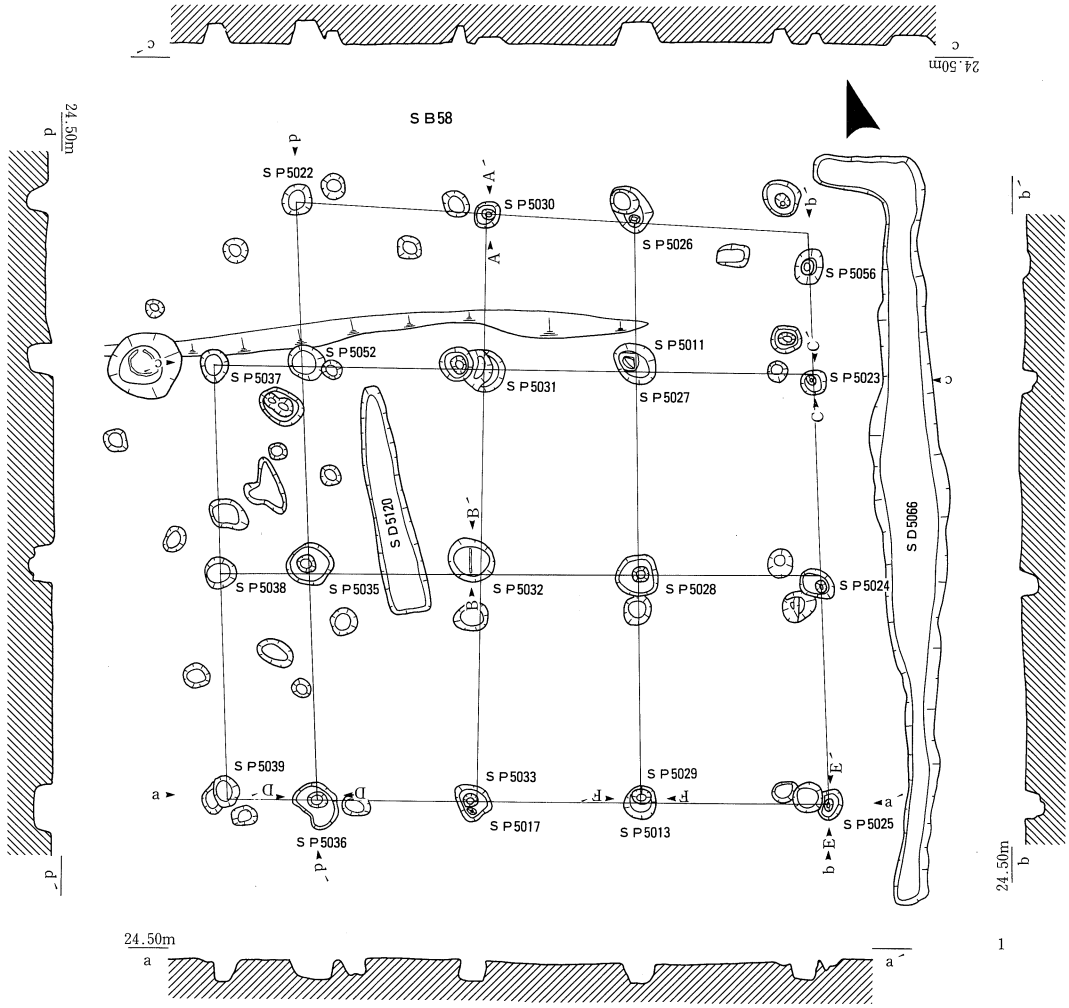
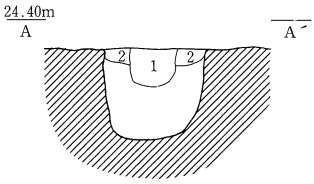
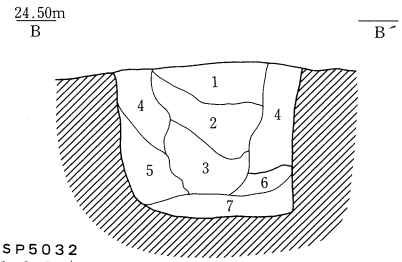
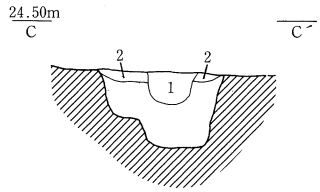




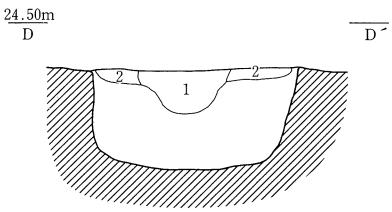
SP5030
1. 2.5Y3/2 黒褐色シルト
2. 2.5Y3/2 黒褐色シルト(黄褐色砂混)



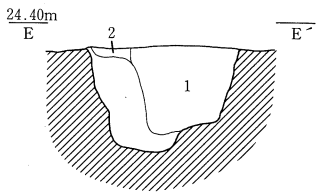
SP5032
1. 2.5Y4/3 オリーブ褐色土(木・炭化物混、酸化鉄混)
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト(炭化物混、黒色土が縞状に混)
3. 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト(砂混)
4. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト(酸化鉄混、黄橙色砂混)
5. 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト
6. 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト
7. 10YR2/1 黒色シルト



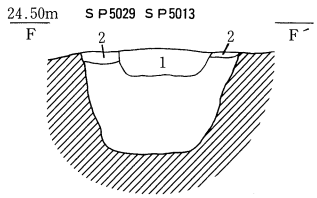
SP5023
1. 2.5Y3/1 黒褐色シルト(木混)
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト(黒色土ブロック状に混)



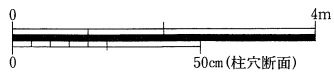
SP5036
1. 2.5Y3/2 黒褐色シルト
2. 2.5Y3/2 黒褐色シルト(黄褐色砂混)



SP5025
1. 2.5Y3/1 黒褐色シルト(木混)
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト(黒色土ブロック状に混)

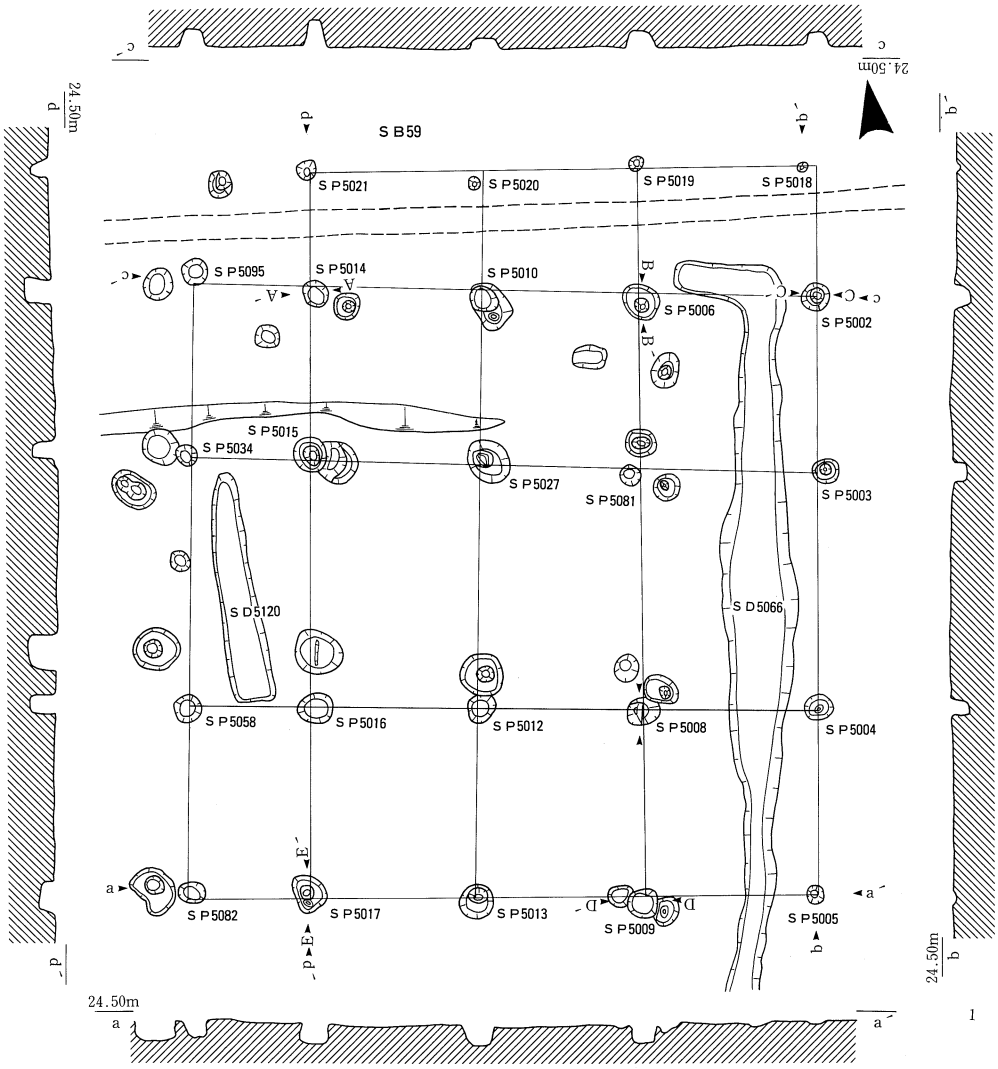


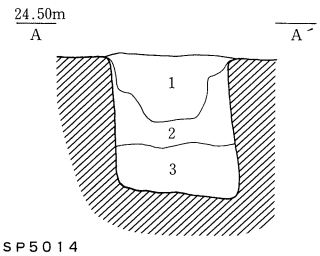
SP5013
1. 10YR3/1 黒褐色土(木・炭化物混、灰褐色土ブロック状に混)
SP5029
2. 10YR4/2 灰黄褐色土(酸化鉄混)



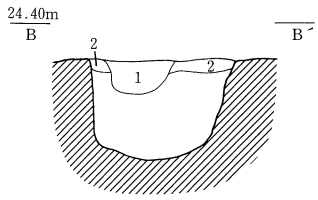
第112図　遺構実測図

1.SB58

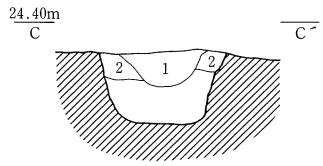




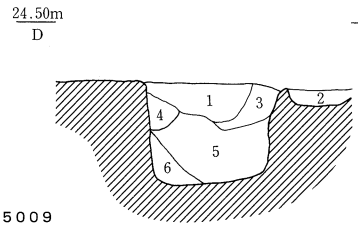
SP5014
1. 2.5Y5/1 灰黄色シルト(木・炭化物混、酸化鉄混)
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト(砂混)
3. 10YR2/1 黒色シルト



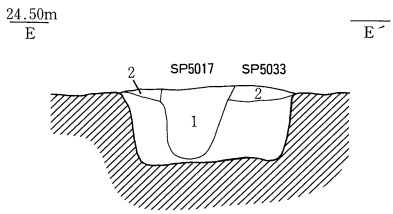
SP5006
1. 10YR3/1 黒褐色土
(炭化物・木混、灰色土と黒色土ブロック状に混)
2. 暗褐色シルト(褐灰色シルトと黒色シルトブロック状に混)



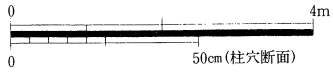
SP5002
1. 10YR3/1 黒褐色シルト
(炭化物・木混、灰褐色土と黒褐色土ブロック状に混)
2. 2.5Y3/2 黒褐色シルト



SP5009
1. 10YR3/1 黒褐色土(木・炭化物混、灰褐色土と黒褐色土ブロック状に混)
2. 10YR3/2 黒褐色土(酸化鉄混)
3. 10YR4/3 にぶい黄褐色土
4. 暗褐色シルト(褐灰色シルトと黒褐色シルトブロック状に混)
5. 10YR4/2 灰黄褐色土
6. 10YR2/1 黒色シルト

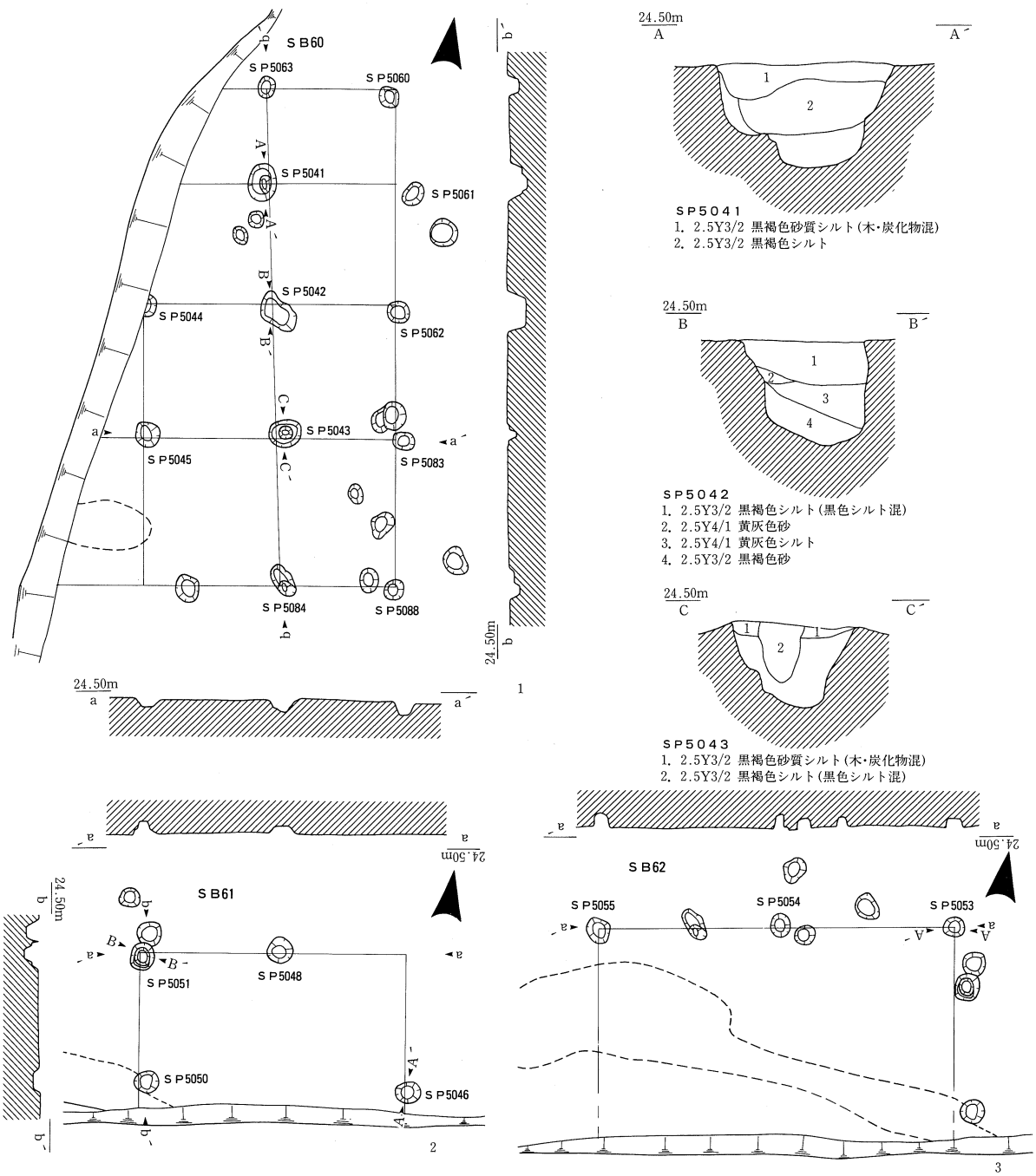


SP5017
1. 10YR4/3 にぶい黄褐色土
2. 2.5Y4/3 オリーブ褐色土
SP5033
2. 2.5Y4/3 オリーブ褐色土



第113図　遺構実測図

1.SB59



第114図　遺構実測図

1.SB60　2.SB61　3.SB62

桁行8.00ｍ×梁行4.40ｍの大きさで，平面積は35.20㎡である。建物主軸の方位は，Ｎ－6°－Ｗを測る。柱間寸法は桁行が約10尺等間，庇の出が約6.5尺，梁行は不揃いである。庇の柱列は中央が未確認で確実性に欠ける。柱穴の掘形は，円形ないしやや不整な楕円形で，直径22㎝～40㎝である。北辺柱列のさらに北側に約50㎝離れて東西方向の柱列がある（ＳＡ13）。桁行柱列からは少しずれ，近すぎるため，庇とは考えにくいもので，ＳＢ63に関連する柱列とみておきたい。

遺物は，図示してないがＳＰ6003から土師器細片が出土している。

64号掘立柱建物（ＳＢ64，第115図，図版148）

Ｃ２地区の東側に位置し，ＳＢ63と重なる。この建物もさらに発掘区の東側に伸びる可能性がある。確認できた範囲では，２間×２間の南北棟総柱建物である。桁行5.52ｍ×梁行4.56ｍの大きさで，平面積約25.17㎡である。建物主軸の方位は，Ｎ－5°－Ｗを測る。柱穴掘形はほぼ円形を呈し，直径20㎝～35㎝である。

65号掘立柱建物（ＳＢ65，第116・117・132図，図版148・170）

Ｃ３地区の中央部に位置し，ＳＢ66・67と重なるが，前後関係は不明。北東隅および南東隅の柱穴が未確認ではあるが，５間×５間の南北棟総柱建物である。桁行14.25ｍ×梁行12.45ｍの大きさで，平面積177.41㎡となり，本遺跡中最大規模の建物である。建物主軸の方位はＮ－9°－Ｅを測る。比較的明瞭に柱穴配列を確認でき，柱間寸法は，桁行が南から８尺・11尺・10尺・10尺・8.5尺，梁行が東から7.5尺・８尺・９尺・９尺・８尺となり，中央が広く周辺が狭い傾向がある。柱穴掘形は不整円形，不整楕円形を呈するものが多く，直径は25㎝～80㎝と幅がある。中には土質の関係で測量時に一回り大きくなったものがあると考えられる。

遺物はＳＰ7140・7144から土師器の皿か椀の底部が出土している（第132図705・706）。その他にＳＰ7131・7137・7150・7152から土師器，ＳＰ7149・7152・7156から中世土師器皿，ＳＰ7150から箸，ＳＰ7131・7133・7134・7137・7146・7151・7152から加工材，ＳＰ7139からトチの実が20個以上出土している。

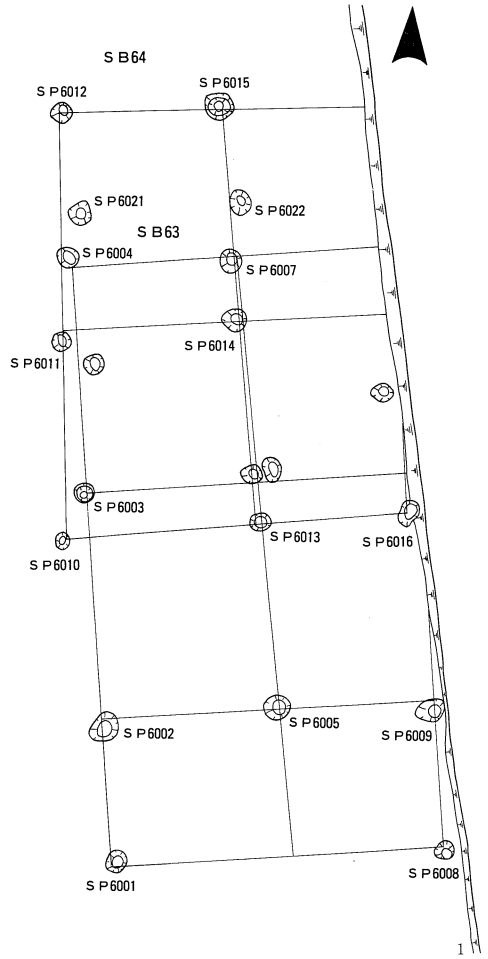
66号掘立柱建物（ＳＢ66，第116・118・132図，図版148・170・196・223）

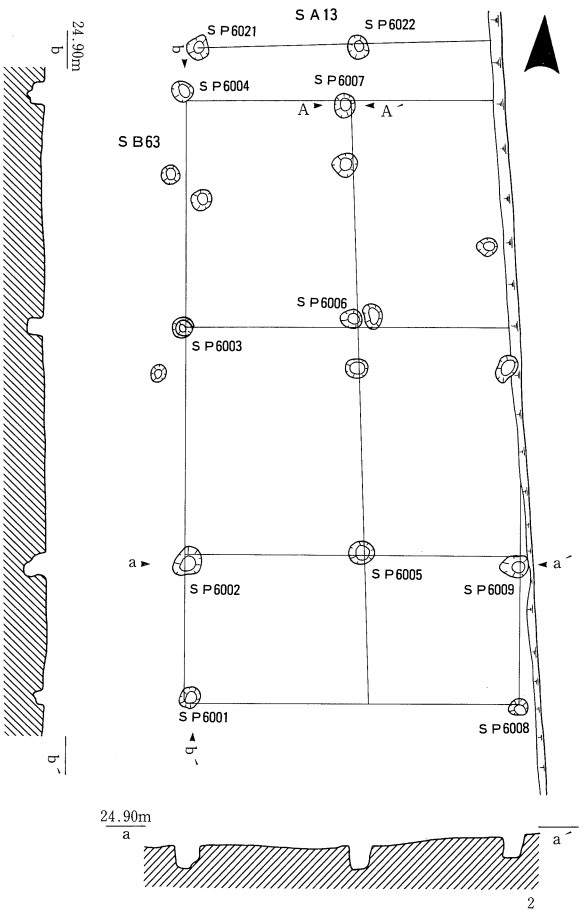
Ｃ３地区の中央部に位置する。ＳＢ65と重なるものの前後関係は不明である。身舎４間×３間の東西棟総柱建物で，東側に１間ないし２間分の張り出しがある。桁行9.40ｍ×梁行8.88ｍの大きさで，平面積は約83.47㎡である。建物主軸の方位はＮ－87°－Ｗを測る。東側の張り出しは梁行中央１間分が確認でき，さらに南側もう１間伸びるかどうか不明である。柱間寸法は桁行が８尺弱とやや小さく，梁行は10尺弱と大きい。柱穴の掘形は楕円形・不整楕円形を呈し，直径は25㎝～55㎝と幅がある。

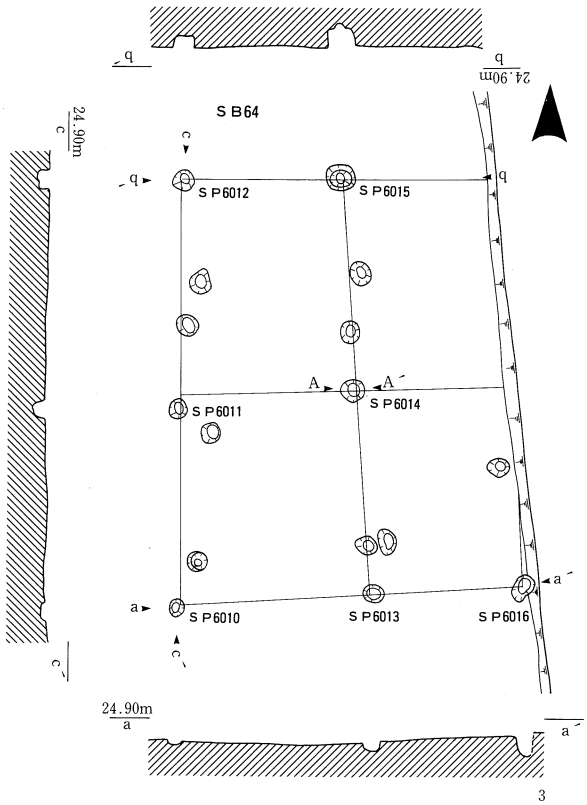
第132図707はＳＰ7172出土の中世土師器皿ＲＣ類である。口縁部の一部に油煙による炭化物が付着しており，灯明皿として使われたもの。708もＳＰ7172出土で，口縁部１段ナデで底部非ロクロ成形の器形に貼り付け高台を持つ。体部には明瞭な合わせ目が残る。709はＳＰ7176出土の中世土師器でこれも体部に合わせ目を残し，粗雑な作りである。710はＳＰ7172出土の泥岩製砥石，711はＳＰ7162の柱である。その他にＳＰ7161・7168・7171・7176・7178などから土師器，ＳＰ7164・7168・7171・7172・7176・7178・7181から加工材が出土している。

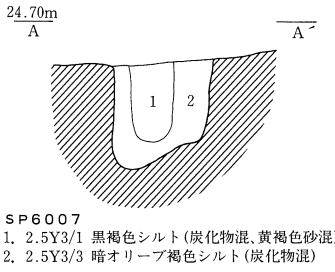
67号掘立柱建物（ＳＢ67，第116・119図，図版148）

Ｃ３地区の中央部に位置する。65号掘立柱建物と重なり，66号掘立柱建物の北側に接するように建つ，２間×２間の東西棟総柱建物である。桁行4.80ｍ×梁行2.70ｍの大きさで，平面積は約12.96㎡である。建物主軸の方位はＮ－89°－Ｗを測る。梁行柱筋がＳＢ66の中央２間の柱筋と大体一致する。柱

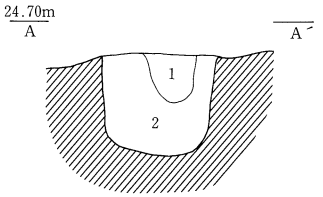




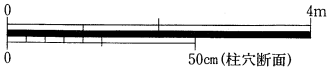




SP6007
1. 2.5Y3/1 黒褐色シルト(炭化物混、黄褐色砂混)
2. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルト(炭化物混)

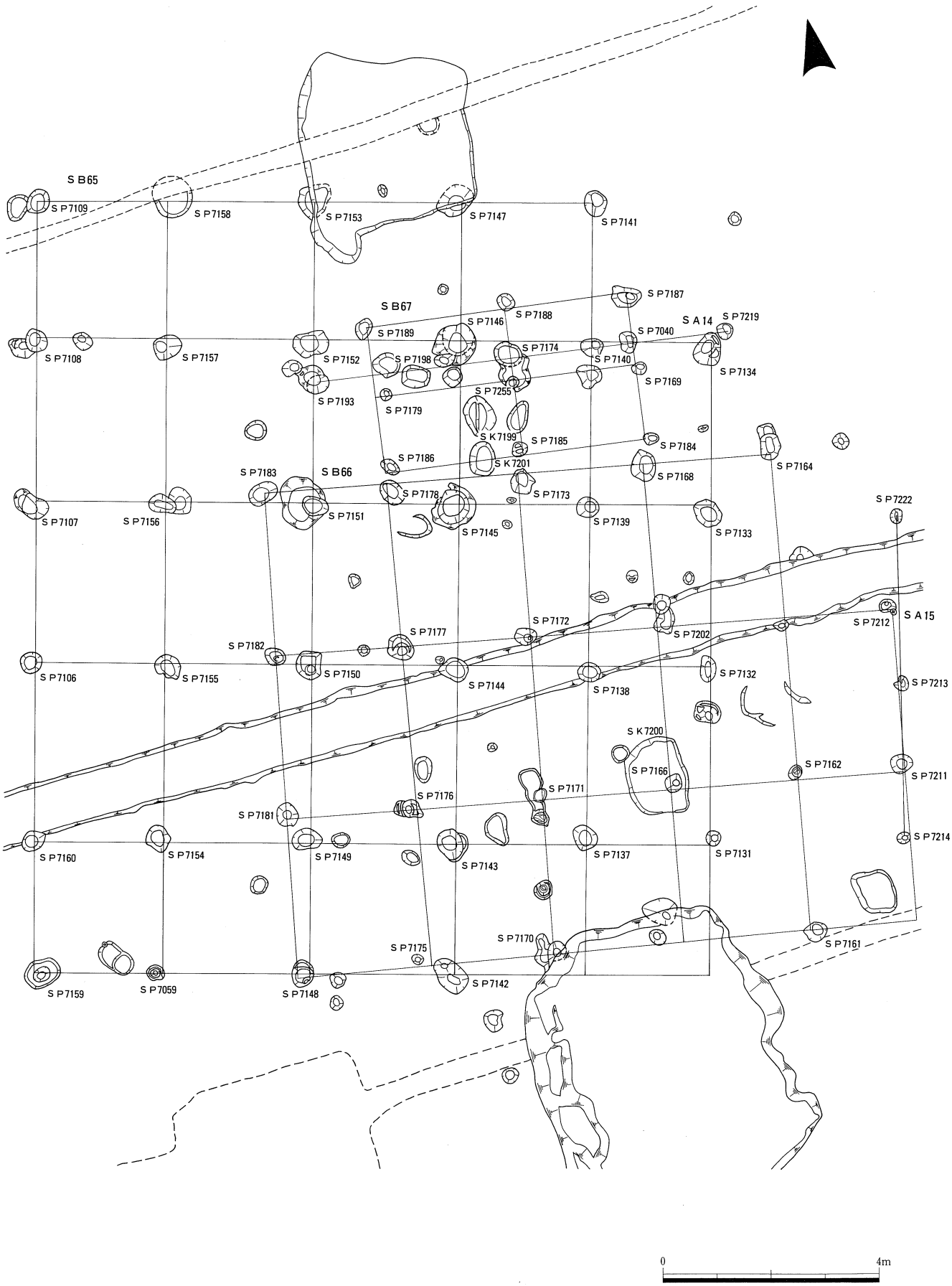


SP6014
1. 2.5Y3/1 黒褐色砂(炭化物多量混)
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂

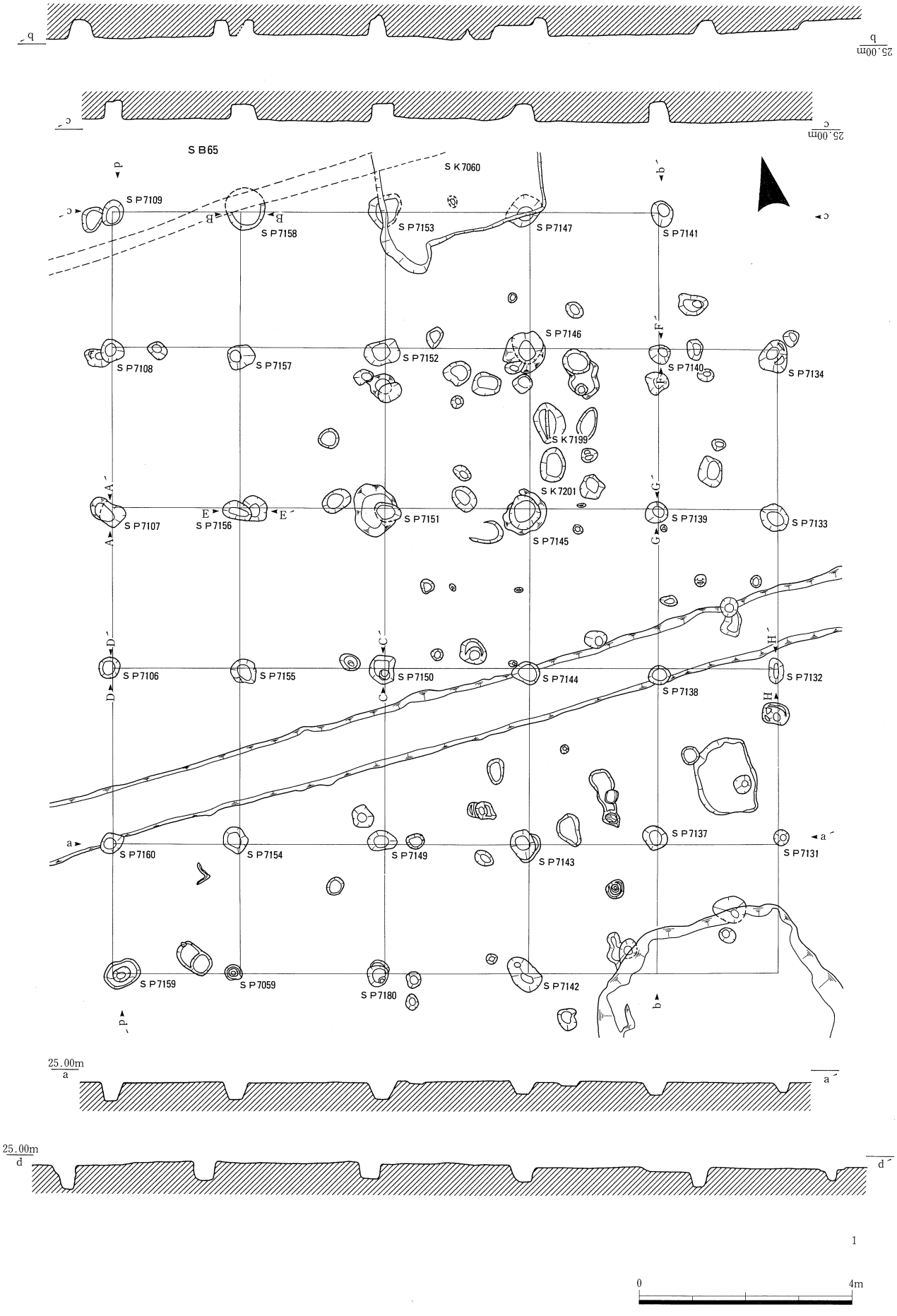


第115図　遺構実測図

1.SB63・64　2.SB63・SA13　3.SB64

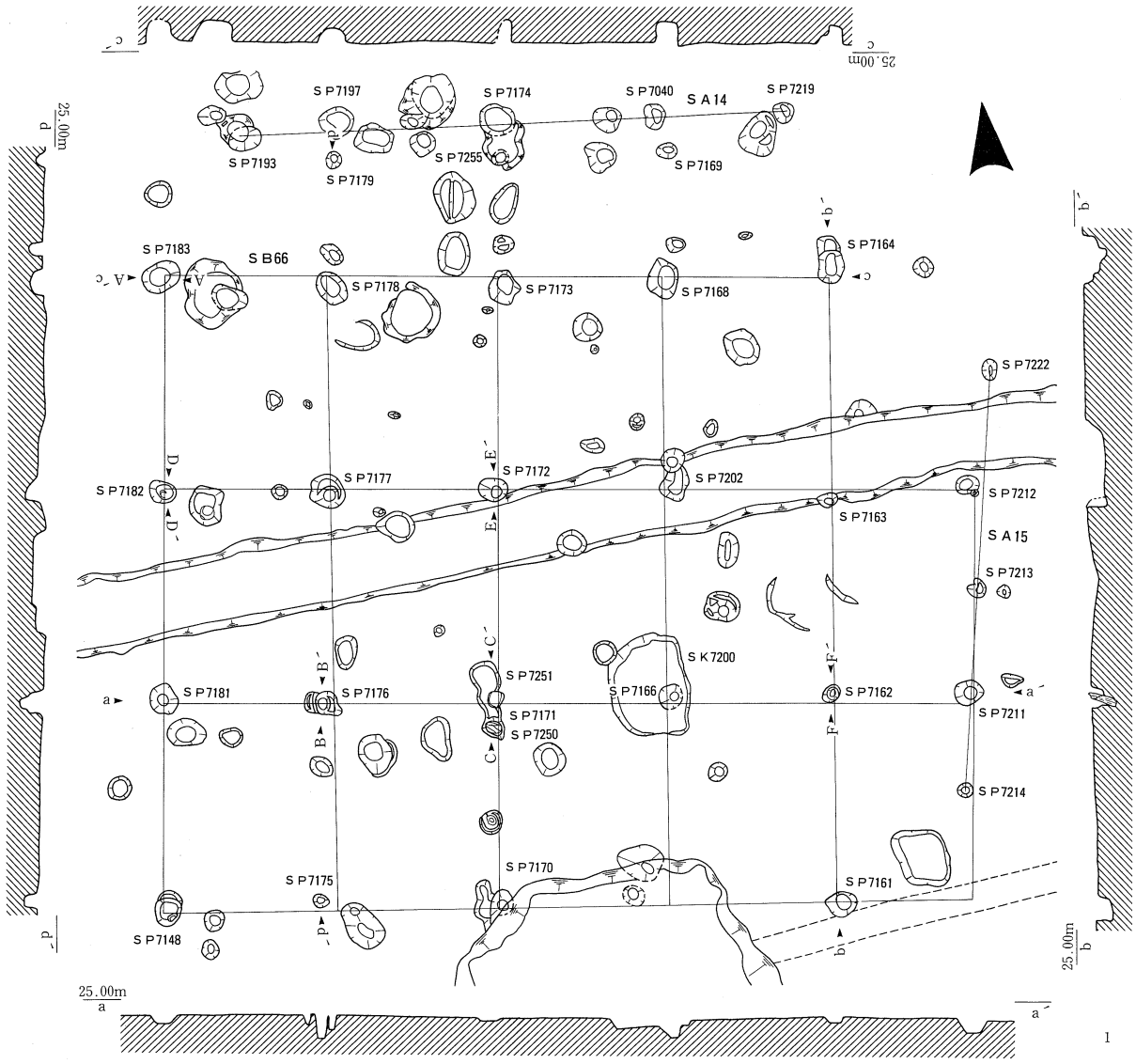


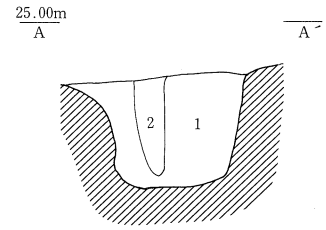
第116図　遺構実測図
SB65～SB67



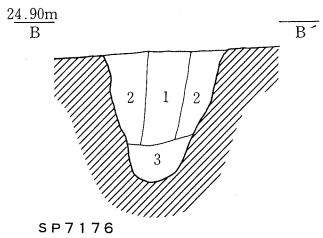
第117図　遺構実測図

1.SB65

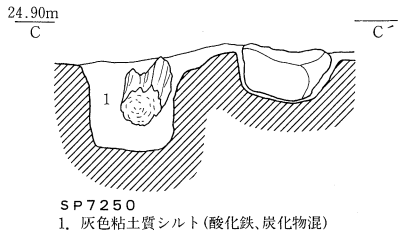




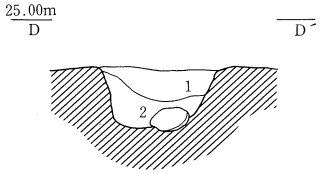
SP7183
1. 2.5Y3/1 黒褐色シルト(暗灰黄色砂混、酸化鉄、炭化物混)
2. 2.5Y4/1 黄灰色砂質シルト(炭化物、酸化鉄混)



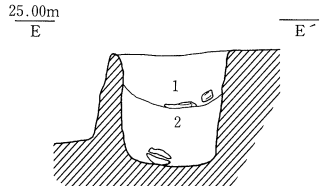
SP7176
1. 褐色粘土質シルト(淡黄褐色シルト混、炭化物混)
2. 灰色粘土質シルト(淡黄褐色シルト混)
3. 灰色粘土質シルト(青灰色シルト混、炭化物混)



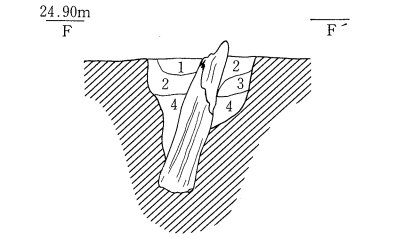
SP7250
1. 灰色粘土質シルト(酸化鉄、炭化物混)



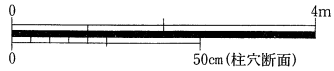
SP7182
1. 灰色粘土質シルト(灰白色シルト50%混)
2. 灰白色粘土質シルト(灰白色シルト混)



SP7172
1. 灰色粘土質シルト(淡黄褐色シルト5%混、炭化物混)
2. 灰色粘土質シルト(淡黄褐色シルト40%混、炭化物混)



SP7162
1. 2.5Y3/1 黒褐色シルト(暗灰黄色砂混、酸化鉄、炭化物混)
2. 2.5Y3/1 黒褐色シルト(暗灰黄色砂混、酸化鉄、炭化物混)
3. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂(酸化鉄混)
4. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト



第118図　遺構実測図

1.SB66・SA14・SA15

間寸法は桁行８尺，梁行4.5尺の等間となる。柱穴の掘形は楕円形・不整楕円形を呈し，直径は25cm～50cmと幅があるが，概して小さい。桁行中央柱列についてはＳＢ66の張り出しもしくは庇部とすることも可能である。

68号掘立柱建物（ＳＢ68，第120・121・132図，図版149・170）

Ｃ３地区のやや南よりに位置する，５間×４間の南北棟総柱建物である。ＳＢ69・ＳＢ70と重なり，柱穴の切り合いでは両者より時期が新しく，また西側を北流するＳＤ7010やＳＥ7020よりも新しい。桁行12.80ｍ×梁行9.60ｍの大きさで，平面積は約121.00㎡ある。建物主軸の方位はＮ－５°－Ｅを測る。柱間寸法は桁行が南から7.5尺・8.5尺・９尺・９尺・８尺，梁行はほぼ８尺等間となる。柱穴の掘形は円形ないし不整楕円形を呈し，直径は30cm～50cmと幅があるが概して小さい。

第132図712はＳＰ7099出土の珠洲擂鉢，713はＳＰ7091出土の珠洲四耳壺で，いずれも珠洲編年のⅠ～Ⅱ期に位置づけられ，12世紀後半から13世紀前半の実年代が与えられよう[注7]。その他に，ＳＰ7084から土師器，ＳＰ7085から珠洲，ＳＰ7073・7081・7085・7088・7091から中世土師器，ＳＰ7240から箸，ＳＰ7074・7078・7080・7081・7084・7085・7090・7092・7096・7099・7240から加工材が出土している。

69号掘立柱建物（ＳＢ69，第120・122・133図，図版149・156・197）

Ｃ３地区のやや南よりに位置する，４間×４間の南北棟総柱建物である。ＳＢ68・ＳＢ70と重なり，柱穴の切り合いではＳＢ68より古いが，ＳＢ70との前後関係は不明である。桁行10.20ｍ×梁行10.00ｍの大きさでほぼ正方形を呈し，平面積は約102.00㎡となる。建物主軸の方位はＮ－３°－Ｗを測る。柱間寸法は桁行・梁行ともにやや不揃いで7.7尺から9.7尺までである。柱穴掘形の平面形は円形ないし不整円形を呈し，直径は28cm～80cmと非常に幅がある。中には地山の崩落により，検出時より一回り大きくなったものもあると考えられる。

第133図714はＳＰ7063出土の珠洲甕の口縁部である。端部を欠損するものの，鳥の嘴状に湾曲して伸びる形態になると推定され，珠洲Ⅰ～Ⅱ期に比定できる。同図715～719は礎板で，材質はスギ。720はＳＰ7066出土の箸，721はＳＰ7062出土の粘板岩製砥石の破片である。この他に，ＳＰ7066・7069から珠洲，ＳＰ7062・7112・7113・7116・7121から中世土師器，ＳＰ7121から櫛，ＳＰ7062・7063・7066・7110・7119から箸，ＳＰ7061・7062・7063・7065・7066・7069・7110・7112・7113・7116・7117・7121・7123からは加工材が出土している。

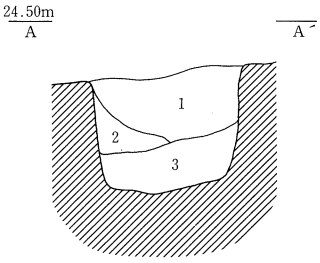
70号掘立柱建物（ＳＢ70，第120・123図，図版149）

Ｃ３地区のやや南よりに位置する，３間×３間南北棟総柱建物である。ＳＢ68・ＳＢ69と重なり，ＳＢ68より古い。桁行7.92ｍ×梁行6.92ｍの大きさで，平面積は約54.81㎡となる。建物主軸の方位は真北である。柱間寸法は桁行・梁行ともにやや不揃いで7.1尺から9.1尺までである。柱穴掘形の平面形は円形・楕円形・不整円形を呈し，直径30cm～45cmと概して小さい。

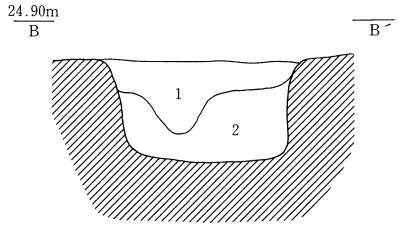
図示はしてないが，ＳＰ7046・7050・7052・7115からは珠洲，ＳＰ7050・7115から中世土師器，ＳＰ7047から箸，ＳＰ7052から櫛，ＳＰ7047・7051・7055・7115から加工材，ＳＰ7057から竹材が出土している。

71号掘立柱建物（ＳＢ71，第123図，図版149）

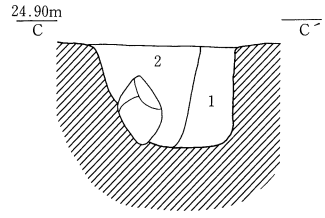
Ｃ３地区の南端部に位置する２間×１間以上の南北棟建物である。西側がさらに発掘区外に伸び，南面に庇が付くと考えられる。桁行8.64ｍ×梁行2.40ｍの大きさで，平面積は約20.74㎡となる。建物主軸の方位は，Ｎ－３°－Ｅを測る。柱間寸法は桁行が南から13尺・８尺，庇の出が5.7尺，梁行が８尺



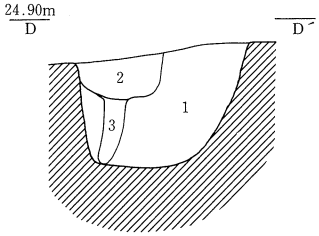
SP7107(SB65)
1. 灰色粘土質シルト(灰白色砂質シルト20%混)
2. 灰色粘土質シルト(灰白色砂質シルト20%混)
3. 灰色粘土質シルト(明緑灰色粘質土30%混)



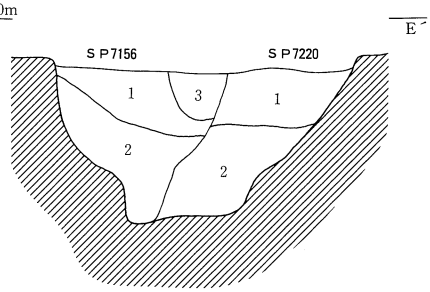
SP7158(SB65)
1. 5Y4/1 灰色砂質シルト(炭化物混、灰白色砂質シルト10%混)
2. 5Y4/1 灰色砂質シルト(酸化鉄混)



SP7150(SB65)
1. 5Y3/1 オリーブ黒色砂質シルト(淡黄色砂質土30%混)
2. 5Y3/1 オリーブ黒色砂質シルト(淡黄色砂質土10%混)

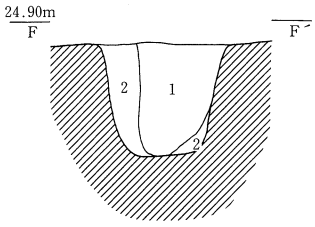


SP7106(SB65)
1. 灰色粘土質シルト
2. 灰色粘土質シルト(灰白色砂質シルト20%混)
3. オリーブ黒色粘土質シルト

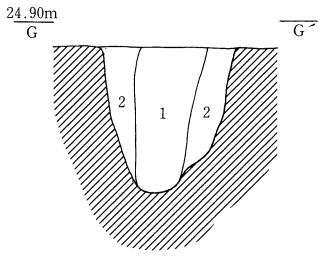


SP7156(SB65)
1. 5Y6/1 灰色粘土質シルト(炭化物・酸化鉄混、灰白色シルト10%混)
2. 7.5YR4/1 褐灰色粘土質シルト(酸化鉄混、灰白色シルト10%混)
3. 5Y4/1 灰色粘土質シルト(木混、灰白色シルト40%混)

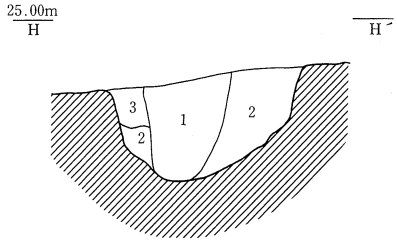
SP7220(SB58)
1. 5Y4/1 灰色粘土質シルト(淡黄色シルト60%混)
2. 5Y4/1 灰色粘土質シルト(淡黄色シルト30%混)



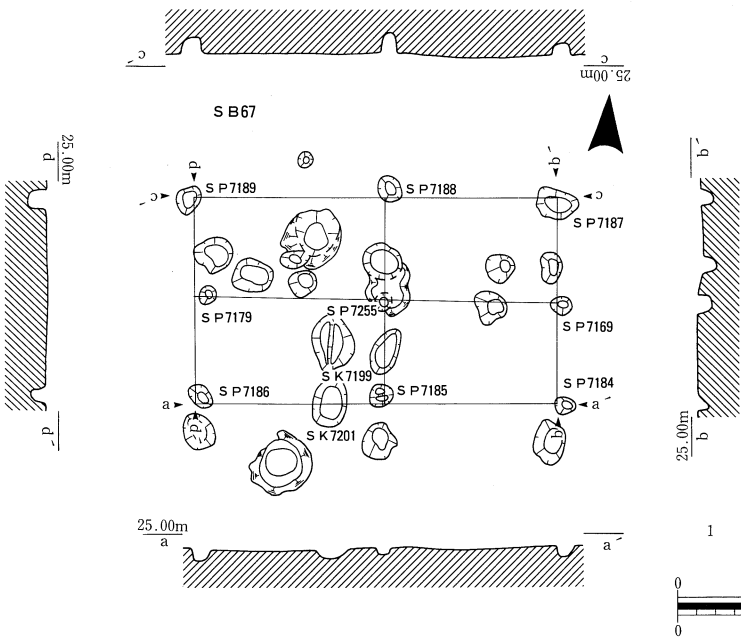
SP7140(SB65)
1. 灰色粘土質シルト
2. 灰白色砂質シルト(炭化物混、灰色粘土質シルト20%混)

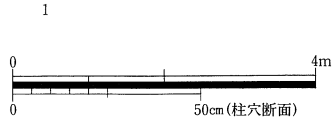


SP7139(SB65)
1. 灰色粘土質シルト(炭化物混、灰白色シルト40%混)
2. 灰色粘土質シルト(炭化物混、灰白色シルト10%混、植物遺体混)



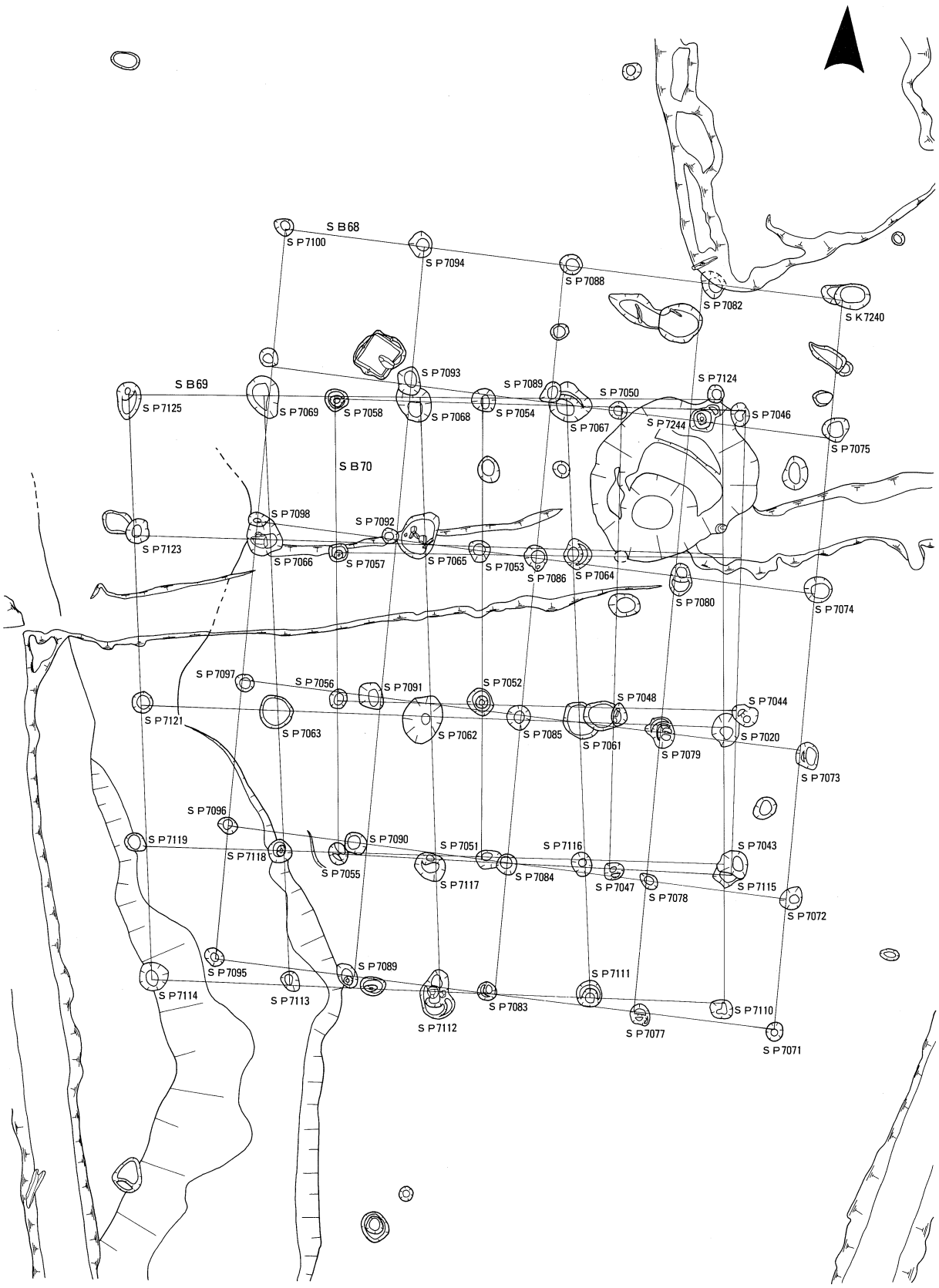
SP7132(SB65)
1. 黒褐色粘土質シルト(炭化物混)
2. 淡黄色砂質シルト(炭化物混)
3. 黒色粘土質シルト(淡黄色砂質シルト10%混)





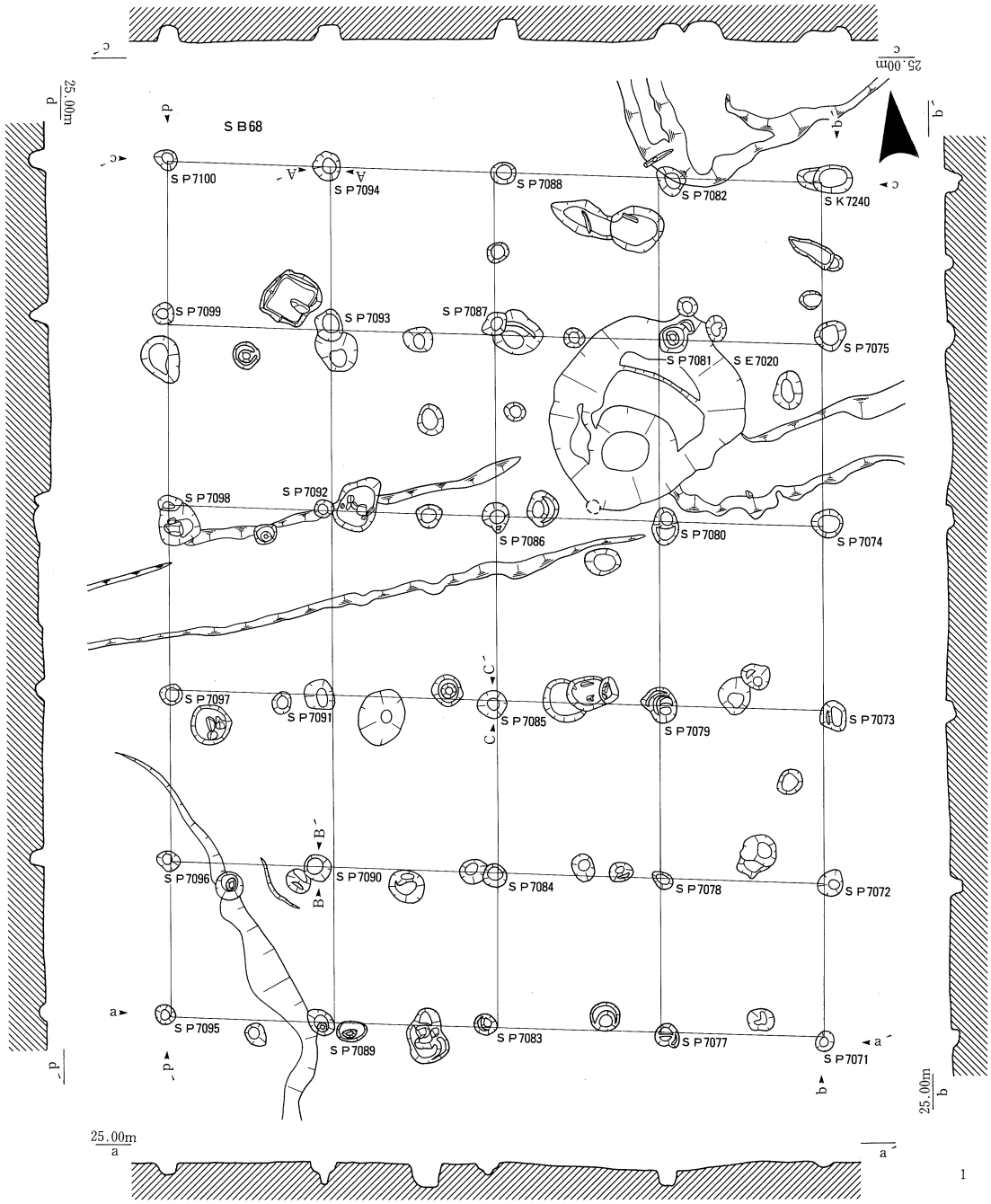
第119図　遺構実測図

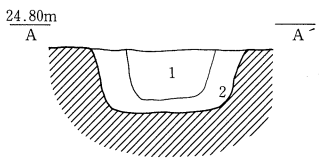
1.SB67



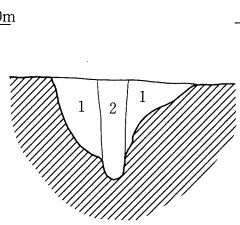
第120図　遺構実測図

1.SB68～SB70

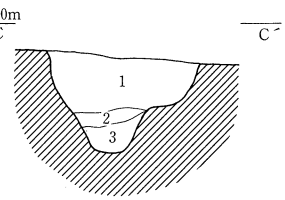




SP7094
1. 濃黄灰色粘土質シルト(灰白色シルト5%混、黒色粘土質シルト5%混)
2. 灰白色砂質シルト(濃黄灰色粘土質シルト10%混)



SP7090
1. 5Y3/1 オリーブ黒色砂質シルト
(炭化物土器片混、灰白色砂質シルト5%混)
2. 5Y3/1 オリーブ黒色砂質シルト

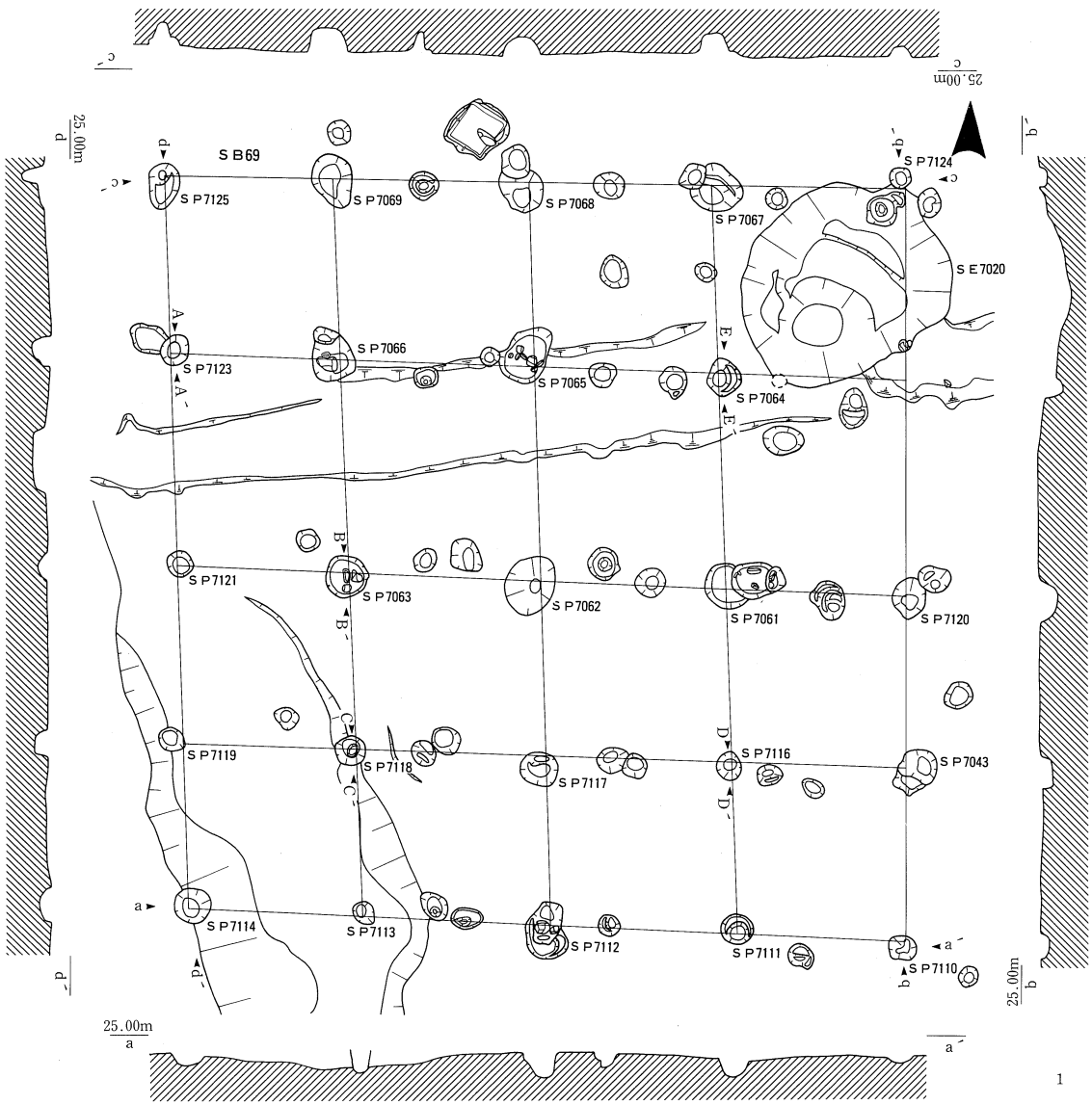


SP7085
1. 5Y3/1 オリーブ黒色砂質シルト
(炭化物・土器片混、灰白色砂質土20%混)
2. 5Y5/1 灰色砂質土(炭化物粒状に混)
3. 5Y3/1 オリーブ黒色砂質シルト(炭化物混)

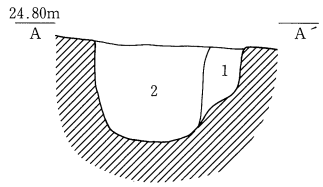
0　4m
0　50cm(柱穴断面)

第121図　遺構実測図

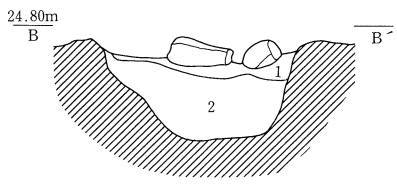
1.SB68



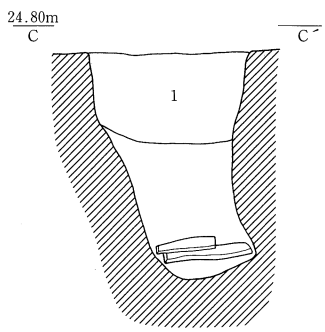
1



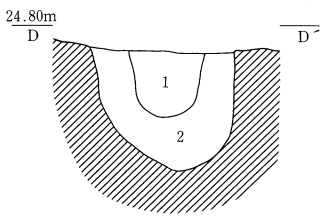
SP7123
1. 10YR6/1 褐灰色シルト
2. 10YR5/1 褐灰色シルト



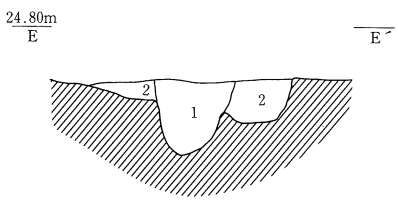
SP7063
1. 10YR2/2 黒褐色シルト(炭化物混)
2. 10YR4/1 褐灰色シルト(炭化物混)



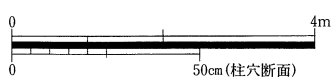
SP7118
1. 10YR5/1 褐灰色シルト(炭化物混)



SP7116
1. 10YR4/1 褐灰色シルト(黒色土混)
2. 10YR7/1 灰白色砂質土(褐灰色土混)

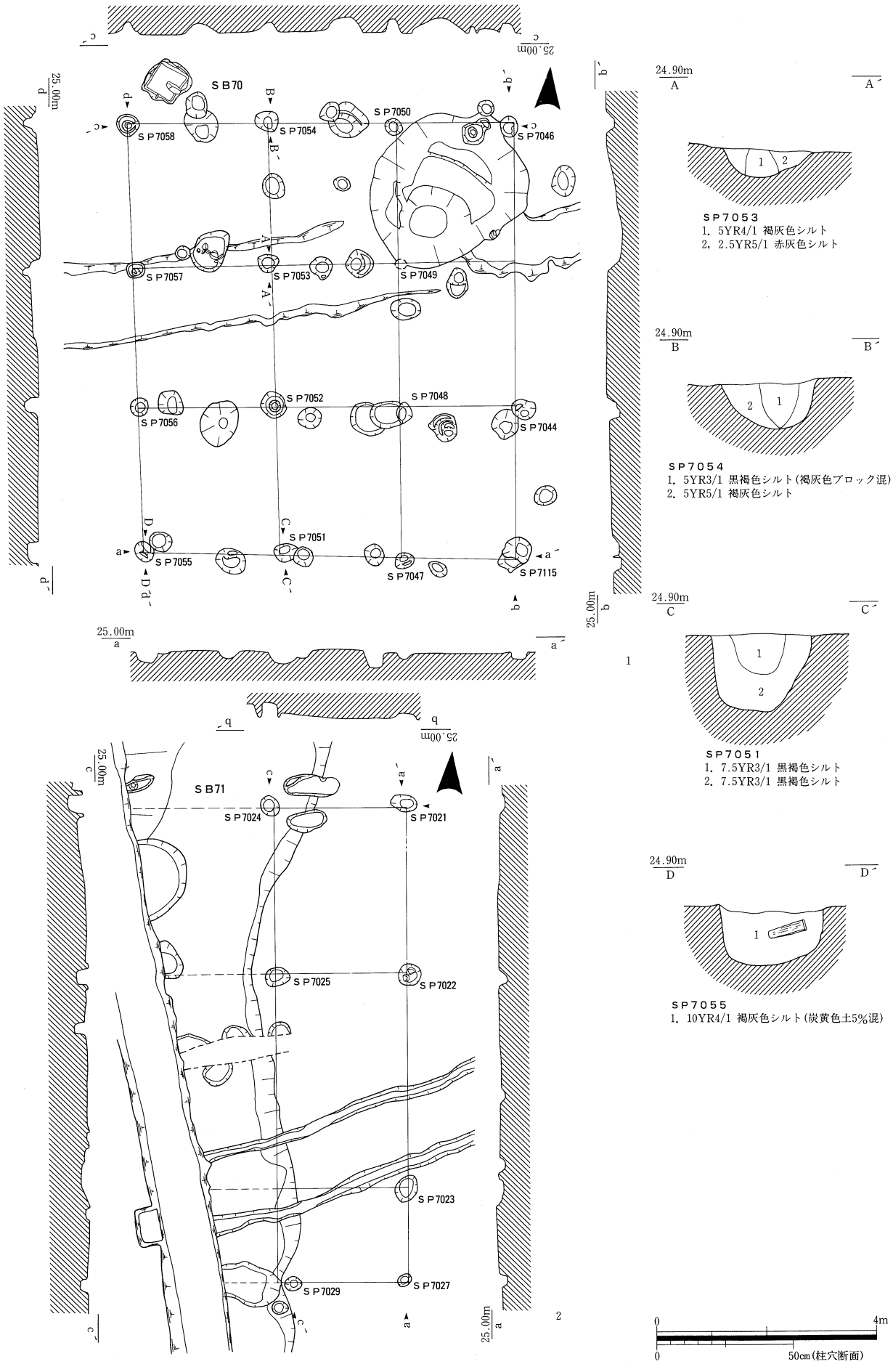


SP7064
1. 10YR4/1 褐灰色シルト(黒色シルト)
2. 10YR6/1 褐灰色シルト



第122図　遺構実測図

1.SB69



第123図　遺構実測図

1.SB70　2.SB71

となる。柱穴掘形の平面形は円形ないし楕円形を呈し，直径は身舎部では35cm～50cm，庇部では30cm前後とやや小さい。

図示はしてないが，ＳＰ7022・7023・7024・7025から加工材が出土している。

Ｃ３地区における３群７棟の掘立柱建物の年代については，柱穴や，周辺の溝・土坑等から出土の土器類を参考にすると，12世紀後半から13世紀前半の実年代が考えられよう。

72号掘立柱建物（ＳＢ72，第124図，図版150）

Ｄ１地区の中央やや西よりに位置し，Ｄ１地区の南側建物集中域の北側に１棟だけ離れて建つ。３間×２間の東西棟総柱建物で，北西隅の柱穴を欠く。桁行6.92ｍ×梁行5.72ｍの大きさで，平面積は方形で考えると約39.58㎡となる。建物主軸の方位は，Ｎ－79°－Ｅを測る。柱間寸法は，桁行が東側から８尺・８尺・７尺，梁行が南側から10尺・９尺となる。柱穴掘形の平面形は円形ないし楕円形を呈し，直径は30cm～65cmと幅があるが，50cm前後が多い。

遺物はＳＰ7229から中世土師器が出土している。

73号掘立柱建物（ＳＢ73，第124・125図，図版150・156）

Ｄ１地区南端部の建物集中域に位置する２間×２間の東西棟総柱建物である。ＳＢ74と重なるが柱穴の切り合いはなく，前後関係は不明。桁行4.20ｍ×梁行3.92ｍの大きさで，平面積は16.46㎡となる。建物主軸の方位はＮ－79°－Ｅを測る。柱間寸法は桁行が７尺等間，梁行が6.5尺等間になる。柱穴掘形の平面形は楕円形を呈するものがほとんどで，直径30cm～60cmと幅がある。中央及び南側柱列に比べ北側柱列の直径は小さい。

74号掘立柱建物（ＳＢ74，第125・126図，図版151）

Ｄ１地区南端部の建物集中域に位置する身舎４間×２間の南北棟総柱建物である。ＳＢ73と重なるが前後関係は不明。北及び西面の庇が付くが北西隅の柱を欠く。桁行8.68ｍ×梁行5.32ｍの大きさで，平面積は約46.18㎡になる。建物主軸の方位はＮ－12°－Ｗを測る。柱間寸法は身舎部分で6.2尺から７尺まであり不揃いである。庇の出は北面3.5尺，西面４尺である。柱穴掘形の平面形は円形ないし楕円形で直径は20cm～40cmと幅があるものの，全体に小さい。

図示はしてないが，遺物はＳＰ8265から中世土師器が出土している。

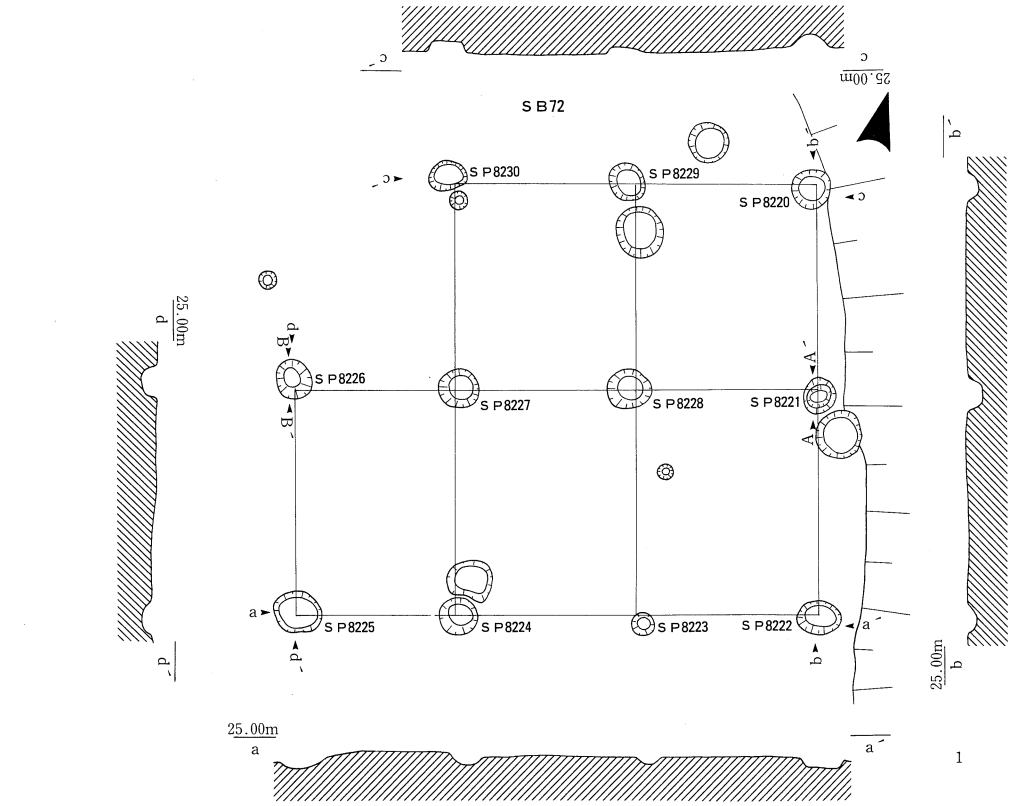
75号掘立柱建物（ＳＢ75，第125・126図，図版152）

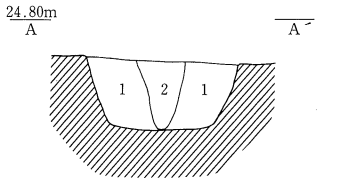
Ｄ１地区南端部の建物集中域に位置する４間×３間の東西棟総柱建物である。ＳＢ74と重なるが，柱穴の切り合いはなく，前後関係は不明。またＳＢ76とも重なり，中央部分で柱穴が重なると考えられるが，これも前後関係は不明である。北西隅柱を欠き，東西両側及び北側１間分の柱間寸法は，中央２間よりやや狭いが，あまり極端なものではなく，身舎に含めて考えておきたい。桁行6.65ｍ×梁行5.64ｍ，平面積約37.51㎡である。建物主軸の方位はＮ－74°－Ｅを測る。柱間寸法は５尺から7.2尺と不揃いである。柱穴掘形の平面形は円形ないし楕円形を呈し，直径20cm～50cmと幅がある。

図示してないが，ＳＰ8240・8249からは中世土師器，ＳＰ8236からは加工材が出土している。

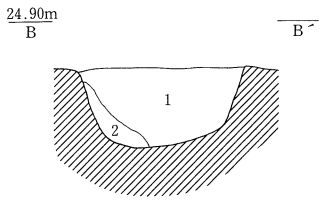
76号掘立柱建物（ＳＢ76，第125・127図，図版152）

Ｄ１地区南端部の建物集中域に位置する３間×３間の東面庇東西棟総柱建物である。ＳＢ75と重なり，建物中央部の柱穴はＳＢ75と共通するため，建物として復原するのに問題もあろうが側柱や庇部の柱列からこのように推定しておきたい。桁行6.96ｍ×梁行5.92ｍの大きさで，平面積は41.20㎡となる。建物主軸の方位は，Ｎ－74°－Ｅを測る。これも身舎部の柱間寸法は不揃いで，5.7尺から７尺まであり，庇の出は3.2尺である。柱穴掘形の平面形は円形ないし楕円形を呈し，直径20cm～50cmと幅があ

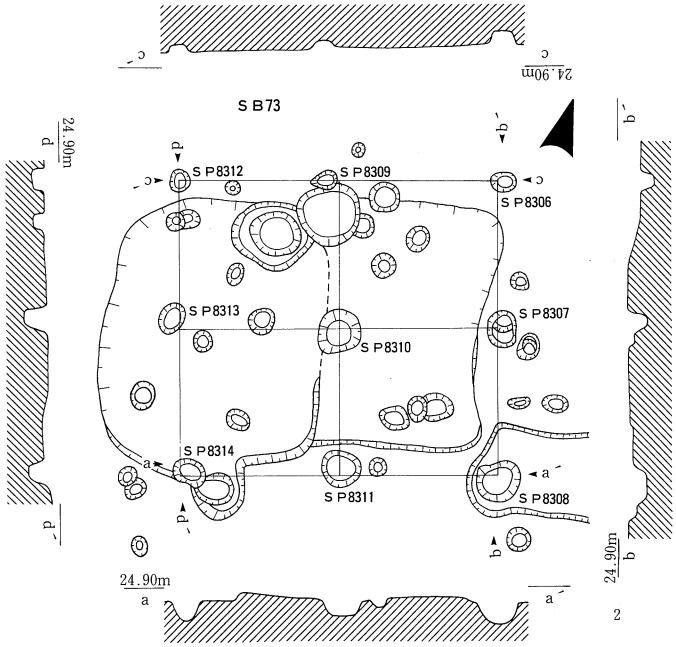


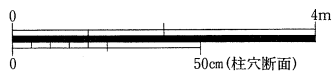


SP8221
1. 灰色砂質シルト
2. 灰色砂質シルト(黒色砂質シルト混)



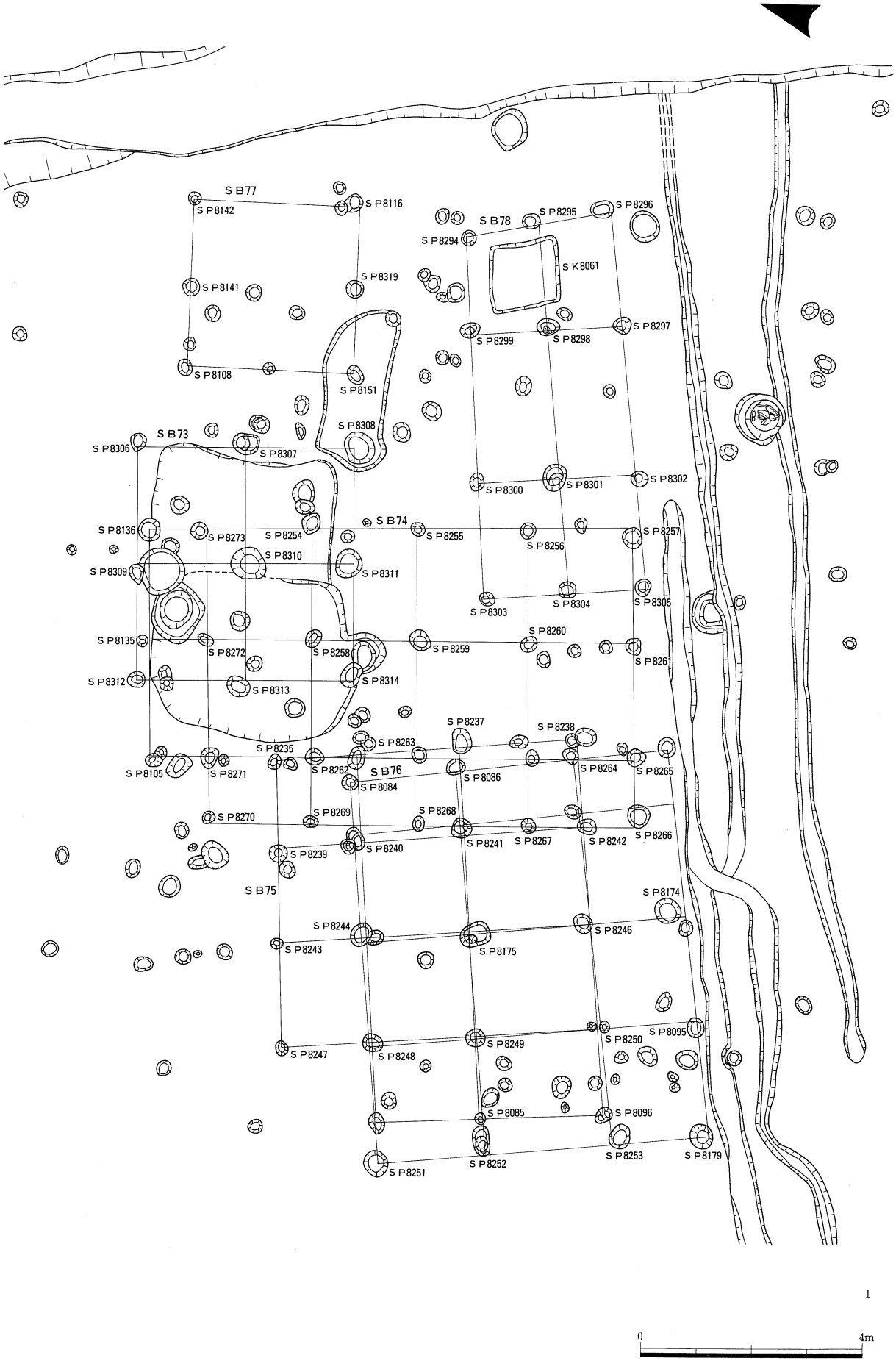
SP8226
1. 灰色砂質シルト(酸化鉄混)
2. 黄褐色砂(灰色砂質シルト混)





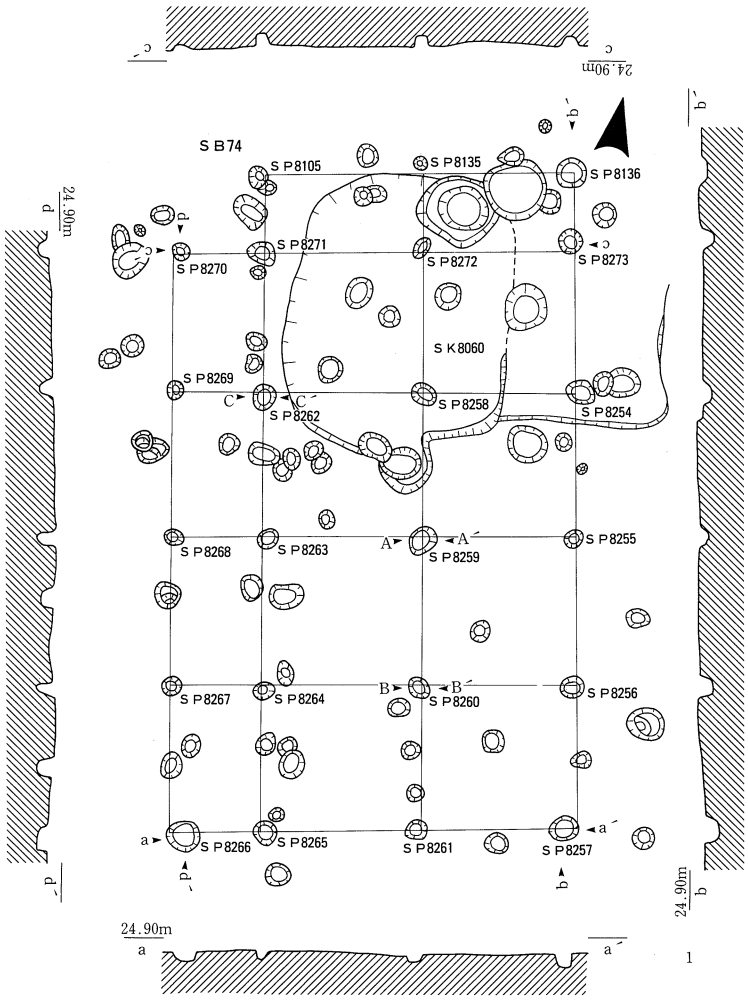
第124図　遺構実測図

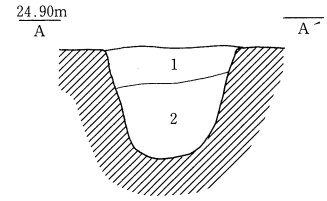
1.SB72　2.SB73



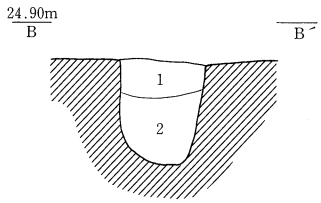
第125図　遺構実測図

1．SB73～SB78

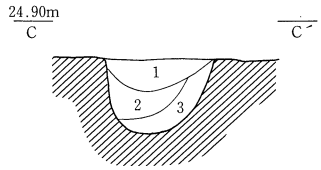




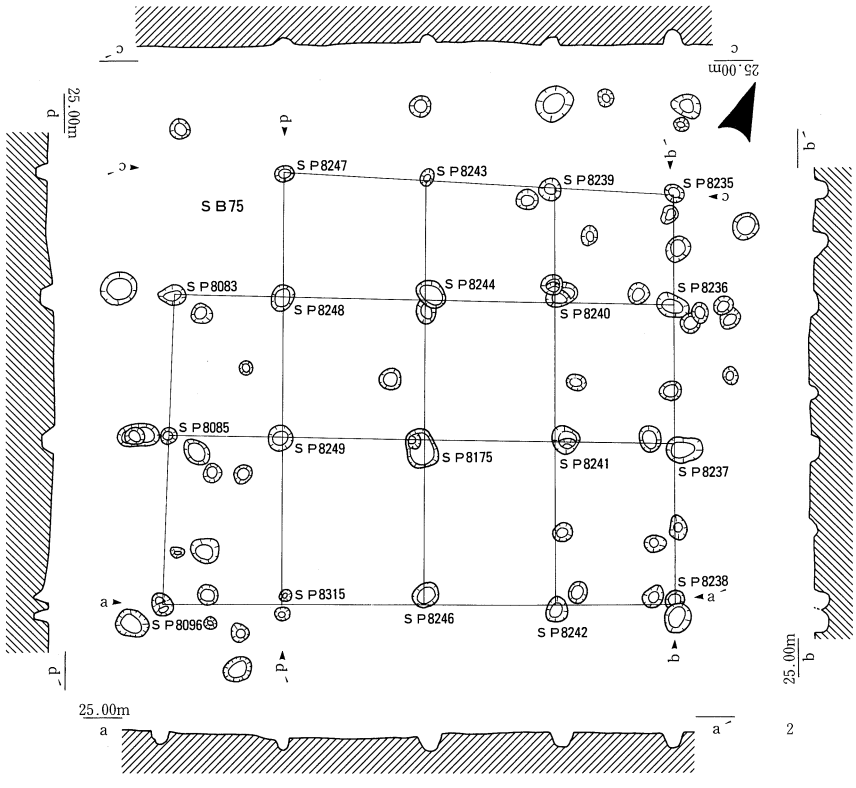
SP8259
1. 褐灰色砂質シルト(酸化鉄混)
2. 褐灰色砂質シルト

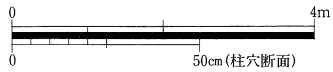


SP8260
1. 灰色砂質シルト(黒色シルト混)
2. 灰色砂質シルト



SP8262
1. 褐灰色砂質シルト(酸化鉄混)
2. 灰褐色砂質シルト(酸化鉄混)
3. 灰色砂質シルト





第126図　遺構実測図

1.SB74　2.SB75

る。ＳＰ8245には柱根が残る。

図示はしてないが，ＳＰ8249から中世土師器が出土している。

77号掘立柱建物（ＳＢ77，第125・127・133図，図版197）

Ｄ１地区南端部の建物集中域で，ＳＢ73の東側に位置する。２間×１間もしくは２間×２間の側柱建物である。桁行・梁行ともに3.00ｍの正方形を呈し，平面積は9.00㎡となる。建物主軸の方位はＮ－９°－Ｗを測る。東側柱列中央の柱穴が確認されていないが，柱間寸法は，桁行・梁行ともに５尺等間である。柱穴掘形の平面形は円形ないし楕円形を呈し，直径25cm～32cmの大きさである。南東隅のＳＰ8116には柱根が遺存していた（第133図722）。

78号掘立柱建物（ＳＢ78，第125・127・133図，図版153・197）

Ｄ１地区南端部の建物集中域に位置する３間×２間の東西棟総柱建物である。道路状遺構の側溝と考えられる，ＳＤ8056の北側に接するように建つ。ＳＢ74と一部重なるが，柱穴の切り合いはなく，前後関係は不明。建物内部東側に方形土坑ＳＫ8061があり，位置的にみても関連する施設と考えられる。桁行6.68ｍ×梁行2.80ｍの大きさで，平面積は約18.70㎡となる。建物主軸の方位は，Ｎ－74°－Ｅを測る。桁行柱間寸法は，中央が約９尺と広く，両端は6.4尺から6.9尺と狭い。梁行柱間寸法はさらに狭く，4.5～4.7尺である。柱穴掘形の平面形は円形ないし楕円形を呈し，直径28cm～45cmである。桁行中央柱列東側２か所には柱根が遺存していた。第133図723はＳＰ8295の柱で，樹種はエノキである。

図示はしてないが，ＳＰ8305から中世土師器が出土している。

79号掘立柱建物（ＳＢ79，第128・129・133図，図版153・154・198）

Ｄ１地区南端部の建物集中域に位置する西面庇付き３間×２間の南北棟総柱建物である。道路状遺構の側溝ＳＤ8057の南側に接して建つ。桁行6.56ｍ×梁行5.12ｍの規模で，平面積は33.59㎡になる。建物主軸の方位はＮ－15°－Ｗを測る。柱間寸法は不揃いで，5.6尺から8.5尺まである。庇の出は4.4尺である。柱穴掘形の平面形は，楕円形を呈するものが多く，直径は24cm～55cmまで幅がある。この建物は柱根の残る柱穴が比較的多く，ＳＰ8276・8281・8285・9227から出土している（第133図724・725）。

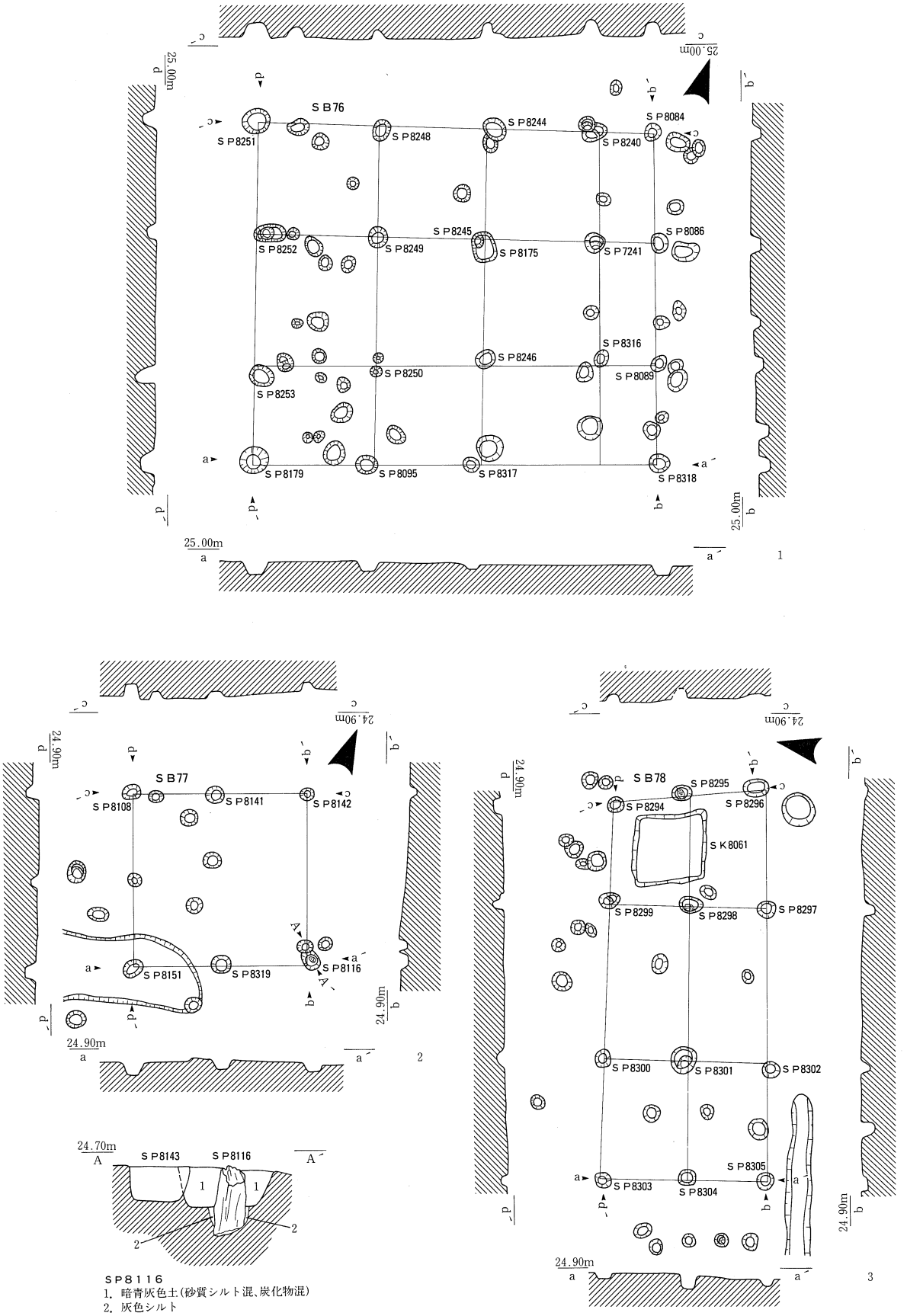
80号掘立柱建物（ＳＢ80，第128・129図，図版153）

Ｄ１地区南端部の建物集中域に位置する２間×２間の東西棟総柱建物である。ＳＢ79の東側に約１ｍ離れ，道路状遺構の側溝ＳＤ8057の南側に接して建つ。桁行3.48ｍ×梁行3.48ｍの規模で，平面積は33.59㎡になる。建物主軸の方位はＮ－71°－Ｗを測る。柱列配置が全体的にゆがみ，北東隅の柱穴は未確認である。柱間寸法は桁行・梁行ともに5.8尺等間である。柱穴掘形の平面形は，円形ないし楕円形を呈し，直径25cm～35cmとなる。南側には隅円方形土坑ＳＫ9093があり，何らかの関連する遺構と考えられる。

図示はしてないが，ＳＰ8290から中世土師器が出土している。

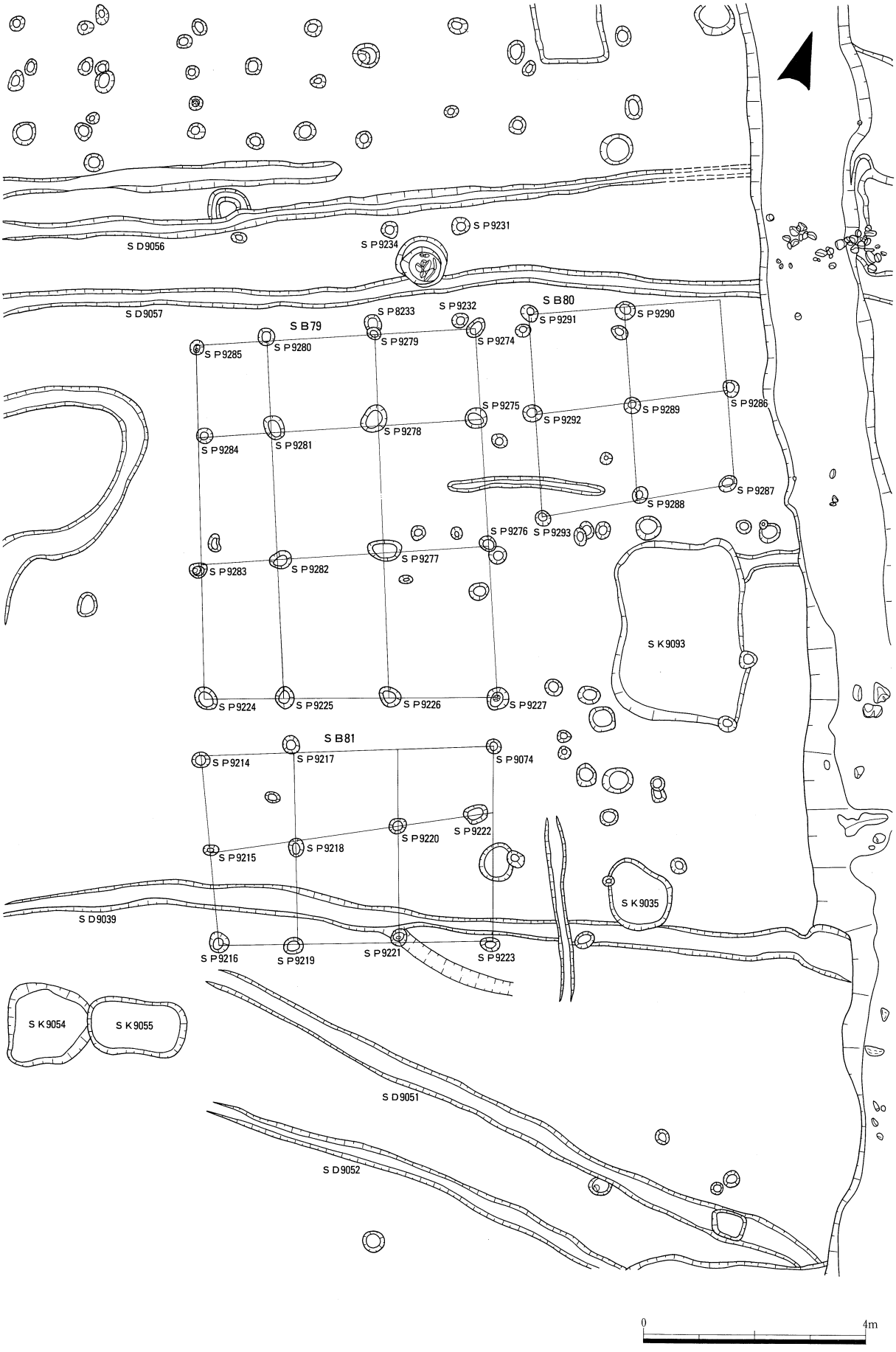
81号掘立柱建物（ＳＢ81，第128・129・133図，図版154・170）

Ｄ１地区から続くＤ２地区北側の建物集中域に位置する３間×２間の東西棟総柱建物である。ＳＢ79の南側に約１ｍ離れて建ち，梁行柱列がＳＢ79の桁行柱列に大体一致する。ＳＢ79～ＳＢ81については計画的配置に基づいて建てられたものであろう。ＳＢ81は桁行中央柱列が東側で北側に大きくずれ，いびつな柱列配置となる。桁行5.12ｍ×梁行3.48ｍの大きさで，平面積は約17.82㎡となる。建物主軸の方位は，Ｎ－75°－Ｅを測る。柱間寸法は不揃いで，5.1尺から6.5尺まである。柱穴掘形の平面形は円形ないし楕円形を呈し，直径は24cm～40cmとなる。ＳＰ9216・9221には柱根が遺存していた。

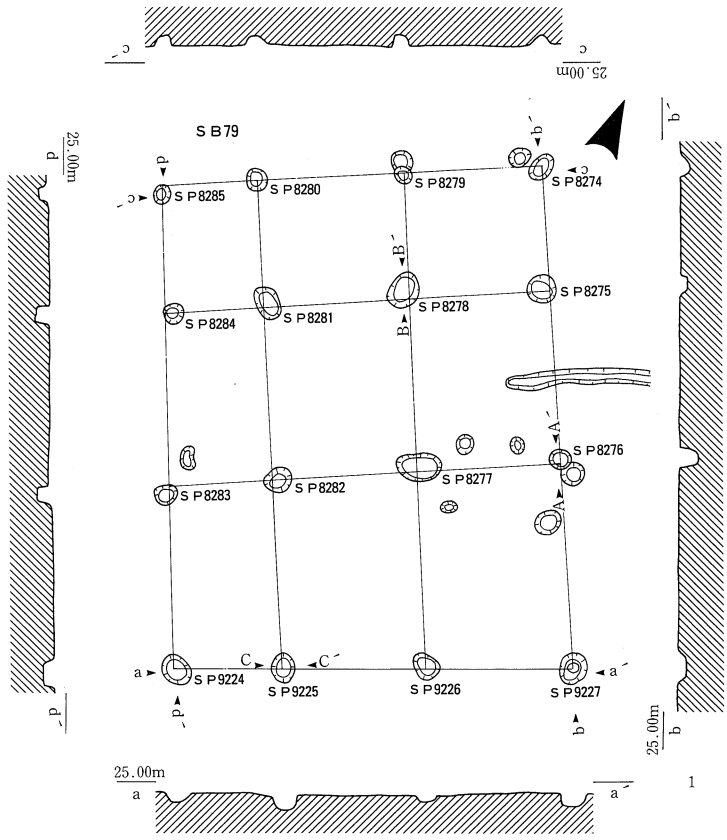


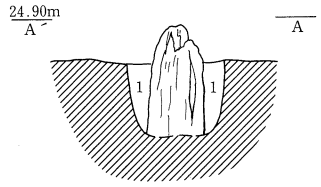
第127図　遺構実測図

1.SB76　2.SB77　3.SB78

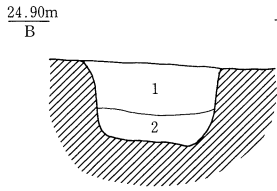


第128図　遺構実測図
SB79～SB81

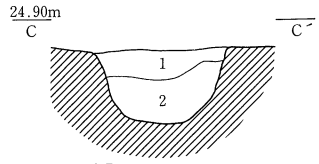




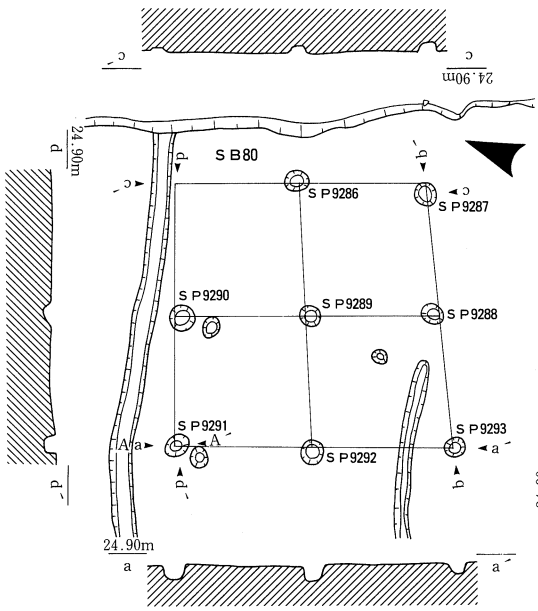
SP8276
1. 灰色シルト(白色砂混)

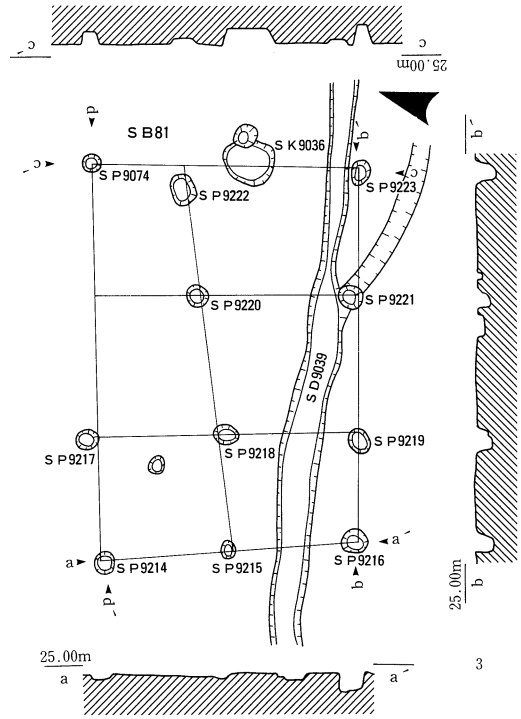


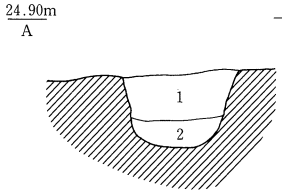
SP8278
1. 灰白色砂質シルト(黒色シルトと黄色砂混)
2. 灰白色砂質シルト



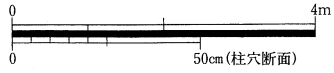
SP9225
1. 褐色シルト(黄褐色砂混)
2. 灰色粘質シルト(青灰色砂混)







SP9291
1. 灰褐色砂質シルト
2. 灰褐色砂質シルト(青灰色砂質シルト混)



第129図　遺構実測図

1.SB79　2.SB80　3.SB81

第133図726はＳＰ9216から出土した中世土師器皿。口縁部が外反する器形で，ＮＣⅠ類になると思われる。

82号掘立柱建物（ＳＢ82，第130・133図，図版155・198）

Ｄ２地区中央東側に位置する４間×２間の南北棟総柱建物である。柱列は全体的にゆがみ，平面形は平行四辺形になる。建物内部の北側には隅円方形土坑のＳＫ9123があり，何らかの関連する施設と考えられる。桁行9.60ｍ×梁行4.55ｍの大きさで，平面積は43.68㎡となる。建物主軸の方位は，Ｎ－12°－Ｗを測る。柱間寸法はやや不揃いで，桁行方向が南から6.5尺・９尺・10尺・6.5尺，梁行方向が東から7.7尺・7.5尺となる。柱穴掘形の平面形は円形ないし楕円形となり，直径30cm～50cmである。北側柱列のＳＰ9228とＳＰ9238は柱根が遺存していた。第133図727はＳＰ9232の柱根で，直径が15cm程，樹種はスギである。

83号掘立柱建物（ＳＢ83，第130・133・134図，図版155・156・198・199）

Ｄ２地区中央東側に位置する４間×３間の東西棟総柱建物である。ＳＢ82のさらに南側で，ＳＤ9129に区画された内部にある。西側柱列の中央２間分の柱穴は確認できず，建物はさらに東側の発掘区外に伸びる。ＳＢ84と重なるが，柱穴の切り合いはなく前後関係は不明である。建物の北側には少し離れて土坑ＳＫ9125があり，関連する施設の可能性がある。桁行8.30ｍ×梁行6.60ｍの大きさで，平面積は54.80㎡となる。建物主軸の方位はＮ－82°－Ｅを測る。柱間寸法は桁行が東から6.5尺・7.3尺・7.4尺・6.5尺，梁行が南から7.5尺・7.5尺・７尺となる。柱穴掘形の平面形は円形ないし楕円形を呈し，直径は25cm～60cmと幅がある。

第133図728は，ＳＰ9243から出土した加工材である。第134図729はＳＰ9257出土の礎板である。スギの分厚い板を用い，片面には楕円形の抉り穴を加えるものである。この他に図示はしてないが，ＳＰ9111・9112から珠洲が出土している。

84号掘立柱建物（ＳＢ84，第131・134図，図版155・156・199・223）

Ｄ２地区中央東側に位置する，２間×１間の南北棟建物である。建物はさらに東側の発掘区外に伸びる可能性が高く，規模・方向とも現状のものである。ＳＢ83と重なるが，前後関係は不明。桁行4.28ｍ×梁行2.16ｍの大きさで，平面積は9.24㎡となる。建物主軸の方位はＮ－４°－Ｗを測る。柱間寸法は桁行が南から7.9尺・6.4尺，梁行が7.2尺となる。柱穴掘形の平面形は円形ないし楕円形を呈し，直径は20cm～50cmと幅がある。

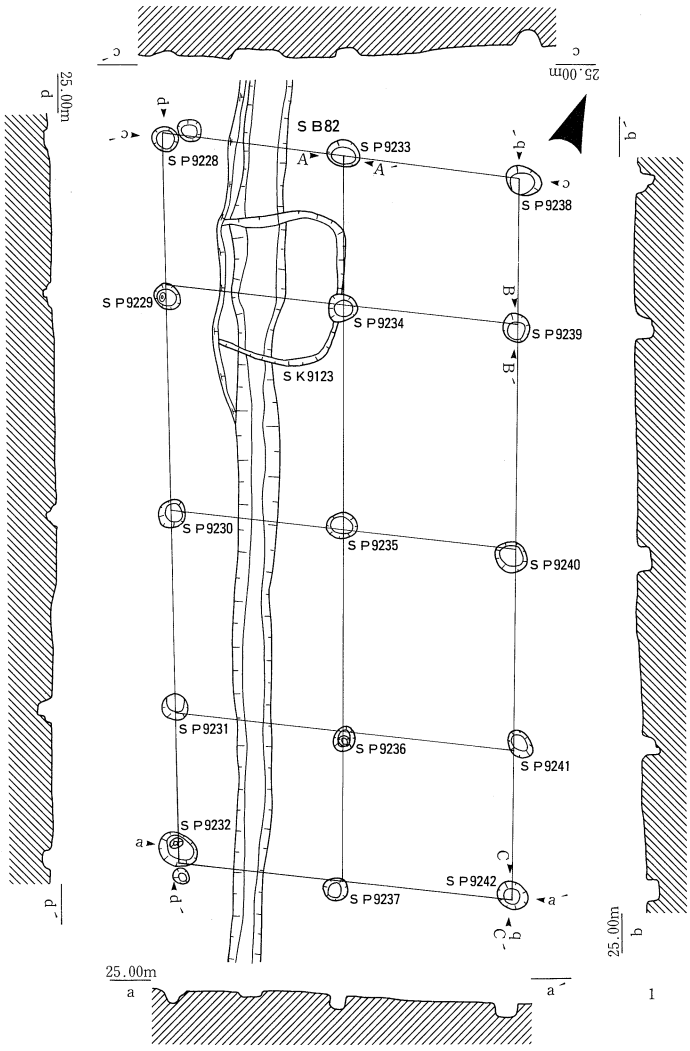
第134図730はＳＰ9251出土の泥岩製砥石である。

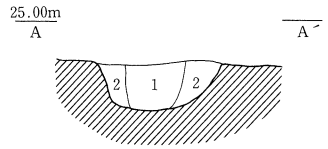
85号掘立柱建物（ＳＢ85，第131図，図版155）

Ｄ２地区中央部でＳＢ83・84の西側に位置する，４間×２間の東西棟総柱建物である。桁行南側柱列は柱穴が小さく，方向が斜めになることから柵列の可能性もあるが，梁行柱筋が通ることから庇とみておきたい。なお南西隅柱を欠く。桁行9.40ｍ×梁行8.16ｍの大きさで，平面積は約76.70㎡となる。建物主軸の方位はＮ－81°－Ｗを測る。柱間寸法は，桁行が東から6.9尺・8.3尺・8.5尺・7.7尺，梁行が南から9.4尺・9.7尺，庇の出が平均約8.1尺である。柱穴掘形の平面形は，円形ないし楕円形を呈し，直径は身舎部が28cm～80cmと幅があり，庇部が25cm～28cmと小さい。

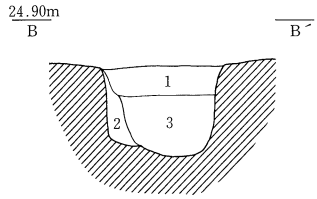
柱穴出土の遺物（第134図，図版170・198・199）

建物として復原できなかった柱穴出土の遺物を一括して報告する。第134図740～742は古代土師器椀類。732～734・737～739・744～746は中世土師器皿である。737・738がロクロ成形Ｒ類で12世紀代，その他が非ロクロ成形で746がＮＢⅡ類，733・734がＮＣ類，744がＮＣⅡ類，732・739・744がＮＤⅡ

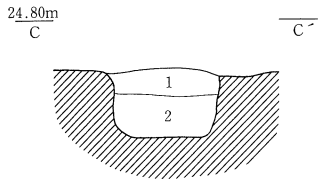




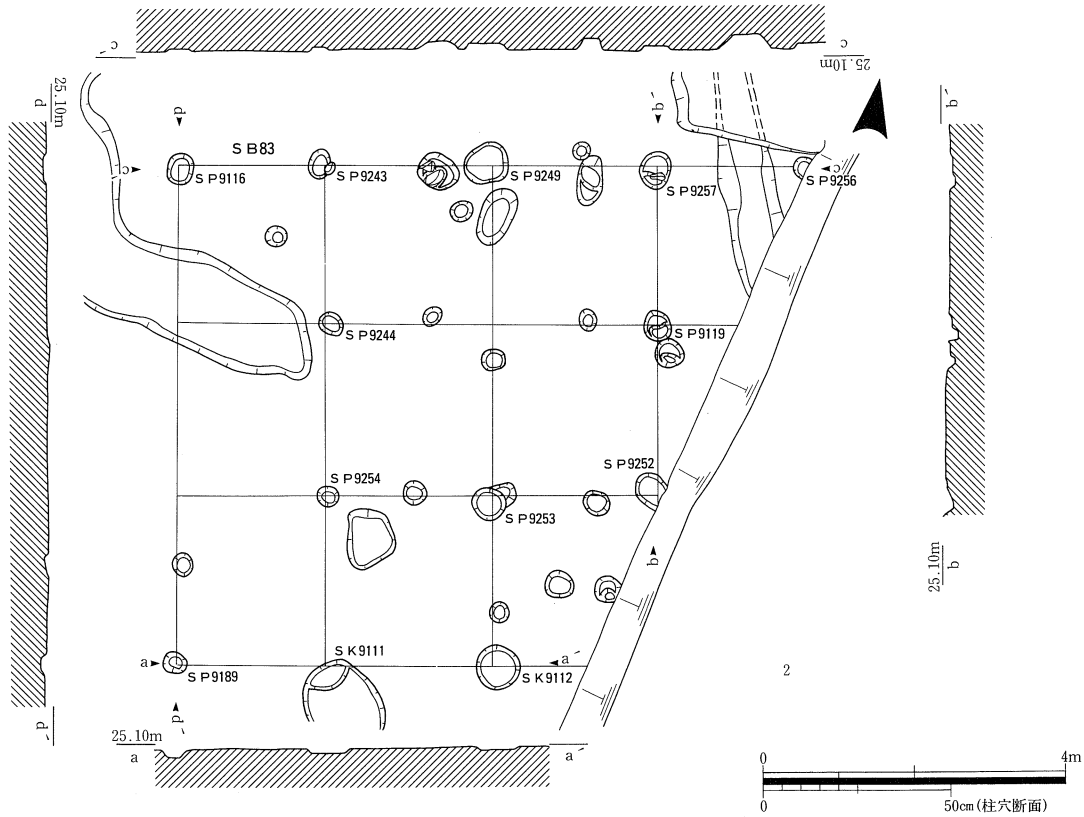
SP9233
1. 灰色シルト(炭化物混、青灰色シルト50%混)
2. 青灰色シルト(炭化物・酸化鉄混、灰色シルト70%混)



SP9239
1. 灰色粘質シルト(炭化物・酸化鉄混、灰色砂質シルト40%混)
2. 青灰色砂質シルト(炭化物・酸化鉄混、灰色シルト混)
3. 灰色粘質シルト(炭化物混、青灰色砂質シルト混)

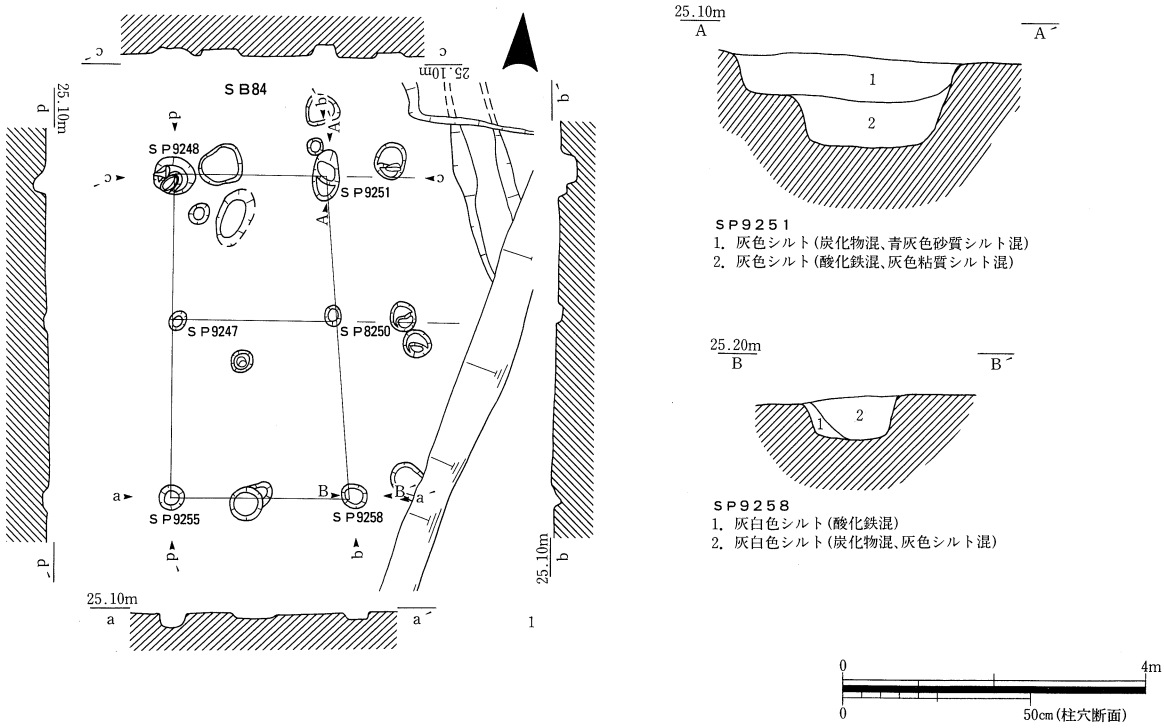


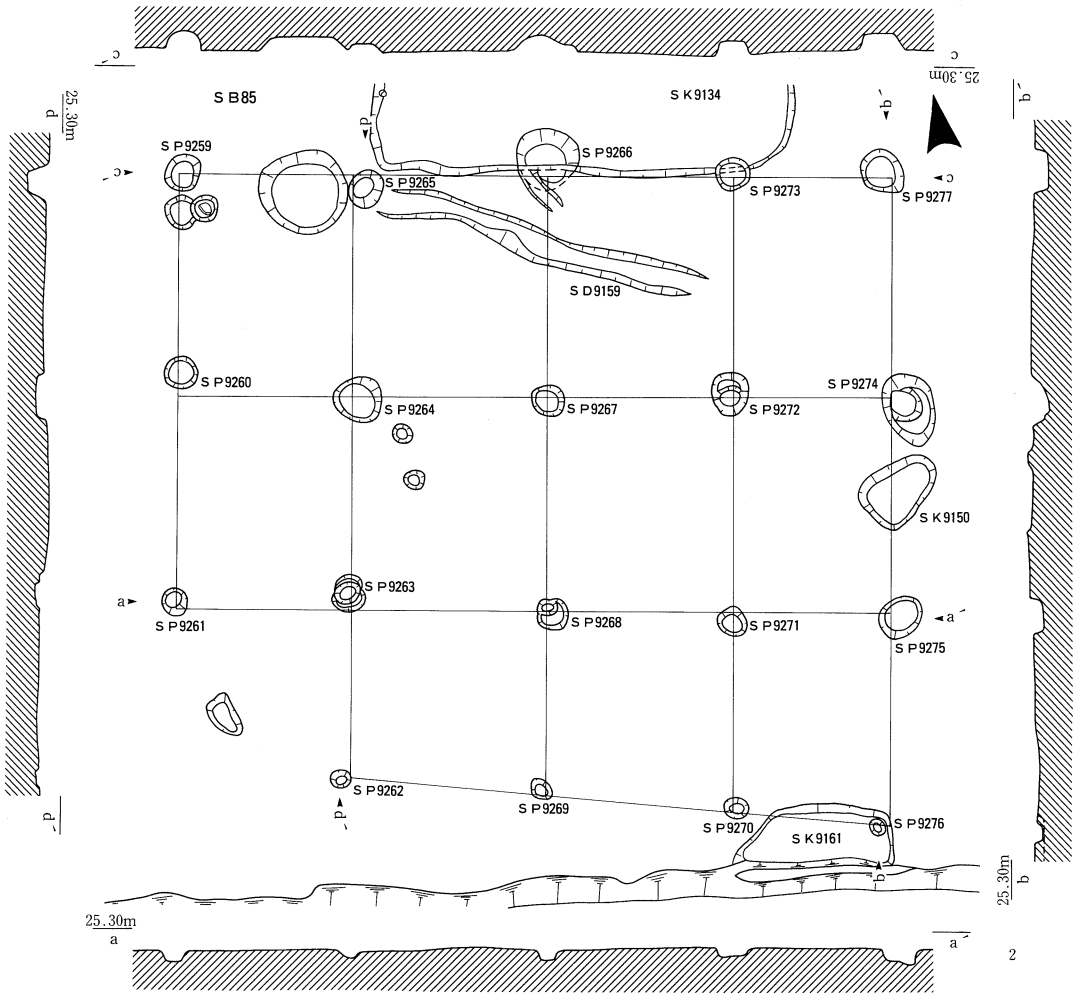
SP9242
1. 青灰色砂質シルト(炭化物混、灰色シルト混)
2. 青灰色粘質土(ピート混、IIIb層相当)



第130図　遺構実測図

1.SB82　2.SB83





第131図　遺構実測図

1.SB84　2.SB85

類でいずれも13～14世紀代のものである。735は珠洲の擂鉢でIV期とみられ，14世紀代の実年代が想定できる。736はＳＢ59付近の柱穴ＳＰ5007出土の呪符木簡である。上部を圭頭状にし，下端を尖らすもので片面に符籙を墨書している。樹種はスギ。731・743はそれぞれＳＰ25・8011出土の柱根で，後者は端部近くにホゾ穴があけられ，樹種はスギである。747・748はＳＰ9248・9182の柱の礎板で，後者の樹種はスギである。

Ｂ　柵（第101・108・109・116・118図）

８号柵（ＳＡ８）はＡ地区ＳＢ40の内側に位置する。南北方向に３間分伸び，柱間寸法は不揃いで，全長7.84ｍとなる。

９号柵（ＳＡ９）はＡ地区ＳＢ43の東側に位置する。南北方向に２間分伸び，全長4.32ｍとなる。

10号柵（ＳＡ10）はＡ地区ＳＢ46の北側に位置する。東西方向に２間分伸び，全長3.32ｍとなる。

11号柵（ＳＡ11）はＢ２Ｅ地区ＳＢ52の東側に位置する。南北方向に２間分伸び，方向はＳＢ52の主軸と同じである。全長4.28ｍ。

12号柵（ＳＡ12）はＢ２Ｅ地区ＳＢ55の西側に位置する。南北方向に２間分伸び，全長3.36ｍ。

13号柵（ＳＡ13）はＣ３地区ＳＢ66の北側に位置する。東西方向に４間分伸び，全長7.72ｍ。

14号柵（ＳＡ14）はＣ３地区ＳＢ66の東側に位置する。南北方向に２間分伸び，全長6.00ｍ。

注１　以下の掘立柱建物の説明でも同様であるが，ここに説明する柱穴の大きさは，測量時のものである。地山の土質の関係で，発掘時に比べ柱穴の縁辺が崩壊して一回り大きくなってしまったものが相当あり，実際はこれより小さなものが多い。あくまで参考値として見ていただきたい。

注２　本節においては，極端に柱間が狭い場合・側柱列の直径が明らかに小さなもの・柱間数が身舎部と相違するもの等の場合を除き，このような例については積極的に庇部とは認定していない。柱列のみから庇部と身舎部とを区別することは，上屋部分が遺存していない現状では非常に困難であり，また縁の出を支える束柱との区別の問題もあると考えられるので，将来の検討課題としておきたい。

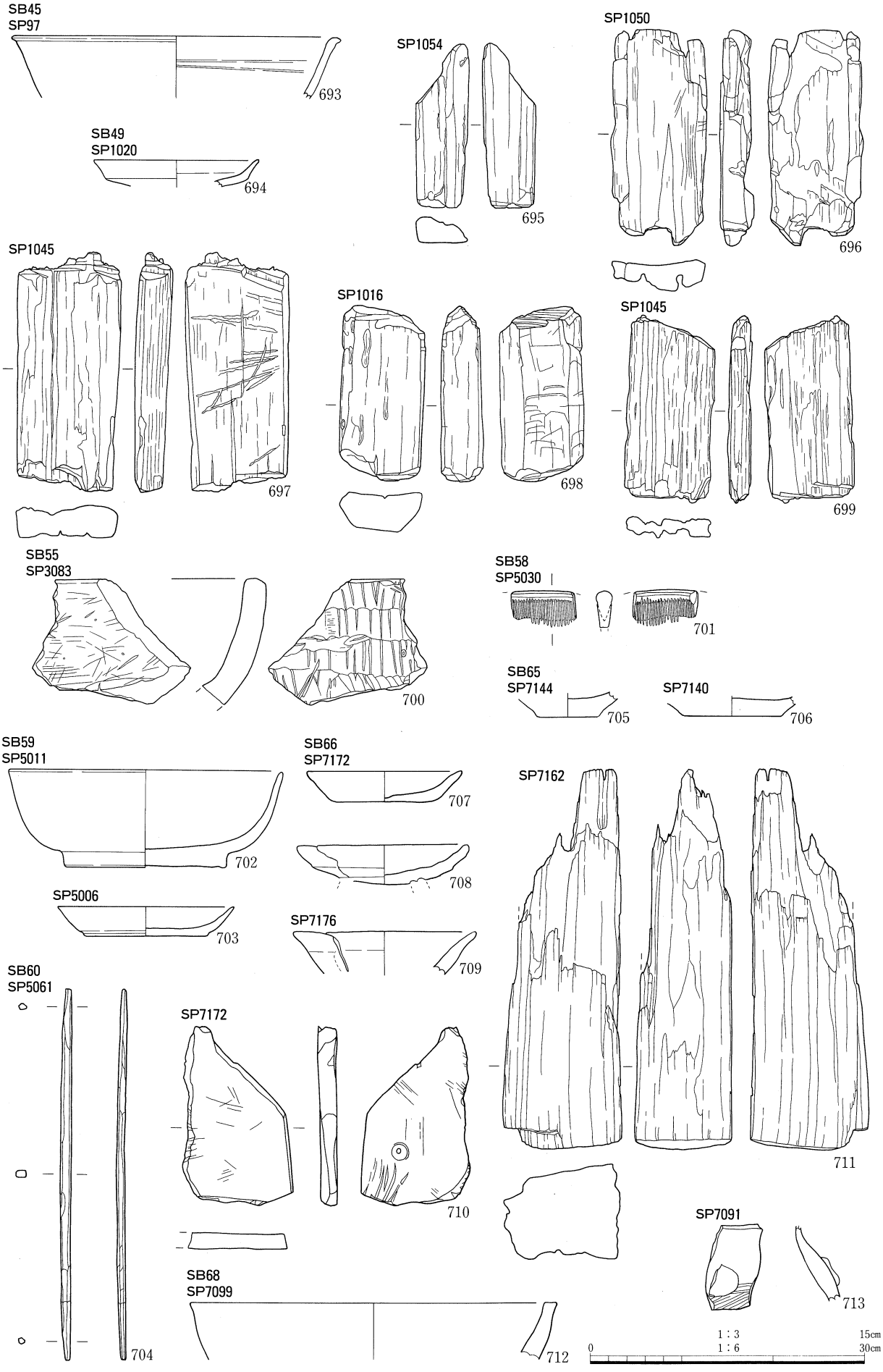
注３　河西健二・中川道子　1993　「Ⅶ調査概要　３能越自動車道関連発掘調査　１中世面　(1)Ａ地区」『埋蔵文化財年報(4)』財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

注４　河西健二　1993　「Ⅷ研究レポート　五社遺跡調査で思ったこと」『埋蔵文化財年報(4)』財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

注５　越前慎子　1996　「Ｃ．中近世の土器・陶磁器　１．中世土師器」および「梅原胡摩堂遺跡出土中世土師器の編年」『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告（遺物編）－東海北陸自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅱ－』財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所　以下の分類もこれに準じた。

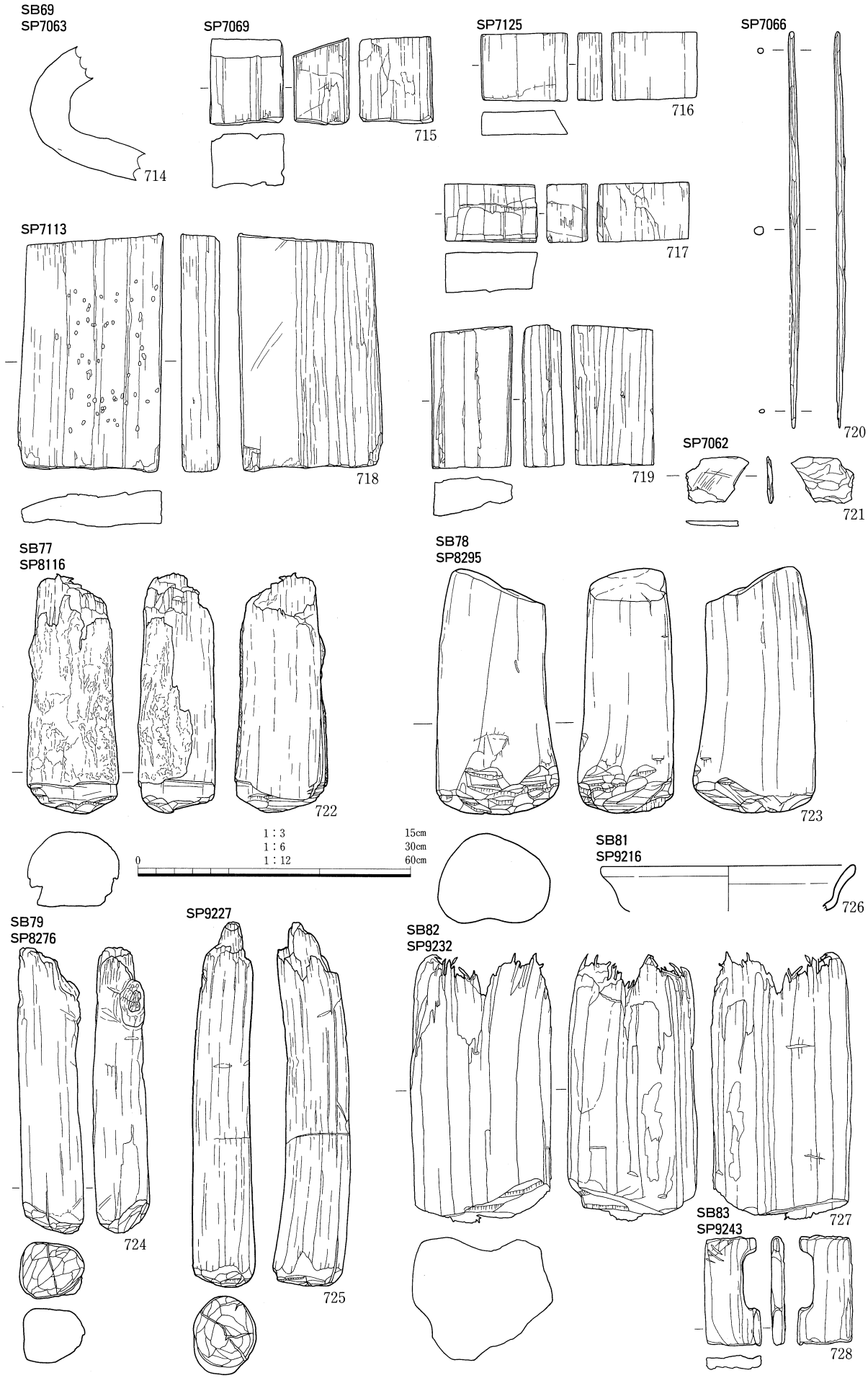
注６　谷杉廷子　1993　「Ⅶ調査概要　３能越自動車道関連発掘調査　１中世面　(5)Ｃ１地区」　『埋蔵文化財年報(4)』財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

注７　珠洲の時期区分や実年代については，吉岡康暢　1994　『中世須恵器の研究』吉川弘文館に準拠した。

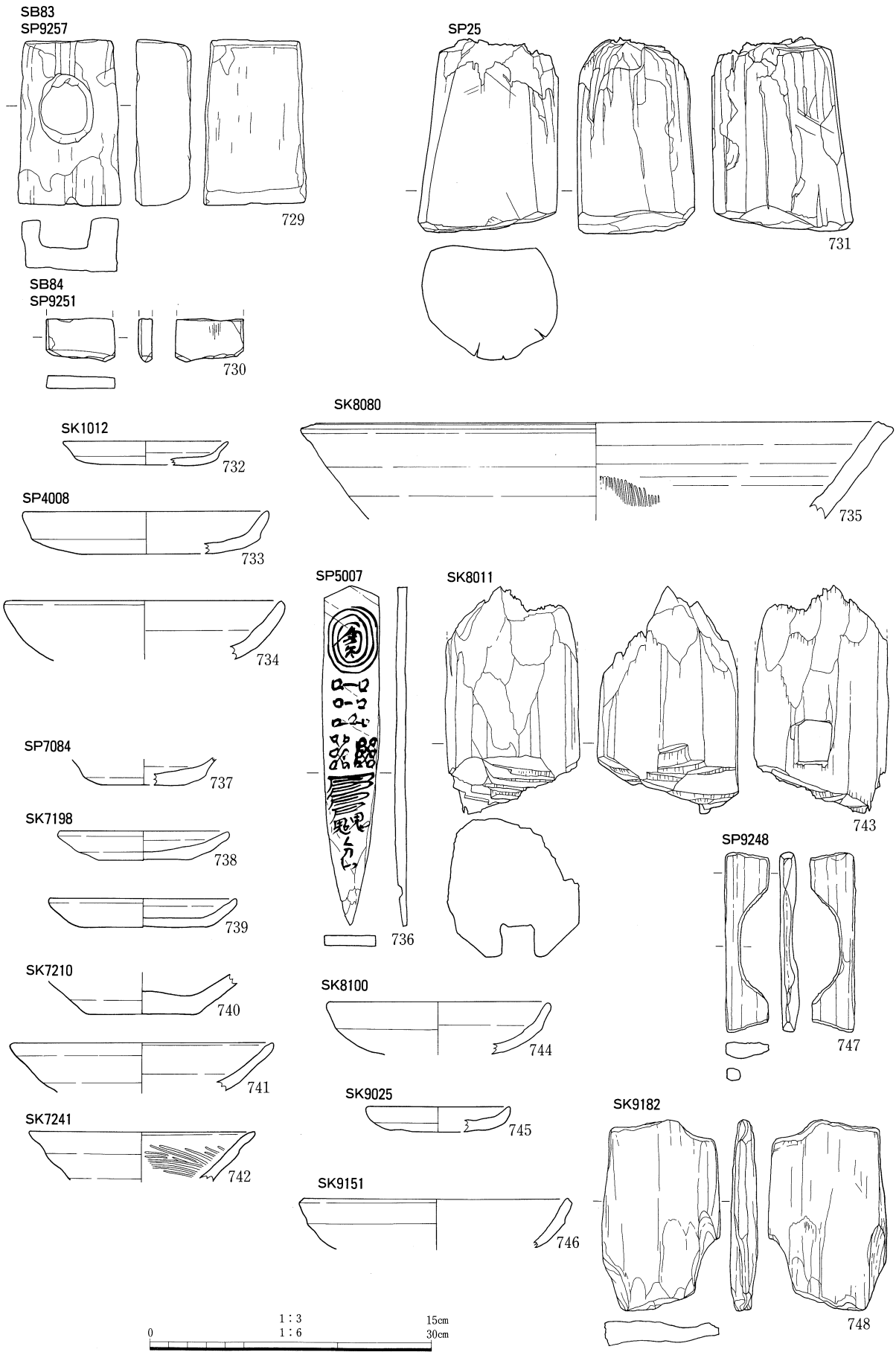


第132図　遺物実測図　(693・694・700～710・712・713　1/3, 695～699・711　1/6)

SB45(693)　SB49(694～699)　SB55(700)　SB58(701)　SB59(702・703)　SB60(704)　SB65(705・706)
SB66(707～711)　SB68(712・713)



第133図　遺物実測図　(714・720・721・726　1/3，715～719・722・723・727・728　1/6，724・725　1/12)
SB69(714～721)　SB77(722)　SB78(723)　SB79(724・725)　SB81(726)　SB82(727)　SB83(728)



第134図　遺物実測図　(730・732～742・744～746　1/3,　729・731・743・747・748　1/6)

SB83(729)　SB84(730)　SP25(731)　SK1012(732)　SP4008(733・734)　SP5007(736)　SP7084(737)
SK7198(738・739)　SK7210(740・741)　SK7241(742)　SK8011(743)　SK8080(735)　SK8100(744)
SK9025(745)　SK9151(746)　SK9182(748)　SP9248(747)

C　溝

溝には自然流路(川跡)，建物群の区画溝，雨落ち溝，道路側溝，畠のさく跡等様々な性格のものが含まれる。時期的にも中世から近世・現代に至るものもある。ここでは溝のうち代表的なものを選択して報告することにする。

42号溝（第135・137図，図版171・200）

A地区の北側に位置する南北方向の溝である。幅1.5m～2.5m，全長約22mを確認した。SB42とSB43・44の間を抜けて北流する自然流路で，途中でくびれて方向をわずかに北方向へ変える。現状の深さは30cm程で，溝肩の立ち上がりは緩やかである。覆土は部分的に砂層を挟む場合がみられるものの，基本的には灰色～灰オリーブ色の砂質シルトである。南端部付近からSD70が北に伸びるが，SD42はこれよりも古い。

出土遺物には中世土師器・珠洲・中国製白磁（IV類）・木製品（曲物・加工板）・フイゴの羽口・混入品と思われる伊万里がある。第137図749は珠洲の甕口縁部である。大きく外反する器形で口縁部内面には浅い凹線が巡る。珠洲編年のI期後半に比定でき，12世紀後半の年代が考えられる。750は肩部に櫛描波状文を施す珠洲の壺である。頸部以上と体部下半以下を欠くが，四耳壺になる可能性が高い。751は中国製白磁の碗である。小片で口径不明であるが玉縁状口縁を持つもので，太宰府分類のIV類にあたる[注1]。752は木札状に加工したもので上端近くに釘穴がある。753は一端にホゾ状の凸部を作り出した板材である。754は破片となったフイゴの羽口で，外径72mm，内径21mmと復元できる。村落内鍛冶作業の存在が考えられる。

SD42の時期は珠洲や白磁から12世紀後半～13世紀前半と考えられる。

45号溝（SD45，第136・137図，図版200）

B1地区からA地区南西隅に向かって北流する自然の浅い谷。幅6m～8mあり，溝肩は緩やかに立ち上がる。深さは30cm～40cmと浅い。遺物は古代の土師器・中世土師器・珠洲・瓦器・中国製白磁・青磁などが出土している。第137図755はスギ材を用いた柄である。図上端から2cm程の所に緊縛のための溝を巡らし，約15cmのところでもう一条溝を巡らす。先端部には割れ目がある。下端はやや反り，端部には焼痕が残る。全体に漆が筋状に薄く残っている。武器あるいは工具などの刃物の柄と考えられる。同様の形態のものがD地区の谷部からも出土している。756は古代の土師器椀。

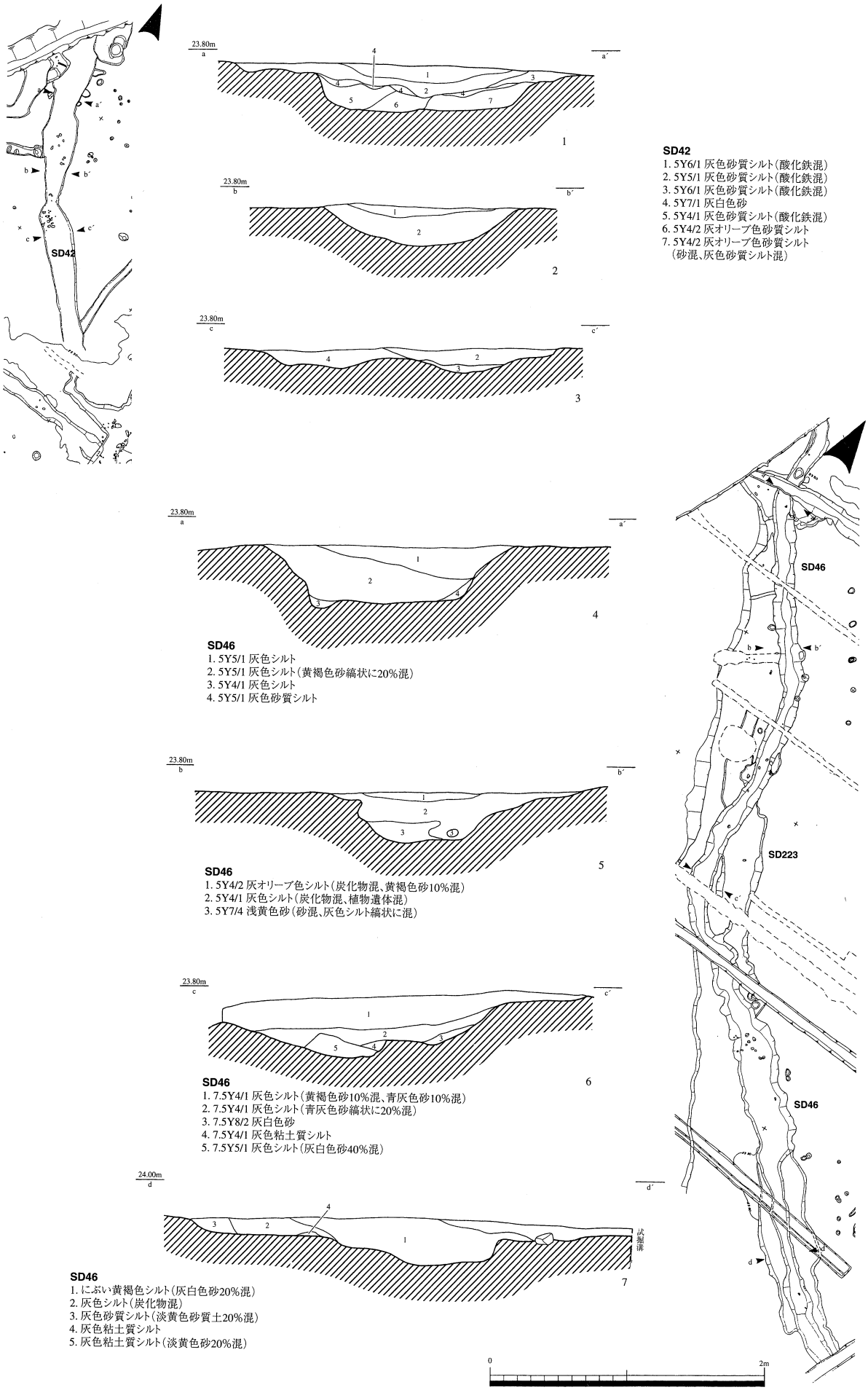
SD45の埋没時期はSD46より新しく，中世後半～近世と考えられる。

46号溝（SD46，第135・137・138・139図，図版157・171・172・200・201）

B1地区北東部からA地区南西部に向かって，蛇行しながら北流する自然流路である。A地区とB1地区の建物群全体の西側を画する溝となる。B1地区にかかる南側では幅1.5m～2.0mあるが，北側では幅80cm前後と細くなる。深さは現状で30cm～40cmである。全長は約34mを検出し，両端とも発掘区外へ伸びる。溝の堆積土は灰色シルト質が中心である。断面形は基本的には皿状を呈し溝肩の立ち上がりは緩やかであるが，一部では地震による地層の水平移動により土層堆積に乱れの認められる部分もある。第135図5のb－b'土層断面図では左肩部の地山の一部が溝中央に向かって覆い被さるように盛り上がっており，溝の上部と下部が横方向にずれた地震痕跡と見なされる[注2]。流路は洪水等によって若干変化しており，溝中央付近で検出されたSD223はこれに先行する溝である。

遺物は古代土師器・須恵器・中世土師器・珠洲・中国製白磁・青磁・瓷器系中世陶器・石臼・下駄・漆椀・櫛・箸・加工材などが出土している。

第137図757・763は回転糸切り底の古代土師器椀と皿。758～762・764・765は非ロクロ中世土師器皿



SD42
1. 5Y6/1 灰色砂質シルト(酸化鉄混)
2. 5Y5/1 灰色砂質シルト(酸化鉄混)
3. 5Y6/1 灰色砂質シルト(酸化鉄混)
4. 5Y7/1 灰白色砂
5. 5Y4/1 灰色砂質シルト(酸化鉄混)
6. 5Y4/2 灰オリーブ色砂質シルト
7. 5Y4/2 灰オリーブ色砂質シルト
(砂混、灰色砂質シルト混)

SD46
1. 5Y5/1 灰色シルト
2. 5Y5/1 灰色シルト(黄褐色砂縞状に20%混)
3. 5Y4/1 灰色シルト
4. 5Y5/1 灰色砂質シルト

SD46
1. 5Y4/2 灰オリーブ色シルト(炭化物混、黄褐色砂10%混)
2. 5Y4/1 灰色シルト(炭化物混、植物遺体混)
3. 5Y7/4 浅黄色砂(砂混、灰色シルト縞状に混)

SD46
1. 7.5Y4/1 灰色シルト(黄褐色砂10%混、青灰色砂10%混)
2. 7.5Y4/1 灰色シルト(青灰色砂縞状に20%混)
3. 7.5Y8/2 灰白色砂
4. 7.5Y4/1 灰色粘土質シルト
5. 7.5Y5/1 灰色シルト(灰白色砂40%混)

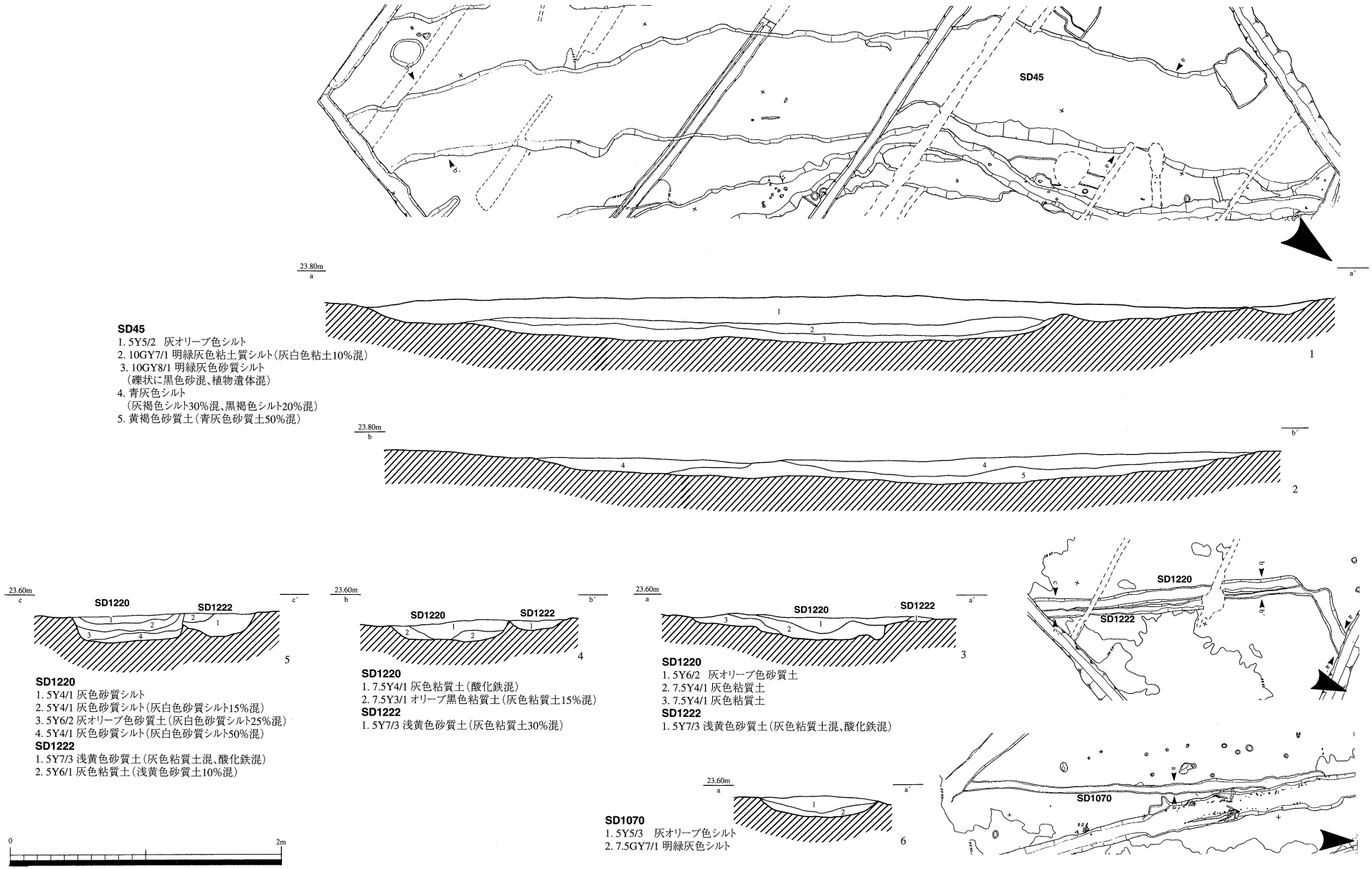
SD46
1. にぶい黄褐色シルト(灰白色砂20%混)
2. 灰色シルト(炭化物混)
3. 灰色砂質シルト(淡黄色砂質土20%混)
4. 灰色粘土質シルト
5. 灰色粘土質シルト(淡黄色砂20%混)

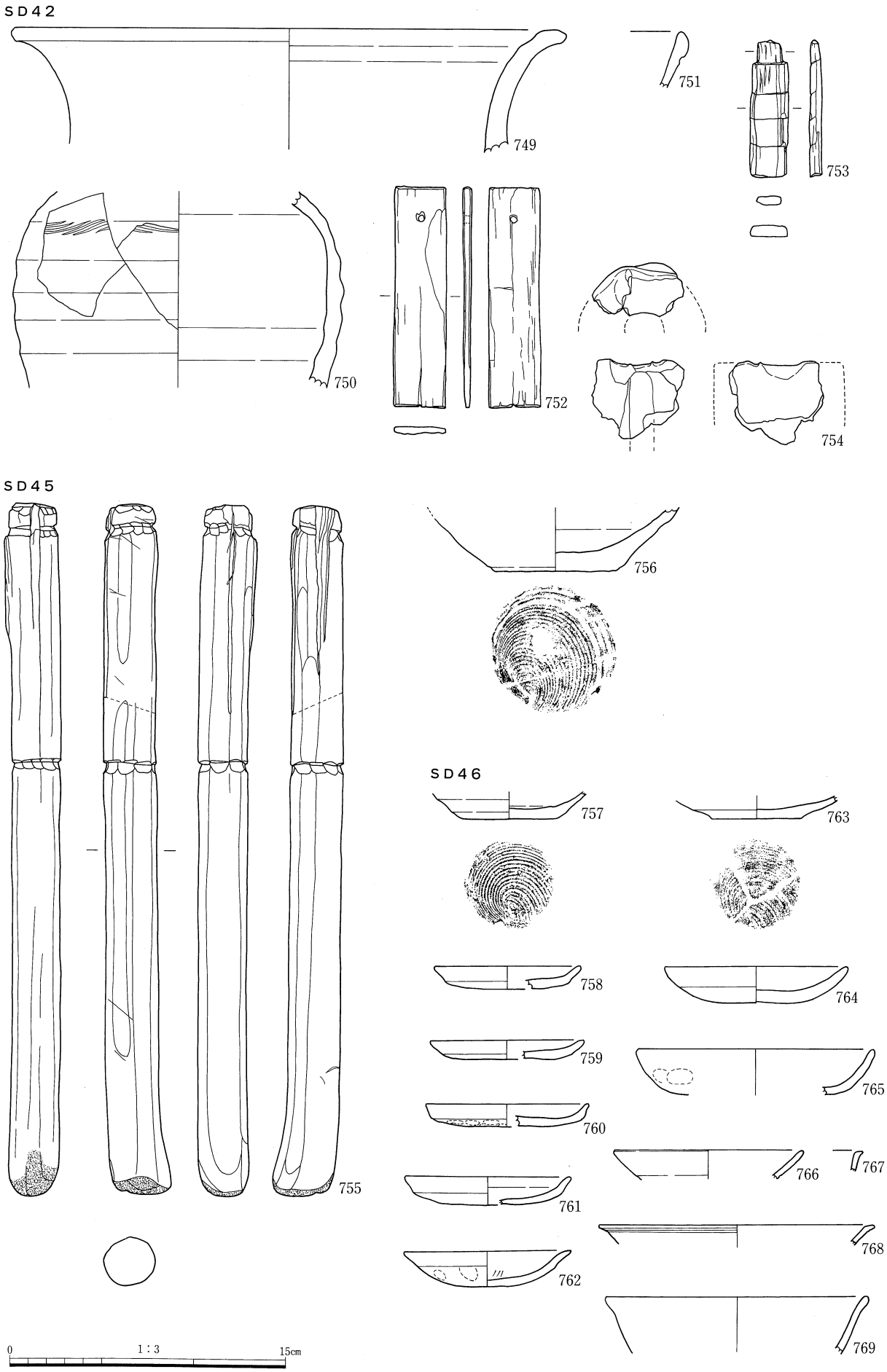
第135図　遺構実測図

1～3.SD42　4～7.SD46

第136図　遺構実測図

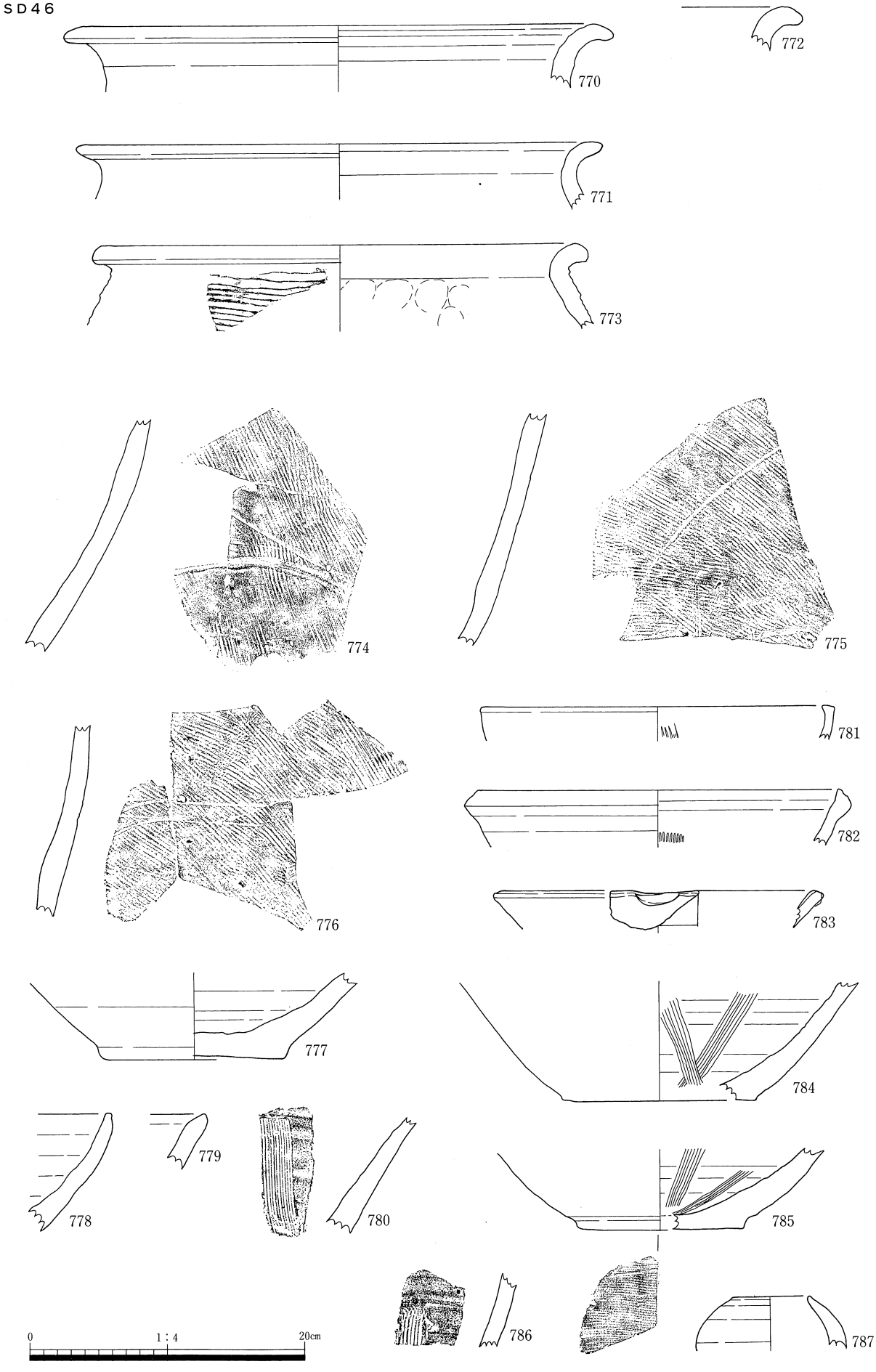
1・2.SD45　3・4・5.SD1220・SD1222　6.SD1070



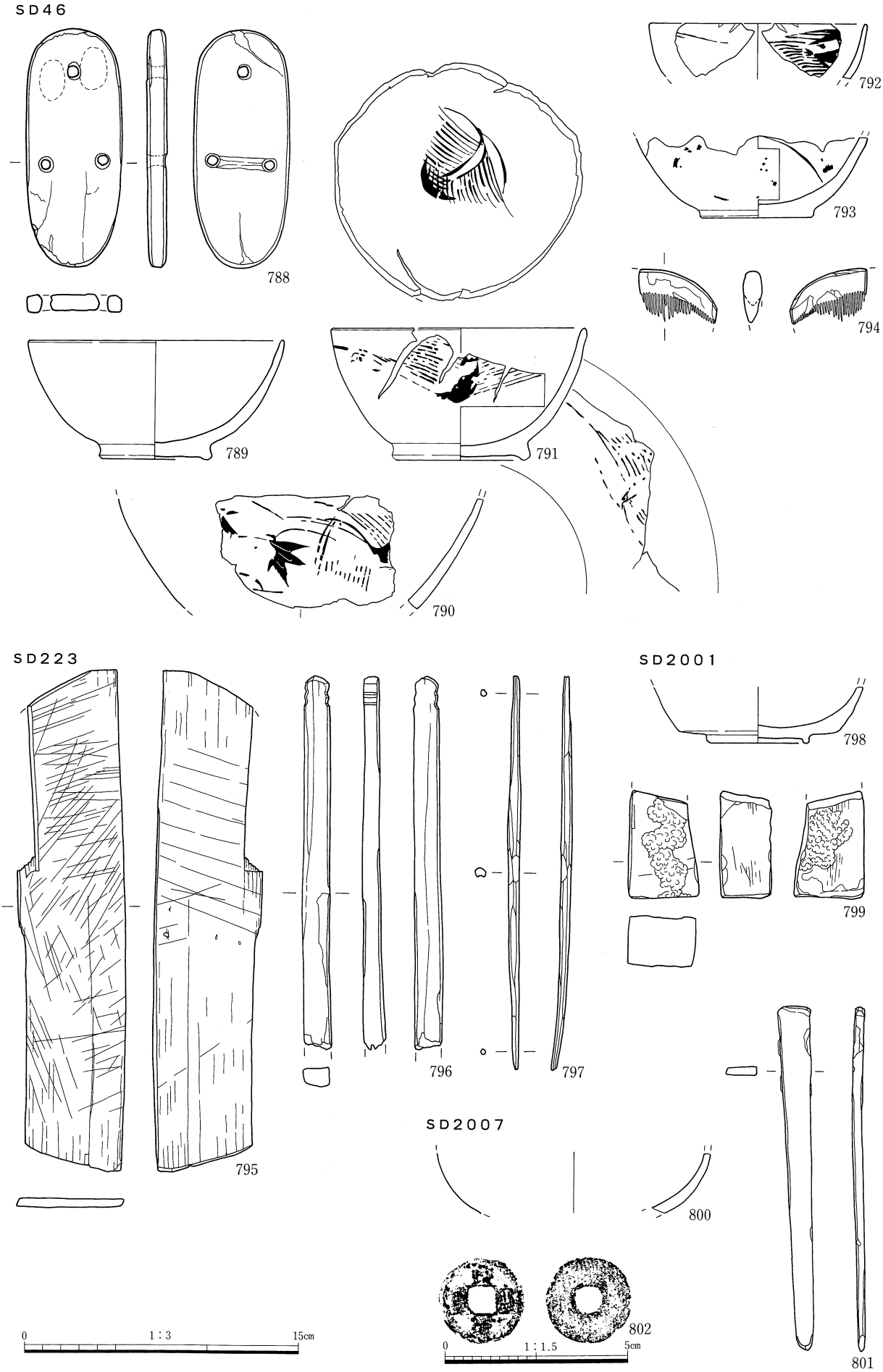


第137図　遺物実測図　(1/3)

SD42(749～754)　SD45(755・756)　SD46(757～769)



第138図　遺物実測図　(1/4)
SD46(770～787)



第139図　遺物実測図　(802　2/3，788～801　1/3)

SD46(788～794)　SD223(795～797)　SD2001(798・799)　SD2007(800～802)

で，758～761・764はＮＤII類，762がＮＪ類，765がＮＣ類に分類できる。766は中国製白磁の碗もしくは皿，767・768は同じく白磁の端反り碗（Ｖ類４），769は龍泉窯系青磁碗で上田氏による分類のＤ類にあたる[注3]。第138図770～786は珠洲である。770～772は甕口縁部で，大きく外反し，端部が嘴状に尖る。口縁部内面には浅い凹線が巡るもので，珠洲編年Ｉ期後半からII期前半にかけてのものであろう。773の甕は，口縁部が比較的短く外反し，端部が丸く終わるもので，やや新しく，III～IV期と考えられる。774～776は同一個体で甕の体部下半部。777は甕の底部。778～786は擂鉢である。778は口縁部が内湾しながら立ち上がり，端部はやや薄くなり，角張るもので，Ｉ～II期と考えられる。781は端部内面が肥厚するものでII期，779・782は口縁部形状からIV期，784・785は口縁部を欠く体部破片であるが，内面の卸目が疎らに引かれることから，II～III期に比定できよう。787は自然釉が掛かる瓷器系中世陶器の無頸壺である。産地は不明。

788は無歯下駄。スギ材を用い，全長13cmの小型のもので，子供用か。台裏の後緒を繋ぐ溝が切ってある。789は無文の漆椀。口径12.5cmでわずかに高台を削り出す。790は大ぶりの漆椀。黒色漆地に赤色漆で草木文を描く[注4]。791は外面と内底面に草木文を描く。792も口縁部内外面に草木文を描く。793は文様の意匠は不明。789～791・793の樹種はブナである。794はイスノキを用いた櫛で漆塗り。赤色漆による文様が残るが，ほとんど剝げ落ちており意匠は不明。

ＳＤ46の時期は，出土遺物の時期が12世紀末から15世紀代まで幅広くあり，13世紀代を中心とする。主体的な埋没時期は13世紀代であるが，一部は14～15世紀代まで残るものと考えられる。

70号溝（ＳＤ70，第136図）

Ａ地区北西部に位置し，ほぼ直線的に北流する溝である。幅50cm～100cmで，全長約26.5ｍを検出した。壁肩は緩やかに立ち上がる。深さは約20cmでやや緑がかったシルトが堆積する。北端はＳＤ44に切られ，南端はＳＤ42と重なるが前後関係は不明。出土遺物がほとんどなく，時期は不明である。

220・222号溝（ＳＤ220・222，第136図）

Ａ地区北東部を直線的に北流し，ＳＢ38の南側で北東方向に折れる溝である。北流する部分では２本に分かれるが，折れ曲がってからは１本になる。重なる部分では，ＳＤ222が古く，ＳＤ220が新しい。ＳＤ220は幅80cm～100cm，断面が逆台形となり，ＳＤ222は幅40cm～50cm，断面は半円形に近い。遺物はＳＤ220から加工材が出土しているのみで，時期は不明。

223号溝（第139図，図版200・201）

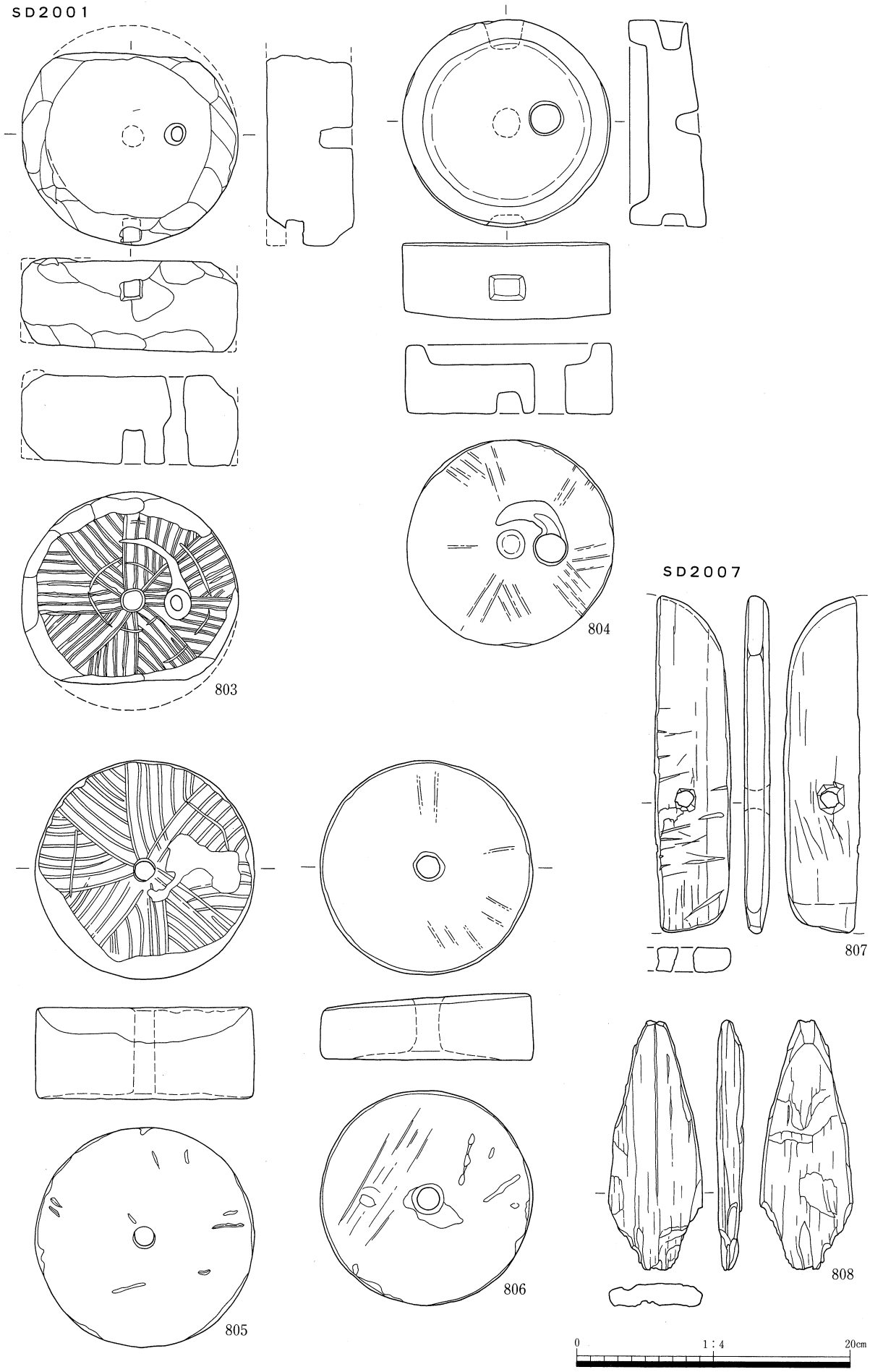
Ａ地区南部でやや蛇行しながら北流する自然流路である。前述したＳＤ46の一部区間でこれに先行する流路として確認でき，幅100cm～300cm，全長約10ｍを検出した。

出土遺物は珠洲・漆碗・箸・曲物・円形板・加工棒・混入と見られる伊万里などがある。第139図795は直径約28cmに復元できる，底板とみられる円形板である。796は板材を細長く棒状にしたもので，一端を圭頭状にし，少し下がって２箇所の切り込みを両側から入れる。他端は欠損する。樹種はスギ。797は箸である。

ＳＤ223の時期は，ＳＤ46より古く，おそらく12世紀後半代と考えられる。

2001号溝（ＳＤ2001，第139・140図，図版158・219・220）

Ｂ２Ｅ地区西側からＢ２地区にかけて，西側にカーブしながら北流する溝である。幅1.5ｍ～2.5ｍで全長約50ｍを検出した。自然流路と考えられ，ＳＤ2007やＳＤ2008とともに，Ｂ２Ｅ地区建物群に西側を区切る溝となっている。第139図798は漆椀である。高台径が小さく，体部下半と底部の角が張り出す。799は凝灰岩製の砥石。第140図803は凝灰角礫岩製の石臼（上石）。804は同じく凝灰岩製。805



第140図　遺物実測図　(1/4)
SD2001(803～806)　SD2007(807・808)

は凝灰角礫岩製の石臼（下石）。806は同じく凝灰岩製。この他に須恵器や唐津が出土している。ＳＤ2001の時期は明瞭でなく，中世から近代にかけて埋没したものと考えられる。

2007号溝（ＳＤ2007，第139・140，図版158・201・202・224・226）

Ｂ２Ｅ地区の南西部からＢ２地区にかけて，西側にカーブしながら北流する浅い谷である。幅は10ｍ以上あり溝肩は緩やかに立ち上がる。遺物は須恵器・珠洲・唐津・伊万里・陶磁器・砥石・下駄・漆椀・加工板・楔状鉄器・銅銭・矢板などが出土している。第139図800は漆椀，801は楔状のもので，鉄製。802は銅銭であるが，銭貨名は不明。第140図807は半欠品であるが，無歯下駄と考えられる。808は先端を矢板状に尖らせた板材である。ＳＤ2007も中世から近世にかけて埋没したもので，一部は現代まで残った可能性がある。

3003号溝（ＳＤ3003）

Ｂ２Ｅ地区の中央部，ＳＢ55の西側に位置し，北流する幅約60cm～120cmの溝である。全長約24ｍを検出。断面は逆台形を呈し，堆積土は砂質シルト。南端は直角に東に折れてＳＤ3089につながる。ＳＢ55を区画する溝と考えられる。出土遺物は須恵器・珠洲がある。時期は明確ではないが，周辺出土の遺物から13世紀代と推測される。

3007号溝（ＳＤ3007，第141図）

Ｂ２Ｅ地区の北東隅，ＳＢ52の東側に位置し，東流する幅40cm～80cmの溝である。全長約８ｍを検出。やや蛇行しながら発掘区外に伸びる。断面は不整半円形を呈し，堆積土は砂質シルト。出土遺物はなく時期不明であるが，周辺出土の遺物から13世紀代と推測される。

3008号溝（ＳＤ3008，第141図）

Ｂ２Ｅ地区の北東隅，ＳＢ52の東側に位置し，北流する幅40cm～50cmの溝である。全長約７ｍを検出。北端はＳＤ3008につながり，直角に折れる。南端はＳＢ52の南側に短く曲がって終わる。断面は逆台形を呈し，堆積土は砂質シルト。ＳＢ52の雨落ち溝の可能性もある。出土遺物はなく時期不明であるが，周辺出土の遺物から13世紀代と推測される。

3009号溝（ＳＤ3009，第141図）

Ｂ２Ｅ地区の北東隅，ＳＢ52の東側に位置し，東流する幅約30cmの溝である。全長約６ｍを検出したが，溝の南肩は撹乱を受けており，明らかでない。東端はＳＤ28につながる。断面は逆台形を呈し，堆積土は砂質シルト。出土遺物はなく時期不明であるが，周辺出土の遺物から13世紀代と推測。

3012号溝（ＳＤ3012，第141図）

Ｂ２Ｅ地区の北東隅，ＳＢ52の東側に位置し，東流する幅約50cmの溝である。全長約2.6ｍを検出。断面は逆台形を呈し，堆積土は砂質シルト。出土遺物はなく時期不明であるが，周辺出土の遺物から13世紀代と推測される。

3028号溝（ＳＤ3028，第141図）

Ｂ２Ｅ地区の北東隅，ＳＢ52の東側に位置し，東流する幅約50cmの溝である。全長約２ｍを検出。東端はＳＫ3005につながる。断面は逆台形を呈し，堆積土は砂質シルト。出土遺物はなく時期不明であるが，周辺出土の遺物から13世紀代と推測される。

3035号溝（ＳＤ3035，第141図）

Ｂ２Ｅ地区の北東部，ＳＢ53の南東側に位置する幅20cm～30cmの溝である。北東－南西方向に直線的に伸び，全長約2.3ｍを検出。断面は半円形を呈し，堆積土は砂質シルト。出土遺物はなく時期不明であるが，周辺出土の遺物から13世紀代と推測される。

3036号溝（ＳＤ3036，第141図）

Ｂ２Ｅ地区の東側をわずかに蛇行しながら北流する幅40cm～50cmの溝である。南側に続くとみられるＳＤ3098も含めると，途中少し途切れるものの全長約18ｍを検出。断面は逆台形を呈し，堆積土は砂質シルト。出土遺物はなく時期不明であるが，周辺出土の遺物から13世紀代と推測される。

3089号溝（ＳＤ3089）

Ｂ２Ｅ地区の南部，ＳＢ55の南側に位置し，西流する幅40cm～60cmの溝である。全長約12ｍを検出。西端はＳＤ3003につながり，ＳＢ55を囲む溝となる。断面は半円形を呈し，堆積土は黒褐色砂。出土遺物はなく時期不明であるが，周辺出土の遺物から13世紀代と推測される。

3103号溝（ＳＤ3103，第141図）

Ｂ２Ｅ地区の南西部，ＳＢ54の南側に位置し，西流する幅約35cmの溝である。全長約2.6ｍを検出。周辺で検出された南北方向の畠のさく跡に似る。断面は半円形を呈し，堆積土は砂質シルト。出土遺物はなく時期不明であるが，周辺出土の遺物から13世紀代と推測される。

3104号溝（ＳＤ3104，第141図）

Ｂ２Ｅ地区の南西部，ＳＢ54の南西側に位置する，幅約40cmの南北溝である。全長約1.5ｍを検出。畠のさく跡と考えられる。断面は逆台形を呈し，堆積土は砂質シルト。出土遺物はなく時期不明であるが，周辺出土の遺物から13世紀代と推測される。

なおＳＢ54とＳＢ55の中間部には南北方向の畠のさく跡とみられる溝群が検出されている。ＳＤ3051～3056・3068～3073・3104・3110・3111などで，幅は40cm～50cm，長さは１～５ｍまである。

3107号溝（ＳＤ3107，第141図）

Ｂ２Ｅ地区の南西部，ＳＢ54の北側柱列に位置する幅約40cmの東西溝である。全長約２ｍを検出。周辺で検出された南北方向の畠のさく跡に似る。断面は半円形を呈し，堆積土は砂質シルト。出土遺物はなく時期不明であるが，周辺出土の遺物から13世紀代と推測される。

3111号溝（ＳＤ3111，第141図）

Ｂ２Ｅ地区の南西部，ＳＢ54の北側に位置する，幅約30cmの南北溝である。全長約２ｍを検出。畠のさく跡と考えられる。断面は逆台形を呈し，堆積土は砂質シルト。出土遺物はなく時期不明であるが，周辺出土の遺物から13世紀代と推測される。

3112号溝（ＳＤ3112，第141図）

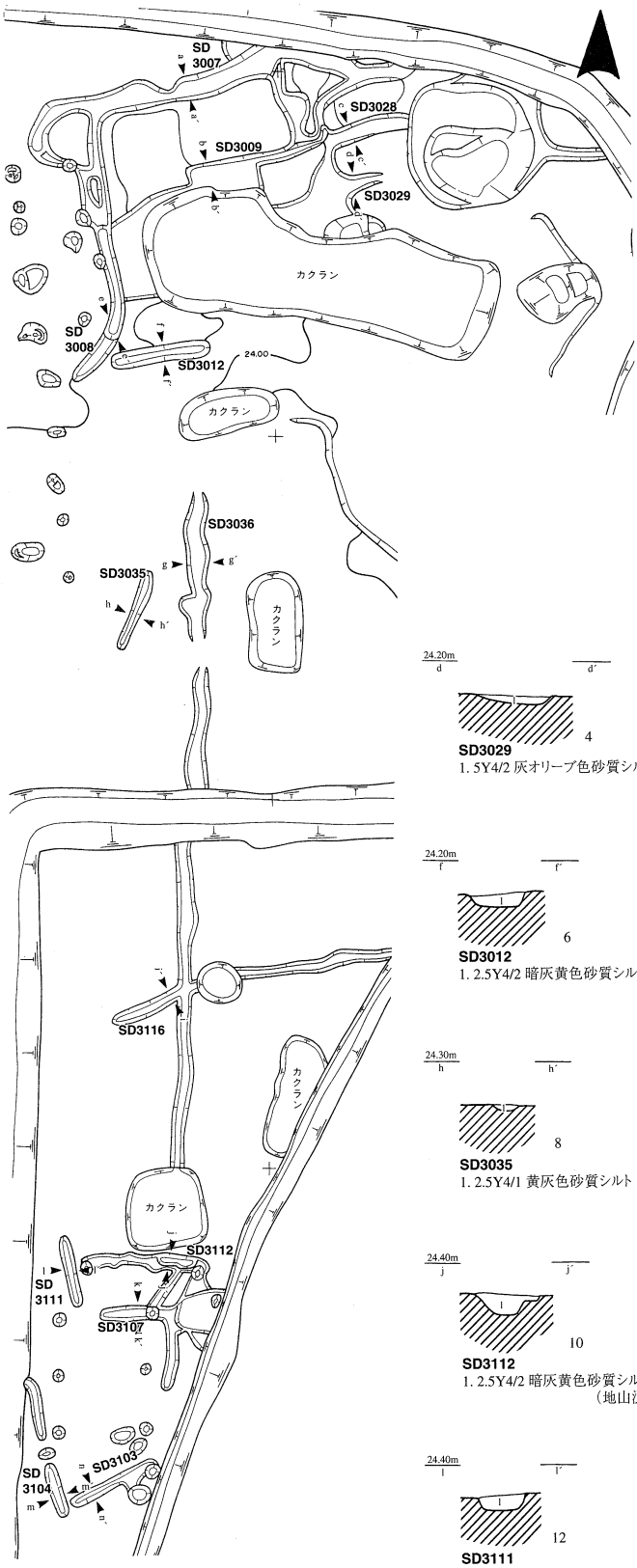
Ｂ２Ｅ地区の南西部，ＳＢ54の北側に位置する幅約40cmの東西溝である。全長約3.4ｍを検出。周辺で検出された南北方向の畠のさく跡に似る。断面は逆台形を呈し，堆積土は砂質シルト。出土遺物はなく時期不明であるが，周辺出土の遺物から13世紀代と推測される。

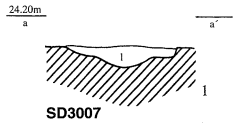
3116号溝（ＳＤ3116，第141図）

Ｂ２Ｅ地区の東部，ＳＢ53とＳＢ54の中間に位置し，西流する幅約30cm～40cmの溝である。全長約８ｍを検出。途中交差するＳＤ3098（3036）より古い。断面は半円形を呈し，堆積土は砂質シルト。出土遺物はなく時期不明であるが，周辺出土の遺物から13世紀代と推測される。

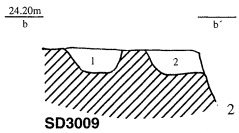
4001号溝（ＳＤ4001，第142・143図，図版159・172・202・227）

Ｂ３地区北東部に位置し，ＳＢ56の南部では西流し，ややカーブして北に折れる溝である。ＳＢ56の区画溝とみれないこともないが，むしろ自然流路に近い。東端は発掘区外に伸び，北端はＢ２Ｅ地区のＳＤ2001あるいはＳＤ2008につながるものと考えられる。幅は１ｍ～３ｍと場所により変化が大きく，一部現代の溝と交差し，溝肩の不明瞭な部分もある。断面形は逆台形状（ａ－ａ’）や半円状（ｃ－

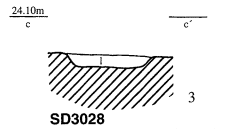




SD3007
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト

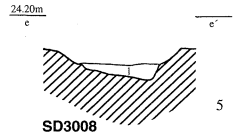


2
SD3009
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト



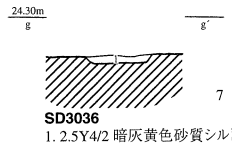
3
SD3028
1. 5Y4/2 灰オリーブ色砂質シルト
（地山混）

4
SD3029
1. 5Y4/2 灰オリーブ色砂質シルト



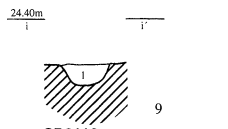
5
SD3008
1. 5Y3/2 オリーブ黒色砂質シルト
（地山混）

6
SD3012
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト



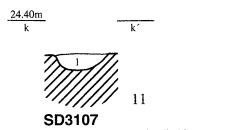
7
SD3036
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト

8
SD3035
1. 2.5Y4/1 黄灰色砂質シルト



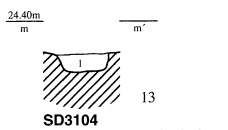
9
SD3116
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト
（地山混）

10
SD3112
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト
（地山混）

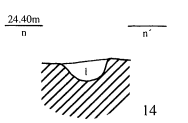


11
SD3107
1. 2.5Y4/1 黄灰色砂質シルト
（地山混）

12
SD3111
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト
（地山混）



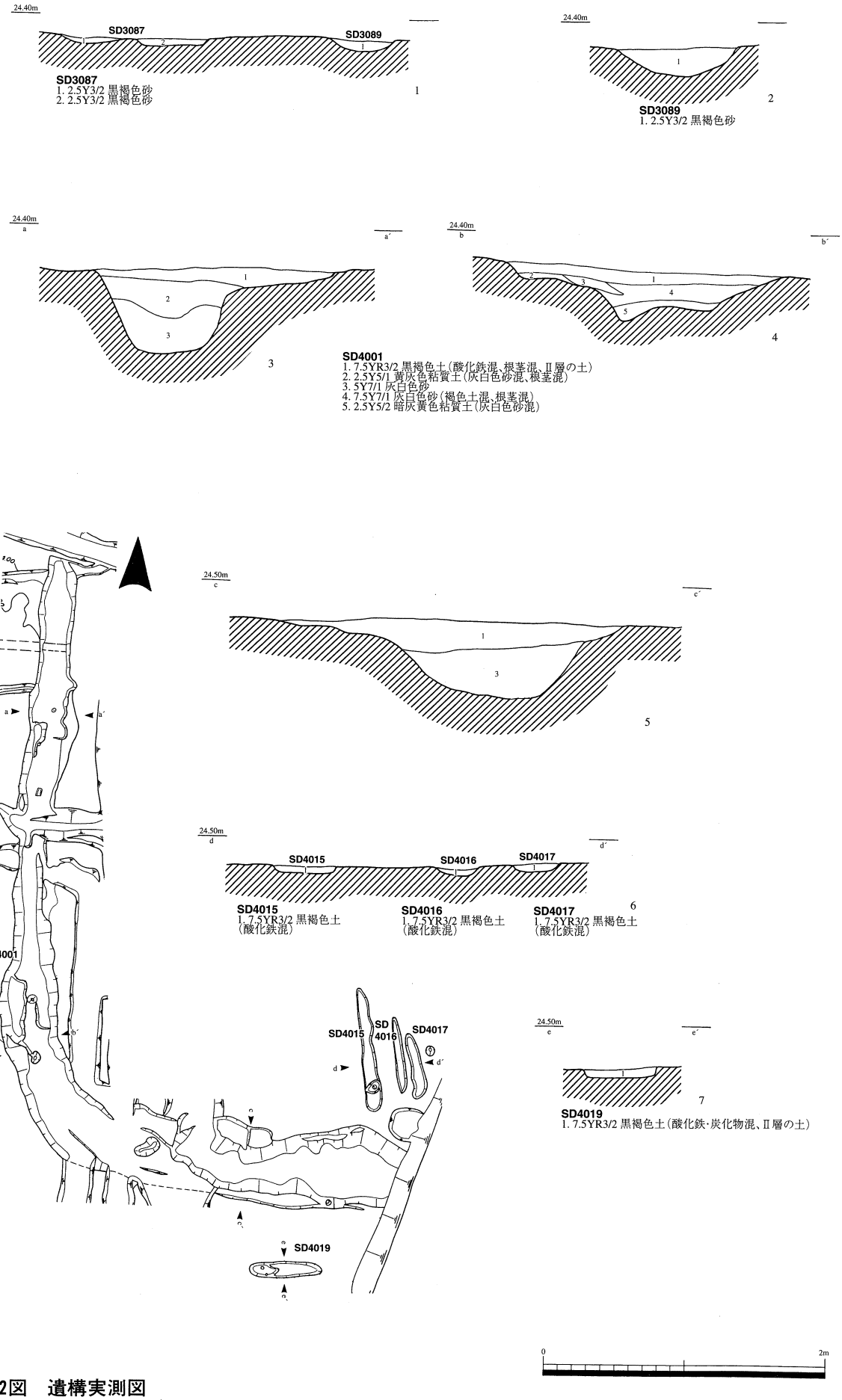
13
SD3104
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト
（地山混）



14
SD3103
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト
（地山混）

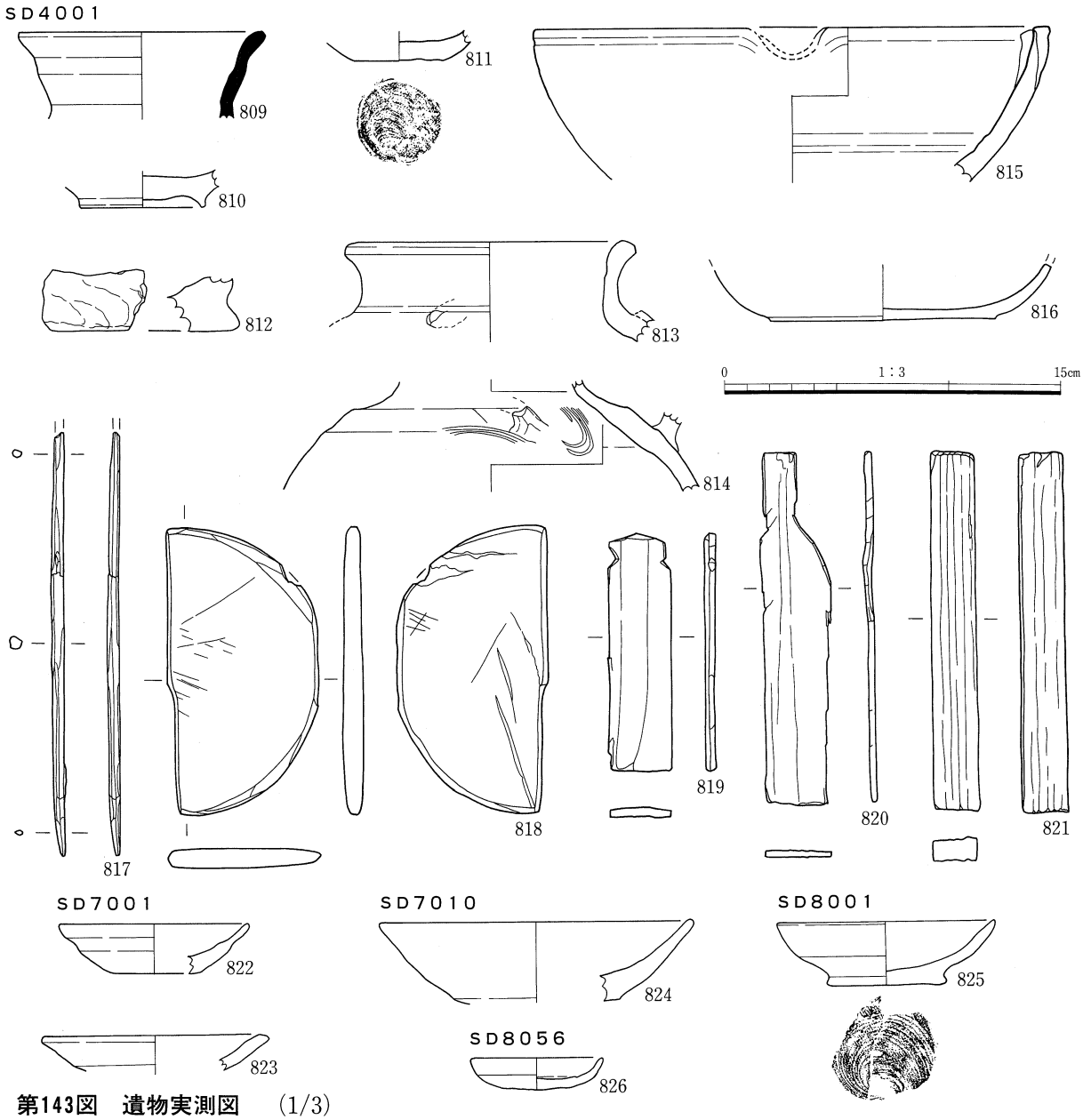
第141図　遺構実測図

1．SD3007　2．SD3009　3．SD3028　4．SD3029　5．SD3008　6．SD3012　7．SD3036　8．SD3035
9．SD3116　10．SD3112　11．SD3107　12．SD3111　13．SD3104　14．SD3103



第142図　遺構実測図

1．SD3087　2．3089　3～5．SD4001　6．SD4015・SD4016・SD4017　7．SD4019



第143図　遺物実測図　(1/3)
SD4001(809～821)　SD7001(822・823)　SD7010(824)　SD8001(825)　SD8056(826)

c')を呈し，これも場所によって変化が大きい。b－b'の断面図にみるように，土層や溝底の乱れなどは，A地区のSD46のように，地震による水平断層の可能性があるかもしれない。

遺物は古代土師器・須恵器・製塩土器・中世土師器・珠洲・中国製白磁・陶器・漆椀・箸・加工木などが出土している。第143図809は須恵器壺の口縁部。810は高台付，811は無高台で底部回転糸切り痕を残す土師器の椀もしくは皿。812は平底製塩土器の底部。体部との境の角が外に膨らみ，表面には手づくねの痕跡が顕著に残る。813・814は珠洲の四耳壺。813の口縁端部はやや肥厚し，814の肩部には櫛描波状文が施される。815は珠洲の擂鉢である。体部が丸く内湾して立ち上がる器形で，端部は四角くなる。卸目はみられない。珠洲のⅠ～Ⅱ期のものであろう。816は漆椀。薄手の作りで，樹種はケヤキ。817は箸，818は円形板，819は木札状のもので，上端を圭頭状にし両側から切り込みを入れる。820も同様の板状のもので，側面から切り込みを入れる。いずれも未成品と思われ，樹種はスギである。821は細長い板状に加工したもの。この他にウマの臼歯が出土している[注5]。

SD4001の時期は，珠洲などから12世紀末～13世紀代と考えられる。

4015・4016・4017号溝（ＳＤ4015・4016・4017，第142図）

Ｂ３地区北東部にあるＳＢ56の西側に，３本並ぶ南北溝である。Ｂ２Ｅ地区の溝群と同様，畠のさく跡の可能性がある。いずれも掘り込みは浅く，検出したのは10cm以下である。堆積土は黒褐色土。最も西にあるＳＤ4015は幅40cm～50cm，全長4.4ｍである。続いてＳＤ4016は幅30cm前後で，全長2.6ｍある。ＳＤ4017は幅40cm前後，全長2.4ｍである。出土遺物はなく，時期が決めにくいが，ＳＤ4001と同様12世紀末～13世紀代と考えられる。

4019号溝（ＳＤ4019，第142図）

Ｂ３地区北東部で，ＳＤ4001の南側に位置する東西溝である。幅約50cm，全長約2.6ｍを検出した。断面は逆台形を呈するが，掘り込みは浅く，10cm以下。時期はＳＤ4001と同じと考えておきたい。

5066号溝（ＳＤ5066，第111・144図）

Ｃ１地区の南西部で，ＳＢ58の東側に位置する南北溝である。幅40cm～100cm，全長約10ｍを検出した。溝北端はＳＢ58の北側に回り込むように，直角に短く西側へ折れる。ＳＢ58の雨落ち溝と考えられる。堆積土は上層に黒褐色土，中に砂層を挟み，下層はシルト層となる。遺物は箸が出土している。

5099号溝（ＳＤ5099，第110・144図）

Ｃ１地区東側でＳＢ57の西側に位置する南北溝である。幅30cm～40cmで，全長約7.5ｍを検出した。溝南端はＳＢ57の南側に回り込むように，東側にカーブして終わる。ＳＢ57の雨落ち溝と考えられる。断面は半円形で，深さ約15cm，堆積土は褐色砂層である。

7001号溝（ＳＤ7001，第143・144図，図版172）

Ｃ３地区南端部で南西から北東方向に流れる溝である。幅160cm～200cm，全長約９ｍを検出した。両端とも発掘区外に伸びる。断面形は半円形を呈し深さ約50cm，堆積土はシルト～砂質シルトである。遺物は土師器皿（第143図822・823）が出土している。溝の時期は検出面から中世と考えられる。

7003号溝（ＳＤ7003，第144図）

Ｃ３地区南端部で南北方向に伸びる溝。幅は１ｍ～1.8ｍとひょうたん形に大きくくびれ，全長は約４ｍを検出した。南端は発掘区外にのび，ＳＤ7001につながるか，交差するものと思われる。断面形は逆台形を呈し，堆積土は上層が砂質シルト，下層が粘質土シルトや砂層などである。

7009号溝（ＳＤ7009，第144図）

Ｃ３地区南部でＳＢ71の東側に位置する南西－北東方向の溝である。幅約40cmで，全長約２ｍを検出した。断面形は不整形で，溝の深さは10cm程度と浅い。堆積土は粘質土シルト～シルトである。

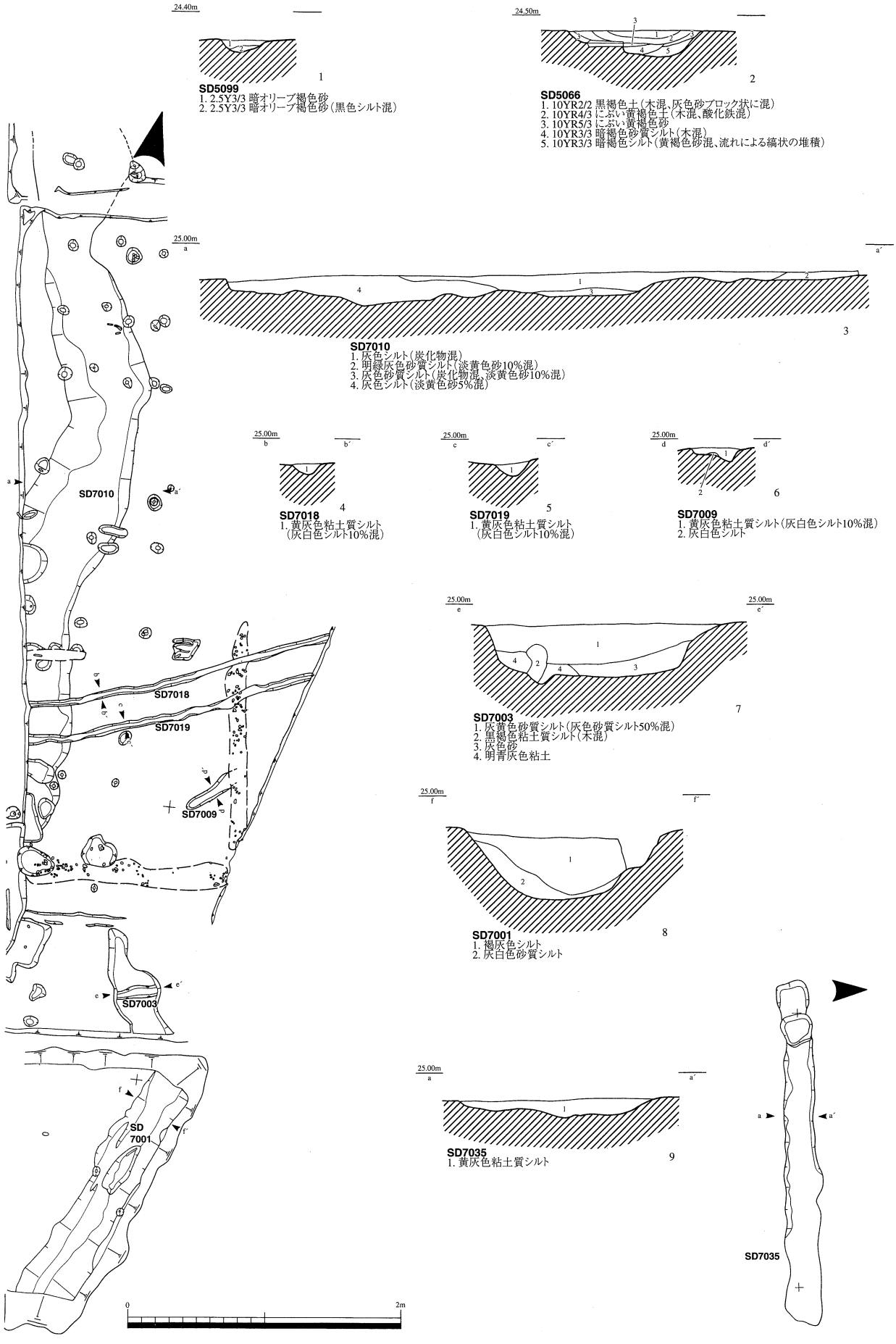
7010号溝（ＳＤ7010，第143・144図，図版159・172）

Ｃ３地区南西部でやや蛇行しながら北流する溝で，自然流路と考えられる。埋没後にＳＢ61～ＳＢ64が建てられており，建物群に先行するものである。幅160cm～340cmで，全長約26ｍを検出した。南端は発掘区外に伸び，北側は徐々に浅くなって確認できなくなる。断面形は皿状でかなり浅く，ａ－ａ’セクションでは，約30cmの深さである。堆積土はシルト～砂質シルトである。

遺物は土師器が出土している。第143図824は土師器椀で，底部は回転糸切り調整とみられる。溝の時期は建物群の直前で，12世紀代と考えられる。

7018・7019号溝（ＳＤ7018・7019，第144図，図版159）

Ｃ３地区南端部に位置する，東西方向に平行して伸びる溝で，道路状遺構の側溝と考えられる。２本の溝は約１ｍの間隔をあけ，それぞれ幅約20cm～30cmで，全長約11ｍを検出した。わずかに蛇行しながら西方向に下がる。東西両端ともに発掘区外に伸び，西側は谷部を挟んでＤ１地区のＳＤ8056・



第144図　遺構実測図

1.SD5099　2.SD5066　3.SD7010　4.SD7018　5.SD7019　6.SD7009　7.SD7003　8.SD7001
9.SD7035

ＳＤ8057につながると考えられる。ＳＤ7010が埋没後に形成されており，これより新しいが，同じく重なるＳＢ71との前後関係は不明である。溝断面形は半円状を呈し，深さは10cm前後と浅く，堆積土は粘土質シルトである。

出土遺物がないため，決め手を欠くが，溝（道路状遺構）の時期は周辺の掘立柱建物群と同様12世紀後半～13世紀代とみておきたい。

7035号溝（ＳＤ7035，第144図）

Ｃ３地区のやや北より，ＳＢ65の北側に約1.5ｍ離れて，直線的に西流する単独溝である。東側は徐々に浅くなって消滅し，西端は土坑状になる。幅100cm～120cmで，全長約12ｍを検出した。断面形は皿状で浅く，深さは20cm以内である。堆積土は粘土質シルト。

8001号溝（ＳＤ8001，第143図，図版172）

Ｄ１地区の北端部で，南西から北東方向に伸びる溝である。途中で緩やかに北方向に向きを変えるが，幅は約120cmと一定で，全長約26ｍを検出した。遺物は底部回転糸切り調整の古代土師器椀（第143図825）が出土している。溝の時期は明確ではなく，中世以降と考えられる。

8043号溝（ＳＤ8043，第145～147図，図版160・173・202～204・223）

Ｄ２地区北側からＤ１地区にかけて北流する溝である。わずかに蛇行しながら流れる自然流路と考えられるが，Ｄ１・Ｄ２地区の建物群の東側を区切る区画溝も兼ねる。幅は南端部の膨らみを除くと120cm～250cmで，全長約80ｍを検出した。南端部は後述する谷部に合流し，北端部は発掘区外に伸びる。溝断面はおおむね逆台形を呈し，深さは20cm～30cmと浅い。堆積土は場所により，また上下によりわずかに違いがあるものの，基本的には砂質シルトである。南端部には自然木を横に並べた護岸状の木組みがみられる。谷部とＳＤ8043の前後関係はあまり明瞭でないが，谷部がある程度埋没した段階で，ＳＤ8043が一時的に分流したものと考えられる。

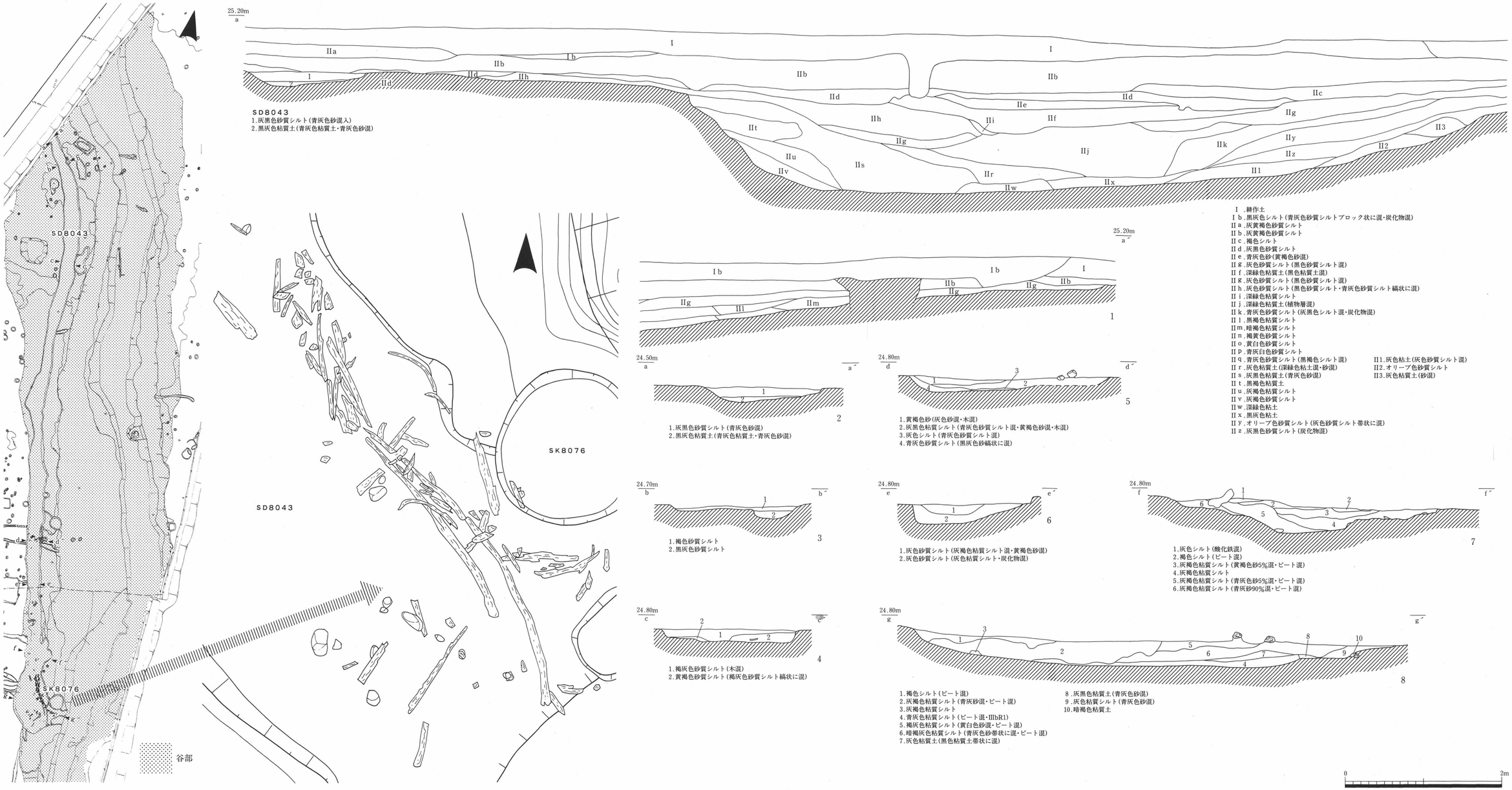
遺物は，土師器高坏・須恵器・灰釉陶器・中世土師器・珠洲・中国製白磁・青磁・伊万里・越中瀬戸・近世陶磁器・漆器椀・櫛・箸・曲物・杓子形木器・加工板・加工棒・烏帽子？・砥石などが出土している。

第146図827は古墳時代の土師器高坏，828は９世紀前半の灰釉陶器皿である。829～845は中世土師器皿。すべて非ロクロ成形のもので，一部明確でないものもあるが，845はＮＡII類，843･844はＮＢＩ類，832はＮＢII類，836・840・842はＮＣＩ類，834・835・837・839・841はＮＣII類，838はＮＣ類，829～831･833はＮＤII類に分類できよう。ＮＡ･ＮＢ類が12～13世紀前半に位置づけられる他は，13～14世紀にかけてのものである。846はＩ期後半に比定できる珠洲の甕である。口縁部が外反し，端部が嘴状になる。847は珠洲の壺Ｔ種でIII期と考えられる。848～851は珠洲の擂鉢である。848はＩ～II期，849･850はIV期，851は口縁部を欠くがII～III期に比定できる。852は粘板岩製の砥石。

第147図853・854は櫛で，漆がわずかに残る。樹種はいずれもイスノキ。855～859は漆椀。855は体部外面と内面に草木文が赤色漆で描かれる。857は漆が薄くなって地が見えている外底面に黒色漆で記号？を記入している。樹種は855がケヤキで，857がトチノキ。860～864は箸で，860がスギを用いている。865は杓子形木器で樹種はスギ。866は木札状の加工材で２箇所に釘穴があり，一方には木釘が残る。876は方形の加工板，877は棒状に加工したものである。867～875は漆片で，烏帽子の一部かもしれない。混入品と考えられる近世陶磁器類を別にして，溝の時期は14世紀代と考えられる。

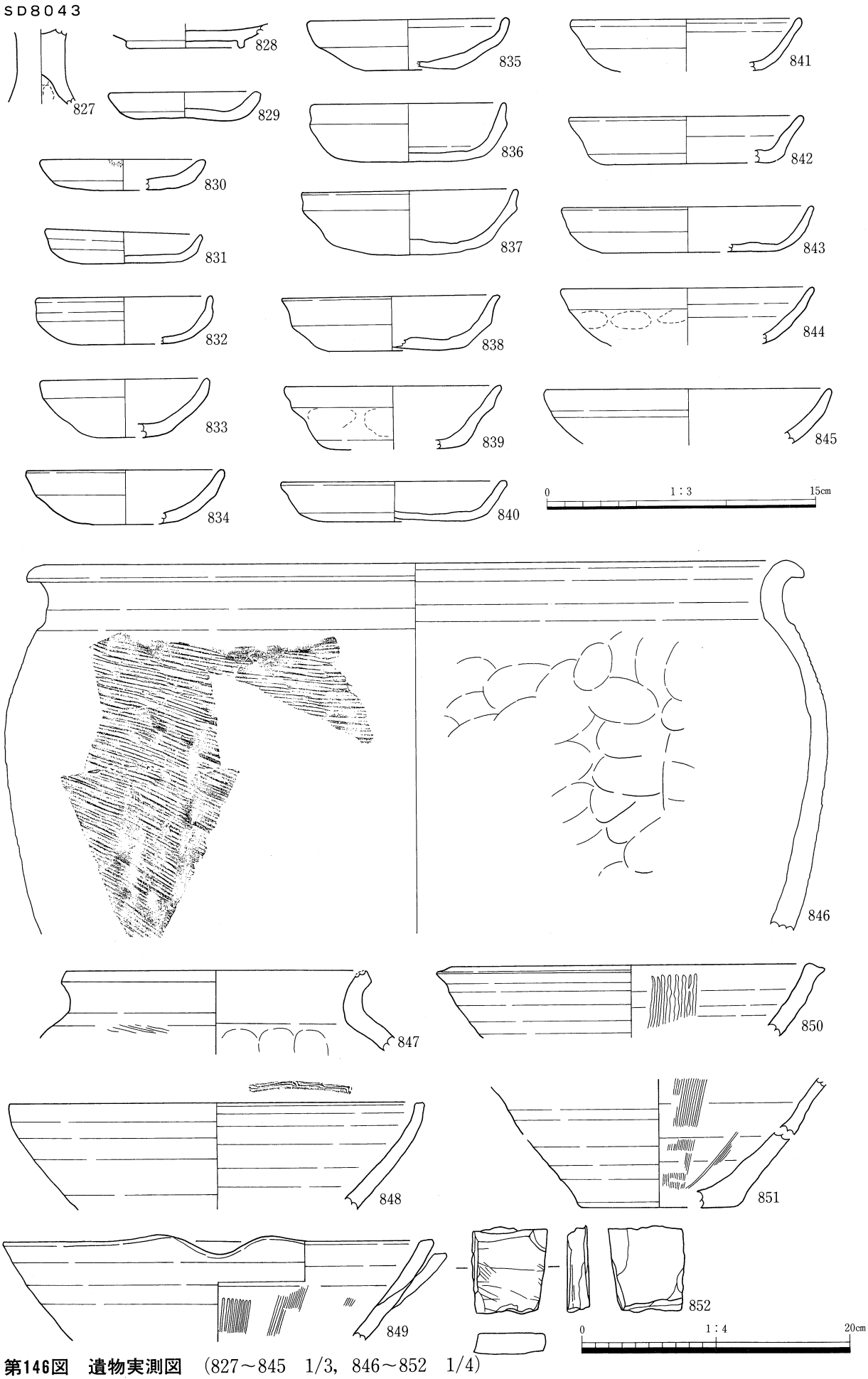
なおＳＤ8043のＸ69Ｙ51区からはウマの臼歯が出土している[注5]。

谷部（第145・148～157図，図版162・169・174～178・204～212・223・224・226・227）

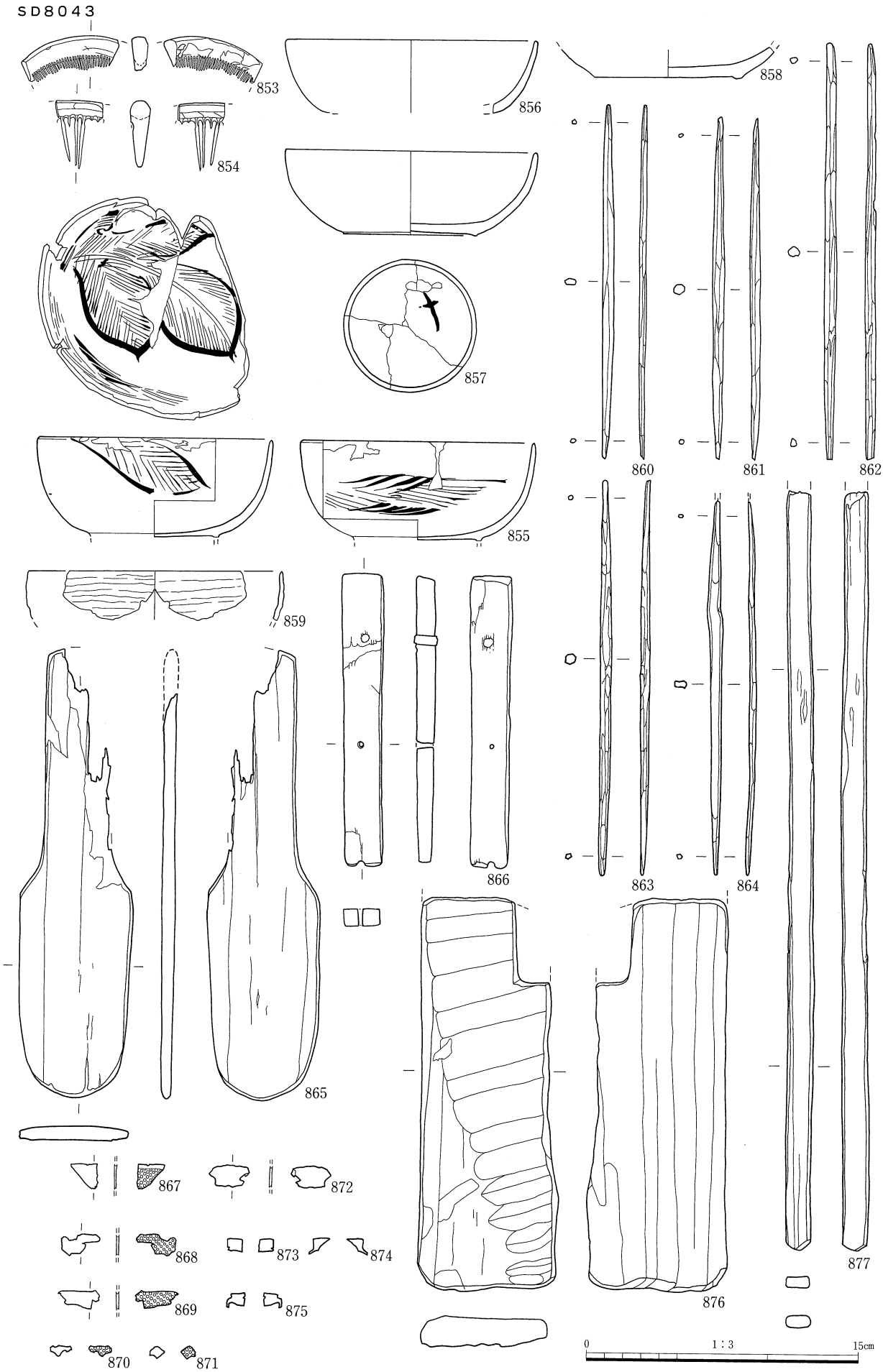


第145図　遺構実測図

1～8.SD8043・谷部



第146図　遺物実測図　(827～845　1/3，846～852　1/4)
SD8043(827～852)



第147図　遺物実測図　(1/3)
SD8043(853～877)

Ｄ２地区北東部からＤ１地区北西部にかけて北流する自然流路である。規模が大きいので，谷部としておく。谷肩部の落ち際から測って，幅18ｍ～22ｍあり，全長110ｍを検出した。Ｃ３地区の建物群とＤ１・Ｄ２地区の建物群を地形的に隔てており，溝の南北両端とも発掘区外に伸びる。断面形は谷中央部が深くなり，角の丸い逆台形を呈し，北端部では約1.8ｍの深さがある。堆積土は粘質あるいは砂質のシルトが主体である。谷部がある程度埋没した段階で，ＳＤ8043が分流したものと考えられている。

遺物は木製品を中心に量が多く，古墳時代土師器・須恵器・古代土師器・中世土師器・珠洲・中国製白磁・青磁・土師質の火舎・伊万里・須恵器片利用の硯・飾り金具・火箸・銭貨・下駄・円形板・折敷・曲物・漆椀・漆皿・漆片口・箸・台脚・杓子形木器・柄・糸巻き・舟形・鍬形・加工板・加工棒・ウシの下顎骨・臼歯[注5]などが出土している。

第148図878は古墳時代土師器甕である。丸底長胴型で，内外面ハケメ調整を施す。879も同様な器形であるが，底部外面にヘラケズリを施す。880は小型平底に近い椀。口縁端部は外に開き，内外面ともヘラミガキ調整を行う。881は内面黒色の鉢。丸底で口縁部は直立し，内外面ともヘラミガキ調整を行う。これらの土器群の年代は，７世紀代と考えられる。

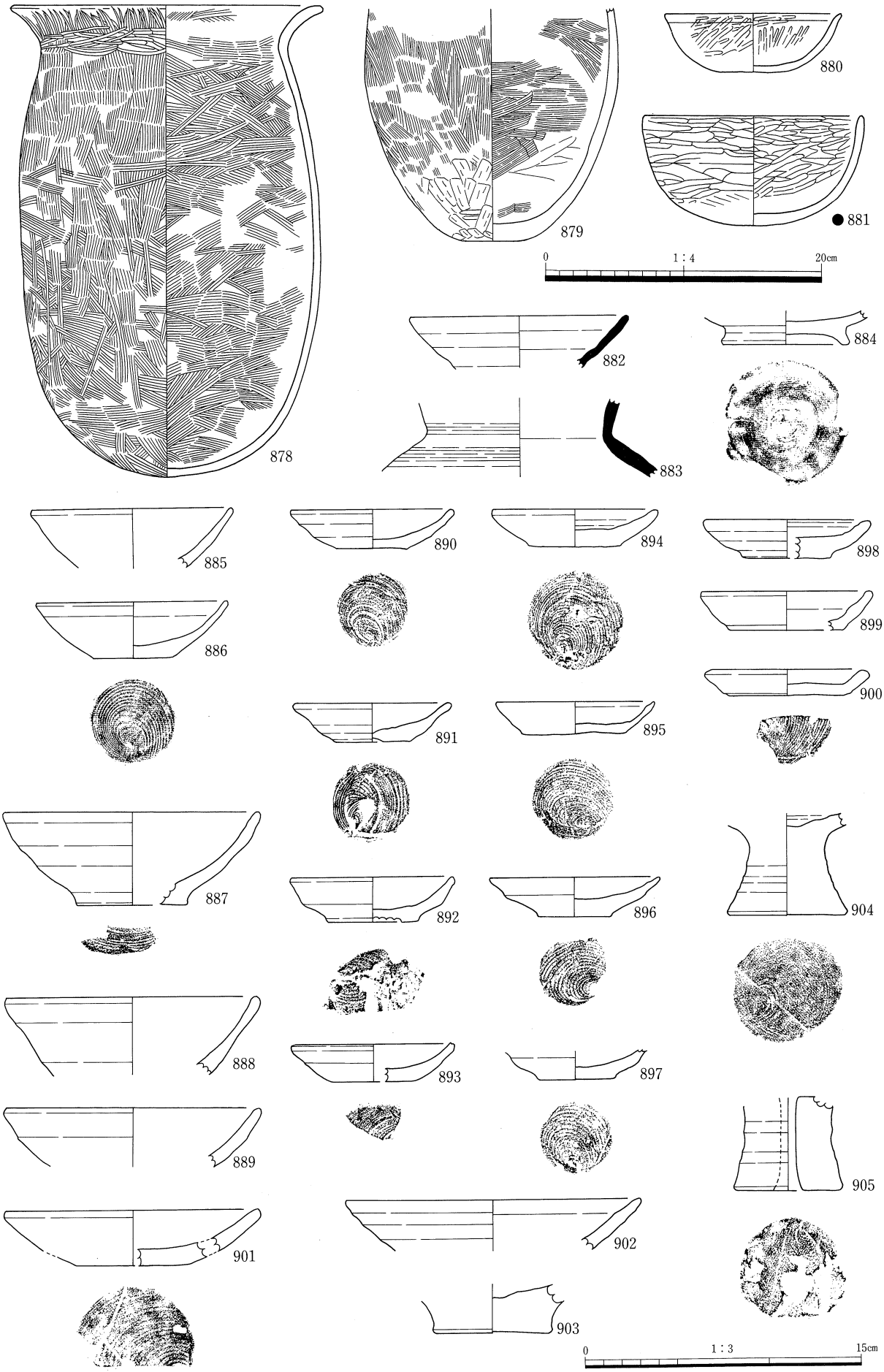
第148図882は平安時代須恵器椀。883は同じく壺の頸部。884～902は平安時代の土師器椀･皿類である。884は有台の椀もしくは皿。885～889は無台もしくは高台の有無不明の椀類である。口径10.5cm～11cm，器高３cm前後の小型Ｉ類（885・886）と，口径13.8cm～14cm，器高5.1cmの大型II類（887～889）に二分出来る。いずれも底部は回転糸切り調整。890～902は皿類。口径が8.7cm～９cm，器高1.8cm～2.4cmのＩ類（890～899），口径はほぼ等しいが，器高が1.4cmと浅いII類（900），口径が13.8cm以上の大型品であるIII類（901～902）に分類できる。これらも，いずれも底部は回転糸切り調整である。903は土師器甕もしくは壺？の底部である。以上の土器群は平安時代でも後半期のものである。

第148図904・905，149図906～918は中世土師器皿。904・905は柱状高台ロクロ成形のもので，ＲＡ類。905は直径１cm程の底部貫通孔が施される。906～918は非ロクロ成形で，中には不明確なものもあるが，917・918はＮＡII類，915・916はＮＢＩ類，910・911はＮＣII類，912・913はＮＣIII類，907・909はＮＤＩ類，906・908はＮＤII類に分類できる。これらの中世土師器皿の時期は，ＮＡ類・ＲＡ類が12世紀代，ＮＢ類は12世紀後半～13世紀前半代，ＮＣ類・ＮＤ類が13～14世紀代に位置付けされ，時期差がみられる。

第149図919～929は珠洲である。919は甕で，口縁部が大きく外反し，口縁端部が嘴状になる。Ｉ期後半に位置づけられよう。920は小破片であるが，口縁部が強く外反し，端部は丸みをもちながら少し尖り気味になるもので，II期に比定できる。921～928は擂鉢。921はやや小型のもので，内面の一部に横方向の櫛描波状文が施される。底部は静止糸切り痕が残る。923・924は体部が丸く内湾して立ち上がり，口縁端部は外削ぎになる。922も含めてII期とみられる。927・928は体部が直線的に外に開く器形で，内面卸目の間隔が狭くなる。928は口縁端部が水平になり，少し肥厚する。927はIII～IV期，928はIV期のものであろう。929の四耳壺は口縁部が丸く外反し，体部に大きな櫛描波状文が施されるもので，Ｉ期のものである。珠洲の年代も12世紀後半から14世紀代まであり，時期幅がある。

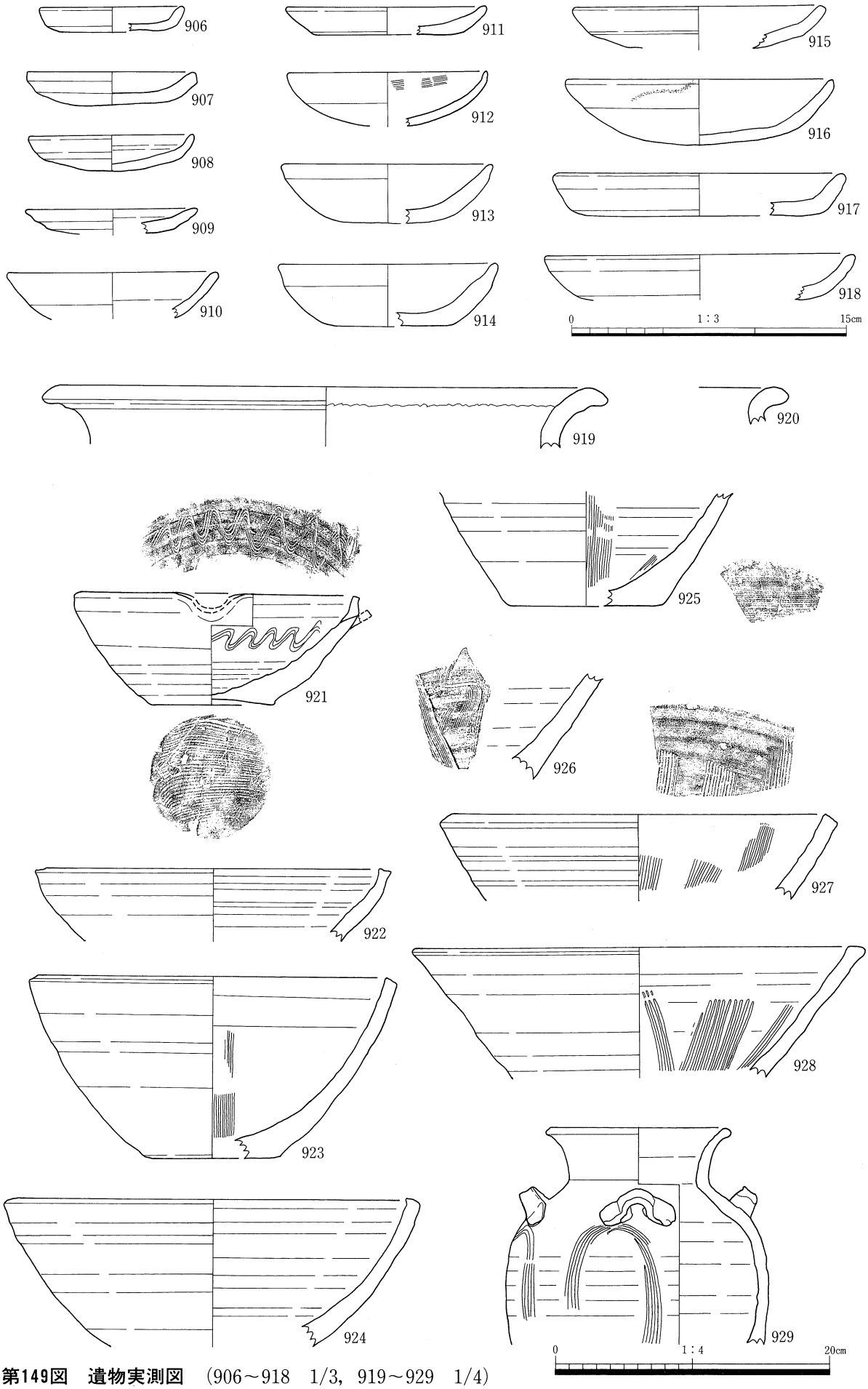
第150図930～934は中国製白磁である。930は小さな玉縁状口縁をもつ白磁碗II類。わずかに黄色味を帯びた釉が薄く掛かる。931は口縁部が外反する器形の碗で，Ｖ類２に分類できよう。932・933は碗IV類の底部である。932の内面には漆状の物質が付着している。934は白磁皿IV類１ａで，黄色味を帯びた釉が薄く掛かり，体部外面下半部と底部は露胎となる。935は中国製青磁碗である。936は同じく

谷部

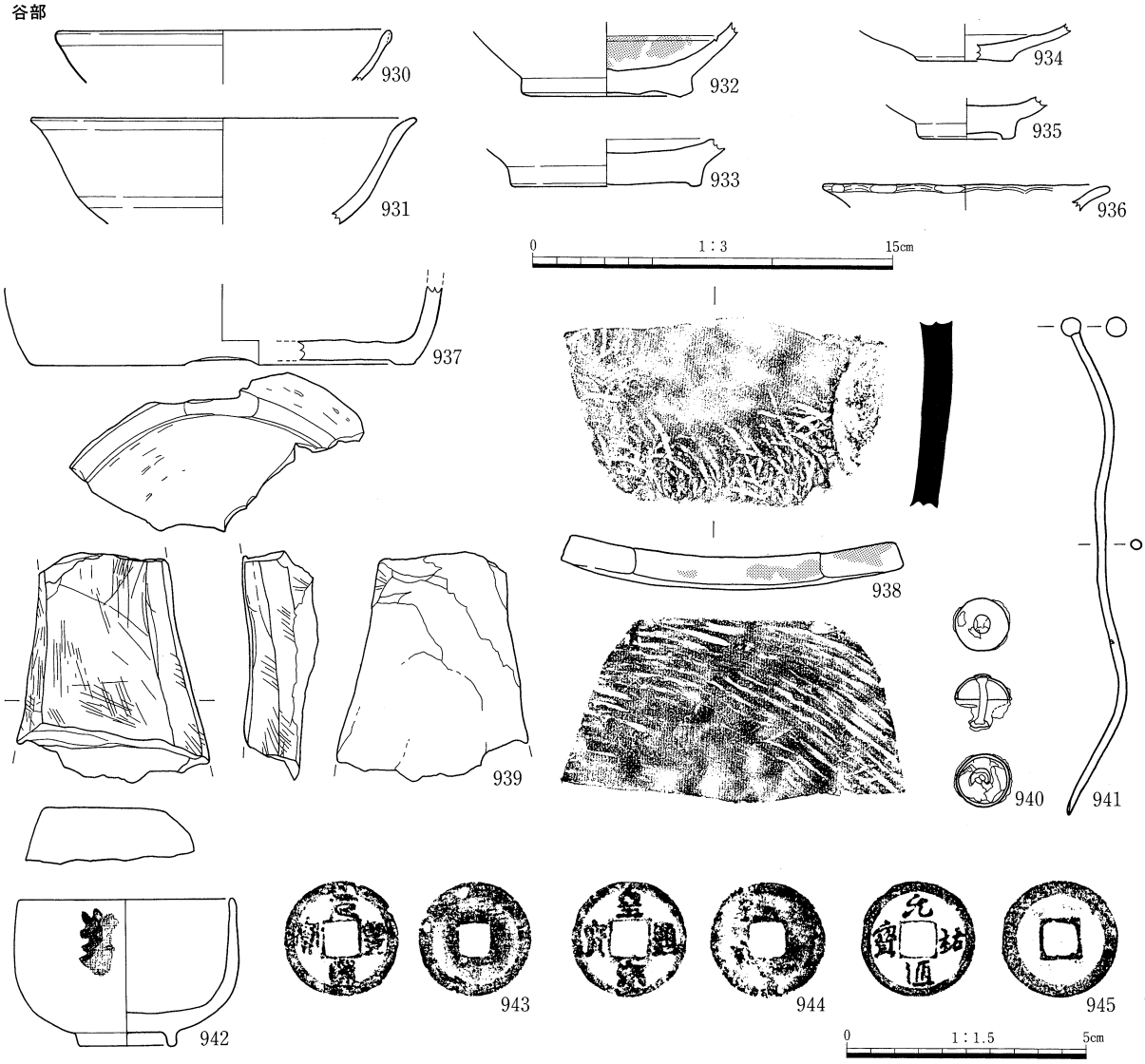


第148図　遺物実測図　(882～905　1/3，878～881　1/4)
谷部(878～905)

谷部



第149図　遺物実測図　(906～918　1/3，919～929　1/4)
谷部(906～929)



第150図　遺物実測図　(943～945　2/3，930～942　1/3)
谷部(930～945)

稜花皿で，口縁部内面に櫛描波状文が施される。時期は15世紀代である。

第150図937は土師質の火舎と考えられる。938は須恵器甕の破片を加工した陶片硯である。残っているのは三分の一程度とみられる。内面は周囲に同心円叩きを残し，中央部がすり減っている。また墨が付着している。外面は周囲に平行叩きが残り，中央部は研磨している。側面は打ち欠き後に丁寧に研磨した上，漆を厚く塗っている。939は砥石。940は半球状の金具で，用途は不明。941は銅製の火箸である。942はコンニャク印判の伊万里碗。銅銭は３枚ある。943は「元豊通寶」？（初鋳1078年），944は「皇宋通寶」（初鋳1038年），945は「元祐通寶」（初鋳1086年）である。

第151図946～956は下駄である。形態的には一木作りの連歯下駄と（946～952）と別作りの歯を台に装着する構造下駄（953～956）がある。連歯下駄は破片のため全体が不明なものを除き，すべて後緒穴が台裏の後歯の前に貫通するものである。構造下駄は台がなく，すべて歯の部分である。ホゾは２個一対である。樹種は947～950・953・954・956がスギ，946がヒノキ科，951がトチノキ，952がシイ属と同定されており，スギが圧倒的に多い。第152図957・958は曲物。957は直径約22cm，高さ４cmの大きさで，側板を底板に木釘止めする。樹種はスギ。958は直径約12cmとやや小型で，側板を桜皮で綴じる。底板へは木釘で止める。959は底板と思われる円形板で，側面には釘痕がある。樹種はスギ。960

は直径約60cmの大型の樽の上板で，注ぎ口の穴が開けられている。第152図961・962第153図963～966は折敷の底板である。一辺が32cm～40cmの大型品（962・963～965）と16cmの小型品（966）がある。962・963の表裏両面の一部には漆が残る。964・965の樹種はともにスギである。

第153図967～969・971～976は漆椀である。967は高台の付くもので，内底面には花文が描かれる。969は口径に対して器高が高く，高台も高い深椀タイプ。外面黒色，内面は赤色漆が施される。970・第154図977～980は漆皿である。大きくは体部が内湾して口縁部が立ち上がる形態（970）と，外方に開く形態（977～980）に分けられる。樹種は968がカツラ，967・969～973・975・976・978～980がケヤキで，ケヤキが圧倒的に多い。981は漆塗り片口の注口部である。樹種はカツラ。

982～985は箸である。986は杓子形木器で樹種はスギ。987は台の脚部で，ホゾ穴は一箇所。樹種はスギ。988は先端が尖り，幅広の中央部をくり抜くもので，網針かもしれない。樹種はスギ。989は糸巻きの枠木である。両端部が焦げており，樹種はスギ。990は刃物の柄である。ＳＤ45からも同様の柄が出土している。上端近くと端部から13cm程の所に溝を巡らせ，もう一端は一方に膨らみをもたせる。図の上端から10.8cmの切り込みを入れる。樹種はスギである。991・992は木製形代の舟形である。上面から四角の掘り込みを入れる。991は，掘り込みの断面が逆台形を呈し，側面の一部と外面舟底に焦げ跡が残る。992は，掘り込みの断面形が逆三角形を呈し，先端部には側面からの貫通孔，やや中央よりには側面から差し込み穴状の穿孔がみられる。いずれも樹種はスギ。第993は鏃形木器とみられるものである。表面を細かく削り，樹種は針葉樹。

第155図994～1000・第157図1013は様々な形状の加工部材である。組み合わせて用いるものも多いと思われ，個々の用途等は不明なものが多い。994は円形板の一部の可能性がある。996は長方形板材で，四角に抉りを入れ，短辺の一方には釘跡が残る。997は一端を凹状に加工するもので，建築部材の一部か。1013は匙状のもので，未成品の可能性がある。樹種は994～996・998がスギ，1013がケヤキと同定されている。

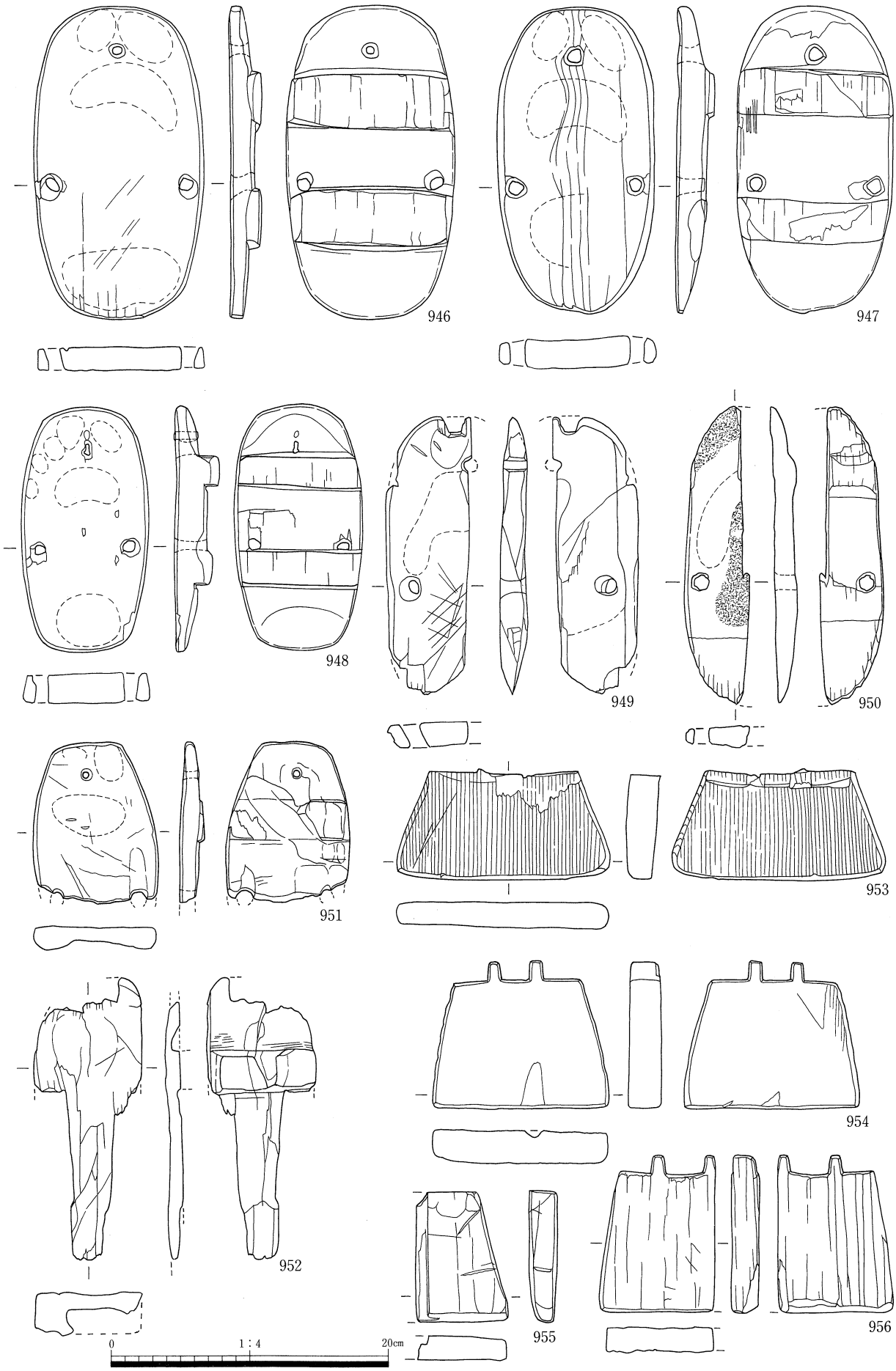
155図1002・第156図1003～1012・第157図1014～1034は種々の加工が施された棒状のものである。棒の一端あるいは両端を尖らせるもの，端部近くに切り込みを入れるもの，溝を巡らすもの，単に切断しただけのものなどがある。また素材用い方の違いからみると，板材を細長く割いたものと芯持ち材を加工したものがある。樹種は1003・1005～1007・1009・1011・1016～1018・1021・1025・1027がスギ，1034がヒノキ科で，圧倒的にスギ材が多く利用されている。

8056・8057号溝（ＳＤ8056・8057，第143・158図，図版160・172）

Ｄ１地区の南部で，0.9ｍ～1.6ｍの間隔をあけて東西方向に平行して伸びる溝で，道路状遺構の側溝と考えられる。Ｄ１・Ｄ２地区の中央を貫き，ＳＢ74～ＳＢ76・ＳＢ78の南側，ＳＢ79・ＳＢ80の北側に接している。溝の東側はＳＤ8043や谷部で切られるが，延長するとＣ３地区のＳＤ7018・ＳＤ7019につながるものと考えられる。溝の傾斜は西から東に向かって下る。ＳＤ8056は幅20～60cm，全長約34ｍを検出した。西側は，この溝に沿って北側を流れるＳＤ8122に合流し，発掘区外に伸びる。ＳＤ8057は幅20cm～30cm，全長約22ｍを検出した。ＳＢ76の西側近くで止まり，かわってＳＤ8117が西側に向かって伸びる。ＳＥ8058はＳＤ8057より新しい。溝の断面形はそれぞれ半円形を呈し，深さは10cm～20cmと浅い。堆積土は，東半部では暗褐色土，西半部では褐色～灰色の砂質シルトである。

遺物はＳＤ8056から中世土師器と珠洲，ＳＤ8057から珠洲が出土している。第143図826はＳＤ8056出土の中世土師器皿である。非ロクロ成形ＮＤII類に分類できる。

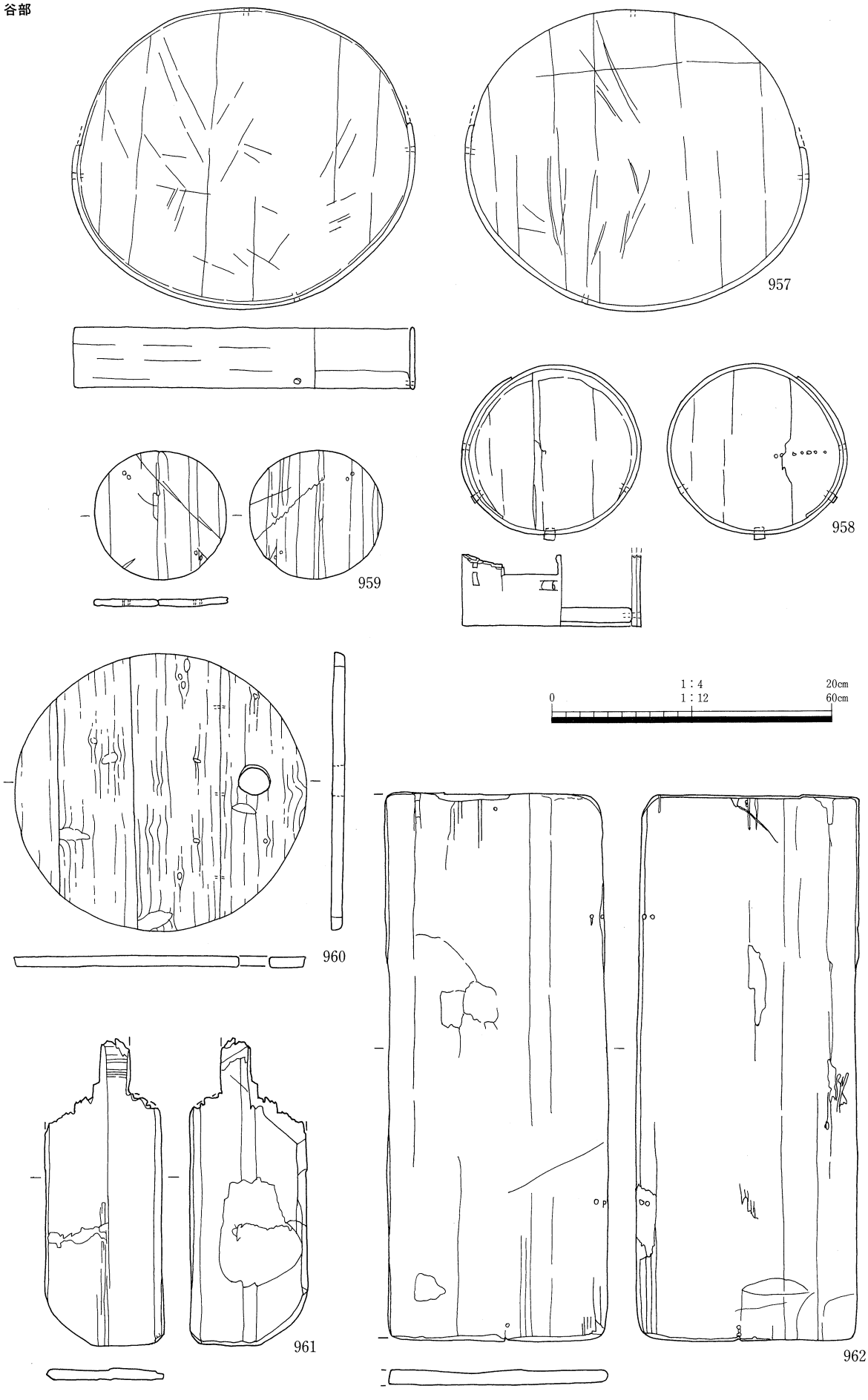
谷部



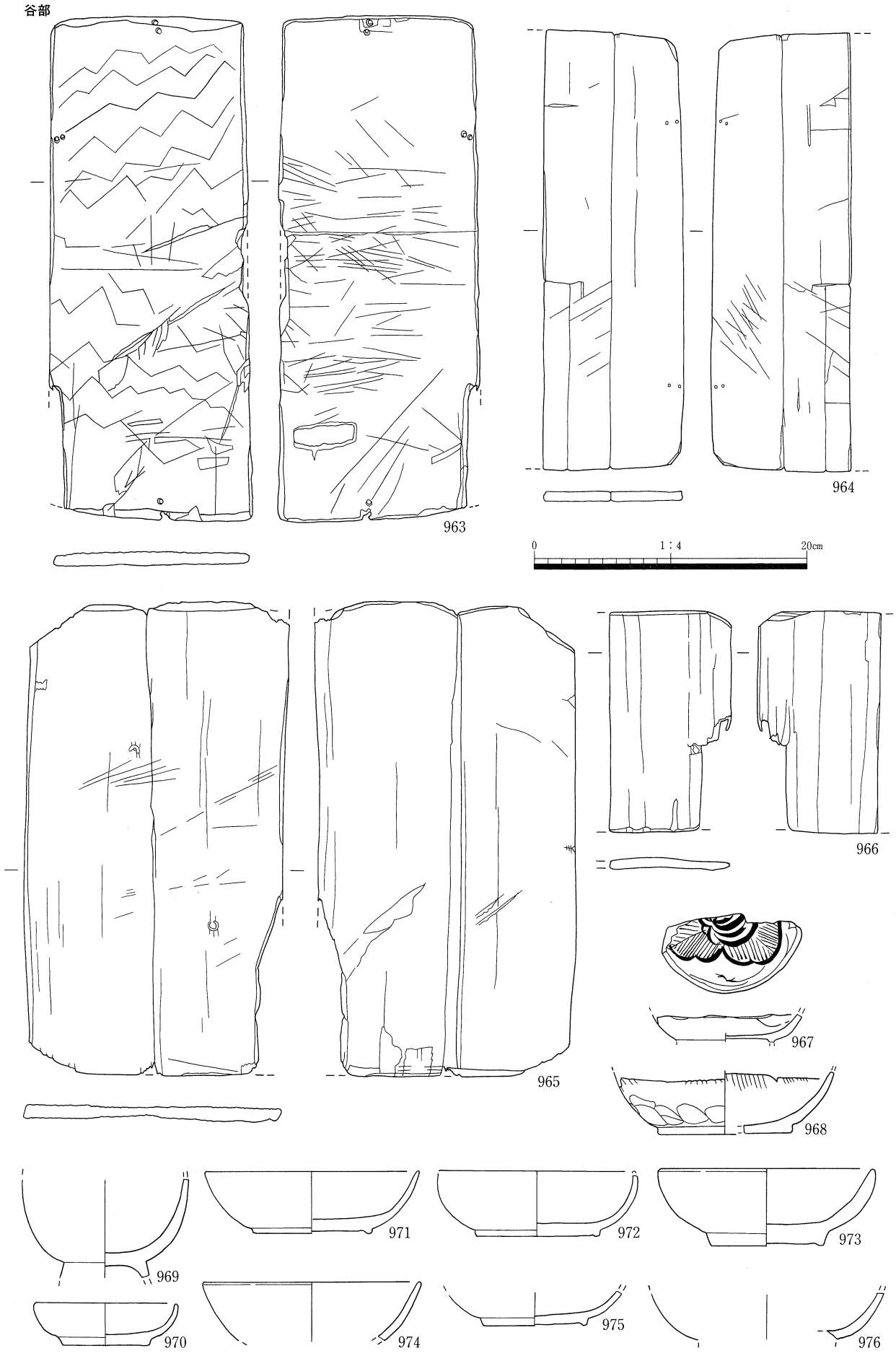
第151図　遺物実測図　(1/4)

谷部(946～956)

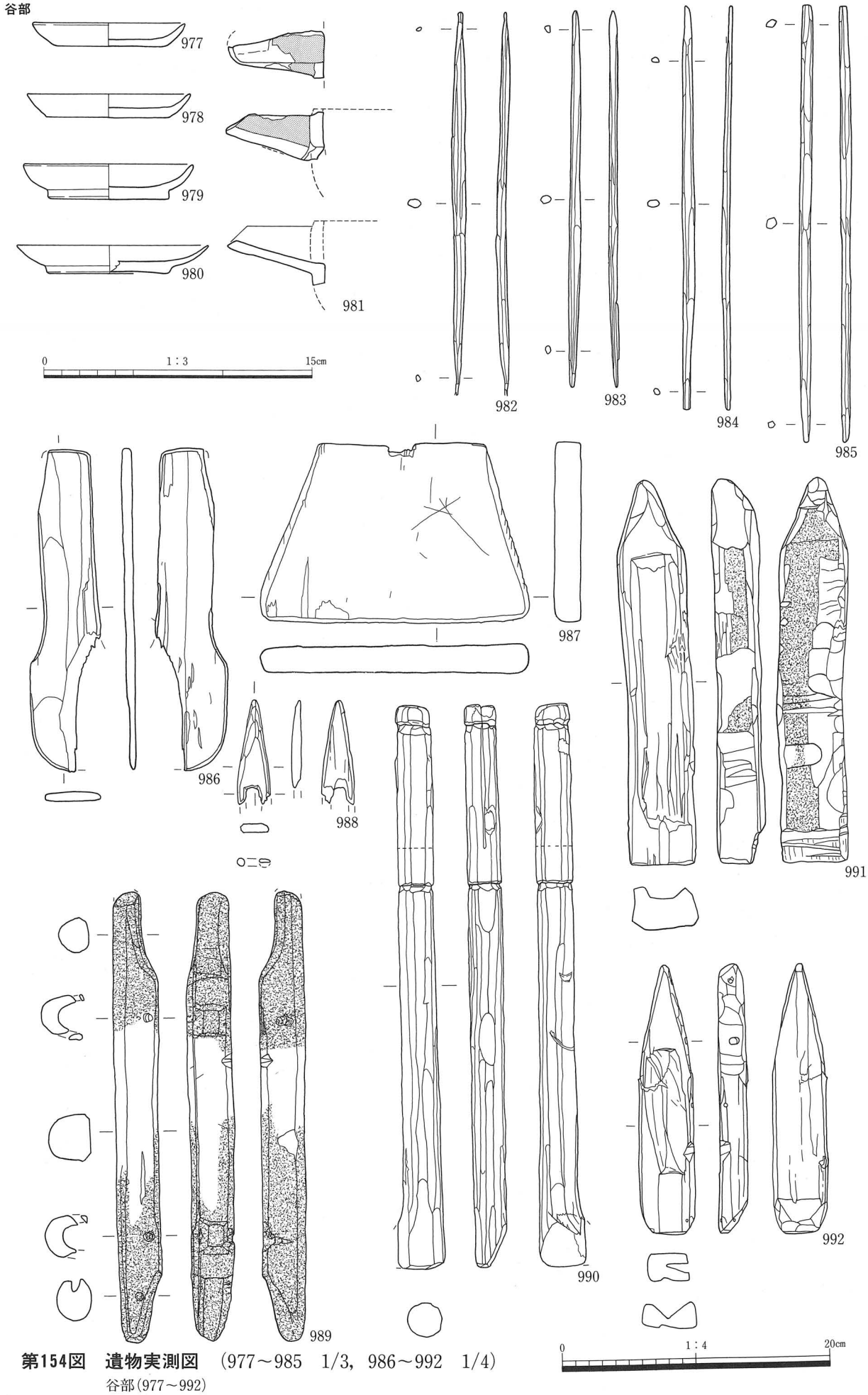
谷部



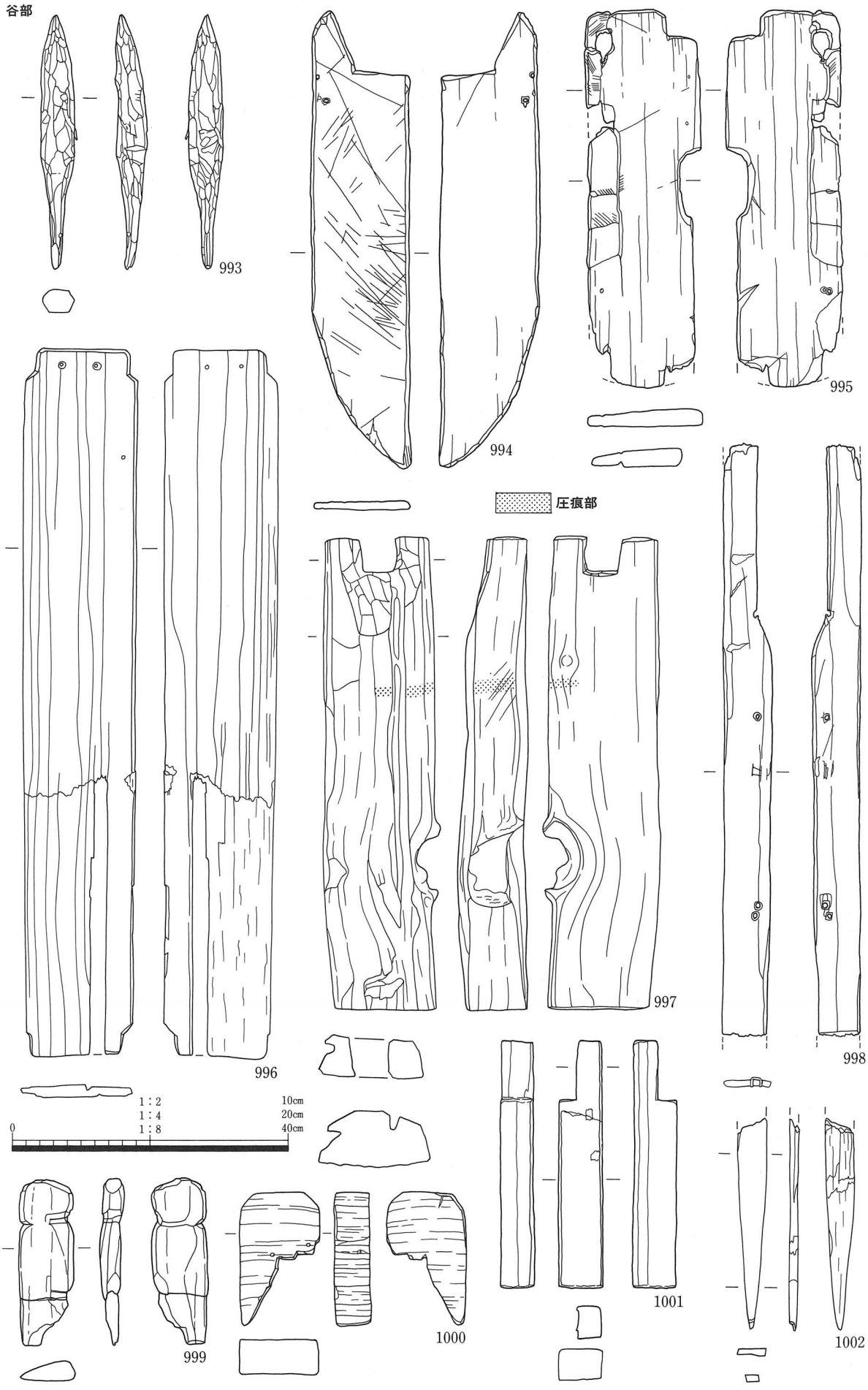
第152図　遺物実測図　(957～959・961・962　1/4，960　1/12)
谷部(957～962)



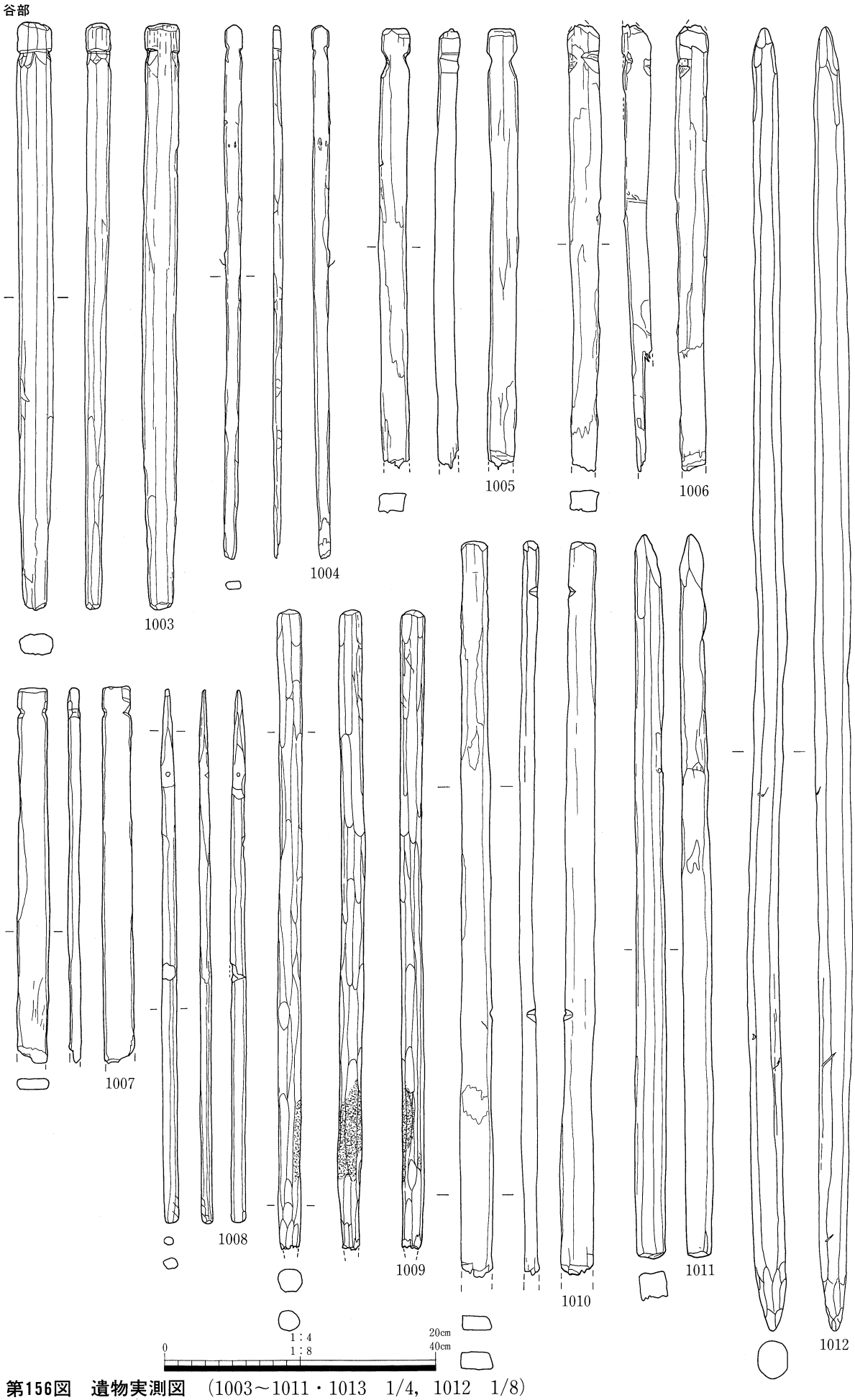
第153図　遺物実測図　(1/4)
谷部(963～976)



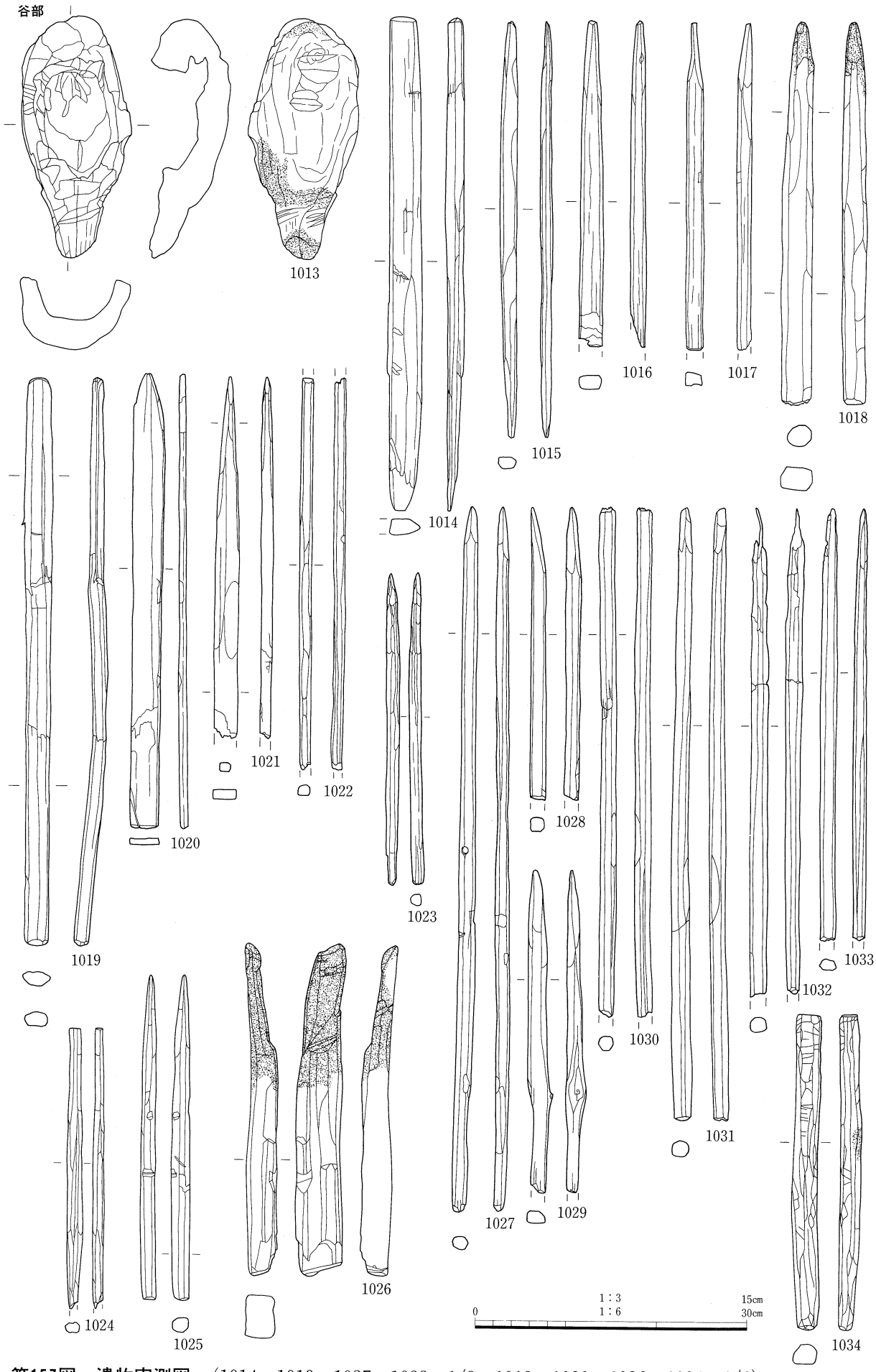
第154図　遺物実測図　(977～985　1/3，986～992　1/4)
谷部(977～992)



第155図　遺物実測図　(993　1/2，994・996・998～1002　1/4，995・997　1/8)
谷部(993～1002)



第156図　遺物実測図　(1003～1011・1013　1/4，1012　1/8)
谷部(1003～1012)



第157図　遺物実測図　(1014～1019・1027～1033　1/3，1013・1020～1026・1034　1/6)
谷部(1013～1034)

8117号溝（ＳＤ8117，第158図）

Ｄ１地区南部からＤ２地区北部にかけて，ＳＢ79～81の３棟の建物群を方形に取り囲む溝である。建物群の北辺は道路側溝のＳＤ8057が主として境界を示すが，途中で途切れる。ＳＢ77の西側で大きく渦巻いた溝が，ＳＤ8057の南側に約2.8ｍ離れて西流して，道路南側側溝になるものと考えられる。建物群の西側においては幅約20ｍの空き地を挟んで，南北方向に伸びる。北端は西流する部分につながり，南端は直角に折れて東に向かい，東端はＳＤ8043に切られて終わる。最初の西流部分はさらに西側の発掘区外に伸びる。幅は30cm～50cm，全長は，北辺で約24ｍ，西辺で約15ｍ，南辺で約22ｍを検出した。断面形は皿状ないし逆台形を呈し，深さは10cm～30cmである。南辺中央で方形土坑ＳＫ8053と重なるが，これより新しい。出土遺物はないが，建物群と同時期であろう。

8122号溝（ＳＤ8122，第158図）

Ｄ１地区南部で，ＳＢ74～ＳＢ76・ＳＢ78の南側に位置する東西方向の溝。ＳＤ8057の50cm程北側を平行して東流する。一部の建物群柱列に接するようにあり，ＳＢ76・78とは時期差があると思われる。西側ではＳＤ8056と合流し，ＳＢ75の南側でも交差するように合流する箇所がある。西側合流部分を別にして，幅20～60cm，全長約27ｍを検出した。断面形は逆台形を呈し，深さは15cm前後，堆積土は砂質シルトである。出土遺物はないが，建物群と比較的近い時期であろう。

8123号溝（ＳＤ8123，第158図）

Ｄ１地区の南端部，ＳＢ79と80の中間に位置する東西溝である。幅約20cmで，全長2.8ｍを検出した。断面形は逆台形，深さ10cm程で，堆積土は砂質シルトである。出土遺物はない。

9001号溝（ＳＤ9001，第159図，図版161）

Ｄ２地区の南端部に位置し，西流する東西溝である。幅12ｍ～14ｍ，深さ約70cmの自然流路で，東西両端は発掘区外に伸びる。断面は半円状で，肩部はなだらかに終わる。堆積土はシルト～砂質シルトである。出土遺物はなく，五社遺跡の南側限界にあたる。

9005号溝（ＳＤ9005，第159図，図版161）

Ｄ２地区の南側にある南北溝である。ＳＢ85の南側から西側を北流し，ＳＤ9007に合流する。幅1.2ｍ～２ｍ，全長約28ｍを検出した。断面形は皿状を呈し，深さは５cm～10cmと浅い。堆積土は灰白色シルト。出土遺物はないが，ＳＢ78に近い時期と考えられる。

9006号溝（ＳＤ9006，第159図，図版161）

Ｄ２地区の南側で，北西－南東方向に伸びる細い溝である。ＳＤ9005の南側に沿い，北西方向に流れる。幅20cm～40cmで，全長約30ｍを検出した。断面形は半円状を呈し，深さは20cm～30cmある。堆積土は黄灰色～灰色のシルトである。出土遺物はないが，ＳＢ78に近い時期と考えられる。

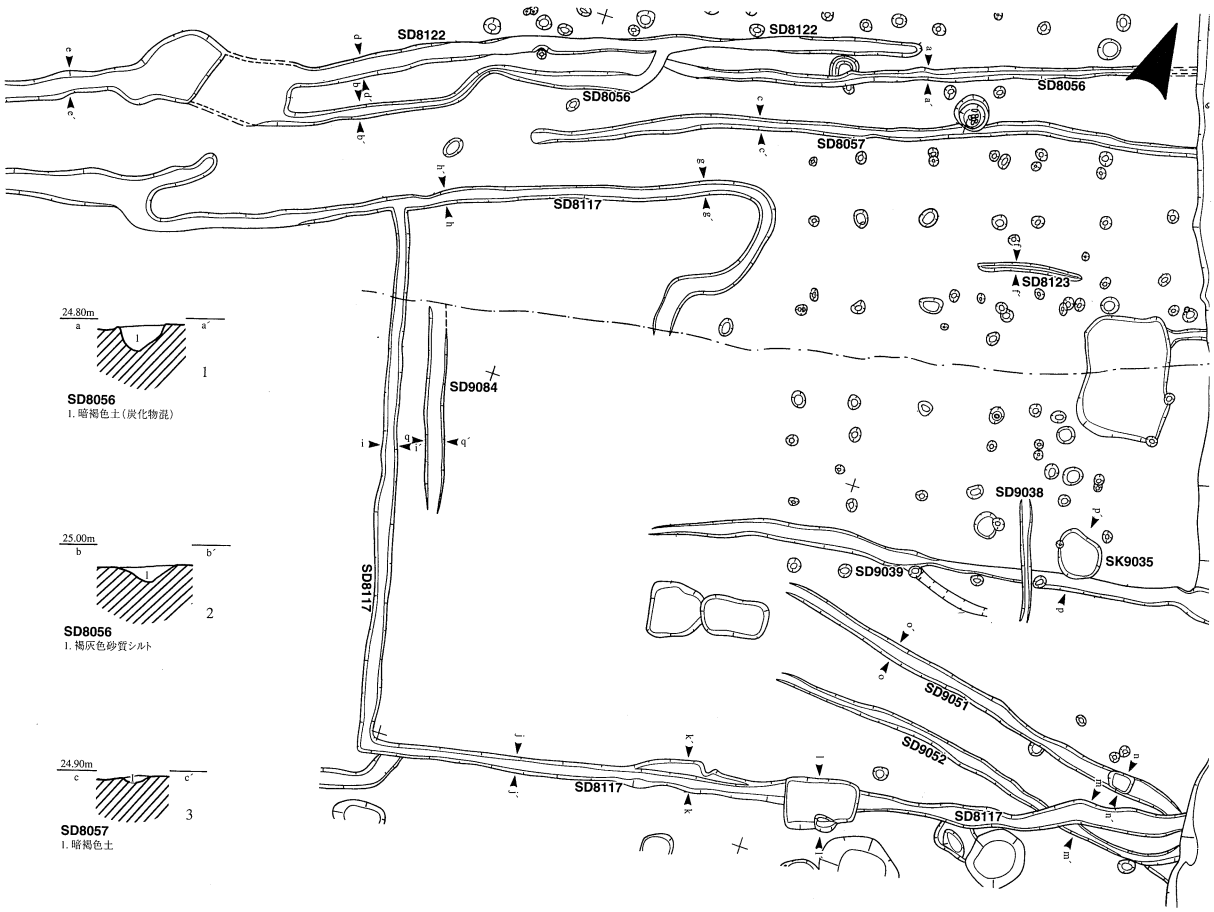
9007号溝（ＳＤ9007，第159・162図，図版161・213）

Ｄ２地区の西側にある南北溝である。わずかに蛇行し北流するとみられる自然流路で，途中からＳＤ9005と合流する。北端部は著しく細くなり，流路は不明確になる。溝幅は1.2ｍ～3.4ｍと場所により変化が激しく，全長は約20ｍを検出した。断面形は半円状を呈し，深さは20cm～25cmである。堆積土はシルト～粘土質シルトで，最下層は砂層が堆積するところもある。

遺物は珠洲・漆椀・加工材・板材などが出土している。第162図1035は両端に凸部を作出した棒状の加工材。樹種はスギ。1036は漆椀で，樹種はトチノキである。

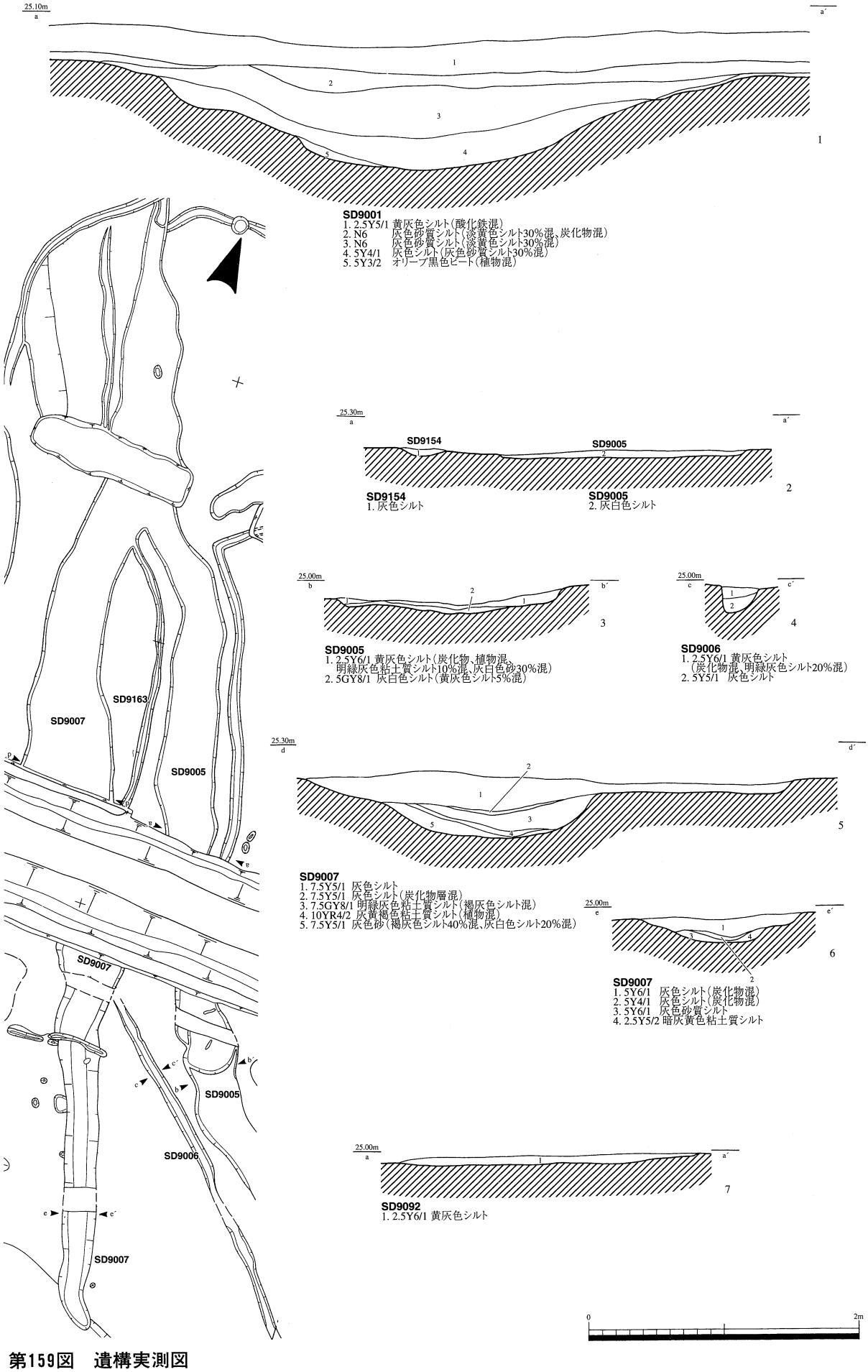
9039号溝（ＳＤ9039，第158図）

Ｄ２地区の北部で，ＳＢ81に重なる位置にある東西溝である。流路は東に向かい，東端はＳＤ8043



第158図　遺構実測図

1・2.SD8056　3.SD8057　4.SD8122　5.SD8056　6.SD8123　7～11.SD8117　12.SD8117・SK9053・SK9082　13.SD8117・SD9052　14・15.SD9051　16.SK9035・SD9039　17.SD9084



第159図　遺構実測図

1．SD9001　2．SD9154・SD9005　3．SD9005　4．SD9006　5・6．SD9007　7．SD9092

につながる。途中でわずかに分流するところでＳＢ81の柱穴と，またさらに東側で円形土坑ＳＫ9035とも重なるがいずれよりも古い。幅20cm～60cmで，全長約15ｍを検出した。断面形は皿状で，深さ10cm程，堆積土は灰白色シルトである。出土遺物はない。

9051・9052号溝（ＳＤ9051・9052，第158図）

Ｄ１地区の北側，ＳＢ81の南側で，1.2ｍ～1.8ｍの間隔をあけて，北西－南東方向に平行に伸びる溝である。ＳＤ8056・8057と同様，道路状遺構の側溝と考えられる。溝幅は30cm～50cm，全長約12ｍを検出した。断面形は逆台形ないし半円状を呈し，深さは10cm～30cmである。堆積土はシルト～砂質シルトである。溝底はゆるやかに東に向かって下がり，東端はＳＤ8043に切られる。ＳＤ9052は，途中ＳＤ8117と交差するが，これより古い。出土遺物はなく，時期は明確ではないが，建物群に先行することは確かであろう。

9091号溝（ＳＤ9091，第160図，図版161）

Ｄ２地区の中央部に位置する南北溝である。直線的に伸び，南端はカーブして東に折れる。屋敷地を区画する溝に思えるが，区画内の建物は東側に24ｍ離れてＳＢ82があるだけである。この建物と一体の区画溝とすると，約30ｍ×24ｍの広い空間を持つことになる。溝幅は南側では30cm～50cm，北側では約100cmである。北端部はＳＤ90に続き，南端はＳＤ184に重なる。断面形は皿状ないし逆台形を呈し，深さは10cm～15cmと浅い。堆積土は砂質シルトが主体である。出土遺物がなく，時期不明であるが建物群と同時期と考えたい。

9092号溝（ＳＤ9092，第159図，図版161）

Ｄ２地区の西側に位置する南北溝である。ＳＤ9091のさらに西側にあり，やや蛇行する自然流路と考えられる。幅1.2ｍ～2.6ｍで，全長約24ｍを検出した。断面形は浅い皿状で，黄灰色シルトが堆積する。出土遺物はなく，時期不明。

9104号溝（ＳＤ9104，第160・162図，図版179）

Ｄ２地区の東側に位置する南北溝で，北に流れる。ＳＤ8043の南側から直線的に伸び，ＳＢ82・ＳＢ83などを横切る。ＳＢ83・ＳＢ84の区画溝ＳＤ128を切っており，建物群より新しい。溝幅は50cm～100cmで，全長約38ｍを検出した。断面形は逆台形を呈し，20cm～30cmの深さがあり，粘質シルト～砂質シルトが堆積する。遺物は中世土師器が出土している。第162図1037は非ロクロ成形の中世土師器皿で，ＮＢⅠ類である。時期は13世紀前半か。

9126号溝（ＳＤ9126，第160図）

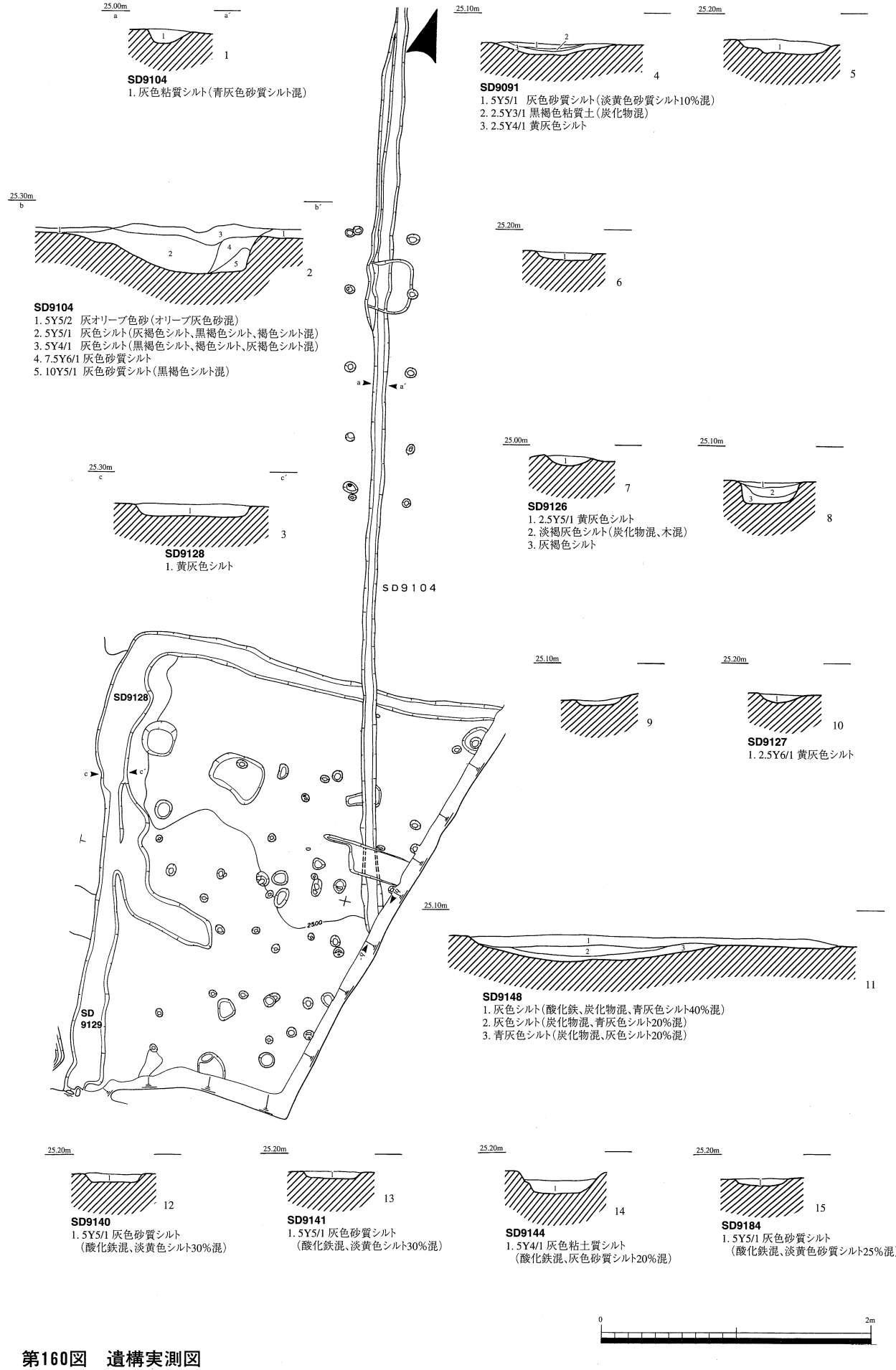
Ｄ２地区の西側に位置する南北溝である。南側では蛇行し，途中ＳＤ9007と合流したあと，ほぼ直線的に北流する。溝幅は30cm～60cmで，全長約30ｍを検出した。断面形は半円形ないし逆台形状で，堆積土層はシルトである。出土遺物はなく時期不明。

9127号溝（ＳＤ9127，第160図）

Ｄ２地区の中央やや西よりに位置する南北溝である。ＳＤ92の西側で，ＳＤ9007の北端部から分れ，最初は東向きに，途中から大きくカーブして北に向かう。溝幅は30cm～60cmで，全長約23ｍを検出した。断面形は皿状で，深さは10cm程度と浅い。堆積土は黄灰色シルトである。遺物は珠洲が出土している。

9128・9129号溝（ＳＤ9128・9129，第160・162図，図版179）

Ｄ２地区の東側に位置し，ＳＢ83・ＳＢ84をＬ字状に区画する溝である。南端部は発掘区外に伸びるが，南から直線的に北流し，直角に折れて東に向かう。南北溝の途中から区画内側に分流して短く



第160図　遺構実測図

1・2．SD9104　3．SD9128　4～6．SD9091　7～9．SD9126　10．SD9127　11．SD9148　12．SD9140　13．SD9141　14．SD9144　15．SD9184

伸びる。分流地点より南側をＳＤ9129，北側および東流部分をＳＤ9128とする。溝幅は60cm～140cmと場所により変化があり，南北約17ｍ，東西約13ｍを検出した。断面形は逆台形で，深さは約10cm。堆積土は黄灰色シルトである。遺物は中世土師器・珠洲が出土している。第162図1038は非ロクロ成形の中世土師器皿で，ＮＤⅡ類である。時期は13世紀代と考えられる。

9148号溝（ＳＤ9148，第160・162図，図版179）

Ｄ２地区西側に位置する東西溝である。溝幅を大きく変え，蛇行して西流する，自然流路である。東端はＳＤ9156から分流し，西端は発掘区外に伸びる。溝幅１ｍ～４ｍで，深さは約20cm，灰色～青色シルトが堆積する。遺物は古代土師器・珠洲が出土している。第162図1039は珠洲擂鉢。1040は古代土師器椀である。体部を直線的に引き出す器形で，底部は回転糸切り。

9184号溝（ＳＤ9184，第160図）

Ｄ２地区の中央部に位置する東西溝である。ＳＢ85の北側を区画する溝かもしれない。西側は少し深くなり，ＳＤ144として区別する。溝幅30cm～40cmで，全長約10ｍを検出した。断面形は浅い逆台形で，深さは約10cm。堆積土は灰色砂質シルトである。出土遺物はない。

44号溝（ＳＤ44，第161・162図，図版157・179・213）

Ａ地区の南東隅から北西隅に向かって流れる自然流路である。南半部では緩やかに蛇行し，途中で少し折れて，ほぼ南北方向に直線的に伸びる。溝の両肩は乱れて波状になる部分が多い。溝幅は1.5ｍ～3.5ｍで，全長約78ｍを検出した。断面形は半円形で，深さは30cm前後，堆積土は砂質シルト～シルトを主体とし，底面には砂層もみられる。この溝は現代まで使用されたものである。

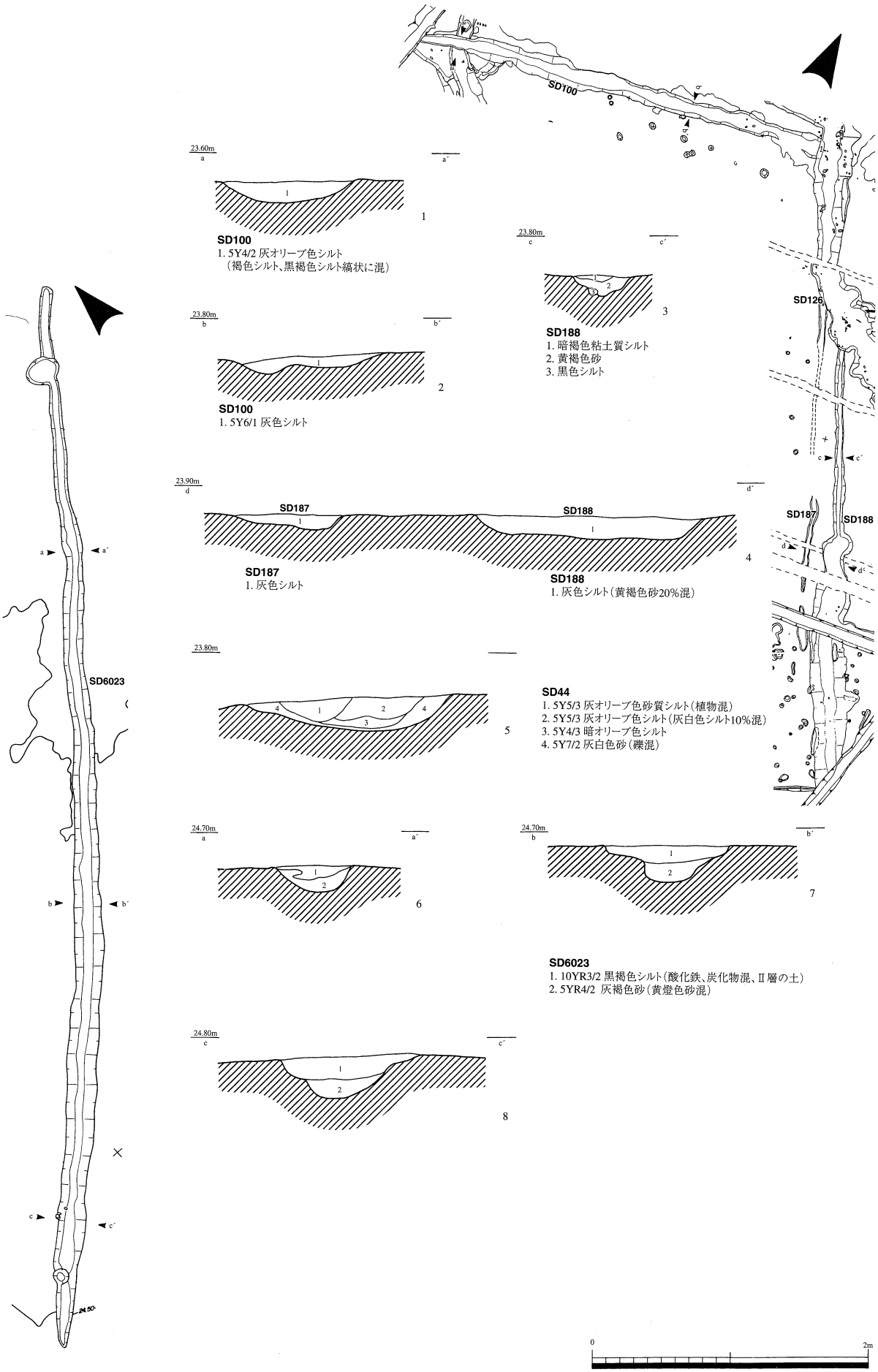
遺物は，須恵器・珠洲・中国製白磁・青磁・染付・伊万里・唐津・信楽・近～現代陶磁器・ガラス瓶・加工材・栓・底板などが出土している。第162図1041は中国製染付皿である。碁笥底で，外面に芭蕉葉文，内面に草文を描く。16世紀前半～中葉の時期。1042は白磁口禿の碗である。白磁碗Ⅸ類にあたり，13世紀後半～14世紀前半のもの。1043は珠洲の擂鉢。肥厚する口縁端部に櫛描波状文を施すもので，Ⅴ期に比定できる。1044は伊万里の碗もしくは鉢。1045は伊万里紅皿で，19世紀のもの。1046は網目文を描く，伊万里の碗。1047は江戸時代の鉄釉陶器擂鉢，1048は信楽の透明釉の掛かる灯明受皿で19世紀代。1049は樽の上板で，栓穴がある。1050は差歯下駄である。

100号溝（ＳＤ100，第161・162図，図版226）

Ａ地区中央部から西に直線的に伸びて，西流する東西溝である。ＳＢ45・ＳＤ46より新しいが，ＳＤ44より古い。中央部で南に折れ，ＳＤ126・ＳＤ188の延長部につながる可能性が高い。溝幅は60cm～180cmで，全長約30ｍを検出した。断面は皿状で，深さは10cm～20cmである。堆積土層はシルトである。時期は出土した寛永通宝から18世紀後葉以降と考えられる。遺物は中世土師器皿・瀬戸美濃・銅銭（寛永通宝）などが出土している。第162図1051は寛永通宝四文銭で背11波（初鋳1769年）のものである。

187号溝（ＳＤ187，第161・162図，図版179）

Ａ地区南東隅近くに位置する，南北方向の溝。北端は少し途切れるが，同一方向に伸びるＳＤ126につながるものと考えられる。南端も，Ｂ１地区にまたがり伸びる細長い土坑ＳＫ1082につながるかもしれない。溝幅は40cm～60cmで，全長約７ｍを検出した。断面形は皿状で浅く，深さ10cm～15cm。堆積土は灰色シルトである。第162図1052は非ロクロ成形の中世土師器皿で，ＮＤⅡ類に分類される。溝の時期は近世と考えられる。



第161図　遺構実測図

1・2.SD100　3.SD188　4.SD187・SD188　5.SD44　6～8.SD6023

188号溝（ＳＤ188，第161・162図，図版158・179）

Ｂ１地区の北東隅からＡ地区の中央に向かって北流する南北溝で，自然流路と考えられる。Ｂ１地区からＡ地区にかけての溝南半部は幅1.5ｍ～2.6ｍと幅広いが，北半部では極端に細く幅50cm～80cmである。北端部はＳＤ44で切られるが，現在のＳＤ44の流路に重なるように直線的に北に伸び，途中でＳＤ100に一部分流したか，あるいは西に折れてＳＤ100につながったか，どちらかであろう。溝断面形は逆台形を呈し，全長約32ｍを検出した。堆積土は灰色シルトである。なお溝南半部で一部が分流して東に伸びる。時期は出土遺物から近世とみられる。

遺物は中世土師器・珠洲・瀬戸美濃・唐津・越中瀬戸・信楽・色絵磁器・漆器などが出土している。第162図1053は越中瀬戸の鉄釉皿である。1054は透明釉の掛かる信楽焼の灯明受け皿。1055は唐津内野山西窯系の銅緑釉皿。1056は色絵磁器皿である。

3087号溝（ＳＤ3087，第162図，図版179）

Ｂ２Ｅ地区の南端部で，ＳＤ3089の南側に位置する東西溝である。溝西端部がＳＤ3089と混ざり合うため区分が不明瞭になる。幅80cm～100cmである。遺物は須恵器・珠洲・瓦器・唐津・唐津（内野山西窯系）・越中瀬戸・近世陶器・櫛などが出土している。第162図1057は珠洲の擂鉢である。II期のものか。1058の櫛はイスノキ製である。溝の時期は明確でないが，出土遺物から近世の可能性がある。

6023号溝（ＳＤ6023，図版159）

Ｃ２地区北側で，南西から北東方向に流れる直線的な溝である。幅40cm～120cm，長さ約38ｍを検出したが，さらに伸びるものである。出土遺物がなく，時期を決めかねるが，覆土の状況から比較的新しく，また近代の井戸ＳＥ6025より古いことから近世の頃と推測しておく。

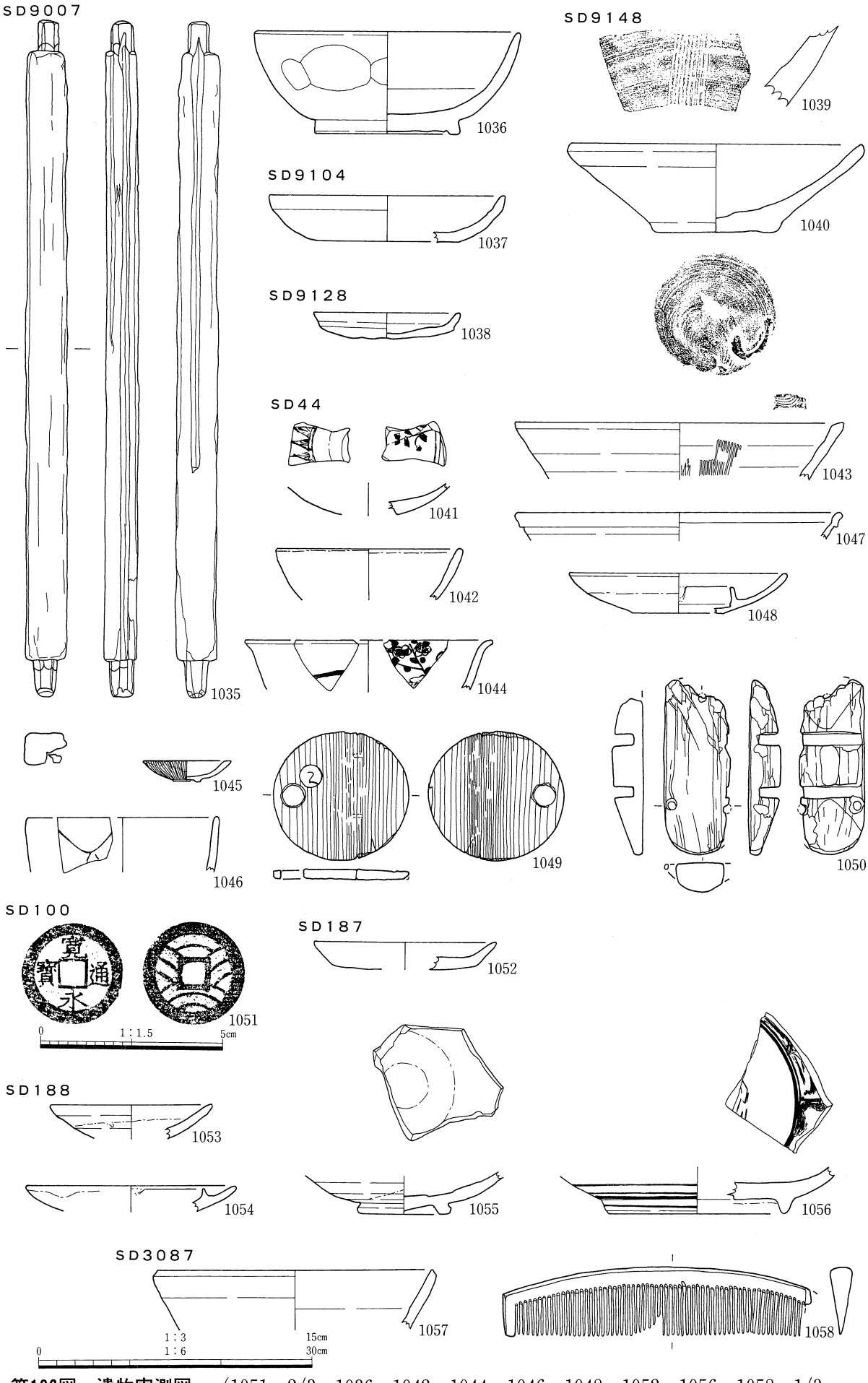
注１　中国製磁器の分類・編年については以下の文献を参考にした。
横田賢次郎・森田　勉　1978　「太宰府出土の輸入中国製陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』４
山本信夫　1988　「北宋期貿易陶磁器の編年－太宰府出土例を中心として」『貿易陶磁研究』No.８

注２　地震痕跡等の解釈については以下の報告を参考にした。
河西健二・田中道子　1993　「３能越自動車道関連発掘調査　１中世面　(1)Ａ地区」『埋蔵文化財年報(4)』財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所・河西健二　1993　「五社遺跡調査で思ったこと」同上

注３　上田秀夫　1982　「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.２

注４　漆器類の漆色は，特記ないかぎり地が黒色，文様は赤色である。

注５　出土獣骨類の同定結果については第二分冊の自然科学的分析結果報告を参照願いたい。



第162図　遺物実測図　(1051　2/3, 1036～1042・1044～1046・1048・1052～1056・1058　1/3, 1035・1043・1047・1049・1050・1057　1/6)

SD44 (1041～1050)　SD100 (1051)　SD187 (1052)　SD188 (1053～1056)　SD3087 (1057・1058)
SD9007 (1035・1036)　SD9104 (1037)　SD9128 (1038)　SD9148 (1039・1040)

D 井　　戸

5067号井戸（ＳＥ5067，第163・165図，図版165）

Ｃ１地区のやや西よりで，ＳＢ59の北側に約50cm離れた場所に位置する。掘形の平面形が不整楕円形を呈する，素掘の井戸である。掘形の断面形は上部がやや開くが，下部は円筒状を呈する。規模は長軸約200cm，短軸168cm，深さ59cmである。堆積土は上部が黄色砂や黒褐色シルト，間に灰オリーブ色～褐色の砂層を挟み，下部は褐灰色砂層となる。

遺物は土師器・加工板が出土している。第165図1059は長方形の加工板。長さ22.5cm，幅３cmの大きさで，端部近くに釘穴が残る。

井戸の時期は周辺の建物と同様13～14世紀代と考えられる。

5068号井戸（ＳＥ5068，第163・165図，図版165・213）

Ｃ１地区の西よりで，ＳＢ58とＳＢ60の間に位置する。掘形の平面形はわずかに不整形な楕円形の木組み井戸で，井戸側には曲物を用いる。断面形は上部が漏斗状に開き，下部が円筒状になる。曲物は，高さ10.8cmのもの一段を中央で半截し，側板を一部重ねて径を縮めて井戸底に据えている。規模は長軸100cm，短軸92cm，深さ52cmで，堆積土は黒褐色シルトが主体である。

遺物は曲物と杓子形木器が出土している。第165図1060は井戸側に転用されていた曲物である。直径約23cm，高さ10.8cmの大きさで，底板を留めた釘跡が残る。樹種はスギ。1061は杓子形木器である。３片に割れて井戸壁と曲物の間にはまりこんでいた。片面にはひっかきキズが多く残る。樹種はヒノキである。

井戸の時期はＳＥ5067と同様13～14世紀代と考えられる。

6027号井戸（ＳＥ6027，図版165）

Ｃ２地区の北西隅近くに位置する。掘形の平面形は楕円形の素掘井戸である。規模は長軸146cm，短軸130cm，深さ約60cm。図版165に示すように，竹竿が立てられていた。遺物は中世土師器皿・伊万里・近代磁器などが出土している。時期は近代以降と考えられる。

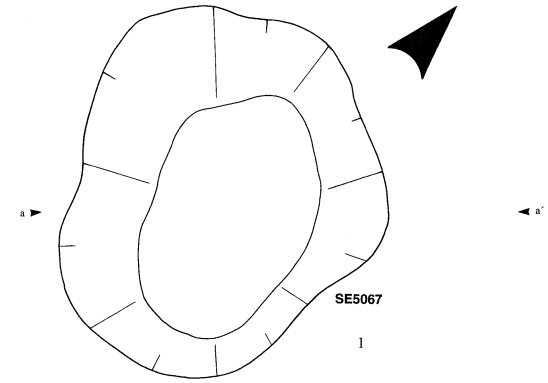
7020号井戸（ＳＥ7020，第163・165図，図版164・165・180・213・214・224）

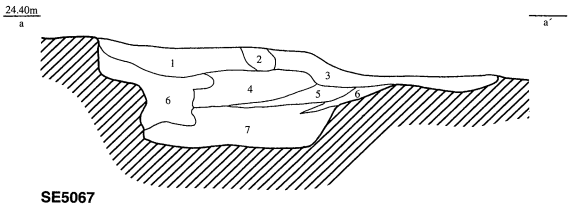
Ｃ３地区の南側建物群中に位置する，素掘井戸である。SB68～70と重なるが，遺構の切り合いが明瞭なのはＳＢ61より古いことである。位置から見てＣ３地区北側建物群に伴うものと考えたい。掘形の平面形は楕円形を呈する。断面形は漏斗状であるが北東側に二段のテラスが形成されており，井戸本体は南西側に偏る。規模は長軸3.08ｍ，短軸2.48ｍ，深さ1.28ｍである。堆積土は上部は粘質土・シルト・砂質シルトなどが縞状に堆積し，下部は灰色砂質シルトの単純層となる。

遺物は土師器・箸・下駄・加工材・ヒョウタンの種子・鋳鉄製品の一部などが出土している。第165図1062・1063は土師器碗。いずれも底部回転糸切り調整を施す。1064は連歯下駄。後歯は磨り減って残ってない。前歯および台裏の一部に赤色漆が残る。樹種はスギ。1065は箸，1066は鋳鉄片である。井戸の時期はあまり明確ではないが，建物群と同時期とすると，12世紀後半から13世紀前半代と考えられる。

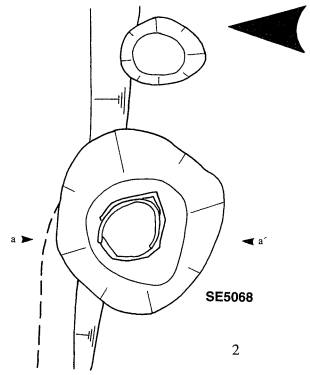
8042号井戸（ＳＥ8042，図版165・214）

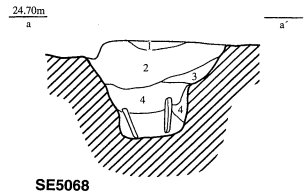
Ｄ１地区のやや東よりに位置する。谷部埋没後に掘られた木組み井戸である。井戸側には逆さにした樽が据えられ，井戸底には竹を打ち込んでいる。掘形の平面形はやや不整な楕円形で，断面形はほぼ円筒状となる。規模は長軸100cm，短軸94cm，深さ53cmである。遺物は折敷・円形板・曲物などが出土している。第165図1067は折敷の一部と考えられる。1068は円形板，1069の曲物は直径7.8cm，高さ



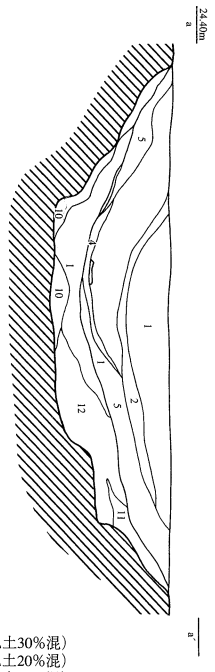


SE5067
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂（木混）
2. 2.5Y3/1 黒褐色シルト（砂混）
3. 10YR2/2 黒褐色シルト（砂、石混）
4. 5Y4/2　灰オリーブ色砂（黄燈色砂混、木混）
5. 2.5Y5/4 黄褐色砂（Ⅲ層の土）
6. 10YR4/4 褐色砂（黄褐色砂混）
7. 10YR4/1 褐灰色砂（褐灰色シルト混）

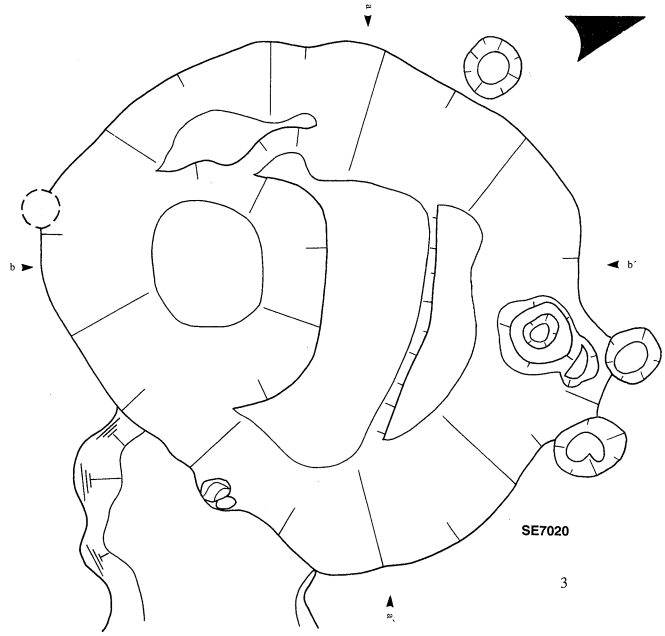


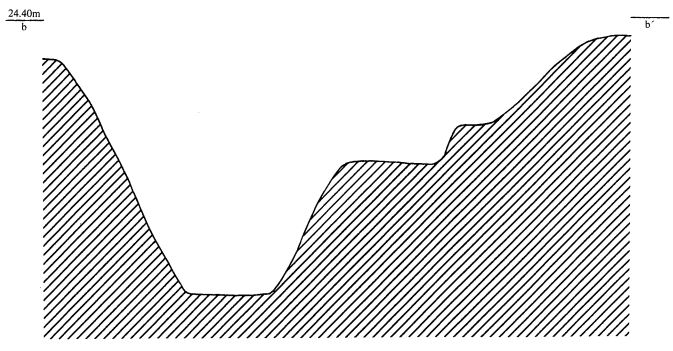


SE5068
1. 2.5Y5/3 黄褐色砂（酸化鉄混、Ⅲ層の土）
2. 10YR3/2 黒褐色シルト（酸化鉄混、Ⅱ層の土）
3. 2.5Y3/1 黒褐色シルト（灰褐色シルト、黒色シルト縞状に混）
4. 2.5Y3/2 黒褐色シルト



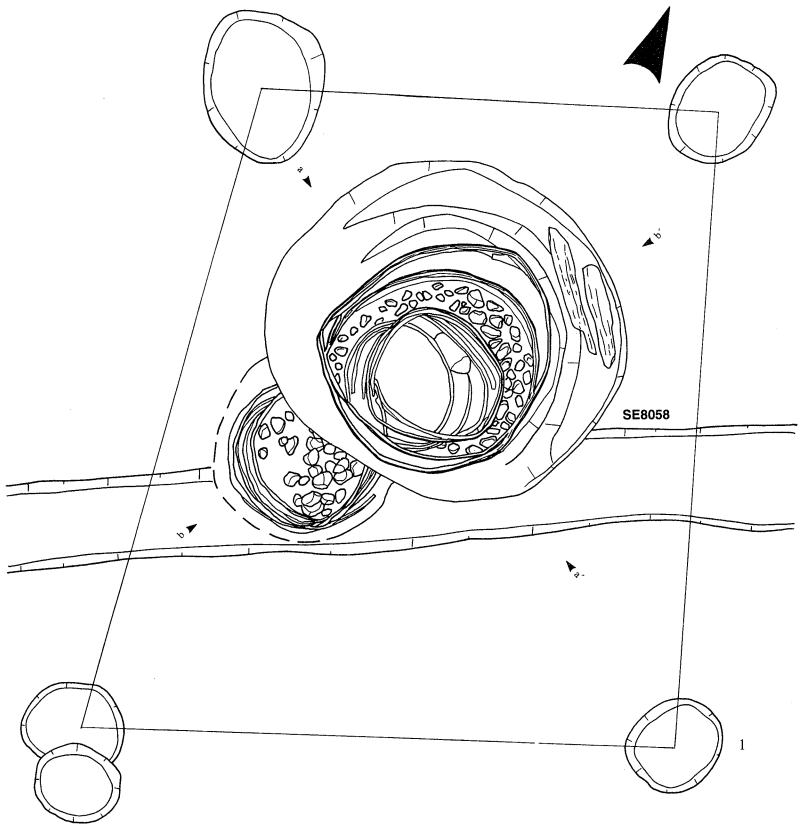
SE7020
1. 2.5Y7/1 灰白色シルト（黒褐色土30%混）
2. 2.5Y3/1 黒褐色シルト（灰白色土20%混）
3. 2.5Y3/1 黒褐色シルト（灰白色土40%混）
4. 2.5Y3/2 黒褐色粘質土
5. N3　暗灰色シルト
6. 2.5Y3/2 黒褐色粘質土
7. 2.5Y3/1 黒褐色シルト（灰白色土混）
8. 暗灰色シルト（黒褐色粘質土混）
9. 灰色砂質シルト（炭化物混）
10. 灰白色砂質シルト
11. 淡黄色砂
12. 明青灰色砂質シルト（灰色シルト20%帯状に混）

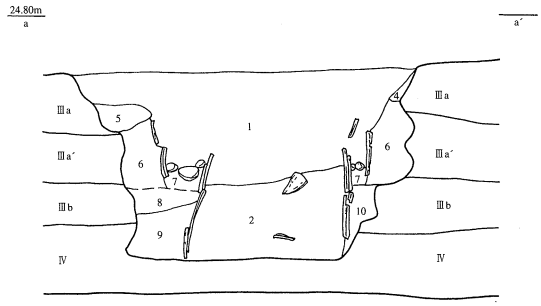


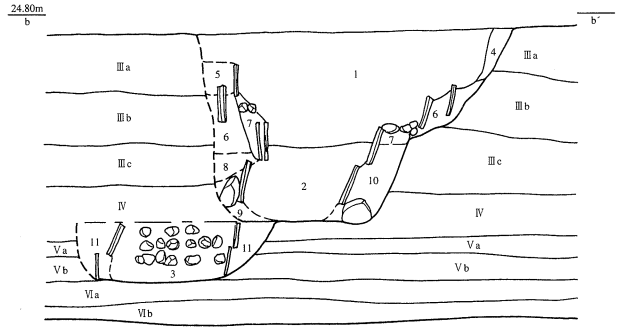


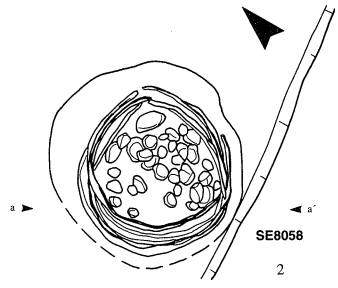
第163図　遺構実測図

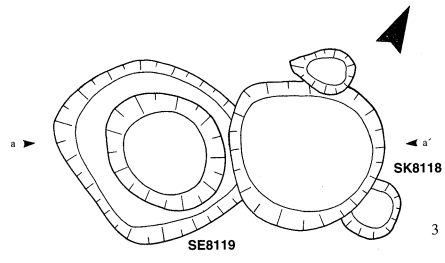
1．SE5067　2．SE5068　3．SE7020

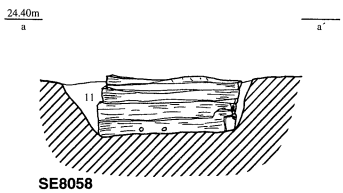


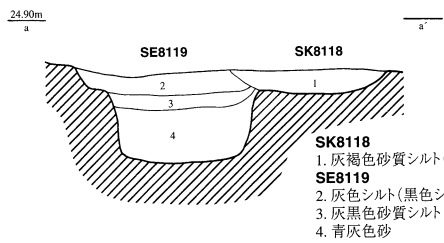


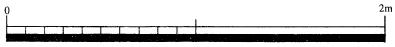












第164図　遺構実測図

1・2.SE8058　3.SK8118・SE8119

4.2cmの大きさで，材質はスギ。井戸の時期は近代以降と考えられる。

8058号井戸（ＳＥ8058，第164・165図，図版163・164・179・214）

Ｄ２地区の南東部，道路状遺構と考えられるＳＤ8056とＳＤ8057の間に位置する。ＳＤ8057と一部重なり，前後関係はやや不明瞭ながら井戸が新しい可能性が高い。道路中央に井戸があったとは考えにくいので，道路・建物群廃絶後に掘られたものと考えたい。なお井戸の周囲には台形の配置になるが４個の掘立柱柱穴がある。井戸を覆う小屋掛けがあったものと考えられる。

井戸は曲物積み上げ井戸で，井戸枠として曲物を６段積み上げている。掘形の平面形は直径約90cmの円形で，断面形は上半部で漏斗状に開き，下半部は筒状となる。深さは約0.65ｍであるが，曲物の上から４段目までの井戸上部が北東方向に約52cmずれ，全体に北東方向に傾いたようになっている。これは，中世以降の大地震による地層の水平方向のずれによるものと考えられる[注1]。

曲物は掘形中央より南側に偏って据えられ，２段ずつ似た直径のものを積み上げるもので，下から上に行くに従って径が大きくなる，最下段では長さ100cm程のものを曲げており，最上段では長さ200cm程のものになる。曲物の上から二段目と三段目の隙間と最下段内部には小礫を詰め込んでいる。曲物は，１枚板を樺皮で留める段や，ほぼ同じ長さと幅のものを複数重ねる段がある。後者の場合は，一方の綴じ皮がはずれてももう一方で押さえが利くように，それぞれの留めの位置をずらしている。上から２段目と６段目の曲物下端には釘跡があり，既製品の利用を図っている。また曲物の位置固定のため，４段目下端の東西には押さえ石を置いている[注2]。

井戸内部の堆積土層は暗褐色シルト・灰色粘質シルトである。井戸枠裏込め土層はシルト・砂質シルト・粘質シルトなどで，場所により変化がある。

出土遺物には中世土師器・加工板・円形板・曲物がある。第165図1070～1072は非ロクロ成形の中世土師器皿。1070はＮＤII類，1071はＮＤＩ類，1072はＮＣ類に分類でき，時代は13～14世紀である。1073～1075は井戸側に用いられていた曲物である。1073は直径36cmで４段目のもの，1074は直径39cmで３段目のもの，1075は直径59cmで２段目のもの。1074の樹種はスギである。

井戸の時期は周辺の建物群に後続するが，大きな時期差はなく，13～14世紀代と考えられる。

8119号井戸（ＳＥ8119，第164図，図版165・217）

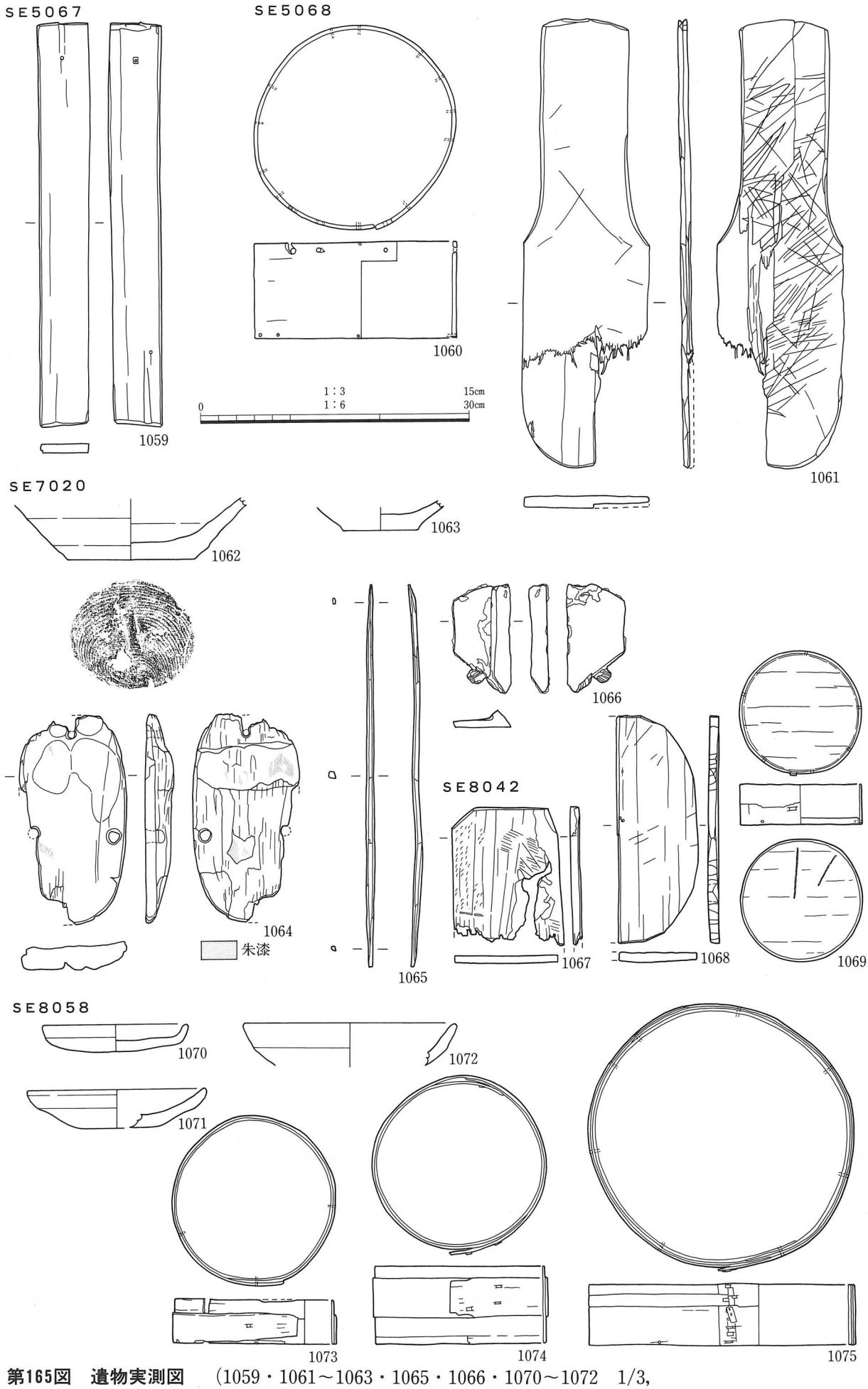
Ｄ１地区の建物群の北端部，ＳＢ73･74に重なる位置にある。ＳＢ73に先行するＳＫ8118より古い。時間的な隔たりはそれほど大きくないと考えられるが，建物群に先行する井戸である。掘形平面形は，やや不整な楕円形を呈する素掘の井戸である。断面形は，下部は円筒状で，上部にテラス状の段があり，一回り広がって漏斗状に開く。規模は外径で長軸推定108cm，短軸94cm，下部の円筒状になる部分では長径68cm，短径56cmで，全体の深さは48cmとなる。堆積土層はほぼ水平堆積で，上部がシルトないし砂質シルト，下部が青灰色砂層である。

遺物は箸が出土している。

以上報告した井戸の他に，Ｃ２地区北半部にＳＥ6025・ＳＥ6026があるが，出土遺物はなく，いずれも近代以降のものである。

注１　河西健二　1993　前掲

注２　井戸側の観察等については次の報告を参考にした。
佐賀和美　1993　「五社遺跡Ｄ地区の井戸58について」『埋蔵文化財年報(4)』財団法人富山県文化振興財団　埋蔵文化財調査事務所



第165図　遺物実測図　（1059・1061～1063・1065・1066・1070～1072　1/3,
1060・1064・1067～1069・1073～1075　1/6）

SE5067（1059）　SE5068（1060・1061）　SE7020（1062～1066）　SE8042（1067～1069）
SE8058（1070～1075）

E　土　　坑

土坑には大小・形態・性格別に様々なものがある。また出土遺物がなく，他の遺構群と離れていて，時期の確定しないものも多い。ここでは発掘した多数の土坑のうち，代表的なものを選んで報告する。

67号土坑（ＳＫ67，第168図，図版180・215）

Ａ地区北西部，ＳＢ42の北東隅柱に隣接する不整形な土坑。長さ60cm，深さ33cmの規模である。遺物は珠洲・箸・柄・円形板が出土している。第168図1076は珠洲の甕である。口縁部は丸く外反し，肩部にはヘラ記号がある。時期はⅢ期とみられる。1077は刃物の柄である。二枚合わせて中子の部分を挟み込み，２箇所で緊縛して固定する。樹種はスギ。1078は箸。

114号土坑（ＳＫ114，第166・168図，図版166）

Ａ地区中央部，ＳＢ45の北東側に位置する円形土坑。土坑下半分は古代後期面で検出された。地震による地層の水平移動のため，上半分が北方へ約1.3ｍずれたものである。最大直径約68cmで，断面形は半球状を呈する。堆積土は砂層～砂質シルトである。遺物は箸（第168図1083）が出土している。

121号土坑（ＳＫ121，第166・168図，図版166・180・215）

Ａ地区中央部，ＳＢ45の南東側に位置する円形土坑。ＳＢ45に関連する土坑の可能性がある。土坑下半分は古代後期面で検出された。地震による地層の水平移動のため，上半分が北北西へ約1.2ｍずれたものである。最大直径約120cm，深さ約50cmで，断面形は逆台形を呈する。堆積土は砂質シルト～シルトである。遺物は中世土師器・下駄・箸・加工材・焼石が出土している。第168図1079は非ロクロ成形の中世土師器皿ＮＣ類。1080は箸，1081は加工棒。1082は連歯下駄で樹種はケヤキ。土坑の時期は建物群と同様12世紀後半～13世紀代と考えられる。

122号土坑（ＳＫ122，第166図）

Ａ地区の南部，ＳＢ46の北西側に位置する楕円形土坑。ＳＢ46に関連する土坑の可能性がある。規模は長軸116cm，短軸92cm，深さは約10cm。断面形は皿状を呈し，灰色砂質シルトが堆積する。出土遺物はないが，建物群と同時期と考えられる。

203号土坑（ＳＫ203，第166図，図版166）

Ａ地区の北西部，ＳＢ38の東側に位置する円形土坑。ＳＢ38に関連する土坑の可能性がある。規模は直径120cm，深さは約10cm。断面形は逆台形を呈し，黄褐色砂層が堆積する。出土遺物はないが，建物群と同時期と考えられる。

3005号土坑（ＳＫ3005，図版166）

Ｂ２Ｅ地区北西部に位置する，円形土坑。規模は直径385cm，深さ35cmで，断面形は半円状を呈する。遺物は加工材が出土している。

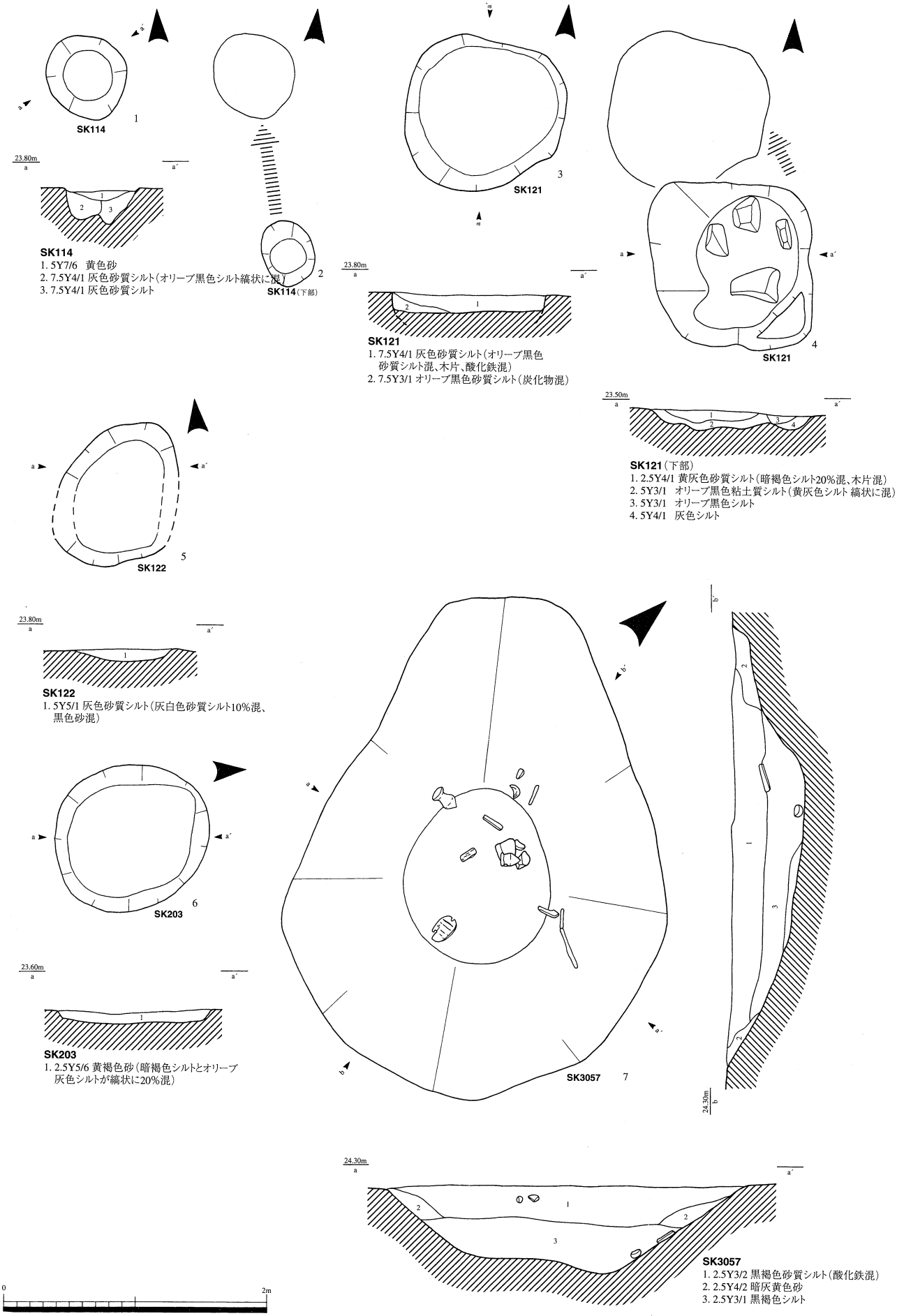
3013号土坑（ＳＫ3013，第167・168図，図版166・215）

Ｂ２Ｅ地区北西部，ＳＢ53の中に位置する楕円形の土坑である。チュウギの大量出土からＳＢ53に伴う便所遺構と考えられる。規模は長軸180cm，短軸88cm，深さ36cmで，断面形は半円形を呈する。西側底面は一部テラス状に高くなる。底面近くからチュウギとみられる細い棒が，敷き詰めたように出土した。堆積土は砂質シルトが主体で，底面には有機物が混入した粘土質シルトがみられる。

第168図1084～1095はチュウギとみられる棒状木片である。直径0.7cm～１cm程の細木を長さ10cm～20cm程に切断したもので表面に焼痕が残るものもある。樹種はスギが１点ある。

3057号土坑（ＳＫ3057，第166・168・169図，図版167・180・215・216）

Ｂ２Ｅ地区中央やや東よりで，ＳＢ55の北東に位置する楕円形土坑である。規模は長軸384cm，短軸



第166図　遺構実測図

1．SK114　2．SK114（下部）　3．SK121　4．SK121（下部）　5．SK122　6．SK203　7．SK3057

288cm，深さ68cmで，断面形は逆台形を呈する。堆積土は砂質シルト～シルトが主体である。遺物は中世土師器・下駄・漆碗・擬宝珠形木器・加工材などが出土している。第168図1096は非ロクロ成形の中世土師器皿で，ＮＤⅡ類に分類できる。1097は漆碗で，樹種はケヤキ。1098は連歯下駄で後歯は磨り減ってほとんど痕跡程度である。第169図1099･1100は，紡錘形の本体に円盤状の台が付くもので，1099は先端と底面の両方から，1100は底面からのみ穿孔される。形態の類似から擬宝珠形木器としたが，用途等は不明。樹種は２点ともヤナギ類である。1101・1102は棒状加工品。

5096号土坑（ＳＫ5096，第167・169図，図版167・180）

Ｃ１地区の中央部，ＳＢ59の北東側に位置する不整楕円形の土坑である。ＳＫ5097と一部重なるが，それより新しい。規模は長軸180cm，短軸140cm，深さ20cmで断面形は逆台形を呈する。堆積土はシルト主体である。遺物は土師器･中国製白磁が出土している。第169図1103は白磁碗Ⅴ類４ａである。時期は周辺建物群と同様13～14世紀代と考えられる。

5097号土坑（ＳＫ5097，第167図，図版167）

Ｃ１地区の中央部，ＳＢ59の北東側に位置する不整楕円形の土坑である。ＳＫ5096と一部重なるが，それより古い。規模は長軸228cm，短軸168cm，深さ10cmで断面形は逆台形を呈する。堆積土はシルト主体である。遺物は土師器・中国製白磁・箸が出土している。時期は周辺建物群と同様13～14世紀代と考えられる。

5117号土坑（ＳＫ5117，第167図，図版166）

Ｃ１地区の南東部，ＳＢ59の東側に少し離れて位置する，円形土坑である。規模は直径88cm，深さ約15cmで，断面形は皿状を呈する。堆積土は暗褐色シルト。遺物は土師器が出土している。

5118号土坑（ＳＫ5118，第167図，図版167）

Ｃ１地区の北部に単独にある不整形土坑である。規模は長軸100cm，短軸76cm，深さ５cmで，断面形は皿状を呈する。堆積土は黒褐色シルトである。遺物は土師器が出土している。時期は不明。

6024号土坑（ＳＫ6024，第169図）

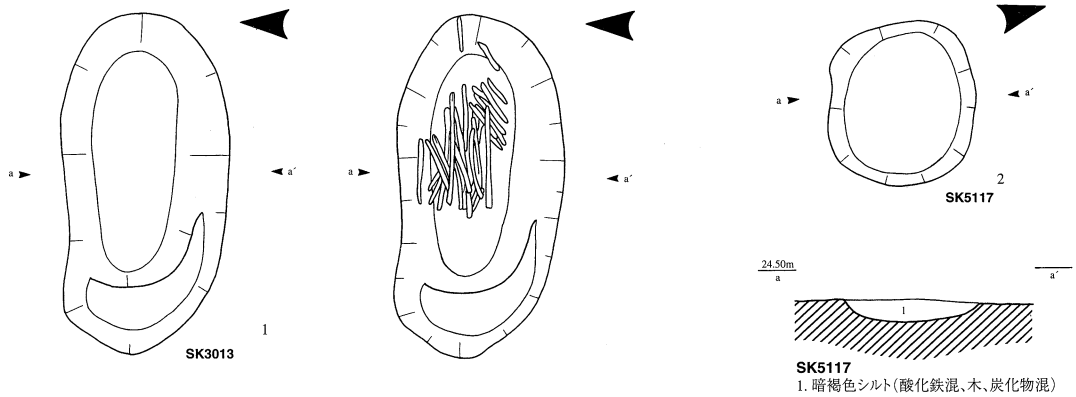
Ｃ２地区中央やや北寄りにある新しい時期の撹乱穴。円形板（第169図1105）が出土している。樹種はモミである。

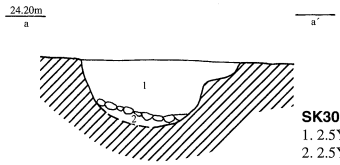
7030号土坑（ＳＫ7030，第169・170・171図，図版167・180・216）

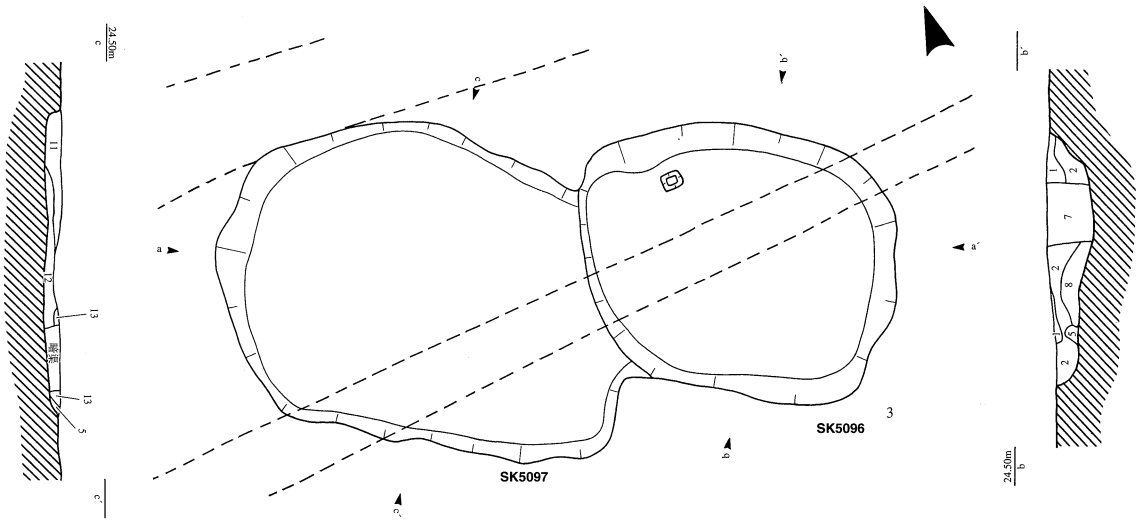
Ｃ３地区中央部，ＳＢ69の北側，ＳＢ68に重なって位置する方形土坑である。建物群との前後関係は不明。規模は長さ156cm，幅144cm，深さ44cmで，断面形は逆台形を呈する。堆積土は上層が灰色シルト，下層が黄褐色砂質土である。土坑の内部に方形に組んだ木枠が設置されている。木枠の四方は相欠接によって組み，木枠と土坑壁との隙間には，頭部を鍵状にした楔状の縦杭を，枠板を側面から押さえるように打ち込んでいる。性格については不明であるが，水溜や便所などの可能性が考えられている[注1]。遺物は土師器･加工板などが出土している。第169図1106は土師器椀で，底部は回転糸切り調整。同図1107～1109･第170図1110は木枠の板材である。長さ約60cm，幅12cm～16cmの大きさで，すべてスギ材。1111～1114は木枠の留め杭で，頭部を鍵状にする。1113は頭部の一部を欠損する。先端は斜めに削いで尖らすものと，直角に切断したものの両方がある。これもすべてスギ材。土坑の時期は建物群と近い時期で，12世紀後半～13世紀代と考えられる。

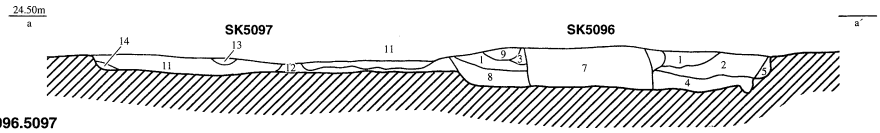
7060号土坑（ＳＫ7060，第171図）

Ｃ３地区北側建物群の北端に位置する不整形な方形土坑である。ＳＢ65と重なり，これより新しい。規模は長さ約348cm，幅308cm，深さ約15cmである。断面形は皿状で底面にやや凹凸がある。灰色粘土

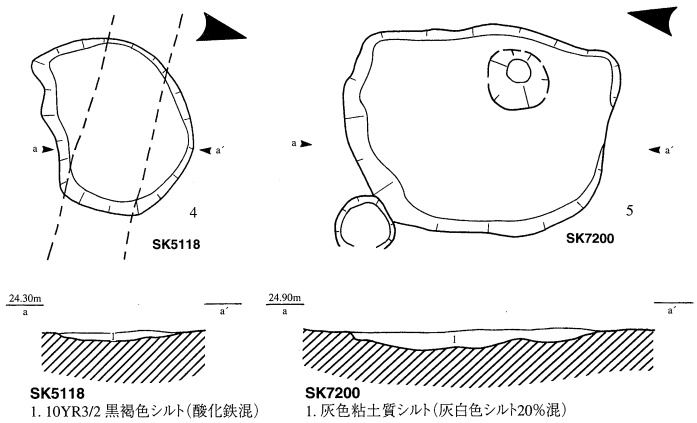








SK5096.5097
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト(黄燈色砂、暗灰黄色シルト混)
2. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルト(黄燈色砂ブロック状に混、木混)
3. 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト(木混)
4. 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト(黄燈色砂縞状に混、木混)
5. 10YR5/3 にぶい黄褐色砂
6. 2.5Y2/1 黒色シルト
7. 暗渠、攪乱
8. 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト(黄燈色砂混、炭化物混)
9. 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト
10. 10YR3/4 暗褐色シルト(炭化物、木混)
11. 黒褐色シルト(黄燈色砂縞状に混、木炭化物混)
12. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト(黄燈色砂混)
13. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルト
14. 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト



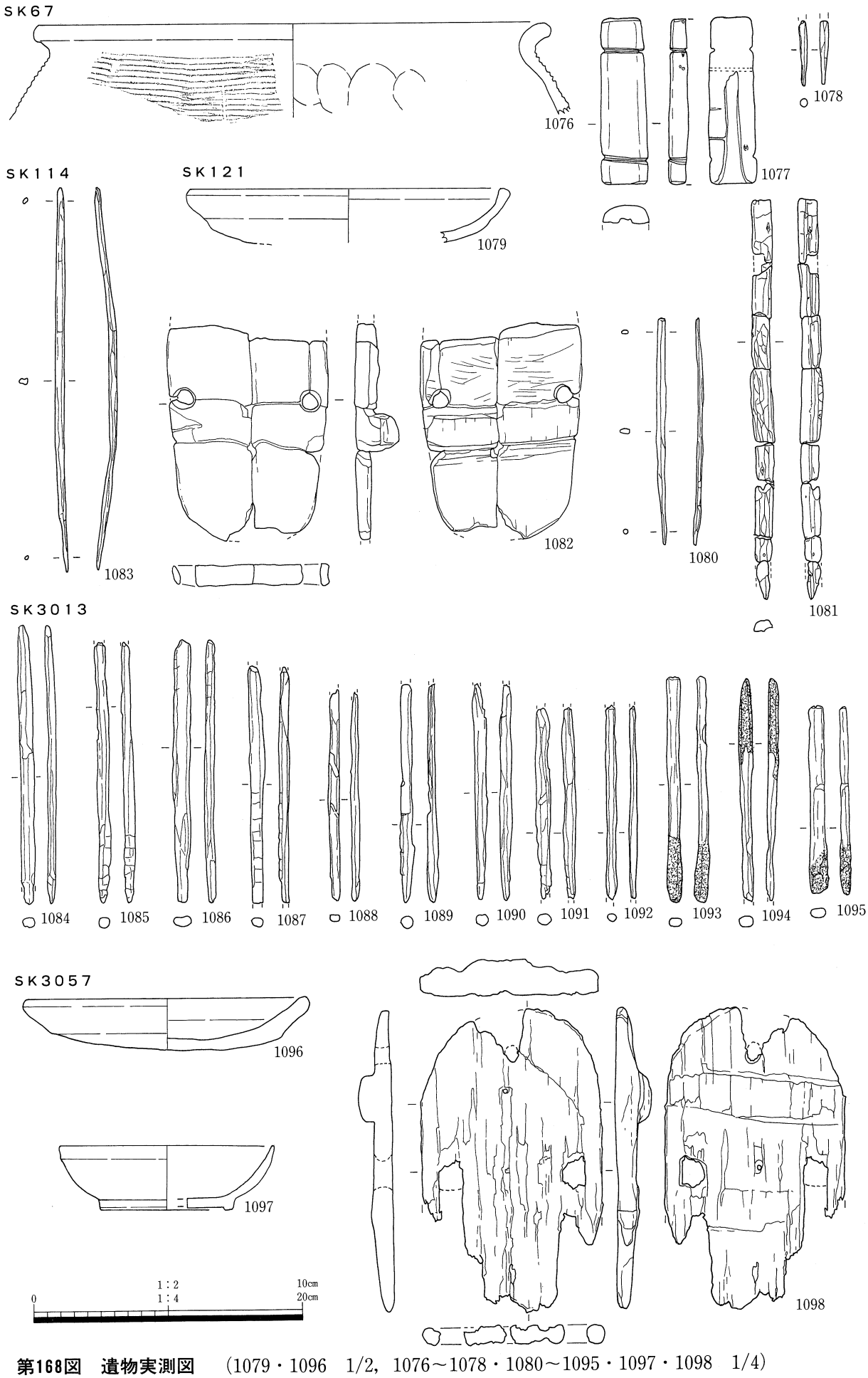
SK5118
1. 10YR3/2 黒褐色シルト(酸化鉄混)

SK7200
1. 灰色粘土質シルト(灰白色シルト20%混)

0　2m

第167図　遺構実測図

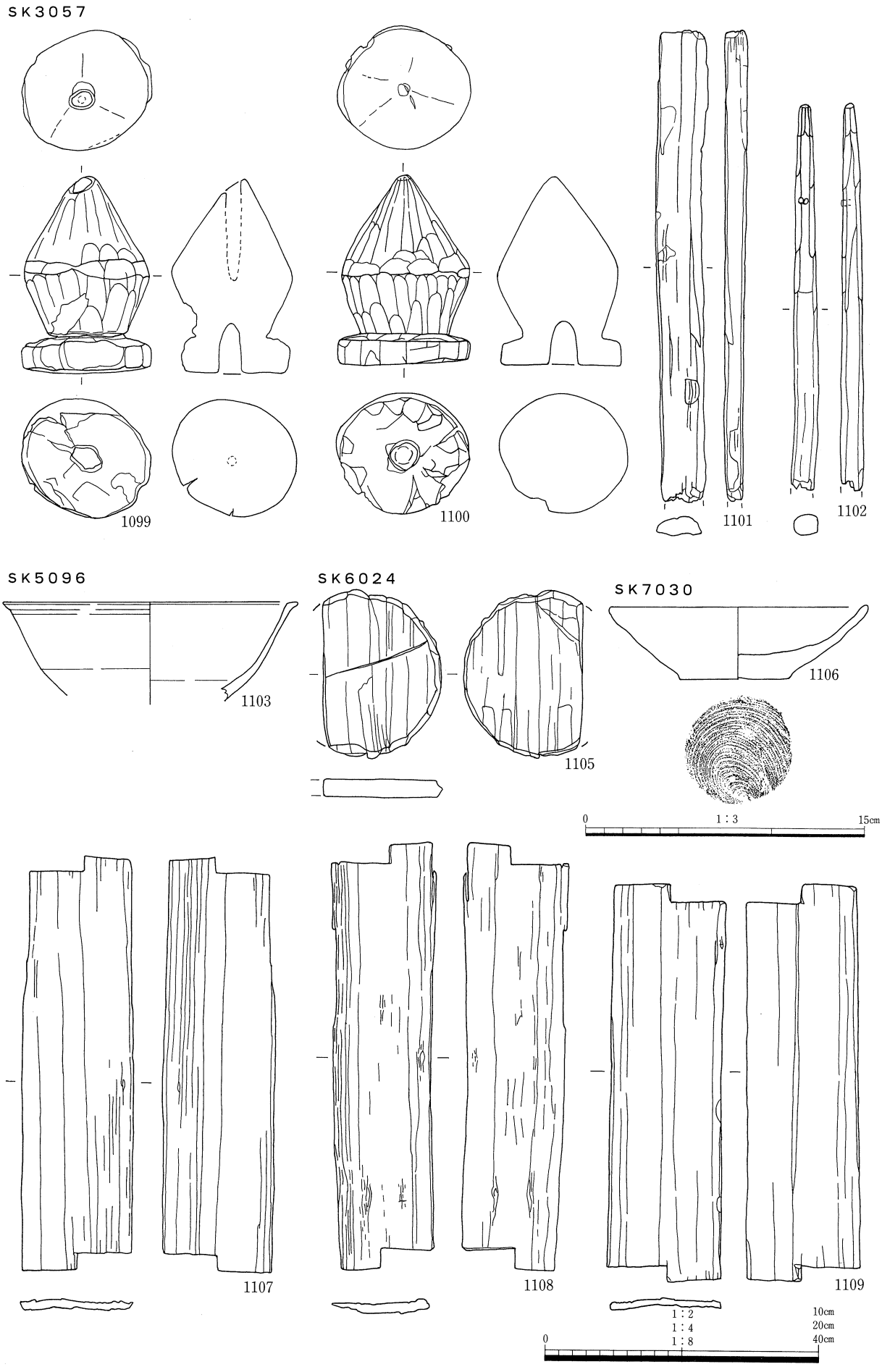
1.SK3013　2.SK5117　3.SK5096・SK5097　4.SK5118　5.SK7200



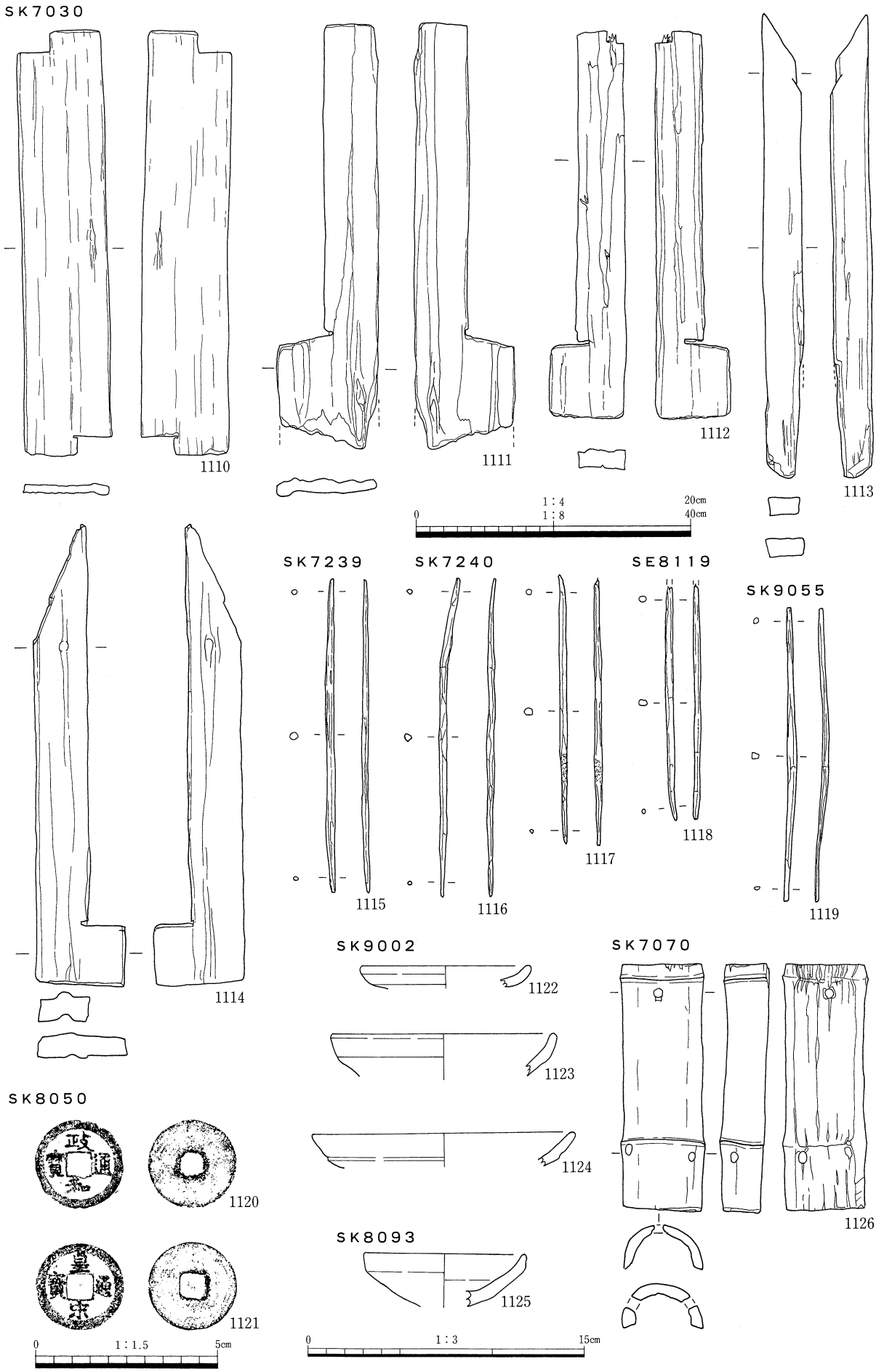
第168図　遺物実測図　(1079・1096　1/2, 1076～1078・1080～1095・1097・1098　1/4)

SK67 (1076～1078)　SK114 (1083)　SK121 (1079～1082)　SK3013 (1084～1095)

SK3057 (1096～1098)



第169図　遺物実測図　(1105　1/2, 1103・1106　1/3, 1099～1102　1/4, 1107～1109　1/8)
SK3057 (1099～1102)　SK5096 (1103)　SK6024 (1105)　SK7030 (1106～1109)



第170図　遺物実測図　(1120・1121　2/3, 1122～1125　1/3, 1111～1119・1126　1/4, 1110　1/8)

SK7030 (1110～1114)　SK7070 (1126)　SK7239 (1115)　SK7240 (1116・1117)
SK8050 (1120・1121)　SK8093 (1125)　SE8119 (1118)　SK9002 (1122～1124)　SK9055 (1119)

質シルトが堆積する。遺物は出土してないが，土坑の時期は建物群に近い12世紀後半～13世紀代と考えられる。

7200号土坑（ＳＫ7200，第167図）

Ｃ３地区の中央部，建物群の中に位置する不整形土坑である。ＳＢ65・66と重なり，ＳＢ66より新しい。規模は長軸140cm，短軸112cm，深さ約10cmで，断面形は皿状を呈する。堆積土は灰色粘土質シルトである。遺物は珠洲が出土している。土坑の時期は建物群に近い12世紀後半～13世紀代と考えられる。

7239号土坑（ＳＫ7239，第170図，図版217）

Ｃ３地区南側建物群の北側に位置する不整形な土坑である。ＳＢ68と重なるが前後関係は不明。ＳＫ7240と接し，それより古い。規模は長軸94cm，短軸48cm，深さ19cm。遺物は箸（第170図1115）・加工材が出土している。土坑の時期は建物群に近い12世紀後半～13世紀代と考えられる。

7240号土坑（ＳＫ7240，第170図，図版217）

Ｃ３地区南側建物群の北側に位置する円形土坑である。ＳＢ68と重なるが前後関係は不明。ＳＫ7239と接し，それより新しい。規模は直径74cm，深さ28cm。遺物は箸（第170図1116・1117）・加工材が出土している。土坑の時期は建物群に近い12世紀後半～13世紀代と考えられる。

8050号土坑（ＳＫ8050，第170・171図，図版168・226）

Ｄ１地区のやや北より，ＳＤ8043の左岸に位置する不整形土坑である。規模は長軸212cm，短軸120cm，深さ約15cmで，断面形は逆台形を呈し，シルトないし粘質シルトが堆積する。遺物は中世土師器と銭貨が出土している。第170図1120は政和通寶（初鋳1111年），1121は皇宋通寶（初鋳1038年）である。土坑の時期は12世紀後半～14世紀代と考えられる。

8059号土坑（ＳＫ8059，第172図）

Ｄ１地区南側の建物群の中にある不整形な土坑である。ＳＢ73・ＳＢ77と重なり，これらより新しい。規模は長軸288cm，短軸124cm，深さ12cmである。断面形は皿状で，灰褐色砂質シルトが主体的に堆積する。遺物は中世土師器が出土している。土坑の時期は建物群に近い12世紀後半～14世紀代と考えられる。

8060号土坑（ＳＫ8060，第172図，図版168）

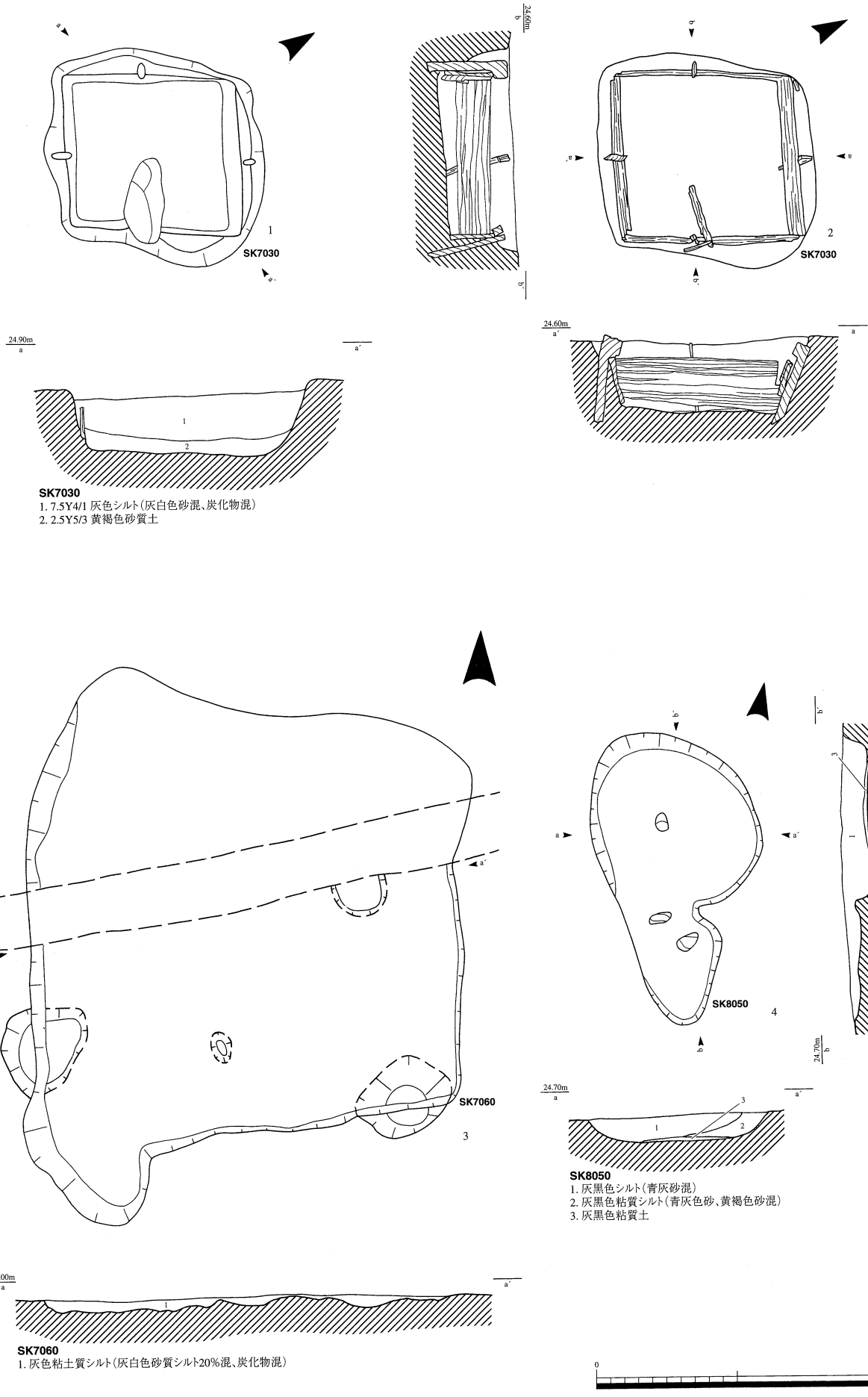
Ｄ１地区南側の建物群の中にある不整形な方形土坑である。ＳＢ73・ＳＢ74と重なり，これらより新しい。中央で段があり，西側がやや深い。掘立柱建物の土間状の部分とも考えられる。２基の土坑が重なっている可能性もあるが覆土がほとんどなく，明らかではない。規模は長さ約500cm，幅340cm，深さ5cm以下である。断面形は皿状である。遺物は中世土師器・中国製白磁が出土している。土坑の時期は建物群に近い12世紀後半～14世紀代と考えられる。

8061号土坑（ＳＫ8061，第172図，図版168）

Ｄ１地区南側の建物群の中にある方形土坑である。ＳＢ78と重なり，東側１間に丁度収まることから，この建物に伴う施設と考えられる。規模はほぼ120cm四方で，やや平行四辺形状にゆがむ。断面形は皿状で，深さ約12cmである。堆積土は褐灰色砂質シルトである。遺物は出土してないが，土坑の時期は建物群に近い12世紀後半～14世紀代と考えられる。

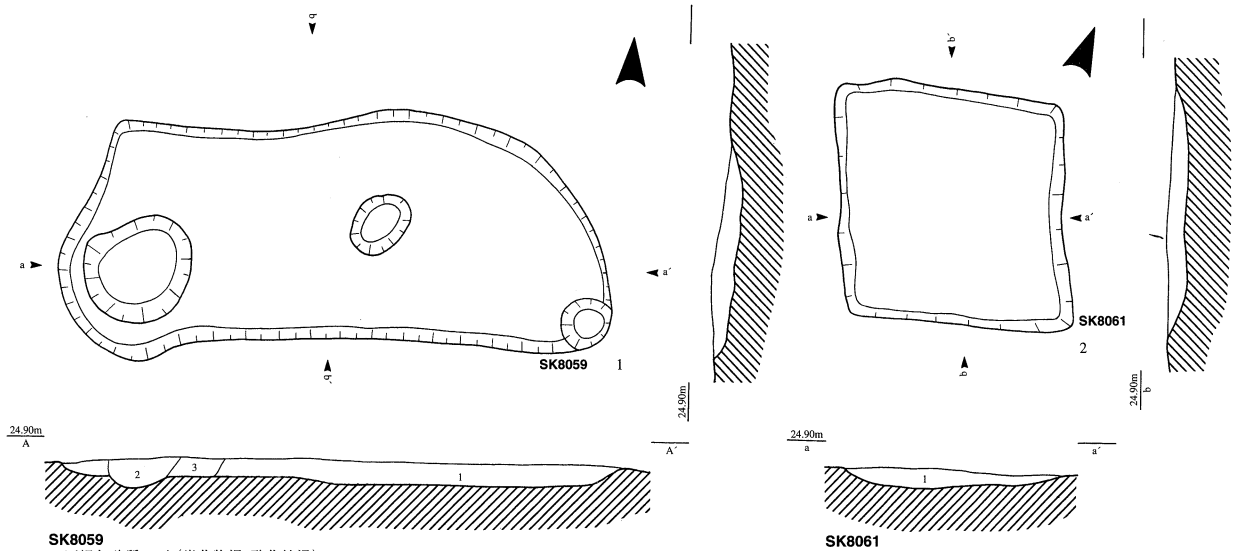
8075号土坑（ＳＫ8075，第173図，図版168）

Ｄ１地区南側で，ＳＤ8043の東側に位置する楕円形土坑である。ＳＤ8043より新しく，谷部がある程度埋没した段階で掘られている。規模は長軸164cm，短軸148cm，深さ24cmで，断面形は逆台形を呈



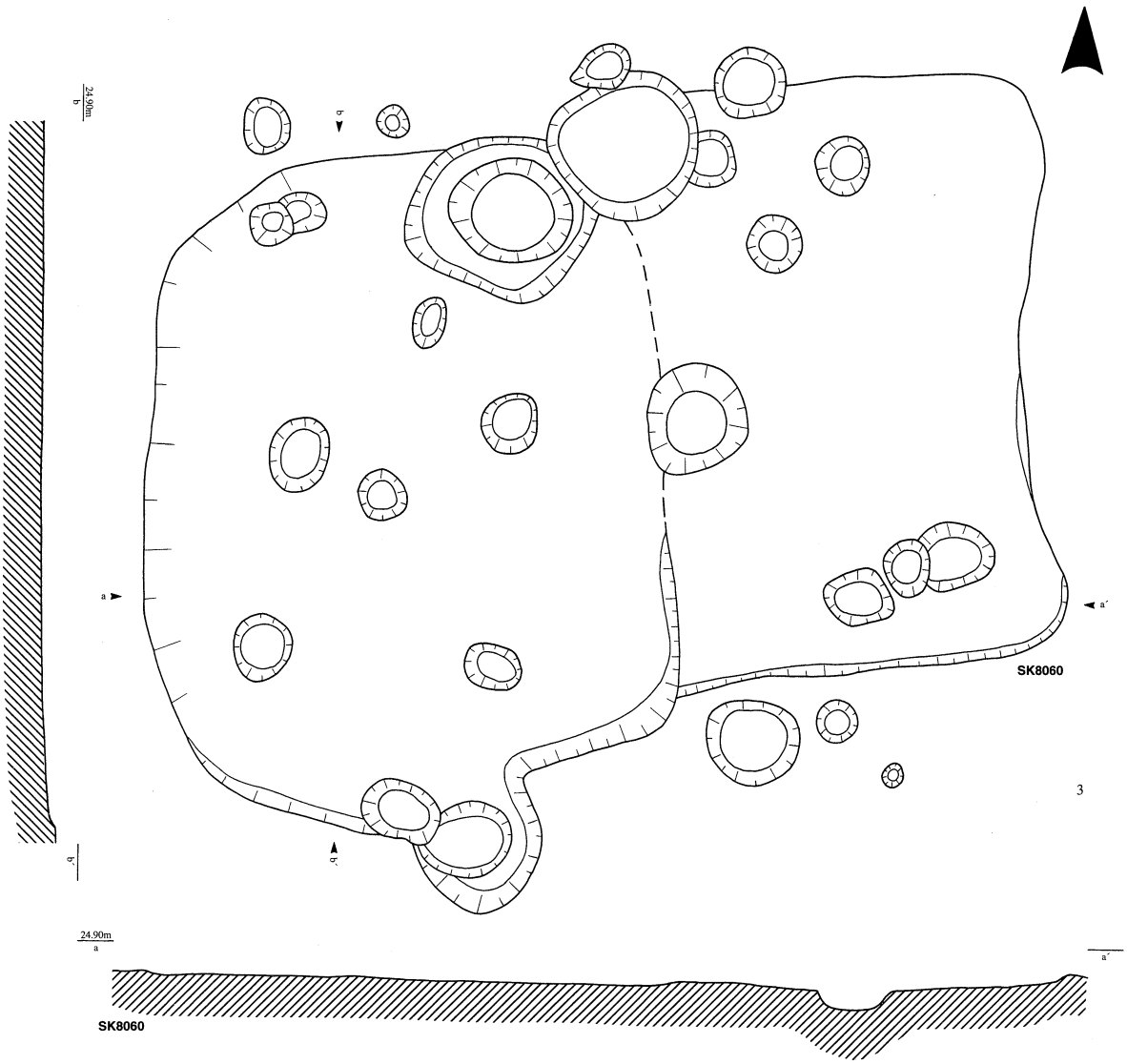
第171図　遺構実測図

1・2.SK7030　3.SK7060　4.SK8050



SK8059
1. 灰褐色砂質シルト(炭化物混、酸化鉄混)
2. 灰褐色砂質シルト(黒褐色粘質土混、黄褐色砂混)
3. 褐灰色砂質シルト(黒褐色粘質土縞状に混)

SK8061
1. 褐灰色砂質シルト(黒褐色粘土質縞状に混、酸化鉄混)



0　2m

第172図　遺構実測図

1.SK8059　2.SK8061　3.SK8060

し，灰褐色～暗褐色シルトが堆積する。出土遺物がなく時期は不明確であるが建物群よりは新しい。

8076号土坑（ＳＫ8076，第173図，図版168）

Ｄ１地区南側で，ＳＤ8043の東側に位置する楕円形土坑である。規模は長軸80cm，短軸64cm，深さ24cmで，断面形は逆台形を呈し，灰褐色砂質シルトが主体的に堆積する。出土遺物はなく時期は不明。

8093号土坑（ＳＫ8093，第173図，図版168）

Ｄ１地区南端部の建物群に隣接するやや不整な方形土坑。ＳＢ80の南側に接し，これに関連する施設と考えられる。規模は長さ325cm，幅240cm，深さ約16cmで，断面形は皿状を呈し，灰褐色土が堆積する。遺物は中世土師器が出土している。土坑の時期は建物群と同様12世紀後半～14世紀代と考えられる。

8118号土坑（ＳＫ8118，第173図）

Ｄ１地区南部の建物群中に位置する円形土坑。ＳＢ73・74およびＳＫ8060と重なる。規模は直径84cm，深さ約12cmで，断面形は半円状を呈し，灰褐色砂質シルトが堆積する。遺物はなく，土坑の時期は建物群と同様12世紀後半～14世紀代と考えられる。

8120号土坑（ＳＫ8120，第173図，図版168）

Ｄ１地区南部建物群の北側に位置する円形土坑。規模は直径140cm，深さ約38cmで，断面形は半円形を呈する。遺物はないが，土坑の時期は建物群と同様12世紀後半～14世紀代と考えられる。

9002号土坑（ＳＫ9002，第170・173図，図版168・180）

Ｄ２地区の南部に位置する楕円形土坑。ＳＢ83・85などの建物群のさらに南側にある。一部壊されているが，規模は長軸420cm，短軸200cm，深さ32cmで，断面形は逆台形を呈し，灰色のシルト～粘土質シルトが堆積する。遺物は珠洲・中世土師器が出土している。第170図1122～1124は非ロクロ成形の中世土師器皿で，1122がＮＤII類，1123がＮＣ類，1124がＮＢ？類となる。土坑の時期は建物群に近く，13世紀代と考えられる。

9003号土坑（ＳＫ9003，第174図，図版169）

Ｄ２地区の南部に位置する楕円形土坑。ＳＢ83・85などの建物群のさらに南側にある。一部壊されているが，規模は長軸320cm，短軸92cm以上，深さ32cmで，断面形は逆台形を呈し，灰色のシルト～砂質シルトが堆積する。遺物は珠洲が出土している。時期は建物群に近く，13世紀代と考えられる。

9035号土坑（ＳＫ9035，第174図，図版169）

Ｄ２地区の北部建物群に隣接するやや不整な楕円形土坑。ＳＢ81東側にあり，ＳＤ9039より新しい。規模は長軸136cm，短軸112cm以上，深さ６cmで，断面形は皿状を呈し，褐色粘質シルトが堆積する。遺物はないが，時期は建物群に近く，13世紀代と考えられる。

9036号土坑（ＳＫ9036，第174図，図版169）

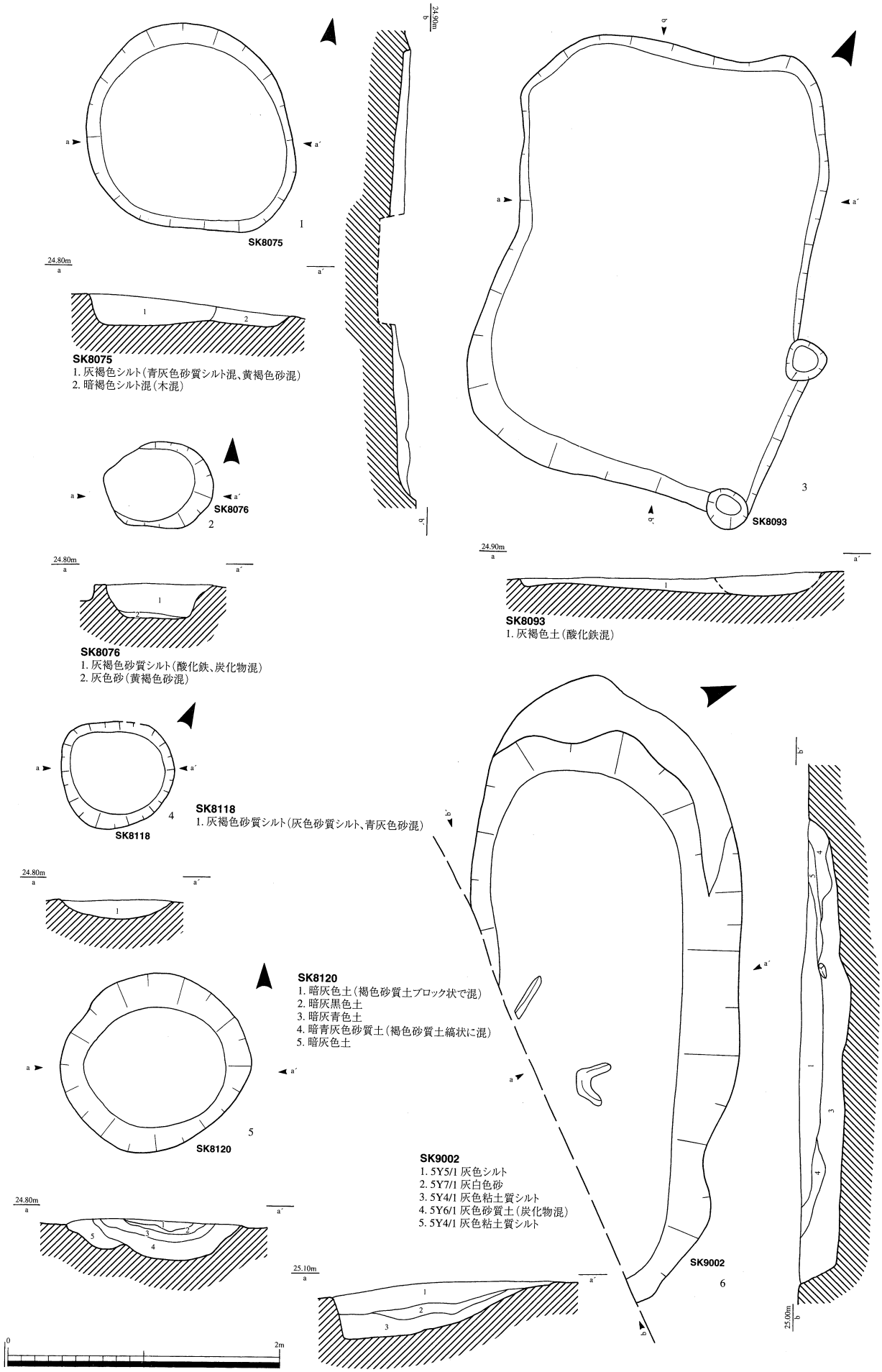
Ｄ２地区の北部建物群中に位置する小楕円形土坑。ＳＢ81の西側に重なる。規模は長軸68cm，短軸60cm，深さ32cmで，断面形は逆台形を呈し，シルト～粘質シルトが堆積する。遺物はないが，時期は建物群に近く，13世紀代と考えられる。

9055号土坑（ＳＫ9055，第170図，図版217）

Ｄ２地区北部建物群ＳＢ81の南西に位置する隅円方形土坑。規模は長さ180cm，幅104cm，深さ12cmである。遺物は箸（第170図1119）が出土している。時期は建物群に近く，13世紀代と考えられる。

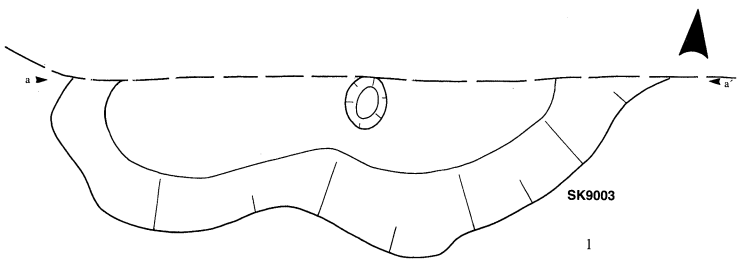
9125号土坑（ＳＫ9125，第174図，図版169）

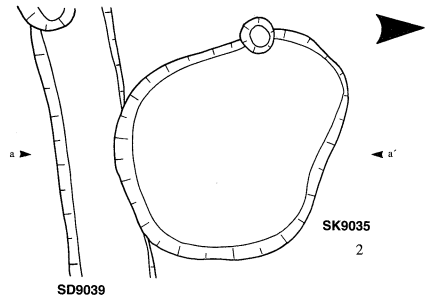
Ｄ２地区南部建物群中ＳＢ83・84の北側に位置する不整形な土坑。ＳＢ83を取り囲む溝の内側空間

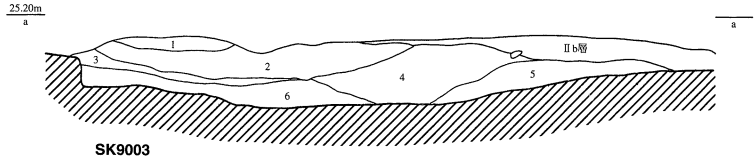


第173図　遺構実測図

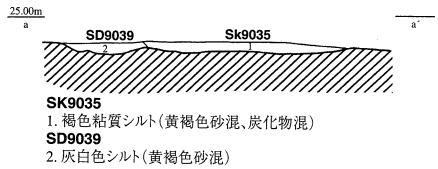
1.SK8075　2.SK8076　3.SK8093　4.SK8118　5.SK8120　6.SK9002



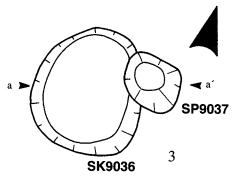


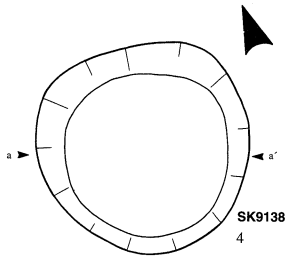


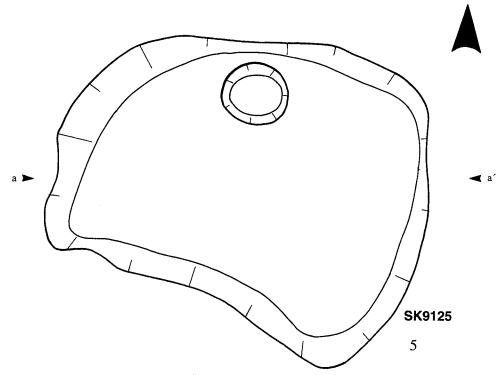
SK9003
1. 10YR5/1 褐灰色シルト
2. 7.5GY7/1 明緑灰色砂質シルト(黄灰色砂質シルト30%混)
3. 7.5GY7/1 明緑灰色砂質シルト(灰色粘土質シルト20%混)
4. 5Y5/1 灰色シルト(灰白色砂20%混)
5. 5Y4/1 灰色シルト
6. 2.5Y4/1 黄灰色粘土質シルト

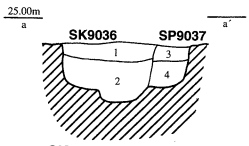


SK9035
1. 褐色粘質シルト(黄褐色砂混、炭化物混)
SD9039
2. 灰白色シルト(黄褐色砂混)

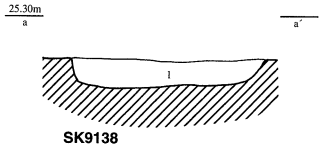




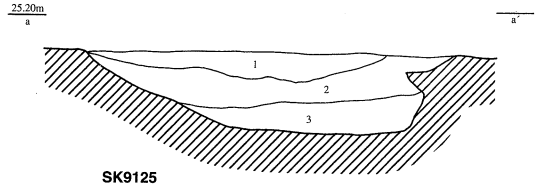




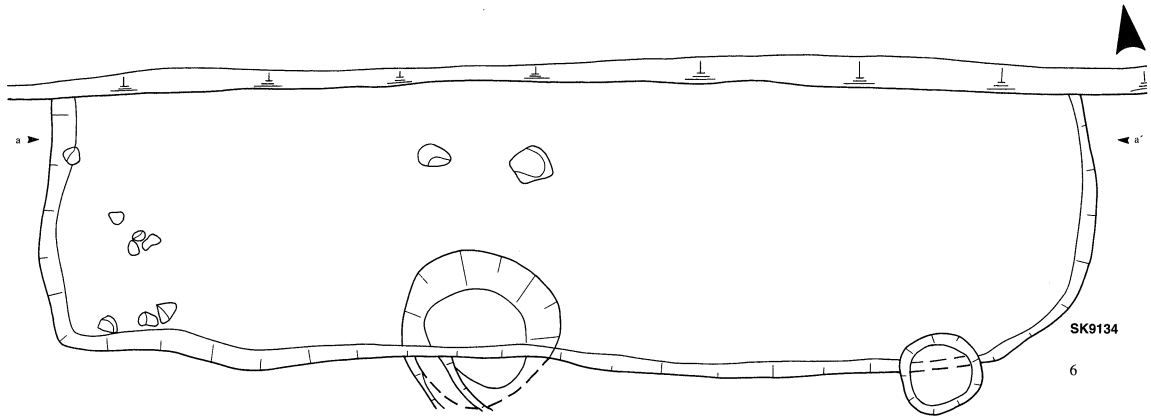
SK9036
1. 褐色シルト(黄褐色砂混)
2. 灰色粘質シルト(黄白色砂混、ピート混)
SP9037
3. 褐色シルト(黄白色砂混)
4. 灰色砂質シルト

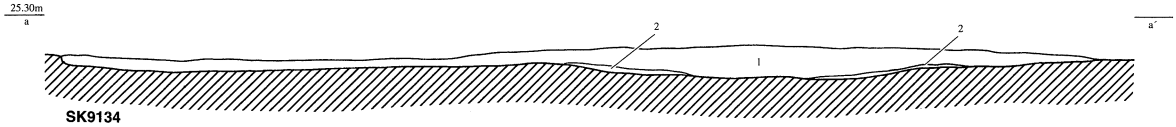


SK9138
1. 灰色粘質シルト(青灰色シルト混、黄砂40%混)

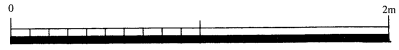


SK9125
1. 暗青色シルト
2. 暗青色シルト(炭化物混)
3. 黒褐色土(炭化物混、砂混)





SK9134
1. 黄灰色シルト(炭化物混)
2. にぶい黄褐色砂質土(炭層混)



第174図　遺構実測図

1.SK9003　2.SK9035・SD9039　3.SK9036・SP9037　4.SK9138　5.SK9125　6.SK9134

にある。規模は長軸200cm，短軸160cm，深さ40cmで，断面形は西側が緩やかに立ち上がり，東側は急で，一部が中にせりだす。堆積土は上部が暗青色シルト，下部が黒褐色土となる。遺物は珠洲が出土している。時期は建物群に近く，13世紀代と考えられる。

9134号土坑（ＳＫ9134，第174・175図，図版180）

Ｄ２地区南部建物群中のＳＢ85の北側に隣接する方形土坑である。ＳＢ85より新しい。北半分が試掘溝で削られているため，規模は明確でないが，長さ556cm，幅152cm以上，深さ５cm～20cmで，断面形は皿状を呈し，主として黄灰色シルトが堆積する。遺物は中世土師器・珠洲が出土している。第175図1127～1130は非ロクロ成形の中世土師器皿である。1127はＮＤII類，1128はＮＣ類，1129はＮＣII類，1130はＮＢＩ？類となる。1131は珠洲擂鉢でII～III期，1132は珠洲の叩き壺で，頸部にヘラ記号があり，II期のものか。土坑の時期は建物群に近く，13世紀代と考えられる。

9135号土坑（ＳＫ9135，第175図）

Ｄ２地区の南部建物群ＳＢ85の西側に位置する円形土坑である。規模は直径92cm，深さ22cmである。遺物は剝片が出土している。第175図1140は鉄石英製剝片で，弥生時代以前のものであろう。

9138号土坑（ＳＫ9138，第174図，図版169）

Ｄ２地区の南部建物群中に位置する円形土坑。ＳＢ85の北西部に重なる。規模は直径116cm，深さ16cmで，断面形は逆台形を呈し，灰色粘質シルトが堆積する。遺物は珠洲が出土している。土坑の時期は建物群に近く，13世紀代と考えられる。

9145号土坑（ＳＫ9145，第175図，図版180）

Ｄ２地区の南部建物群ＳＢ83の北側に位置する方形土坑である。一部ＳＤ9104に切られるが，規模は長さ60cm以上，幅40cm，深さ12cmである。遺物は中世土師器・珠洲・加工材が出土している。第175図1133は非ロクロ成形の中世土師器皿である。土坑の時期は13世紀代と考えられる。

9146号土坑（ＳＫ9146，第175図，図版180）

Ｄ２地区の南部でＳＢ85の西側に位置する楕円形土坑である。規模は長軸200cm，短軸60cm，深さ12cmである。遺物は中世土師器皿ＮＣII類（第175図1134）・凝灰岩製砥石（1135）が出土している。

9150号土坑（ＳＫ9150，第175図，図版180）

Ｄ２地区の南部建物群中でＳＢ85の東側に重なる位置にある楕円形土坑である。規模は長軸105cm，短軸73cm，深さ４cmである。遺物は中世土師器皿ＮＤＩ類（第175図1136）が出土している。

9172号土坑（ＳＫ9172，第175図，図版217）

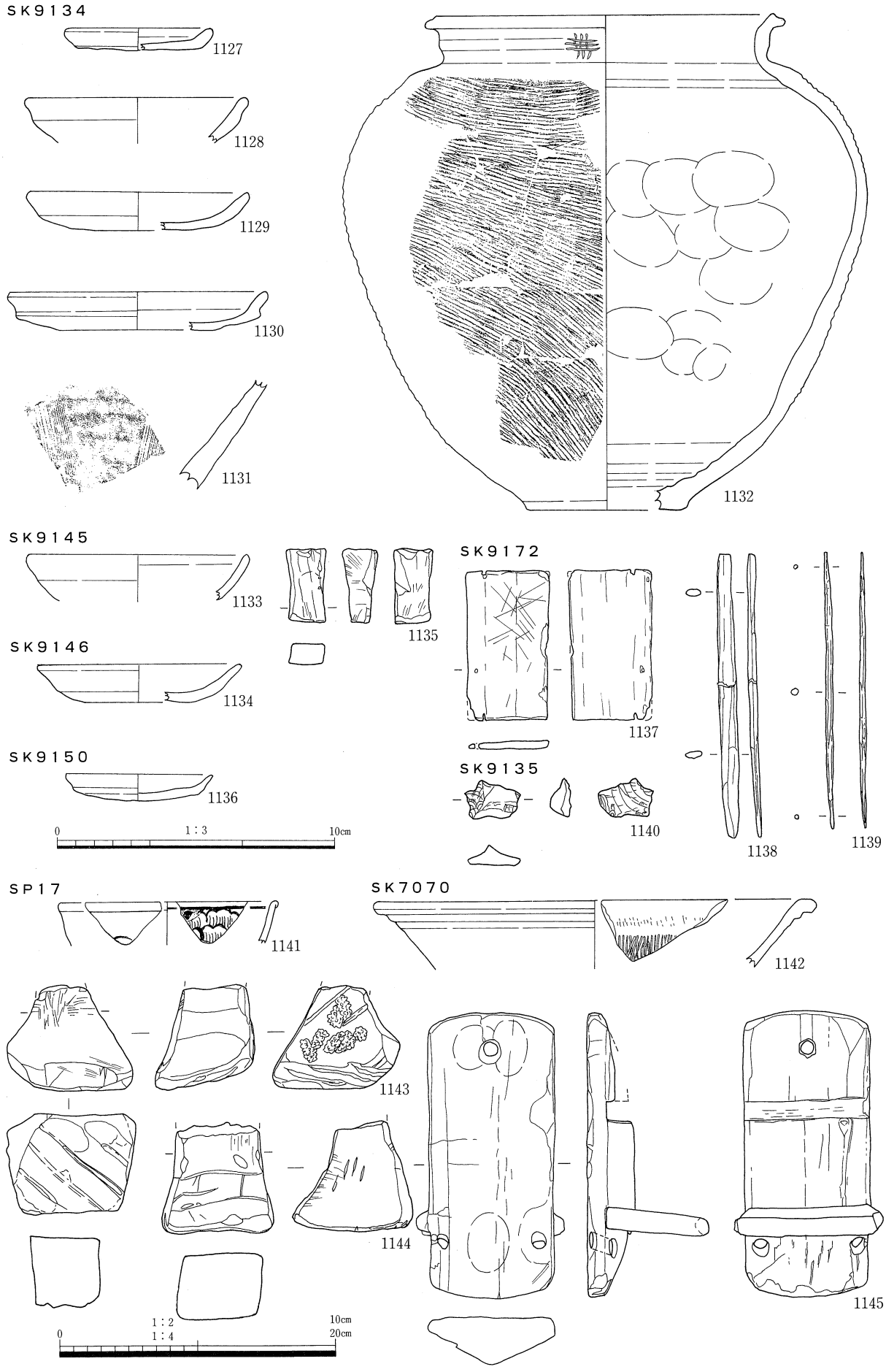
Ｄ２地区の東部でＳＢ82の南西側に位置する不整形土坑である。規模は長軸540cm，短軸326cm，深さ100cmである。遺物は箸（第175図1139），加工板（1137）・箆状の加工棒（1138）が出土している。

7005号土坑（ＳＫ7005，第176図）

Ｃ３地区南端部でＳＢ71の南側に位置する不整形土坑である。西側はＳＫ7006に切られるが，規模は長軸204cm，短軸72cm以上，深さ16cmである。底面は凹凸があり，灰色粘土質シルトが堆積する。遺物は珠洲・近世陶器が出土している。時期は近世と考えられる。

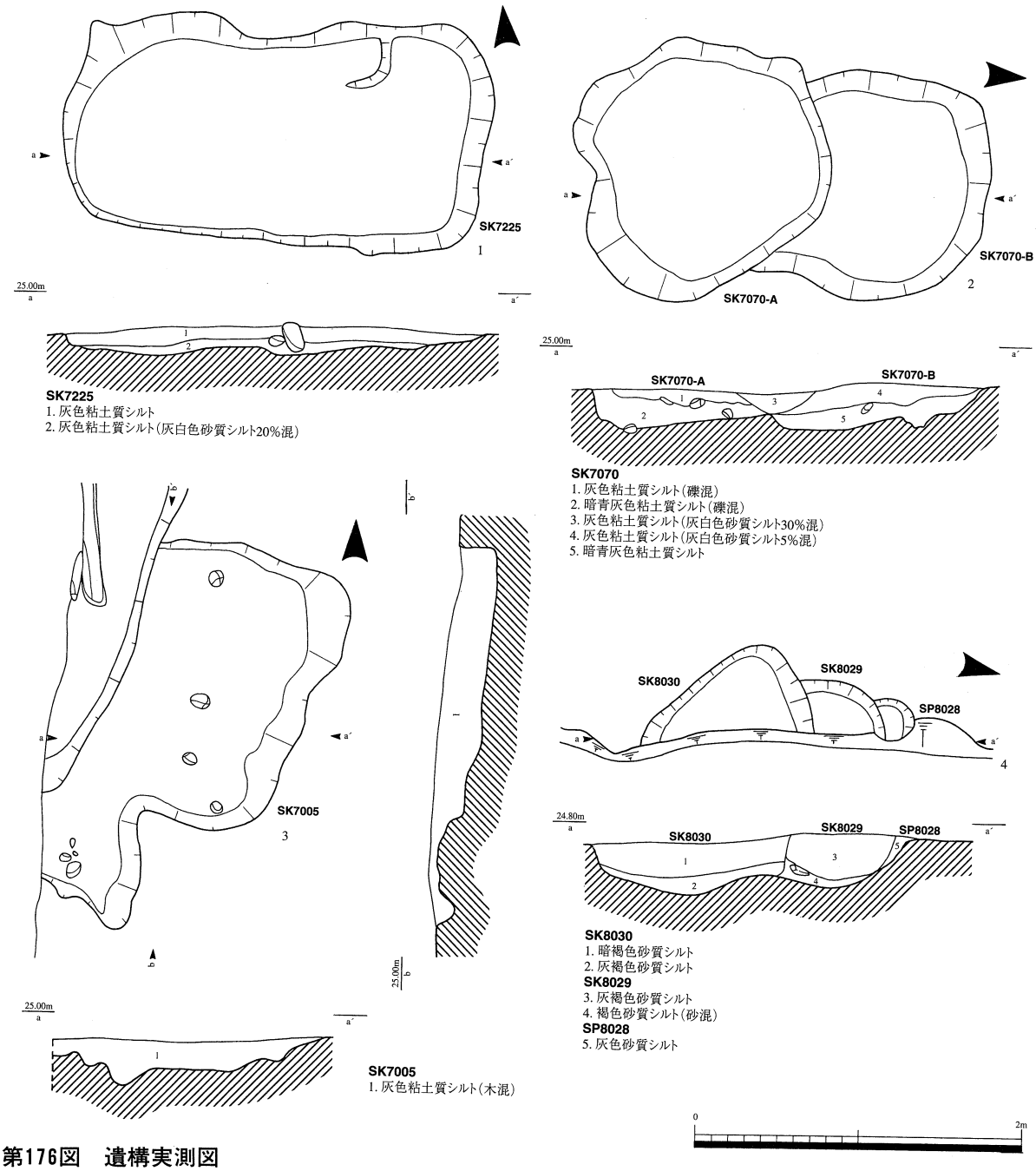
7070Ａ・Ｂ号土坑（ＳＫ7070Ａ・Ｂ，第170・175・176図，図版167・217・223）

Ｃ３地区の北側にあるやや不整形な円形土坑である。２基が重なり，ＳＫ7070Ａが新しい。ＳＫ7070Ａは直径約160cm，深さ24cm，同Ｂは直径約140cm，深さ26cmの規模である。遺物はＡから唐津・近世陶器・下駄，Ｂから近世陶器・加工材などが出土している。図示したのはすべてＡ出土。第170図1126は割竹製の下駄である。第175図1142は近世陶器の擂鉢。1143・1144は砂岩製の砥石で同一個体とみら



第175図　遺物実測図　(1140　1/2, 1127～1130・1133・1134・1136　1/3,
1131・1132・1135・1137～1139・1141～1145　1/4)

SP17 (1141)　SK7070 (1142～1145)　SK9134 (1127～1132)　SK9135 (1140)　SK9145 (1133)
SK9146 (1134・1135)　SK9150 (1136)　SK9172 (1137～1139)



第176図　遺構実測図

1．SK7225　2．SK7070-A・B　3．SK7005　4．SP8028・SK8029・SK8030

れる。1145は差歯下駄で，樹種はウリカエデ節である。土坑の時期は近世と考えられる。

7225号土坑（ＳＫ7225，第176図，図版167）

Ｃ３地区北端部に位置する方形土坑である。規模は長さ260cm，幅140cm，深さ16cmである。灰色粘土質シルトが堆積する。遺物は伊万里・近世陶器などが出土している。時期は近世と考えられる。

8029・8030号土坑（ＳＫ8029・8030，第176～181図，図版169・181～187・218・223）

Ｄ１地区東側の谷部右岸に位置する不整形土坑である。一部は発掘区外に伸びるが，２基の土坑は重なり，ＳＫ8030が新しい。それぞれの土坑から出土した遺物で接合するものがかなりあり，ほぼ同時期と考えられる。ＳＫ8030は長軸104cm，短軸52cm以上，深さ32cmの規模で，ＳＫ8029はさらに小さい。堆積土は砂質シルトである。近世以降の陶磁器が大量に廃棄されており，ゴミ穴と考えられる。

ＳＫ8029出土の遺物（第177図1146～第178図1185）

遺物は伊万里・瀬戸美濃（本業・磁器）・信楽・越中丸山・唐津・産地不明の陶磁器類などが出土している。時代は江戸時代後期～明治時代前期にかけてのもので，特に幕末から明治にかけての磁器類で産地判別の不確かなものもあることを断っておく。

1146～1154は伊万里である。1146は小碗で体部外面に若松を描く。1147は竹笹文を描き，半球形の体部で口縁部が直立するもの。波佐見系で，18世紀後半～19世紀前半。1148は外面に竹笹文，見込みに寿の字とハリ跡があるもので19世紀後半。1149は内面蛇の目釉剝ぎし，染付に酸化コバルトを用いるもので，明治初期以降のものである。1151は広東碗型で，19世紀前半。ガラス接ぎの跡が残る。1152は蛸唐草文の段重で，18世紀末～19世紀前半のもの。1153は内面に草花文，見込みに五弁花，外底面に渦福字が描かれ，18世紀後半の時期である。1154は内面に草花文・竹笹文を描く。

1155～1160は瀬戸美濃産と考えられるものである。1155は陶胎染付広東碗型で，外面に竹笹文見込みに簡略化した五弁花を描く。本業III期でも新しい段階で，19世紀中葉～後葉に位置づけられる。1156～1159は染付磁器碗で，1157・1158などは幕末～明治初期のものである。1161は染付磁器の火入れで，産地・時期は不明。1162・1163は色絵磁器小碗である。産地・時期は不明確であるが，九谷あるいは越中丸山の可能性がある。1164・1165は信楽の灯明皿である。胎土は半磁化しており，透明な灰釉を内面と外面口縁部のみに施す。

1166～1174・1176は越中丸山窯の陶器と考えられるものである。1166は内面全体と外面の口縁部から体部中程にかけて網目状に緑色釉を掛ける大振りの椀である。1167は内面灰釉，外面鉄釉を掛け分ける，ぺこかん形の瓶。1168は口縁部が内側に折れる鉢。灰釉を施し，内底面にハリ跡がある。1170は土瓶と考えられる。地に緑釉を施した上に長石釉で網目文を重ね掛けする。1172・1173は蓋。内面は鉄釉を施し，外面は薄い鉄釉を部分的に掛け，長石釉で花文？を描く。1171は内面灰釉，外面鉄釉を掛け分ける椀である。1174は灰釉地の上に長石釉で「病院」文字を重ね掛けする薬瓶である。1176は灰釉地に鉄釉を重ね掛けする甕である。

1175は内外面鉄釉を施す陶器甕。肩の一部に長石釉を流し掛ける。産地は不明である。

ＳＫ8029・8030出土の遺物（第178図1177～1185）

両土坑出土品で接合した遺物である。1177は瀬戸美濃産の陶胎染付広東碗型のものである。本業III期に位置づけられ，19世紀前葉～中葉の時期。1178～1180は瀬戸美濃産の，酸化コバルトを用いる染付磁器碗で，明治初期のもの。1182は染付磁器皿。やはり瀬戸美濃産で幕末～明治初期か。1181は土師質土器の火入れ。1183は色絵磁器小碗。産地は不明で，九谷あるいは越中丸山の可能性がある。1184は越中丸山の製品で内面鉄釉，外面灰釉掛け分けの陶製瓶である。1185は内外面鉄釉の陶器甕。唐津の可能性がある。

ＳＫ8030出土の遺物（第179図1186～第181図1245）

1186～1199・1201・1202は伊万里である。1186・1187の碗は草花文を描くもので，18世紀後半以降のもの。1188は外面に粗雑な竹笹文？，見込みに崩れた寿字文を描き，内底面にはハリ跡が残るものである。幕末～明治初期のものか。1189は体部外面に稲束と鶴を，1190は稲束，1191は竹笹文，1192は草文を描くもので，それぞれ18世紀末～19世紀中葉の時期のものである。1193は広東碗型のもので，ガラス接ぎがみられる。1195も広東碗型で，漆接ぎの跡が残る。いずれも19世紀前半である。1194は梅繋ぎ文の蓋物である。薄作りで，口縁端部は釉を掻き取る。これもガラス接ぎが行われている。1196～1199は皿。1196は内面に花文，外面に唐草文を描く。時期は18世紀後半。1197～1199は内面に二重格子文

を描き，内底面を輪状に釉を掻き取る。波佐見窯系の粗製皿で，時期は18世紀後半。1201は染付の瓶。細首球形の体部に草文を描く。1202は胴部円筒状の瓶である。薄い青の呉須で草花文・蝶を描く。時期は幕末～明治初期か。

1200・1203～1213は瀬戸美濃産の陶磁器である。1200は草文染付の磁器小瓶。底部露胎となる。時期は19世紀とみられる。1203は陶胎染付広東碗型のもの。外面には竹笹文，見込みに簡略化した五弁花を描く。本業Ⅲ期でも新しく位置づけられ，19世紀代中葉～後葉のものである。1204は陶胎染付菊散し文の筒型椀。見込みに五弁花を描く。19世紀代のものである。1205～1211は染付磁器碗である。1205・1206は体部外面に草花文と蝙蝠？，口縁部内面には崩れた四方襷文が描かれる。２点は接合しないが同一個体の可能性がある。1207は体部外面に草花文，見込みに寿字文が描かれ，外底部には文字もしくは記号が朱書きされる。1208は体部外面に草花文と蝙蝠を，見込みに寿字文を描く。1209は体部外面に波状懸垂文，1210は体部外面に花文を描く。1210は外底面に文字を朱書きし，ガラス接ぎが施されている。1211は草文を描き，口紅を施す。1205～1207は染付が群青色に発色しており，顔料に酸化コバルトを用いたものとみられる。1212は型打の四角小皿。見込みに葉と根菜類の型押し文様が描かれる。1213は菊花散しの仏飯器で，台底抉り込みのもの。濃い群青色の発色で，酸化コバルト使用のもの。いずれも19世紀後半以降と考えられる。

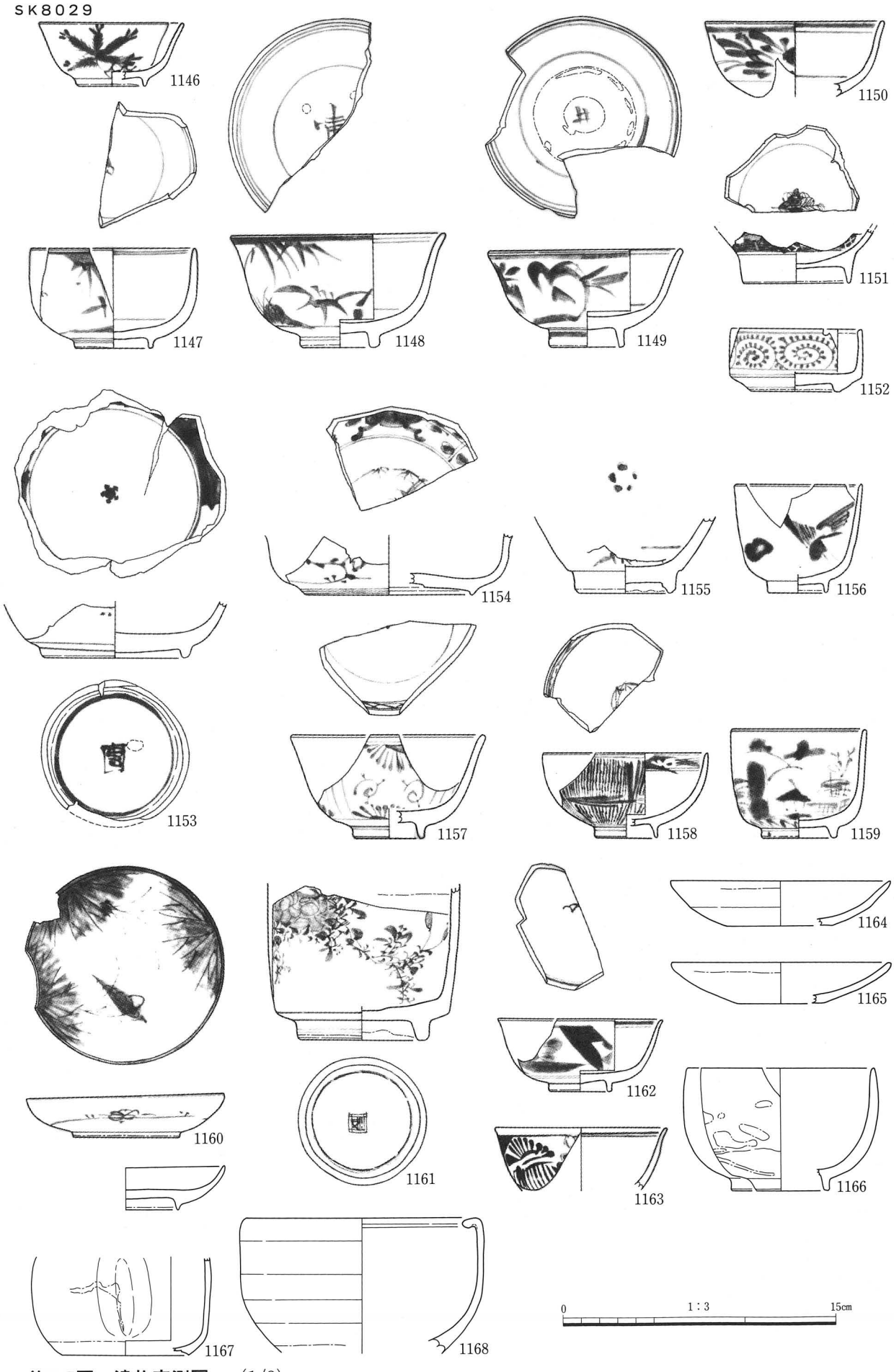
このほかにも磁器類が出土しているが産地は明確でない。瀬戸美濃もしくは肥前産とみられるものが多い。1214は馬上杯風の白磁薄手杯。1215は型紙摺りの碗で内底面にハリ跡がある。1216も型紙摺りの碗で，こちらは内底面輪状釉剝ぎとなる。いずれも明治時代中期の頃とみられ，ＳＫ8029・8030の出土遺物の中では最も新しいもので，土坑の埋没時期を示唆する。1217は群青色に発色する染付瓶。1218は陶胎に近い染付皿。見込みに風景を描く。1219は碁笥底になるもので器種は不明。1220は色絵皿，1221は色絵碗で，いずれも九谷あるいは越中丸山の可能性がある。

1222～1240は陶器である。1222は内外面鉄釉の椀。1223～1236は越中丸山の製品と考えられる。1223～1231は内面灰釉，外面鉄釉を掛け分ける椀である。いずれも腰が張り，口縁部が直立する形態で，削り出し高台を持つ。内面の釉の発色はかなり変化があり，灰色，乳白色，灰青色などを呈する。1224の内底面には３箇所にハリ跡が残る。1232・1233は灰釉椀である。灰釉・鉄釉掛け分け椀に比べ，器高が低くて，口径が大きい。削り出し高台で，口縁部は少し外に開き気味になる。1233の胴部下半は露胎であるが，表面に鉄錆がでる。1234は灰釉の浅鉢である。口縁部が外下方に大きく折れ曲がり，嘴状になる。削り出し高台を持ち，底部外面は露胎となる。1235・1236は同一セットとみられる急須である。1235は蓋部で，外面（上面）に鉄釉を掛け，部分的に斑状に灰釉を重ね掛けする。つまみは五弁花を形どったもの。1236は持ち手で，蓋と同じ鉄釉が掛かる。急須内面は灰釉が施されている。

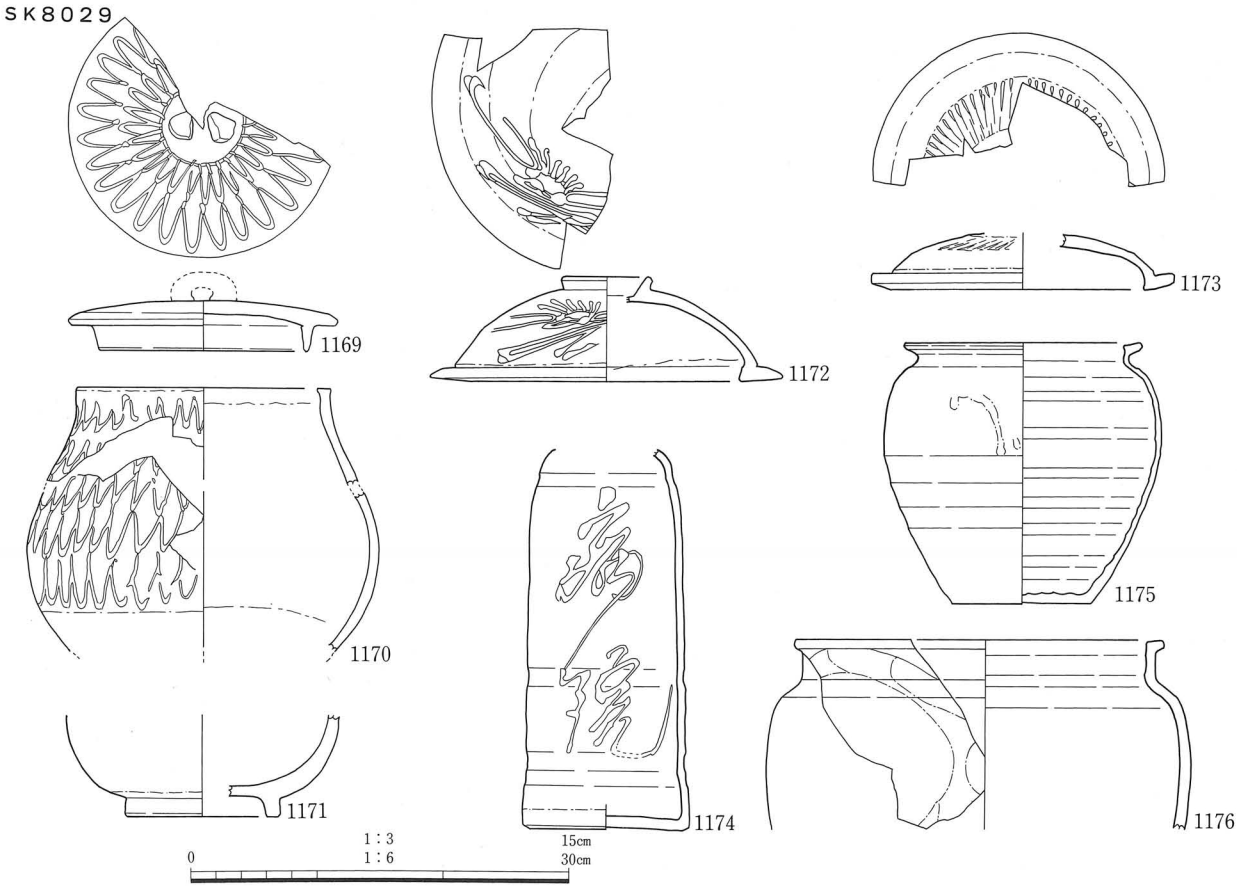
1237・1238は火鉢である。1237は口縁部を内側に丸め込み，体部は輪層形になる。口縁部と体部外面には灰緑色の釉が掛かる。内面は露胎である。1238も口縁部を内側に丸め込んで肥厚させ，透明な灰釉を施す。口縁部外面にのみ薄い灰緑色の釉を重ね掛けしている。露胎となる内面には部分的に薄く炭化物が付着する。1239は灰釉の蓋。内面にのみ施釉される。1240は鉄釉の壺である。

1241・1242は土製人形。中空の女性立像である。1242の底面には穿孔がみられる。1243は樽の栓で樹種はスギ。1244は円形板でこれも樹種はスギである。1245は粘板岩製の硯。海の部分を欠損する。

注１　山本慎子　1993　「五社遺跡Ｃ３地区の掘立柱建物群の変遷と付属施設」『埋蔵文化財年報(4)』財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

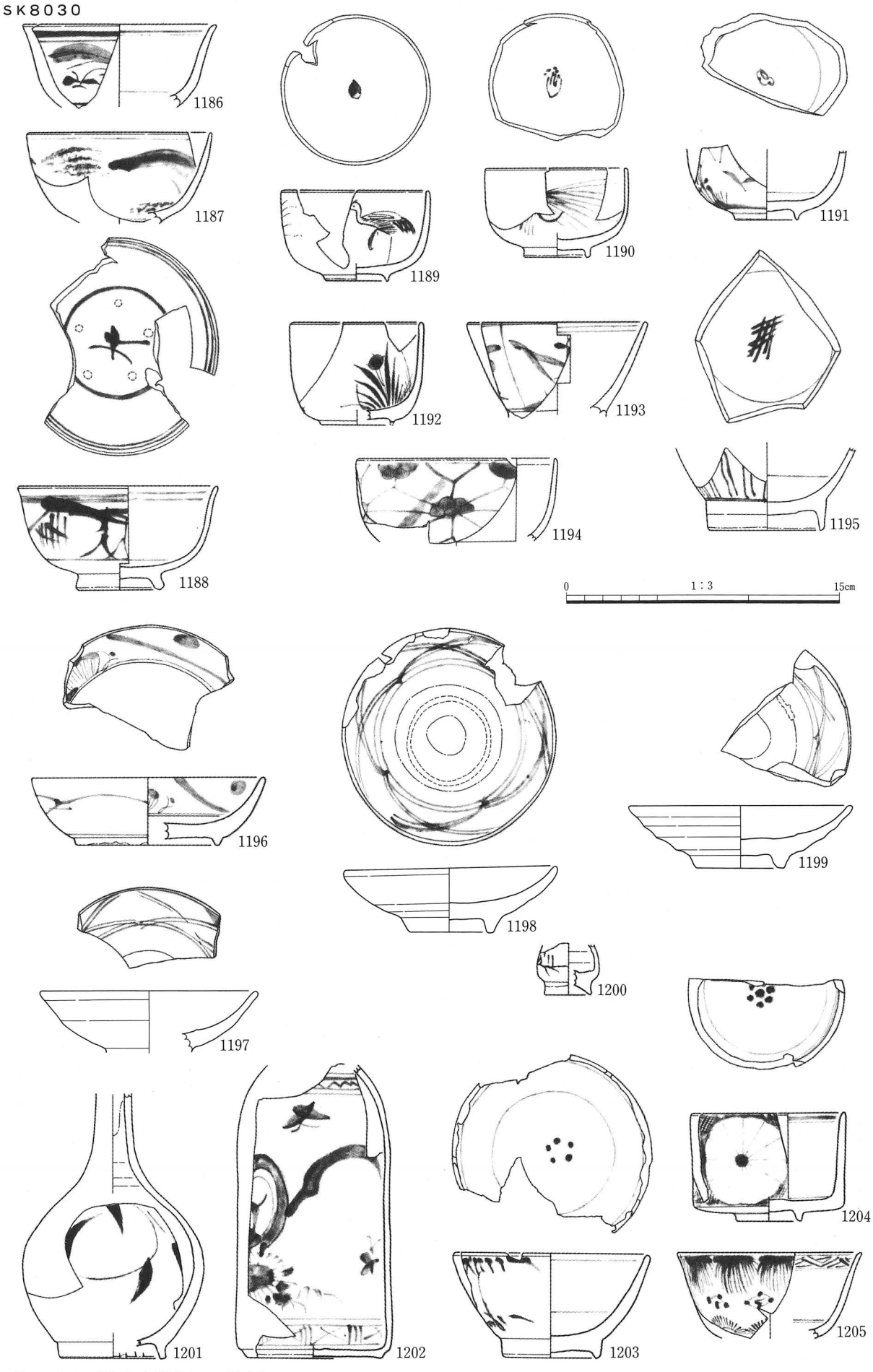


第177図　遺物実測図　(1/3)
SK8029（1146～1168）



第178図　遺物実測図　(1169～1174・1177～1185　1/3, 1175・1176　1/6)

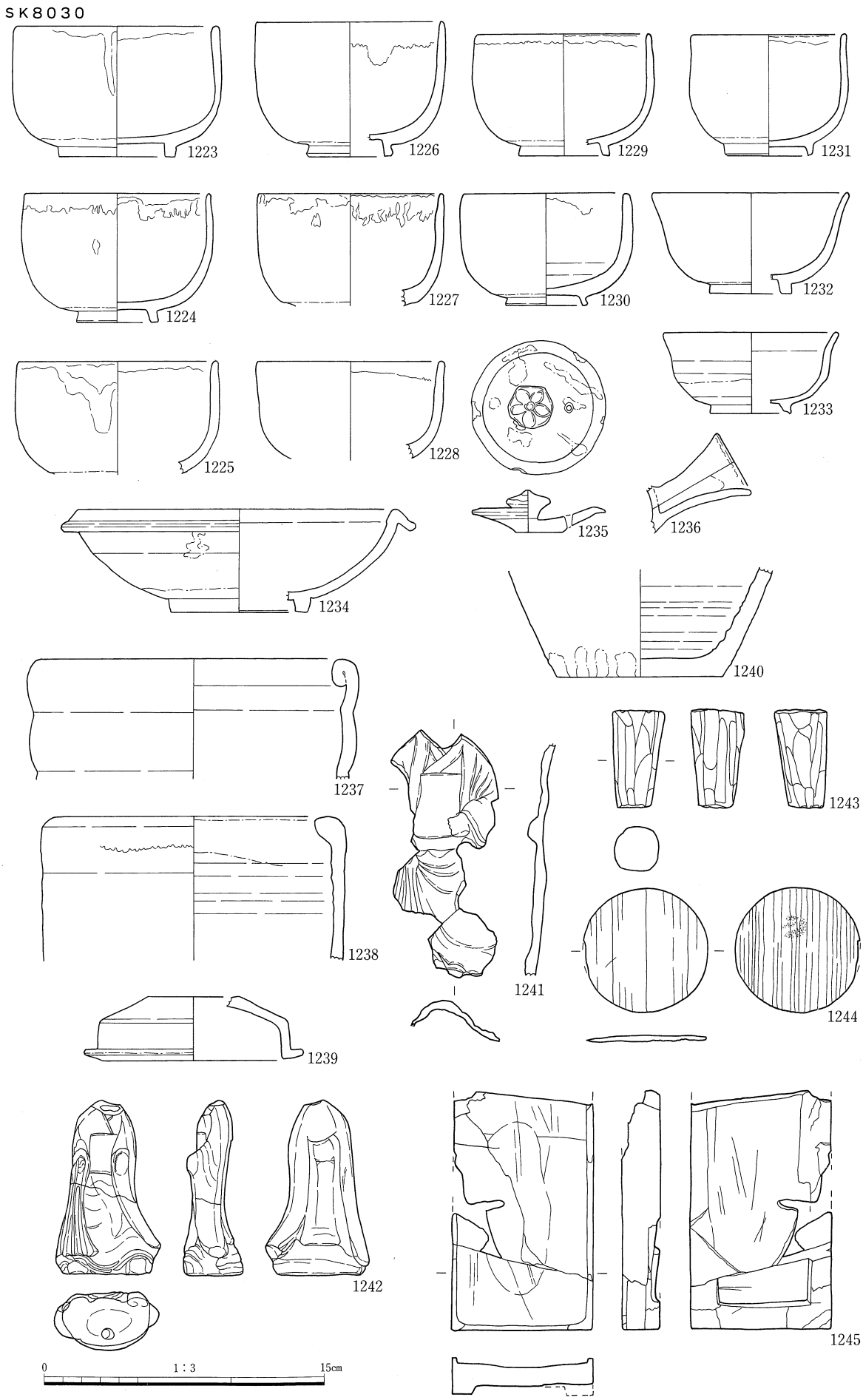
SK8029（1169～1176）　SK8029・8030（1177～1185）



第179図　遺物実測図　(1/3)
SK8030（1186～1205）

SK8030

第180図　遺物実測図　(1/3)
SK8030（1206～1222）



第181図　遺物実測図　(1/3)

SK8030（1223～1245）

F　包含層出土の遺物

AからD２地区までの包含層出土の遺物を一括し，時代順に，また種類ごとに説明する。この中には表土層や盛土層出土ものも含む。これらの遺物は遺跡の存続期間や継続性を確認する上で貴重な資料である。

須恵器・土師器（第182図1246～1252・1255，図版188・191）

1246は須恵器壺である。肩部に２条の沈線が巡る。小破片のため法量等は不明。1247・1248は有台の土師器椀。２点とも内面黒色処理がなされている。1249は小型の土師器皿。底部は回転糸切り調整。1250は土師器椀。底部には板状の圧痕が残る。1251は土師器皿。底部に回転糸切り調整と板状の圧痕が残る。1252も底部回転糸切り調整の皿もしくは椀。1255は土師器の壺もしくは甕の分厚い底部。摩滅が激しい。

中世土師器皿・瓦器（第182図1253・1254・1256～1276，図版191）

1253･1254はロクロ成形の中世土師器皿である。いずれもＲＡＩ類で12世紀後半に位置づけられる。1254は底面が張り出し，穿孔されている。1256～1275は非ロクロ成形の中世土師器皿である。整形や形態で分類すると，1256がＮＡＩ類，1257～1258がＮＢＩ類，1259がＮＣIII類，1260がＮＧ類，1261～1268がＮＤII類，1269～1275がＮＪ類となる。1257・1258・1264・1269などには炭化物が付着しており，煮炊きや灯明皿として使用されたことが窺える。

1276は瓦器皿の底部である。非常に薄手の作りで関西方面からの搬入品と考えられる。内面には斜格子状暗文が施されている。

瀬戸美濃（第182図1277～1281・187図1358，図版191・194）

1277は灰釉皿で口縁部のみ施釉している。漆接ぎの跡があり，同じ漆で底面に「門・里・六十」などの文字を記す。1278も口縁部のみ灰釉施釉の皿である。1279は端反りの灰釉皿。高台と外底面を除き全面施釉。1280は灰釉の花瓶と考えられる。1281は灰釉大皿であろう。内底面に目跡と，割れ口に漆継ぎの跡が残る。1358は鉄釉の丸椀。高台が少し外に踏ん張る形態で，底部には数字と文字が墨書されている。

中国製磁器（第183図1282～1316，図版191・192）

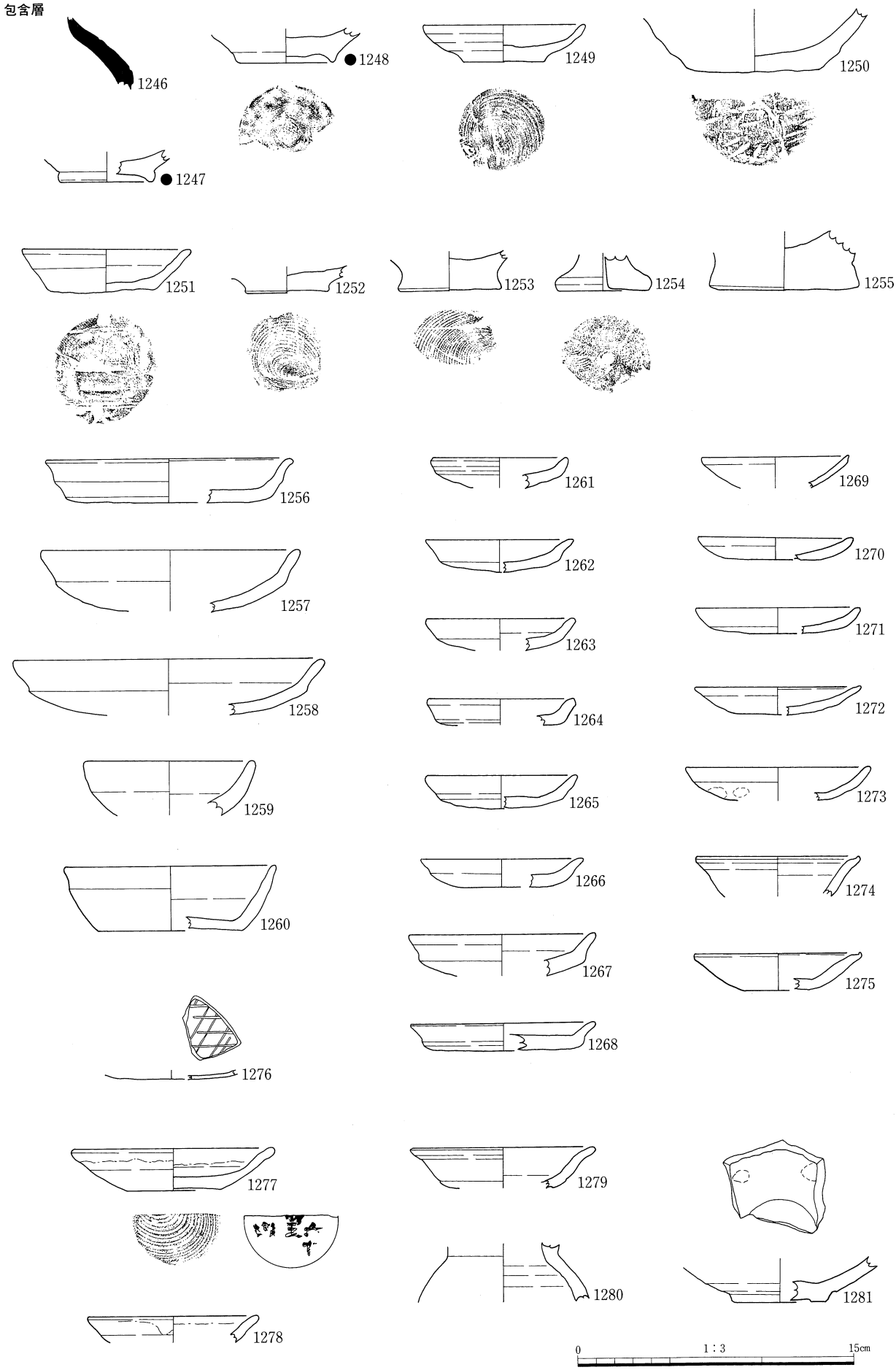
1282～1301は中国製白磁である。1282は黄味を帯びた薄い釉が掛かり，小さな玉縁を持つもので碗II類，1283･1284は口縁部端反りの碗でＶ類４，1285～1290は少し大きめの玉縁状口縁を持つ碗IV類，1291は足高高台で，碗Ｖ類の底部となる。1292はIV類の底部か。1293～1295は輪高台のもので，白磁碗もしくは皿の底部。1296～1301は白磁皿。1296は黄味を帯びた薄い釉薬が，内面及び外面上半部にのみ掛かる，白磁皿VI類１ｂ。1298は口縁部が外反する器形で，おそらく断面三角形の高台となる皿Ｅ類である[注1]。時期は15世紀末～16世紀。

1302・1303は青白磁皿。内面に櫛描文や型押し蓮弁文が施される。12～13世紀代とみられる。

1304～1315は中国製青磁。1304～1311は龍泉窯系青磁碗で，無文の1304はＩ類１，内面櫛描花文の1305・1306はＩ類３，内面櫛描飛雲文の1307はＩ類４，外面鎬蓮弁文の1308・1309はＩ類５ｂ，同じく外面鎬蓮弁文でも剣先が丸くやや幅狭になる1310はIII類２，線描蓮弁文の1311はＢIVａ類に分類できる。1312は透明な釉で外面に櫛描文があり，同安窯系青磁碗のＩ類１ｂである。1313は櫛描文の龍泉窯系青磁皿Ｉ類２，1314は杯III類，1315は盤の底部である。

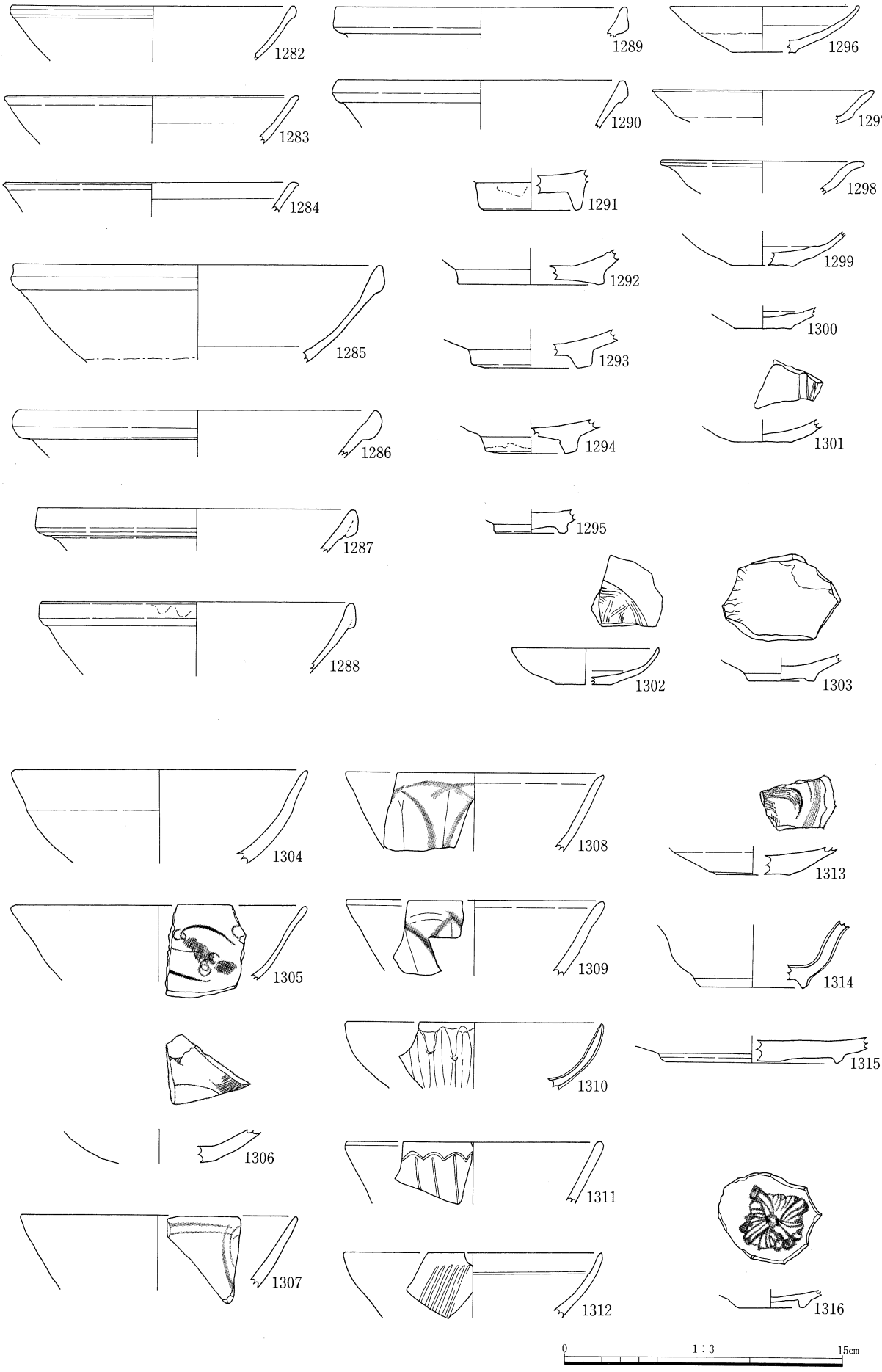
1316は中国製染付皿。内底面に十字花文（羯磨文）を描く。時期は16世紀前葉～中葉である[注2]。

珠洲（第184図1317～第186図1352，図版192・193）



第182図　遺物実測図　(1/3)

包含層



第183図　遺物実測図　(1/3)

1317～1322・1324・1325は珠洲の甕である。1317・1324は口縁部が大きく外反し，口縁端部が嘴状に尖るもので，珠洲Ⅰ期後半に位置づけられよう。1318は口縁部の外反の度合いがやや弱く，Ⅰ期後半からII期にかけてのもの。1319・1325はIII～IV期，1320・1322はIV～Ⅴ期，1321は口縁部が角張ることからⅤ期と考えられる。

1326～1331は珠洲の壺である。1326～1328は口径から中～大型壺とみられ，1329は小型壺。1330は肩部に櫛描波状文を施す四耳壺で，時期はⅠ～II期に位置づけられる。

1323・1332～1352は珠洲の擂鉢である。1332～1335はⅠ期，1323・1336～1339・1341はII期，1349はII～III期，1342～1344・1348はIII期，1345～1347・1350はIV期，口縁端部に櫛描波状文を施す1351はⅤ期に比定できよう。

瓷器系中世陶器（第186図1353・1354，図版194）

1353は越前の甕である。1354の壺は越前もしくは八尾である。

越中瀬戸（第187図1355～1357，1359～1370，図版188・194）

1355～1357・1359・1360は越中瀬戸の陶器椀である。1355は鉄釉（黒色）の天目椀である。1356は底部を円形に打ち欠いたもので，褐色釉の地に黒色釉が流れる。1357は鉄釉の丸椀。1359・1360も鉄釉を掛ける。1361～1366は越中瀬戸の陶器皿。1361・1362は底部回転糸切り調整のままの鉄釉皿。1362は口縁部のみの施釉，1362は内面全面施釉。1363～1365は底部削り出し高台の鉄釉皿。施釉範囲は内外面とも口縁部から体部上半まで。1366は口縁部が立ち上がる向付け風の深皿。やはり口縁部のみ鉄釉を掛ける。1367は鉄釉の秉燭，1368・1369は鉄釉の壺，1370は匣鉢である。

唐津（第187図1371～1373，図版188・194）

1371は輪高台の唐津大皿。灰釉の上に鉄絵を施す。1372は京焼風唐津の椀。黄味を帯びた透明釉を掛け，鉄絵を施す。体部下半から底部にかけては露胎。1373は発色が悪いが，内野山西窯系の銅緑釉の皿である。内底面を輪状に釉剝ぎする。底部は露胎となる。

伊万里（第187図1374～188図1393，図版188・189・194）

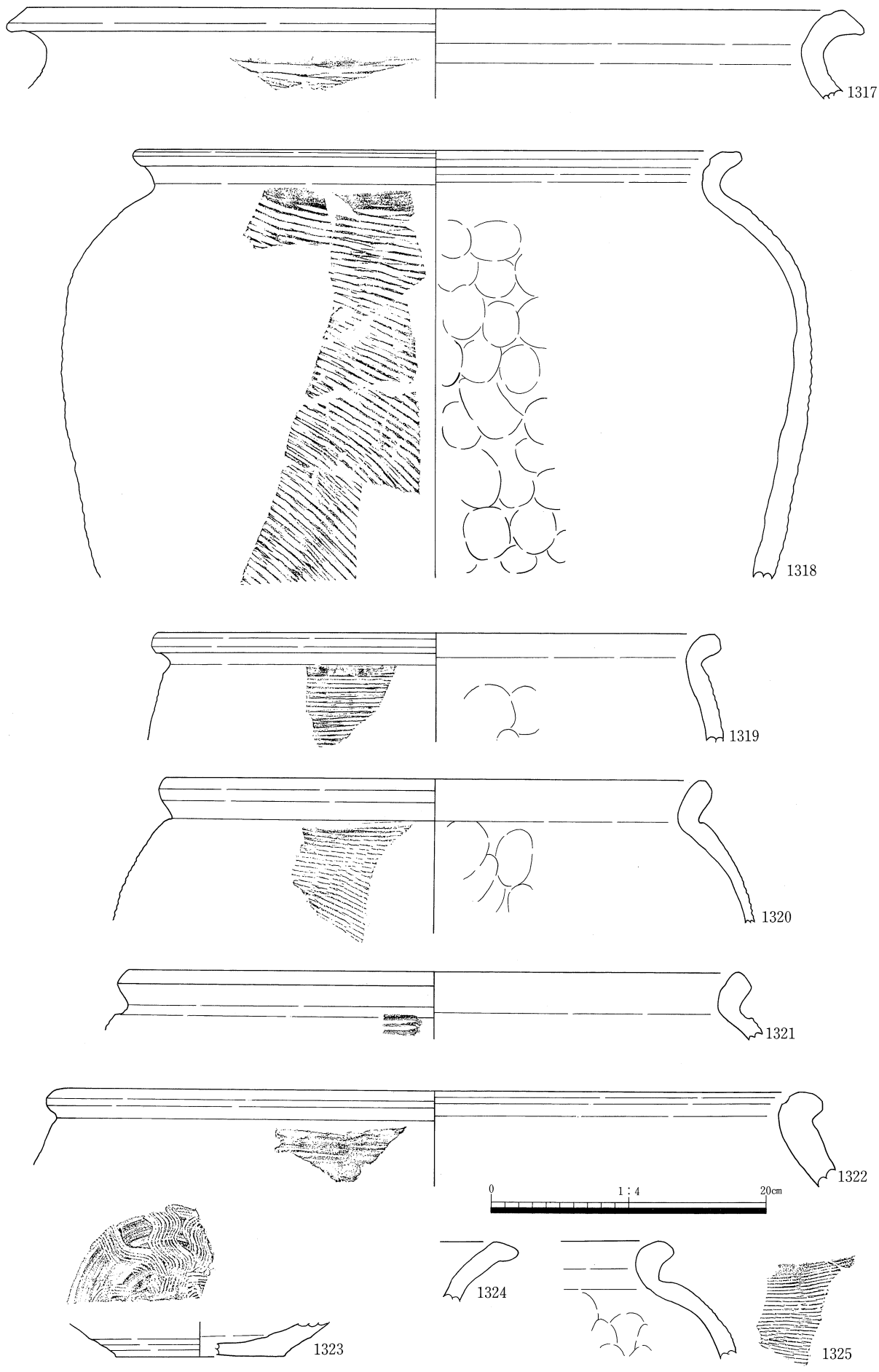
1374～1381は伊万里の碗である。1374～1378は陶胎染付の碗である。灰色ないし茶味灰色を呈し，全体に厚手の作り。文様は草花文や簡略化した唐草文などである。時期は18世紀前半である。1379～1381は磁器碗。1379は外面に波涛文，見込みに鶴を描く。外底面には渦福銘と，朱書きで七△の文字がみえる。1380は外面に丸文，1381は鶴を描く。1380は漆継ぎの跡が残る。1380・1381は19世紀後半か。1382はそば猪口で，花文・柳文を描く。1383は菊花型押の白磁紅皿である。

1384～1392は伊万里の皿である。1384～1386は内面に唐草文を描く。見込みにはコンニャク印判を押し，内底面は蛇の目釉剝ぎをする。波佐見窯系の粗製皿で，18世紀後半のものである。1387・1388は内面に二重格子文を描き，内底面は蛇の目釉剝ぎをする。やはり波佐見窯系の粗製皿で，18世紀後半のものである。1389は内面に四方襷文，1390は蛸唐草文，1391は内面に草花文と五弁花を描く。1392は菊花皿。口紅を施し，内底面には草花文を描く。1393は八角鉢である。内面を4区画し，竹笹文や藤を描く。

瀬戸美濃（第188図1394～1398・第190図1420，図版189・194・195）

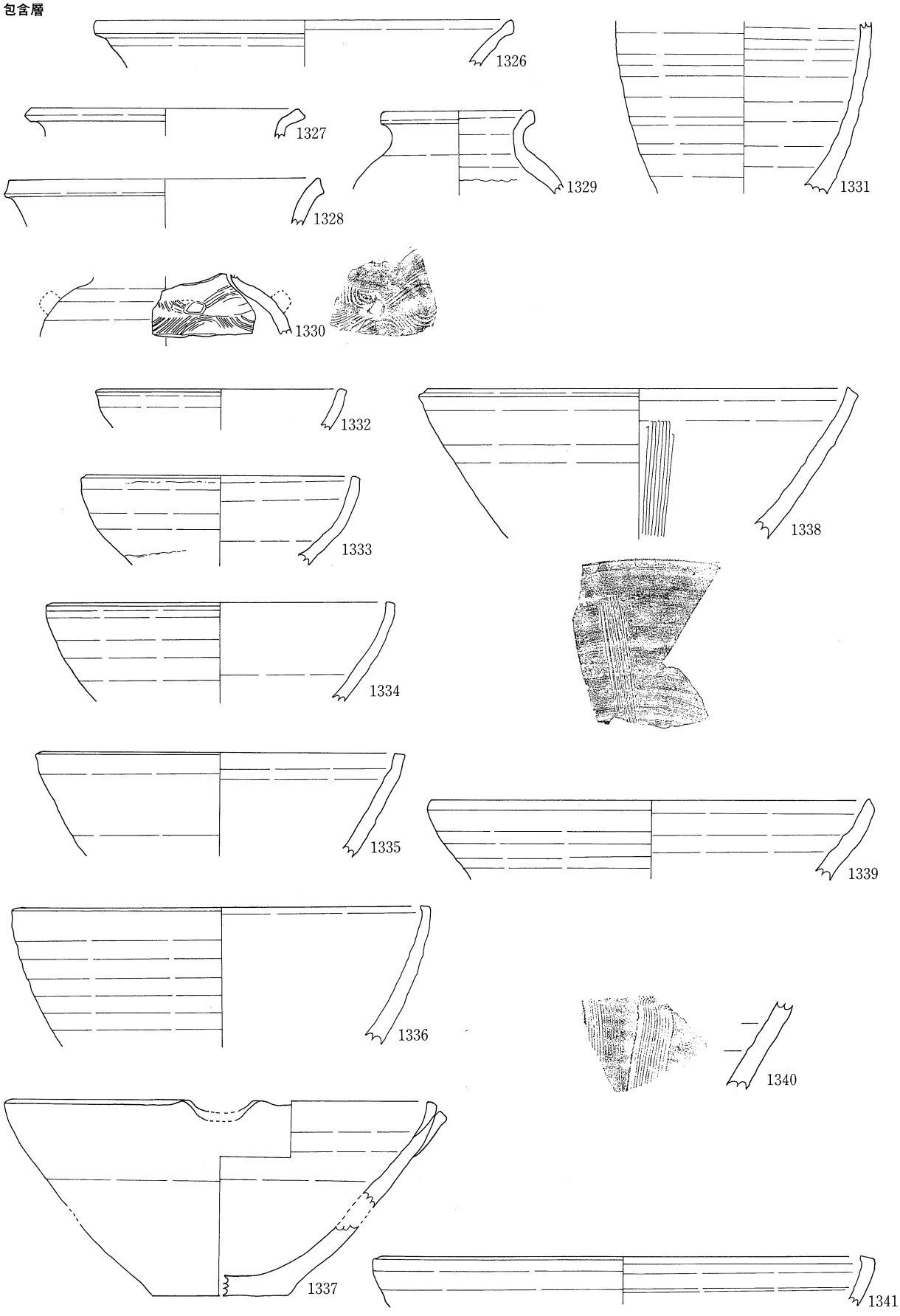
1394は織部の向付。鉄絵と緑釉を施すもので漆継ぎの跡が残る。1395・1396は陶胎染付広東碗型のものである。1395は見込みに簡略化した五弁花を描く。本業III期でも新しく，19世紀前葉～中葉の時期である。1397・1398は染付磁器碗で，幕末以降のもの。1420も染付磁器小碗で花文を描く。幕末以降か。

包含層



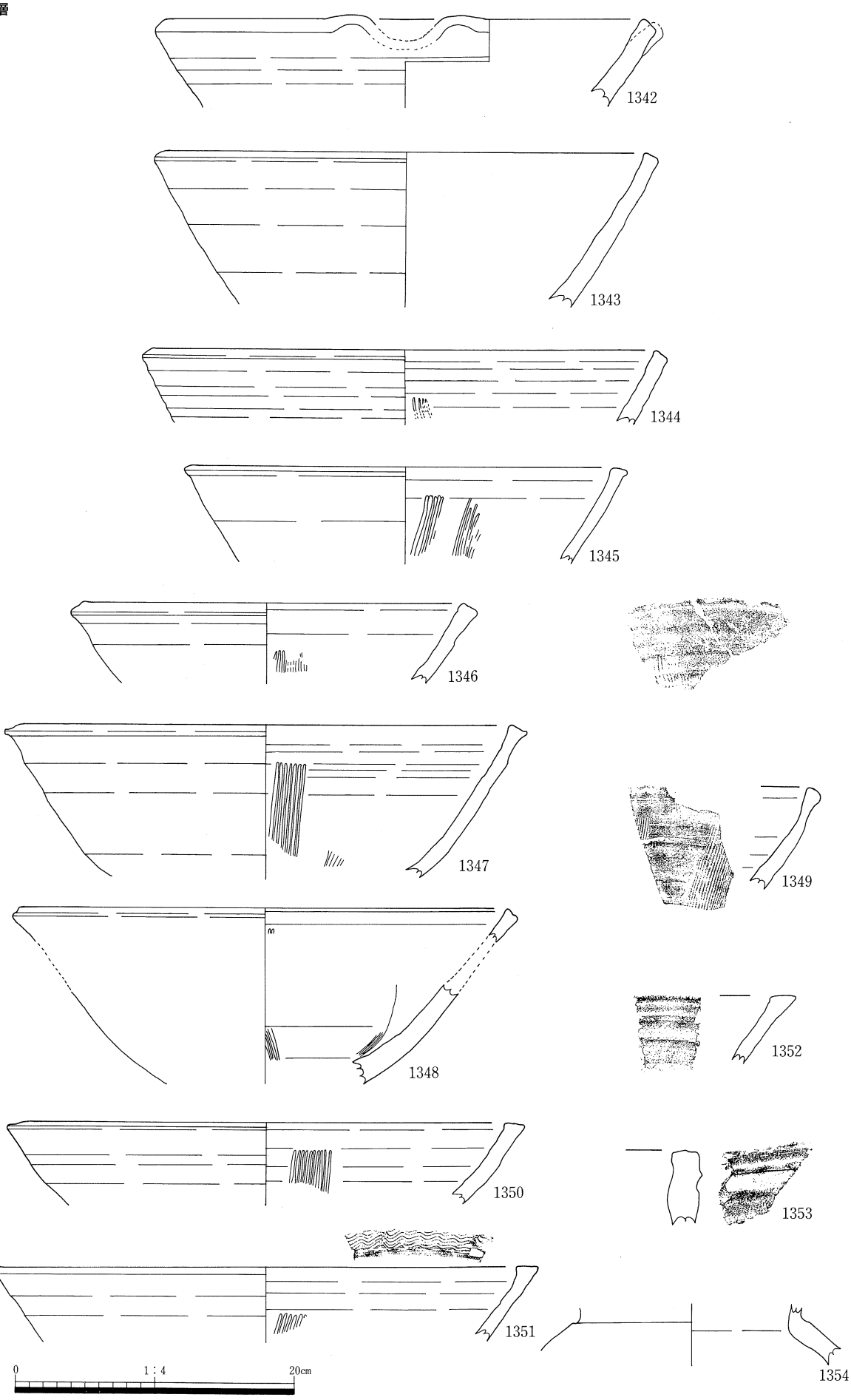
第184図　遺物実測図　(1/4)

包含層



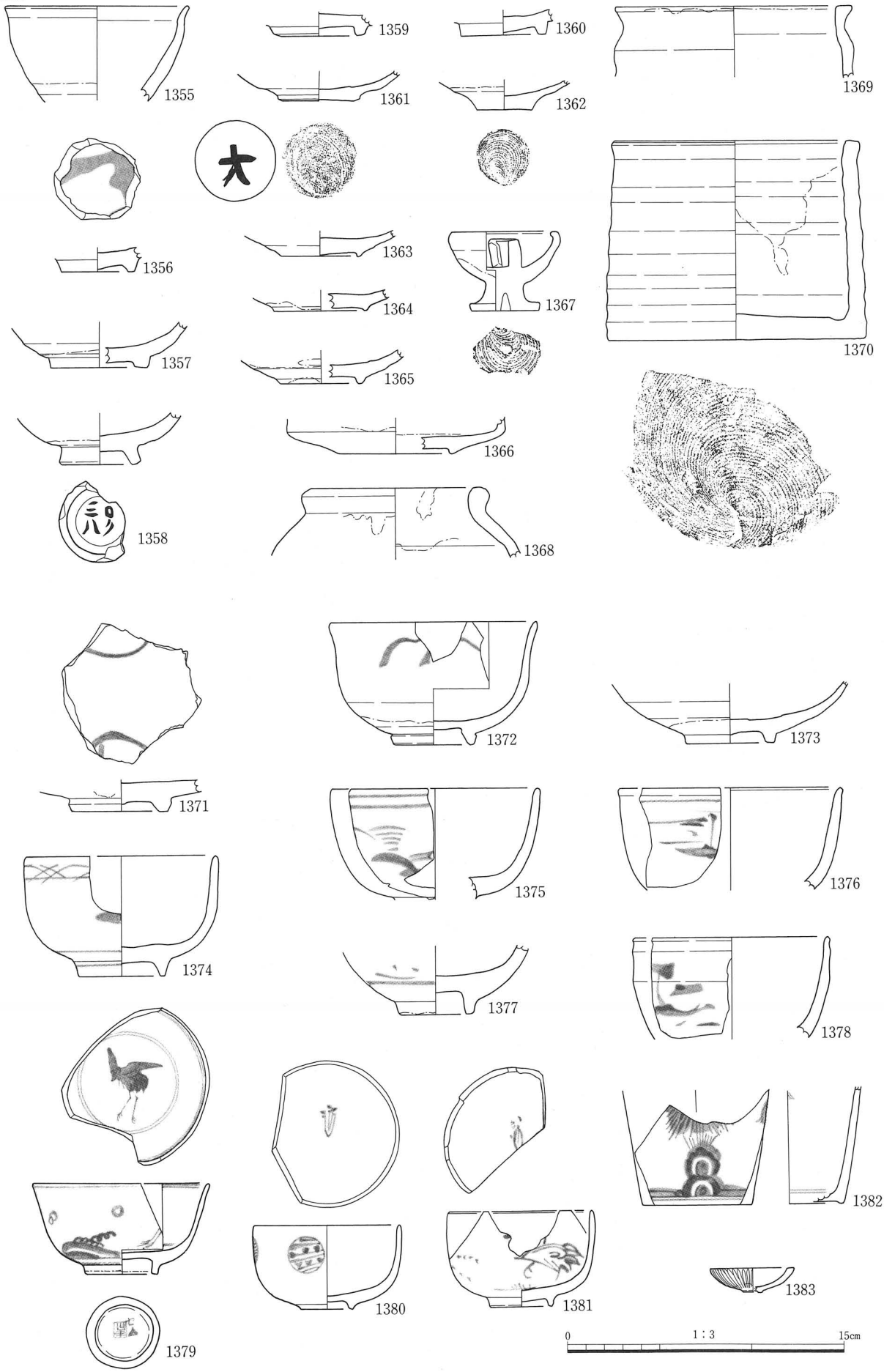
第185図　遺物実測図　(1/4)

包含層



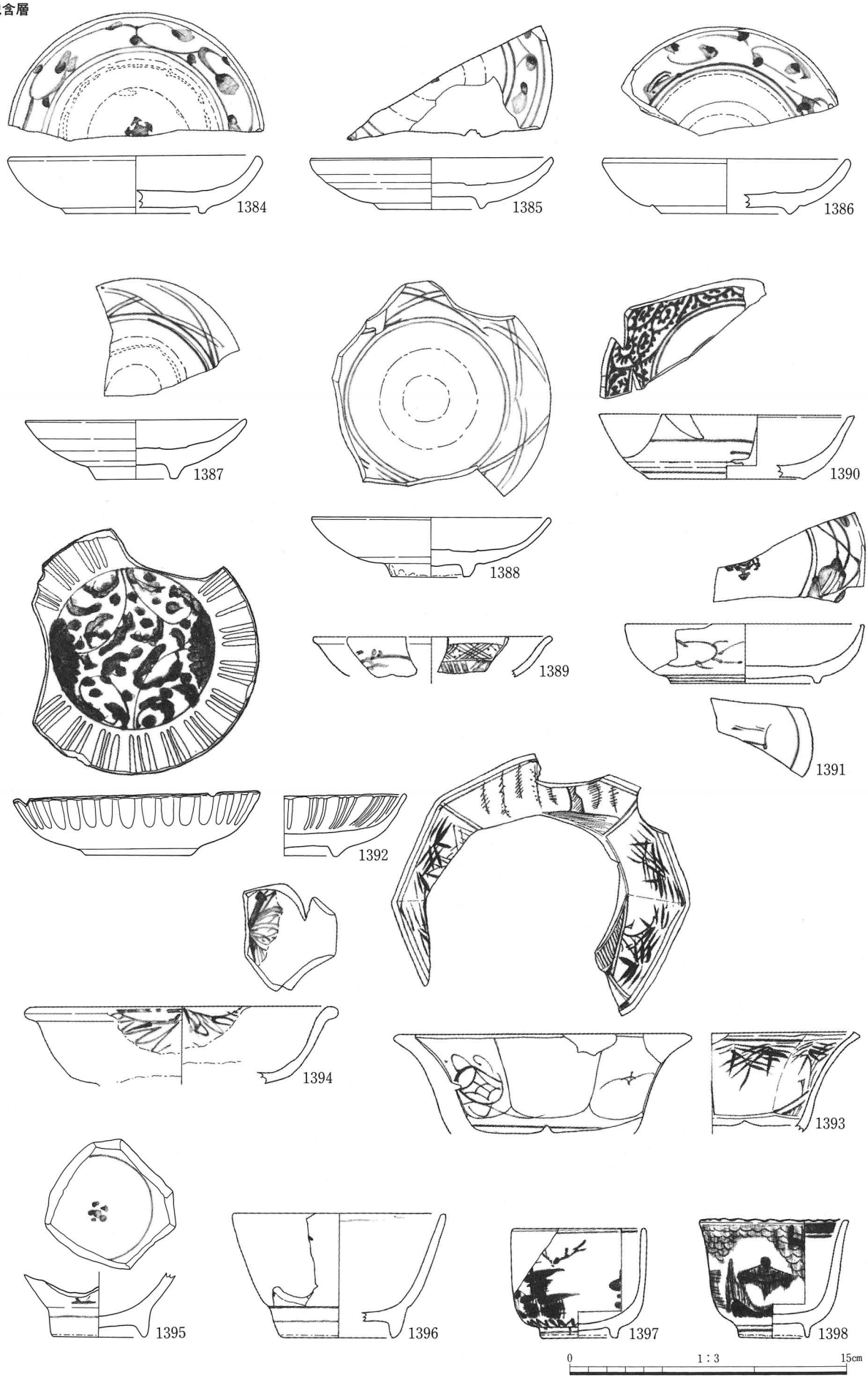
第186図　遺物実測図　(1/4)

包含層



第187図　遺物実測図　(1/3)

包含層



第188図　遺物実測図　(1/3)

越中丸山（第189図1399～1406・1408，図版189・190・195）

1399～1403は越中丸山の陶器皿である。1399は内面灰釉地に「の」字状に長石釉？を上掛けする。底部周辺は露胎とし，内底面にはハリ跡が3箇所残る。1400も1399と同様の器形で，内面灰釉地に長石釉？を上掛けする。底部周辺は露胎とし，内底面にはハリ跡が残る。1401・1402は内底面を蛇の目釉剝ぎする他は全面に灰釉を掛け，鉄絵を施す。1403は体部が立ち上がり，端部が少し外反する器形である。おそらく灰釉を全面施釉するものと考えられる。内底面には鉄絵が加えられる。

1404はぺこかん形の瓶である。へこみは上下2段みられる。全面褐色の鉄釉が掛けられる。1405は口縁部が外に折れる陶器浅鉢である。内面灰釉，外面鉄釉を掛け分ける。削り出し高台で，底部周辺は露胎。内底面にはハリ跡が残り，五本支えと推測される。1406も浅鉢器形である。内外面灰釉を施し，高台を削り出し，底部周辺は露胎となる。内底面には5箇所にハリ跡が残る。1408は鉢もしくは片口である。削り出し高台で，底部周辺は露胎。内外面灰釉を掛け，内面には鉄釉？を上掛けする。内底面にはハリ跡が残る。

近世以降の陶器（第189図1407・1410～1413・1418，図版195）

1407は鉢と推定される。内外面灰釉が掛けられ，底部周辺は露胎となる。内底面には大きな目跡が残る。1410～1413は擂鉢である。産地等は不明。1410・1411は両面とも鉄釉が掛けられ，1412と1413は外面と口縁部のみ鉄釉が施される。1418は鉄釉の鉢である。内面と口縁部は全面に，体部外面には網目状に掛ける。精製された素地を用い焼成も良好である。

近世以降の磁器（第190図1419～1423，図版190）

1419は色絵の仏飯器。台底抉り込みのもので，ＳＫ8029・8030で前述した色絵碗・皿類と絵柄や色調が共通する。おそらくセットで購入されたもので，産地は九谷もしくは越中丸山の可能性がある。1421は竹笹文の染付磁器碗。ガラス継ぎの跡が残る。1422・1423は型紙摺絵の碗。酸化コバルトを顔料に用い，内底面にハリ跡が残る。明治時代中期以降とみられる。

瓦器・土師質土器（第189図1409・第190図1414～1417・1424）

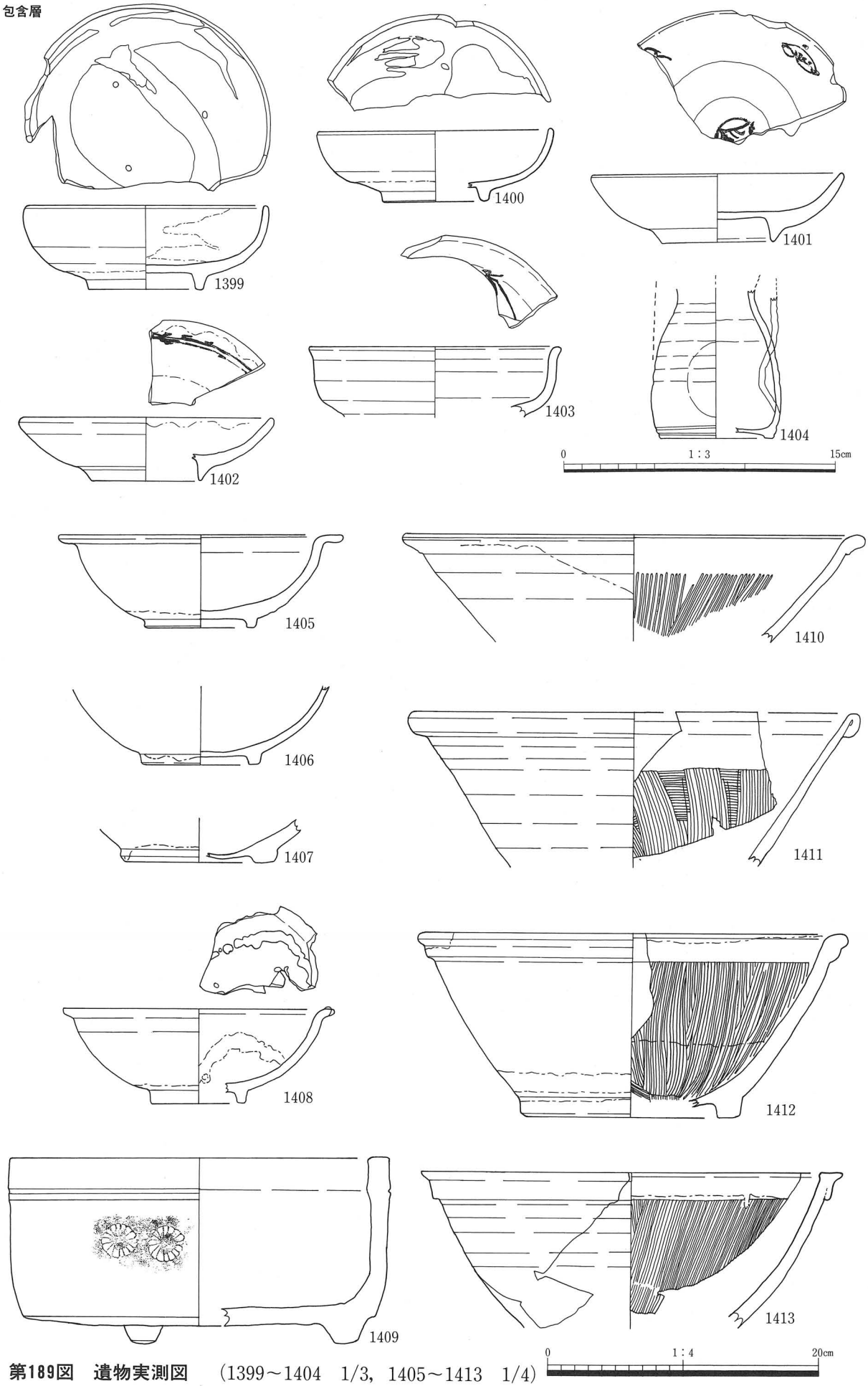
1409は土師質の脚付きの火舎。体部が直に立ち上がる器形で，口縁部はわずかに肥厚する。体部外面はハケ状具で器面調整し，菊花の押印を施す。さらに表面には，口縁部外面に黒色漆，体部外面には赤色漆を塗布する。内面上半部にはスス状炭化物が付着する。時期は近世か。1414は表面黒色処理した，瓦質の火舎。頸部が短く立ち，口縁部が受け口状に外反する器形のものである。Ｂ２Ｅ地区出土で，13～14世紀のものであろう。1415・1416は同一個体の土師質火舎。これも外面はハケ状具で器面調整し，梅花の押印を施すものである。器面調整のハケ跡は波状になり，1409も含めて装飾を意識したものと考えられる。時期は近世とみられる。1417は瓦質のバンドコの一部か。1424は近世の土製人形で，小型の天神様。底面に穿孔がみられる。

木製品（第190図1425～14333，図版218）

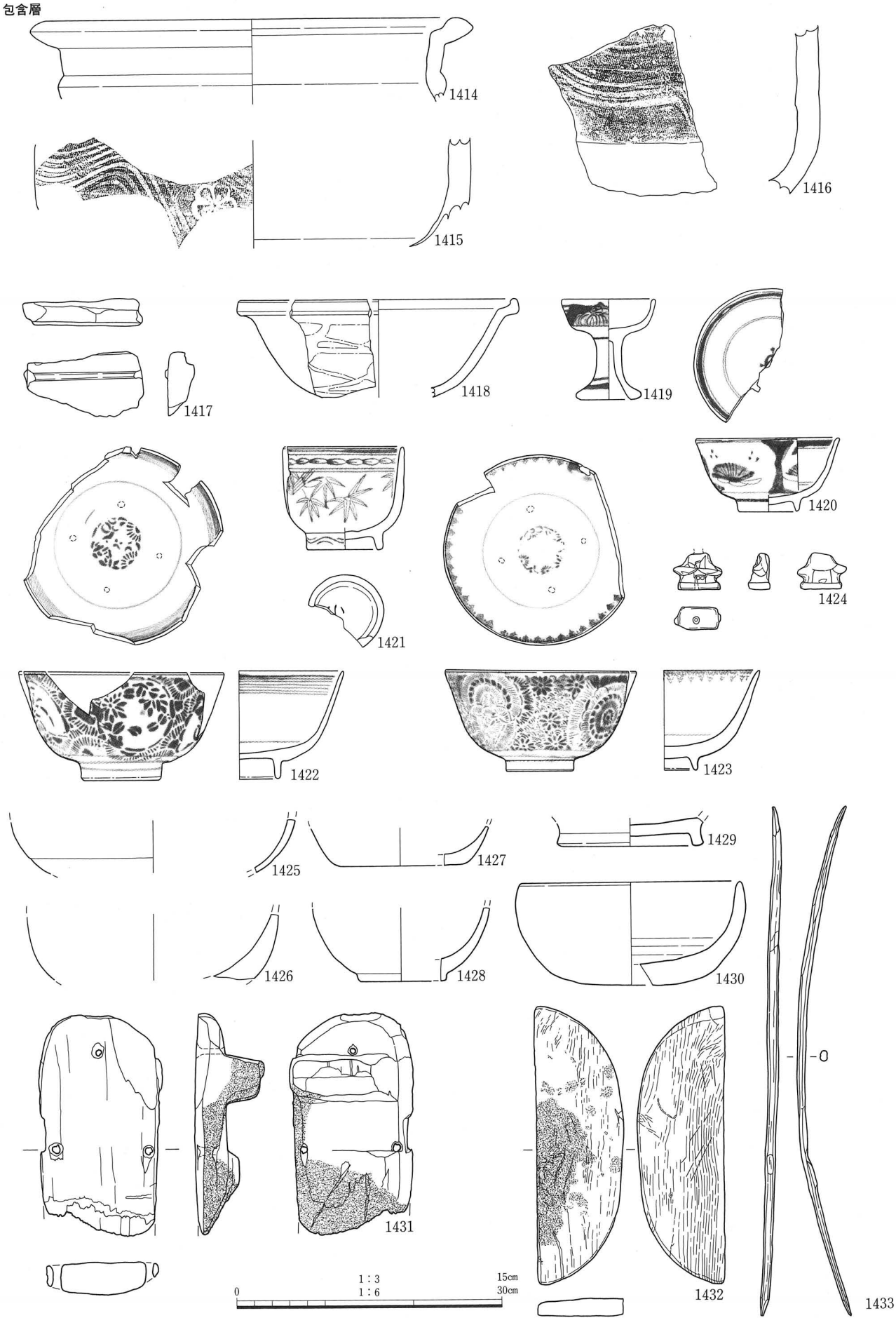
1425～1429は漆椀である。いずれも破片で全形がわかるものはない。樹種は1429がケヤキである。1430は厚手の作りの木椀で，樹種はブナ。1431は一木作りの連歯下駄。後歯はかなり磨り減り，台裏の一部が焦げている。樹種はスギである。1432は円形板で，これも一部焦げている。1433は両端を尖らせ，弓状に曲げた棒である。

石製品（第191図1434～第192図1447，図版221～223）

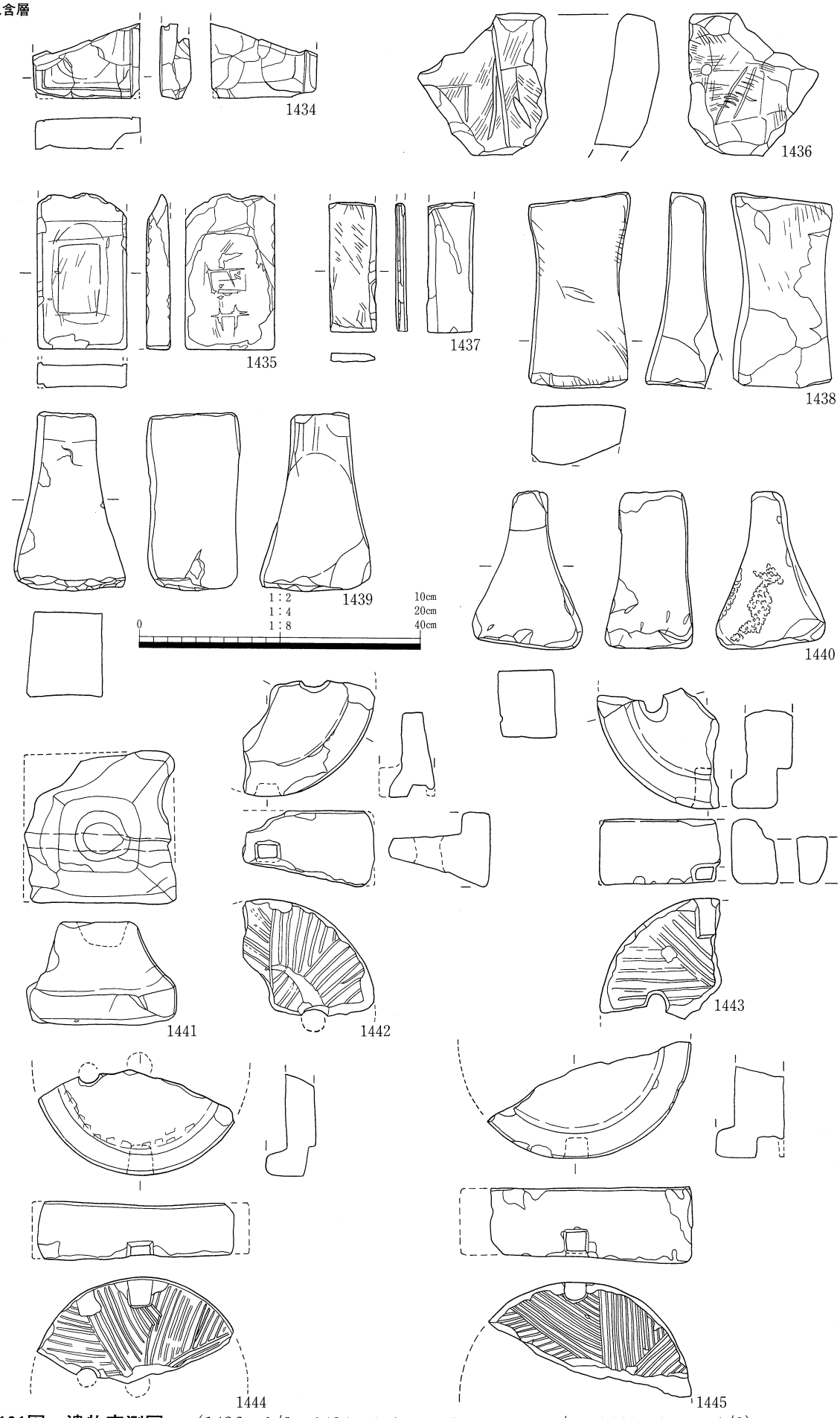
1434・1435は泥岩および粘板岩製の硯。1435の裏面には文字が掘り込まれるが判読出来ず。1436は滑石製の鍋である。口縁部の一部しかないが，分厚いもので，時期は中世にさかのぼる。1437～1440



第189図　遺物実測図　(1399～1404　1/3，1405～1413　1/4)



第190図　遺物実測図　（1414～1431　1/3，1432・1433　1/6）



第191図　遺物実測図　(1436　1/2, 1434・1435・1437～1440　1/4, 1441～1445　1/8)

は砥石である。1437は粘板岩製で仕上げ砥，他は砂岩製で粗砥である。1441は凝灰岩製の五輪塔で，火輪にあたる。

1442～1447は石臼である。1442～1446は上石で，1442～1444には供給穴があり，ほとんどが側面に挽き木穴を設けている。目の分割は8分割である。1447は下石である。石材は1442・1444が凝灰岩，1443砂礫岩，1445～1447が凝灰角礫岩である。

金属製品（第192図1448～1458，図版224・225）

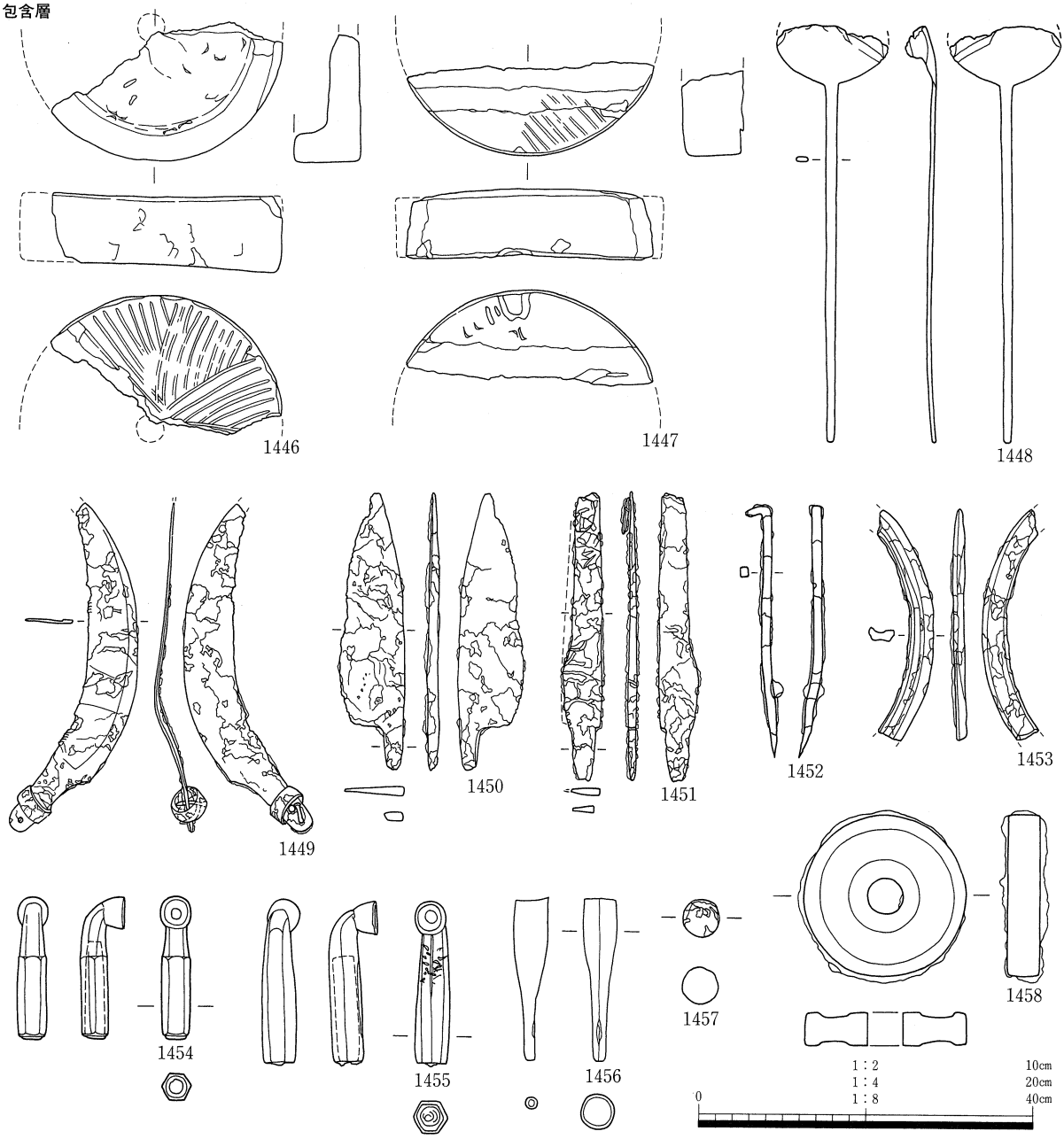
1448は匙状のもので，銅製。1449は鎌，1450は包丁，1451は刀子，1452は釘でいずれも鉄製。1453は輪状のもので用途不明。1454～1456は銅製の煙管で，首部と吸口部が出土している。1457は鉛玉でおそらく鉄砲の弾であろう。1458は鉄製の円盤状のもので用途不明。

銭貨（第192図1459～1467，図版226）

すべて銅銭で，渡来銭（1459～1461）と国産である寛永通寶（1462～1467）が出土している。1459は銭貨名不明瞭。1460は永楽通寶（初鋳1408年）。1461は祥符通寶（初鋳1009年）。他は寛永通宝であり，一文銭で背無文。1467は拓本ではやや不明瞭であるが，かろうじて寛永通寶と読める。

注1　森田　勉　1982　「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2
注2　小野正敏　1982　「15～16世紀の染付椀，皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No.2

包含層



第192図　遺物実測図　(1459～1467　2/3，1454～1458　1/2，1448～1453　1/4，1446・1447　1/8)

第19表　掘立柱建物一覧(1)（中世）

No.	地区	桁行×梁行	桁行長(m)	梁行長(m)	面積(m²)	棟方向	方　位	柱形式	時代	備　　考	挿図番号	図版番号
38	A	4×4	9.6	8.7	83.5	南北棟	N-26°-W	総柱	12C後～13C		100	142
39	A	4×2	10.36	4.72	48.9	南北棟	N-18°-W	総柱	12C後～13C		100	142
40	A	5×3	13.08	8.4	115.92	南北棟	N-11°-W	総柱	12C後～13C	西面庇。北面は西側2間のみ確認。	101	142, 143
41	A	1×1	4.12	3.6	14.83	南北棟	N-18°-W	側柱	12C後～13C	柱配置台形。柱穴小さい。	101	142
42	A	2×1	5.64	3	16.92	東西棟	N-77°-E	側柱	12C後～13C	東西2面庇	102	
43	A	2×2	4.8	4.5	21.6	東西棟	N-62°-E	総柱	12C後～13C		102	143
44	A	2×1	4.8	2.7	12.96	南北棟	N-28°-W	側柱	12C後～13C		102	143
45	A	4×4	10.8	9	102.06	南北棟	N-30°-W	総柱	12C後～13C	東側に張出。	103, 104	143, 144 156
46	A	2×2	5	4	20	南北棟	N-18°-W	総柱	12C後～13C		103	144
47	A	2×2	7.5	5.1	38.3	南北棟	N-24°-W	側柱？	12C後～13C	北面庇	105	144
48	A	2×2	4.35	4.05	17.6	東西棟	N-67°-E	側柱？	12C後～13C		105	144
49	B1	4×2	12.24	6.92	84.7	東西棟	N-62°-E	総柱	12C後～13C	4面庇？	106, 107	145, 156
50	B1	2×2	4.92	4.9	24.11	南北棟	N-40°-E	総柱	中世		107	145
51	B2E	4×3	7.8	5.85	45.6	南北棟	N-11°-W	総柱	13C		108	145
52	B2E	3×2	4.48	4.28	19.17	南北棟	N-12°-W	総柱	13C		108	146
53	B2E	3×2	4.12	4.08	16.81	南北棟	N-10°-W	総柱	13C		109	146
54	B2E	2×1	3.16	2.48	7.84	南北棟	N-1°-W	総柱	13C	東側にのびる可能性あり。	109	146
55	B2E	2×1	5.8	3.68	21.34	南北棟	N-8°-W	側柱	13C		109	
56	B3	2×1	6	2.1		南北棟	N-4°-W	側柱？	13C	北面庇	110	146
57	C1	2×2	8.28	4.6	38.09	南北棟	N-10°-E	総柱	14C	3面庇	110	147
58	C1	3×2	7.92	7.8	61.78	東西棟	N-79°-W	総柱	14C	北・西2面庇，＜SB59	111, 112	147
59	C1	3×3	9.56	8.32	79.54	南北棟	N-7°-E	総柱	14C	北・西2面庇，＞SB58	111, 113	147
60	C1	3×2	7.6	3.8	28.88	南北棟	N-7°-W	総柱	13C	北面庇？	111, 114	147
61	C1	2×1	2～	4		南北棟？	N-8°-W	側柱？	13C		111, 114	147
62	C1	2×1	？	5.4		南北棟？	N-8°-W	側柱？	13C		111, 114	147
63	C2	2×2	8	4.4	35.2	南北棟	N-6°-W	総柱	13C～14C	南面庇	115	148
64	C2	2×2＜	5.52	4.56	25.17	南北棟	N-5°-W	総柱	13C～14C		115	148
65	C3	5×5	14.25	12.45	177.41	南北棟	N-9°-E	総柱	12C後～13C前		116, 117	148
66	C3	4×3	9.4	8.88	83.47	東西棟	N-87°-W	総柱	12C後～13C前	東側に張出。	116, 118	148

第19表　掘立柱建物一覧(2)（中世）

No.	地区	桁行×梁行	桁行長(m)	梁行長(m)	面積(m²)	棟方向	方　位	柱形式	時代	備　　考	挿図番号	図版番号
67	C3	2×2	4.8	2.7	12.96	東西棟	N-89°-W	総柱	12C後～13C前		116, 119	148
68	C3	5×4	12.8	9.6	121	南北棟	N-5°-E	総柱	12C後～13C前	SB68＞SB69･SB70	120, 121	149
69	C3	4×4	10.2	10	102	南北棟	N-3°-W	総柱	12C後～13C前		120, 122	149, 156
70	C3	3×3	7.92	6.92	54.81	南北棟		総柱	12C後～13C前		120, 123	149
71	C3	2×1<	8.64	2.4	20.74	南北棟	N-3°-E	総柱？	12C後～13C前	南面庇？	123	149
72	D1	3×2	6.92	5.72	39.58	東西棟	N-79°-E	総柱	12C後～14C前		124	150
73	D1	2×2	4.2	3.92	16.46	東西棟	N-79°-E	総柱	12C後～14C前		124, 125	150, 156
74	D1	4×2	8.68	5.32	46.18	南北棟	N-12°-W	総柱	12C後～14C前	北西2面庇	125, 126	151
75	D1	4×3	6.65	5.64	37.51	東西棟	N-74°-E	総柱	12C後～14C前		125, 126	152
76	D1	3×3	6.96	5.92	41.2	東西棟	N-74°-E	総柱	12C後～14C前	SB75と重複か。	125, 127	152
77	D1	2×2or 2×1	3	3	9	南北棟	N-9°-W	側柱	12C後～14C前		125, 127	
78	D1	3×2	6.68	2.8	18.7	東西棟	N-74°-E	総柱	12C後～14C前		125, 127	153
79	D1	3×2	6.56	5.12	33.59	南北棟	N-15°-W	総柱	12C後～14C前	西面庇	128, 129	153, 154
80	D1	2×2	3.48	3.48	33.59	東西棟	N-71°-E	総柱	12C後～14C前		128, 129	153
81	D2	3×2	5.12	3.48	17.82	東西棟	N-75°-E	総柱	12C後～14C前		128, 129	154
82	D2	4×2	9.6	4.55	43.68	南北棟	N-12°-W	総柱	13C		130	155
83	D2	4×3	8.3	6.6	54.8	東西棟	N-82°-E	総柱	13C		130	155, 156
84	D2	2×1	4.28	2.16	9.24	南北棟	N-4°-W	側柱？	13C		131	155, 156
85	D2	4×2	9.4	8.16	76.7	東西棟	N-81°-W	総柱	13C	南面庇	131	155

第20表　柱穴一覧(1)（中世）

建物番号	柱　穴　番　号	出　土　遺　物
SB38	SP204, 205, 206, 207, 208, 209, 210, 211, 212, 213, 214, 215, 216, 217, 218, 219	加工材
SB39	SP135, 157, 158, 159, 160, 161, 162, 163, 164, 165, 166, 167, 408, 409, 410	
SB40	SP127, 128, 129, 131, 132, 133, 134, 136, 137, 138, 139, 140, 141, 142, 143, 144, 145, 146, 148, 149, 150, 151, 152, 153, 168, 169, 170, 171	加工材
SB41	SP172, 173, 174, 176	
SB42	SP53, 54, 55, 56, 58, 59, 60, 61, 62, 63, 64, 67－1	珠洲
SB43	SP11, 14, 17, 19, 22, 24, 26, 29, 31	伊万里
SB44	SP12, 16, 23, 28, 32	加工材
SB45	SP50, 51, 52, 75, 77, 78, 79, 80, 81, 82, 83, 85, 88, 89, 90, 91, 95, 96, 97, 99, 112, 113, 115	白磁，加工材
SB46	SP177, 178, 179, 180, 181, 182, 183, 185, 186	
SB47	SP189, 190, 191, 192, 193, 194, 195, 196	
SB48	SP197, 198, 199, 200, 201	
SB49	SP1013, 1014, 1015, 1016, 1017, 1018, 1019, 1020, 1021, 1025, 1027, 1029, 1031, 1042, 1043, 1044, 1045, 1050, 1054	中世土師器，加工材
SB50	SP1024, 1026, 1028, 1033, 1038, 1040, 1055, 1066, 1070	加工材
SB51	SP3058, 3059, 3060, 3061, 3062, 3063, 3064, 3065, 3066, 3067, 3090, 3091, 3092, 3093, 3094, 3097	柱
SB52	SP3017, 3018, 3019, 3020, 3021, 3022, 3023, 3024, 3037, 3038, 3039, 3040	
SB53	SP3016, 3030, 3031, 3032, 3033, 3042, 3043, 3044, 3045, 3046, 3047, 3048	柱
SB54	SP3099, 3100, 3106, 3114, 3115	
SB55	SP3077, 3078, 3081, 3083, 3086, 3088	石鍋
SB56	SP4003, 4004, 4005, 4006, 4009, 4011	
SB57	SP5100, 5101, 5102, 5103, 5104, 5105, 5107, 5108, 5109, 5110, 5111, 5112, 5116	
SB58	SP5022, 5023, 5024, 5025, 5026, 5028, 5030, 5031, 5032, 5035, 5036, 5037, 5038, 5039, 5052, 5056	土師器，須恵器，珠洲，箸，櫛
SB59	SP5002, 5003, 5004, 5005, 5006, , 5008, 5009, 5010, 5011, 5012, 5014, 5015, 5016, 5018, 5019, 5020, 5021, 5034, 5058, 5081, 5082, 5095	土師器，漆椀，箸，加工材
SB60	SP5041, 5042, 5043, 5044, 5045, 5060, 5061, 5062, 5063, 5083, 5084, 5088	土師器，箸
SB61	SP5046, 5048, 5050, 5051	
SB62	SP5053, 5054, 5055	曲物
SB63	SP6001, 6002, 6003, 6004, 6005, 6006, 6007, 6008, 6009	土師器
SB64	SP6010, 6011, 6012, 6013, 6014, 6015, 6016	
SB65	SP7059, 7106, 7107, 7108, 7109, 7131, 7132, 7133, 7134, 7137, 7138, 7139, 7140, 7141, 7142, 7143, 7144, 7145, 7146, 7147, 7149, 7150, 7151, 7152, 7153, 7154, 7155, 7156, 7157, 7158, 7159, 7160	土師器，中世土師器，珠洲，杭，箸，加工材，種子，礎石

第20表　柱穴一覧(2)（中世）

建物番号	柱　穴　番　号	出　土　遺　物
SB66	SP7161, 7162, 7163, 7164, 7166, 7168, 7170, 7171, 7172, 7173, 7175, 7176, 7177, 7178, 7180, 7181, 7182, 7183, 7202, 7211, 7212	中世土師器，柱，加工材，砥石，礎石，焼石
SB67	SP7169, 7179, 7184, 7185, 7186, 7187, 7188, 7189, 7255	
SB68	SP7071, 7072, 7073, 7074, 7075, 7077, 7078, 7079, 7080, 7081, 7082, 7083, 7084, 7085, 7086, 7087, 7088, 7089, 7090, 7091, 7092, 7093, 7094, 7095, 7096, 7097, 7098, 7099, 7100, 7240	土師器，中世土師器，珠洲，箸，加工材
SB69	SP7043, 7061, 7062, 7063, 7064, 7065, 7066, 7067, 7068, 7069, 7110, 7111, 7112, 7113, 7114, 7116, 7117, 7118, 7119, 7120, 7121, 7123, 7124, 7125	中世土師器，珠洲，箸，櫛，礎板，加工材，砥石，礎石
SB70	SP7044, 7046, 7047, 7048, 7049, 7050, 7051, 7052, 7053, 7054, 7055, 7056, 7057, 7058, 7115	中世土師器，珠洲，箸，櫛，加工材，竹
SB71	SP7021, 7022, 7023, 7024, 7025, 7027, 7029	加工材
SB72	SP8220, 8221, 8222, 8223, 8224, 8225, 8226, 8227, 8228, 8229, 8230	中世土師器
SB73	SP8306, 8307, 8308, 8309, 8310, 8311, 8312, 8313, 8314	
SB74	SP8105, 8135, 8136, 8254, 8255, 8256, 8257, 8258, 8259, 8260, 8261, 8262, 8263, 8264, 8265, 8266, 8267, 8268, 8269, 8270, 8271, 8272, 8273	中世土師器
SB75	SP8083, 8085, 8096, 8175, 8235, 8236, 8237, 8238, 8239, 8240, 8241, 8242, 8243, 8244, 8246, 8247, 8248, 8249	中世土師器，加工材
SB76	SP8084, 8086, 8089, 8095, 8179, 8240, 8241, 8244, 8245, 8246, 8248, 8249, 8250, 8251, 8252, 8253	中世土師器，柱
SB77	SP8116, 8118, 8141, 8142, 8151	柱
SB78	SP8294, 8295, 8296, 8297, 8298, 8299, 8300, 8301, 8302, 8303, 8304, 8305	中世土師器，柱
SB79	SP8274, 8275, 8276, 8277, 8278, 8279, 8280, 8281, 8282, 8283, 8284, 8285, 9224, 9225, 9226, 9227	中世土師器，柱，加工材
SB80	SP8286, 8287, 8288, 8289, 8290, 8291, 8292, 8293	中世土師器
SB81	SP9074, 9214, 9215, 9216, 9217, 9218, 9219, 9220, 9221, 9222, 9223	中世土師器，柱
SB82	SP9228, 9229, 9230, 9231, 9232, 9233, 9234, 9235, 9236, 9237, 9238, 9239, 9240, 9241, 9242	柱
SB83	SP9111, 9112, 9116, 9119, 9189, 9243, 9244, 9249, 9252, 9253, 9254, 9256, 9257	珠洲，礎板，加工材
SB84	SP9247, 9248, 9250, 9251, 9255, 9258	加工材，砥石
SB85	SP9259, 9260, 9261, 9262, 9263, 9264, 9265, 9266, 9267, 9268, 9269, 9270, 9271, 9272, 9273, 9274, 9275, 9276, 9277	
SA8	SP153, 154, 155, 156	
SA9	SP34, 35	
SA10	SP123, 124, 125	
SA11	SP3014, 3015, 3025	柱
SA12	SP3082, 3084, 3085	
SA13	SP7040, 7174, 7193, 7197, 7219	
SA14	SP7211, 7214, 7222	

第21表　溝一覧(1)（中世・近世）

遺構番号	流　路	規模(幅・深さm)	出　土　遺　物	時　期	備　考	挿図番号	図版番号
SD39	W→E	0.7－0.16		中世～			
SD40		1.43－0.12		中世～			
SD42	S→N	1.95－0.36	中世土師器，珠洲，白磁，伊万里，羽口，曲物，木札，加工材	12C後～13C前		135，137	171，200
SD44	S→N	2.44－0.26	須恵器，青磁，白磁，中国製染付，珠洲，伊万里，唐津，信楽，近～現代陶磁器，ガラス瓶，円形板，下駄，栓，蓋，加工材，銭，金属製品，七輪	現代		161，162	157，179
SD45	S→N	7.5－0.34	中世土師器，珠洲，瓦器，青磁，白磁，柄，加工材	近世		136，137	200
SD46	S→N	1.28－0.5	須恵器，中世土師器，青磁，白磁，珠洲，瀬戸，越前，中世・近世陶器，下駄，草履，櫛，漆椀，箸，加工材，石臼	13C～14C		135，137，138，139	157，162
SD70	S→N	0.49－0.16		中世～		136	
SD100	E→W	0.95－0.24	中世土師器，瀬戸美濃，銭	近世		161，162	143
SD126	S→N	0.56－0.08		中世～			
SD187	S→N	0.36－0.1	中世土師器	近世		161	179
SD188	S→N	1.58－0.2	中世土師器，珠洲，越中瀬戸，瀬戸美濃，唐津，信楽，近世磁器，漆器	近世		161	179
SD220	SE→NW	0.85－0.2	加工材	中世～		136	
SD222	SE→NW	0.6－0.06		中世～		136	
SD223	SE→NW	3.0－0.17	珠洲，伊万里，曲物，漆椀，箸，木簡，円形板，加工材	12C後		139	
SD1004	S→N	0.3－0.1		中世～			
SD1006		0.26－0.07		中世～			
SD1010	SE→NW	4.15－0.24		中世～			
SD1041	S→N	0.26－0.06		中世～			
SD1077		0.2－0.08		中世～			
SD2001	SE→NW	2 －0.2	須恵器，珠洲，八尾？，伊万里，唐津，近世陶磁器，近代磁器，漆椀，石臼，砥石	中世～近代		139，140	158
SD2002		0.79－0.12		中世～			
SD2006		0.34－0.02		中世～			
SD2007	SE→NW	11.1－0.9	須恵器，珠洲，伊万里，唐津，陶磁器，矢板，楔，下駄，漆椀，加工材，砥石，銅銭	中世～近世		139，140	158，201，202
SD2008		3.14－0.29		中世～			158
SD2009	SE→NW	0.92－0.2		中世～			
SD3003	S→N	1.3－0.15	須恵器，珠洲	13C			
SD3007	W→E	0.9－0.1		中世～		141	
SD3008	S→N	0.39－0.08		13C		141	
SD3009	W→E	0.65－0.14		13C		141	
SD3012	W→E	0.34－0.08		13C		141	
SD3028	W→E	0.48－0.06		13C		141	
SD3029	W→E	0.45－0.06		中世～		141	
SD3035	NE→SW	0.26－0.05		13C		141	
SD3036	S→N	0.58－0.04		13C		141	
SD3051	S→N	0.29－0.04		中世～			
SD3052	S→N	0.3－0.06		中世～			
SD3053	S→N	0.33－0.06		中世～			
SD3054	S→N	0.3－0.08		中世～			

第21表　溝一覧(2)（中世・近世）

遺構番号	流　路	規模(幅·深さm)	出　土　遺　物	時　期	備　考	挿図番号	図版番号
SD3055	S→N	0.42－0.08		中世～			
SD3056	S→N	0.29－0.06		中世～			
SD3068		0.32－0.04		中世～			
SD3069	S→N	0.34－0.04		中世～			
SD3070	S→N	0.3－0.03		中世～			
SD3071	S→N	0.35－0.05		中世～			
SD3072		0.35－0.05		中世～			
SD3073	S→N	0.16－0.04		中世～			
SD3087		1.15－0.06	須恵器，瓦器，珠洲，越中瀬戸，唐津，近世陶磁器，櫛	近世		142，162	179
SD3089	E→W	0.52－0.22		13C		142	
SD3095	S→N	2.1－0.2		中世～			
SD3096	S→N	1.1－0.12		中世～			
SD3098	S→N	0.58－0.16		中世～			
SD3103	E→W	0.29－0.12		13C		141	
SD3104		0.3－0.1		13C		141	
SD3107		0.4－0.08		13C		141	
SD3110	S→N	0.24－0.06		中世～			
SD3111		0.28－0.08		13C		141	
SD3112		0.32－0.12		13C		141	
SD3116	E→W	0.42－0.1		13C		141	
SD4001	E→N	2.7－0.56	土師器，須恵器，内黒，製塩土器，中世土師器，珠洲，白磁，陶器，漆椀，蓋，木簡，箸，叩石	13C		142，143	159，172，202
SD4015	S→N	0.44－0.06		13C		142	
SD4016	S→N	0.3－0.06		13C		142	
SD4017	S→N	0.44－0.07		13C		142	
SD4019	E→W	0.54－0.08		13C		142	
SD5066	S→N	1.0－0.18	箸	中世～		111，144	
SD5099	S→N	0.42－0.1		中世～		110，144	
SD5120	S→N	0.56－0.03		中世～			
SD6023	SW→NE	0.63－0.2		近世			159
SD7001	SW→NE	1.60－0.45	土師器	15C？		143，144	
SD7003	S→N	＊＊－0.1		中世～		144	
SD7009	SW→NE	0.38－0.08		中世～		144	
SD7010	S→N	＊＊－0.1	土師器	12C		143，144	159，172
SD7018	E→W	0.24－0.2		12C後～13C		144	159
SD7019	E→W	0.22－0.06		12C後～13C		144	159
SD7035	E→W	1.40－0.22	櫛	中世～		144	
SD8001	W→E	1.2－0.16	土師器，中世土師器，板状，木	中世～		143	172
SD8002	S→N	0.94－0.2	近世陶磁器	近世			162
SD8036	E→W	0.38－0.08		中世～			
SD8043	S→N	1.76－0.25	土師器，須恵器，灰釉，中世土師器，珠洲，青磁，白磁，越中瀬戸，伊万里，近世陶磁器，杭，曲物，烏帽子，櫛，漆椀，箸，杓子形木器，加工材，砥石	13C～14C		145，146，147	160
SD8056	W→E	0.24－0.14	中世土師器，珠洲	12C後～14C		143，158	160，172
SD8057	W→E	0.28－0.03	珠洲	12C後～14C		158	160
SD8117		0.56－0.26		12C後～14C		158	160

第21表　溝一覧(3)（中世・近世）

遺構番号	流　路	規模(幅・深さm)	出　土　遺　物	時　期	備　考	挿図番号	図版番号
SD8122	W→E	0.5−0.09		中世～		158	
SD8123	W→E	0.18−0.05		中世～		158	
SD9001	SE→NW	10.3−0.77		中世～		159	161
SD9005	SE→NW	1.75−0.2		中世～		159	
SD9006	SE→NW	0.35−0.21		中世～		159	
SD9007	SE→NW	1.22−0.2	珠洲，板，加工材，漆椀	中世～		159，162	161，212，213
SD9008		0.34−0.06		中世～			
SD9009	SE→NW	2.93−0.27		中世～			
SD9010	S→N	2.9−0.23		中世～			
SD9021	S→N	0.26−0.03		中世～			
SD9032		0.26−0.04		中世～			
SD9033	E→W	0.18−0.06		中世～			
SD9038	S→N	0.3−0.14		中世～			
SD9039	W→E	0.46−0.06		中世～		158	
SD9051	NW→SE	0.46−0.06		中世～		158	
SD9052	NW→SE	0.32−0.06		中世～		158	
SD9084		0.48−0.05		中世～		158	
SD9090	SE→NW	5.6−0.22		中世～			
SD9091	S→N	0.44−0.12		中世～		160	161
SD9092	S→N	1.8−0.08		中世～		159	161
SD9096	E→W	0.5−0.08		中世～			
SD9104	S→N	0.5−0.11	中世土師器	13C前？		160，162	179
SD9125		0.4−0.08		中世～			
SD9126	S→N	0.46−0.16		中世～		160	
SD9127	S→E→N	0.32−0.06	珠洲	中世～		160	
SD9128	S→N→E	1.6−0.11	中世土師器，珠洲	13C		160，162	
SD9129	S→N	1.16−0.22		13C			
SD9131	W→E→N	0.46−0.09		中世～			
SD9137		0.88−0.08	珠洲	中世～			
SD9140		0.41−0.06		中世～		160	
SD9141		0.44−0.06		中世～		160	
SD9144	E→W	0.6−0.18	珠洲	中世～		160	
SD9148	E→W	2.7−0.2	土師器，中世土師器，珠洲	中世～		160，162	179
SD9154	S→N	0.46−0.09		中世～			
SD9156	S→N	2.2−0.59		中世～			
SD9157	S→N	0.44−0.06		中世～			
SD9158		0.36−0.06		中世～			
SD9159	W→E	0.39−0.12		中世～			
SD9162		0.24−0.05		中世～			
SD9163	S→N	2.2−0.03		中世～			
SD9184	E→W	0.44−0.12		中世～		160	
SD9191		0.56−0.11		中世～			

第22表　土坑一覧(1)（中世・近世）

遺構番号	平面形	規模(長さ・幅・深さm)	出　土　遺　物	時　期	備　　考	挿図番号	図版番号
SK3	不整形	1.28－＊＊－0.15		中世～			
SK4	不整形	1.18－＊＊－0.19		中世～			
SK6	方	3.88－2.96－0.37	中世土師器	中世～			
SK7	隅丸	3.32－2.47－0.97	伊万里，近～現代陶磁器，七輪	現代			
SK8	楕円	2.32－1.06－0.36		中世～			
SK41	不整形	1.4－＊＊－0.18		中世～			
SK43	不整形	1.72－0.85－0.54		中世～			
SK49	楕円	0.58－0.42－0.07		中世～			
SK57	円	0.2－0.18－0.09		中世～			167
SK67	不整形	0.6－＊＊－0.33	珠洲，箸，柄，底板	12C後～13C		168	166，215
SK72	円	0.27－0.26－0.04	珠洲	中世～	SD46と接合		
SK73	不整形	2.28－＊＊－0.54	中世土師器，珠洲	中世～			
SK74	不整形	＊＊－＊＊－0.32	珠洲，青磁	中世～			
SK92	楕円	0.54－0.47－0.35	白磁	中世～			
SK111	不整形	0.56－0.46－0.12		中世～			
SK114	円	0.68－0.62－0.28	箸	中世～	古代上のSK348と同一遺構。	166，168	166，215
SK121	円	1.2－1.15－0.5	中世土師器，下駄，箸，加工棒材，焼石	12C後～13C	古代上のSK326と同一遺構。	166，168	166，215
SK122	楕円	1.16－0.92－0.1		12C後～13C		166	
SK203	円	1.2－1.08－0.1		12C後～13C		166	166
SK224	不整形	0.44－0.29－0.17	加工材	中世～			
SK225	円	0.18－＊＊－0.12	土師器	中世～			
SK1005	方	0.58－0.56－0.14		中世～			
SK1007	不整形	＊＊－0.7－0.17		中世～			
SK1008	不整形	1.4－＊＊－0.13		中世～			
SK1009	不整形	0.8－＊＊－0.25		中世～			
SK1011	不整形	2.2－2.1－0.5		中世～			
SK1012	楕円	0.24－0.35－0.1	中世土師器，珠洲	中世～			
SK1030	楕円	0.54－0.31－0.24		中世～			
SK1032	不整形	0.63－0.48－0.16	中世土師器	中世～			
SK1034	楕円	0.58－0.32－0.34		中世～			
SK1035	隅丸	0.37－0.35－0.14		中世～			
SK1036	円	0.24－0.24－0.08	中世土師器	中世～			
SK1037	不整形	0.84－0.8－0.24		中世～			
SK1047	不整形	0.7－0.4－0.17		中世～			
SK1051	不整形	2.0－0.5－0.09		中世～			
SK1052	不整形	＊＊－0.9－0.15		中世～			
SK1053	不整形	1.6－0.58－0.11		中世～			
SK1055	不整形	1.22－0.57－0.09		中世～			
SK1059	円	0.45－0.4－0.14		中世～			
SK1060	不整形	0.5－0.44－0.15		中世～			
SK1065	不整形	0.95－＊＊－0.08		中世～			
SK1072	楕円	0.58－0.34－0.14		中世～			
SK1073	不整形	0.38－0.3－0.13		中世～			
SK1074	楕円	1.04－0.6－0.12		中世～			
SK1075	不整形	0.44－＊＊－0.07		中世～			
SK1079	楕円	0.56－0.36－0.09	中世土師器	中世～			
SK1080	不整形	0.8－0.44－0.12		中世～			
SK1081	不整形	1.74－0.6－0.2		中世～			

第22表　土坑一覧(2)（中世・近世）

遺構番号	平面形	規模(長さ・幅・深さm)	出　土　遺　物	時　期	備　　考	挿図番号	図版番号
SK1082	不整形	0.75－＊＊－0.07		中世～			
SK1083	楕円	0.5－0.39－0.24		中世～			
SK2003	楕円	0.83－0.59－0.24		中世～			
SK2004	楕円	1.26－0.79－0.22		中世～			
SK2005	円	0.76－0.66－0.06		中世～			
SK3004	楕円	1.2－0.6－0.22		中世～			
SK3005	円	3.85－3.53－0.35	加工材	13C			166
SK3006	不整形	0.6－＊＊－0.14		中世～			
SK3011	不整形	0.62－0.42－0.12		中世～			
SK3013	楕円	1.8－0.88－0.36	チュウギ，加工材	中世～	底付近には長さ10－30cmの棒が多く堆積していた。便所遺構の可能性あり。SB53の内側に位置する。	167，168	166，215
SK3057	楕円	3.84－2.88－0.68	中世土師器，下駄，漆椀，擬宝珠，加工材	13C		166,168,169	167,180,215,216
SK3108	楕円	0.6－0.49－0.1		中世～			
SK3117	不整形	1.2－＊＊－0.08		中世～			
SK4013	不整形	0.53－0.46－0.46		中世～			
SK4018	不整形	1.04－＊＊－0.33		中世～			
SK4021	楕円	0.8－0.5－0.11		中世～			
SK4022	円	0.64－0.65－0.18		中世～			
SK5096	円	1.80－1.40－0.20	土師器，白磁	13C～14C		167，169	167，180
SK5097	不整形	2.28－1.68－0.10	土師器，白磁，箸	13C～14C		167	167
SK5098	不整形	3.73－1.48－0.12		中世～			
SK5117	円	0.88－0.78－0.15	土師器	中世～	SP59→SK117に番号つけかえ	167	166
SK5118	不整形	1.0－0.76－0.06	土師器	中世～		167	167
SK6024	方	2.08－1.96－0.82	土師器，越中瀬戸，唐津京焼風，伊万里，近世陶磁器，円形板	近世以降		169	167
SK7002	不整形	2.0－0.7－0.22		中世～			
SK7005	不整形	2.04－0.72－0.16	珠洲，近世陶器	近世			
SK7006	不整形	5.08－＊＊－0.16	加工材	中世～			
SK7007	不整形	0.58－0.7－0.1		中世～			
SK7008	不整形	0.76－＊＊－0.18		中世～			
SK7016	楕円	0.52－0.36－0.18		中世～			
SK7017	不整形	0.44－0.64－0.34		中世～			
SK7030	方形	1.56－1.44－0.44	土師器，白磁？，加工材	12C後～13C		169,170,171	167,169,180,216
SK7031	不整形	0.60－＊＊－0.28	中世土師器，珠洲	中世～			
SK7037	不整形	1.48－＊＊－0.4		中世～			
SK7038	不整形	1.0－0.38－0.05		中世～			
SK7039	不整形	0.7－0.38－0.08		中世～			
SK7060	不整形	3.48－3.08－0.15		12C後～13C			
SK7070A	不整形	1.6－1.6－0.24	唐津，近世陶器，下駄，加工材，砥石	近世		170,175,176	167,217,223
SK7070B		1.4－＊＊－0.26	近世陶器，加工竹，加工材	近世		170,175,176	167,217,223
SK7101	不整形	0.46－0.52－0.06	土師器	中世～			
SK7104	不整形	0.48－0.58－0.18		中世～			
SK7148	円	0.36－0.38－0.18	曲物，加工材，石製品	中世～			
SK7198	不整形	0.5－0.4－0.14	中世土師器	中世～			

第22表　土坑一覧(3)（中世・近世）

遺構番号	平面形	規模(長さ・幅・深さm)	出　土　遺　物	時　期	備　　考	挿図番号	図版番号
SK7199	不整形	0.76－0.54－0.14	中世土師器，加工材	中世～			
SK7200	不整形	1.4－1.12－0.10	珠洲	12C後～13C		167	
SK7201	楕円	0.62－0.46－0.14		中世～			
SK7210(S)	不整形	0.4－0.32－0.14	土師器	中世～			
SK7210(N)	円	0.32－0.3－0.18	中世土師器	中世～			
SK7215	方	0.8－0.64－0.18		中世～			
SK7224	円	0.22－0.28－0.2	中世土師器	中世～			
SK7225	方	2.60－1.40－0.16	伊万里，近世陶器	近世		176	167
SK7229	不整形	0.36－1.44－0.18		中世～			
SK7233	不整形	1.6－0.84－0.15		中世～			
SK7239	不整形	0.94－0.48－0.19	箸，加工材	12C後～13C		170	217
SK7240	円	0.74－＊＊－0.28	箸，加工材	12C後～13C		170	217
SK7241	不整形	0.44－0.36－0.24	土師器，加工材	中世～			
SK7242	楕円	0.56－0.7－0.12		中世～			
SK7247	不整形	1.4－0.72－0.4	加工材	中世～			
SK8006	円	0.64－0.56－0.07		中世～			
SK8007	不整形	1.14－0.8－0.1		中世～			
SK8011	楕円	0.36－0.3－＊＊	柱	中世～			
SK8021	楕円	0.57－0.48－0.1		中世～			
SK8028	不整形	＊＊－＊＊－0.22		中世～			
SK8029	不整形	＊＊－＊＊－0.34	瓦器，瀬戸美濃，唐津？，伊万里，越中丸山，信楽，九谷？，近世陶磁器，土人形，石盤	近代		176～181	169，181～187，218，223
SK8030	不整形	1.04－0.52－0.38	瓦器，越中瀬戸，越中丸山，瀬戸美濃，伊万里，近世陶磁器，土人形，栓，円形板，硯，石盤	近代		176～181	169，181～187，218，223
SK8032	不整形	0.78－0.48－0.11		中世～			
SK8033	不整形	1.4－1.16－0.08		中世～			
SK8039	隅丸	1.0－0.84－0.12		中世～			
SK8041	円	0.52－0.5－0.12		中世～			
SK8044	不整形	3.56－32.8－0.78	珠洲	現代？			
SK8045	楕円	0.6－0.4－0.05		中世～			
SK8050	不整形	2.12－1.20－0.15	中世土師器，銭	12C後～14C		170，171	168
SK8052	円	0.58－0.52－0.1		中世～			
SK8053	隅丸	1.74－0.82－0.12		中世～			
SK8059	不整形	2.88－1.24－0.12	中世土師器	12C後～13C		172	
SK8060	不整形	5.0－3.4－0.05	中世土師器，白磁	12C後～14C		172	168
SK8061	方	1.24－1.17－0.12		12C後～13C		172	168
SK8068	楕円	0.68－0.6－0.14		中世～			
SK8069	円	0.64－0.6－0.12		中世～			
SK8070	円	0.58－0.5－0.18		中世～			
SK8071	円	0.54－0.5－0.16		中世～			
SK8073	円	0.5－0.46－0.11		中世～			
SK8074	円	0.54－0.54－0.15		中世～			
SK8075	楕円	1.64－1.48－0.24		中世～		173	168
SK8076	楕円	0.8－0.64－0.24		中世～		173	168
SK8077	楕円	0.54－0.44－0.22		中世～			
SK8078	楕円	0.42－0.36－0.12		中世～			
SK8080	円	0.32－0.35－0.08	珠洲	中世～			

第22表　土坑一覧(4)（中世・近世）

遺構番号	平面形	規模(長さ・幅・深さm)	出　土　遺　物	時　期	備　　考	挿図番号	図版番号
SK8093	方	3.2－2.4－0.16	中世土師器	12C後～13C		173	168
SK8097	円	0.37－0.32－0.16	中世土師器	中世～			
SK8100	円	0.29－0.27－0.22	中世土師器	中世～			
SK8102	楕円	0.52－0.43－0.3	中世土師器	中世～			
SK8118	円	0.84－0.78－0.12		12C後～14C		173	
SK8120	円	1.4－1.32－0.38		12C後～13C		173	168
SK8124	楕円	0.54－0.43－0.21	珠洲	中世～			
SK8147	円	0.56－0.54－0.12		中世～			
SK8188	円	0.45－0.43－0.19		中世～			
SK8196	楕円	0.44－0.32－0.05		中世～			
SK9002	楕円	4.2－2.0－0.32	中世土師器，珠洲	13C		173	168
SK9003	楕円	3.2－＊＊－0.32	珠洲	13C		174	169
SK9004	不整形	1.85－＊＊－0.36		中世～			
SK9024	不整形	0.56－0.33－0.14		中世～			
SK9025	不整形	0.43－0.37－0.16	中世土師器	中世～			
SK9028	不整形	1.73－＊＊－0.28		中世～			
SK9029	不整形	1.7－＊＊－0.17		中世～			
SK9030	不整形	1.4－＊＊－0.32		中世～			
SK9031	不整形	1.02－1.02－0.28		中世～			
SK9035	不整形	1.36－1.12－0.06		12C後～13C		174	169
SK9036	楕円	0.68－0.60－0.32		12C後～13C		174	169
SK9042	隅丸	0.44－0.46－0.12		中世～			
SK9045	楕円	0.5－0.44－0.2		中世～			
SK9053	方	1.9－1.3－0.17		中世～			
SK9054	不整形	1.74－1.6－0.31		中世～			
SK9055	方	1.8－1.04－0.12	箸	12C後～13C		170	217
SK9056	円	1.5－1.6－0.39		中世～			
SK9057	不整形	1.06－1.06－0.22		中世～			
SK9058	楕円	2.38－0.7－0.34		中世～			
SK9059	不整形	1.04－0.75－0.29		中世～			
SK9060	多角	0.94－0.88－0.18		中世～			
SK9061	不整形	2.16－2.02－0.5		中世～			
SK9062	楕円	1.4－1.14－0.35		中世～			
SK9063	楕円	1.4－0.74－0.45		中世～			
SK9066	円	0.88－0.78－0.05		中世～			
SK9067	円	1.9－1.6－0.24		中世～			
SK9068	不整形	1.64－1.5－0.25		中世～			
SK9069	不整形	1.38－0.64－0.36		中世～			
SK9070	円	1.24－1.26－0.33	下駄	中世～			
SK9076	円	1.79－1.98－0.21		中世～			
SK9086	楕円	1.66－1.0－0.38		中世～			
SK9087	楕円	0.15－0.68－0.34		中世～			
SK9089	不整形	1.26－＊＊－0.16		中世～			
SK9093	方	3.24－2.15－0.13	中世土師器	中世～	D1地区に半分のびる。		
SK9094	円	1.48－1.44－0.36		中世～			
SK9095	楕円	1.18－1.42－0.34		中世～			
SK9098	惰円	0.7－0.54－0.1		中世～			
SK9099	円	0.42－0.4－0.07		中世～			
SK9105	円	0.54－0.5－0.1		中世～			

第22表　土坑一覧(5)（中世・近世）

遺構番号	平面形	規模(長さ・幅・深さm)	出　土　遺　物	時　期	備　　考	挿図番号	図版番号
SK9106	円	0.4－0.39－0.11		中世～			
SK9111	不整形	0.95－＊＊－0.04	珠洲	中世～			
SK9113	不整形	0.79－0.63－0.05		中世～			
SK9118	楕円	0.78－0.44－0.14		中世～			
SK9124	不整形	1.06－＊＊－0.4		中世～			
SK9125	不整形	2.0－1.6－0.4	珠洲	13C		174	169
SK9127	隅丸	1.18－1.3－0.06		中世～			
SK9132	不整形	0.95－＊＊－0.2		中世～			
SK9134	方	5.56－1.52－0.2	中世土師器，珠洲	13C		174，175	180
SK9135	円	0.9－0.92－0.22	剝片	中世～		175	
SK9136	方	0.8－0.75－0.16		中世～			
SK9138	円	1.16－1.1－0.16	珠洲	13C		174	169
SK9142	円	0.98－0.96－0.19		中世～			
SK9145	方	0.6－0.4－0.12	中世土師器，珠洲，加工材	13C		175	180
SK9146	楕円	2.0－0.6－0.12	中世土師器，砥石	13C		175	180
SK9147	不整形	2.5－＊＊－0.1	珠洲	13C			
SK9150	不整形	1.05－0.73－0.04	中世土師器	中世～		175	180
SK9151		＊＊－＊＊＊－＊＊	中世土師器	中世～			
SK9160	不整形	3.28－1.22－0.08		中世～			
SK9161	方	1.95－＊＊－0.1		中世～			
SK9171	楕円	1.14－1.0－0.12		中世～			
SK9172	不整形	5.4－3.26－1.0	箸，加工材，加工棒	中世～		175	217
SK9173	不整形	0.82－0.52－0.22		中世～			
SK9176	不整形	0.84－＊＊－0.18		中世～			
SK9179	楕円	0.8－0.54－0.12		中世～			
SK9181	楕円	0.8－0.68－0.11		中世～			
SK9182	円	0.4－0.38－0.13	礎板	中世～			
SK9193	不整形	0.82－0.81－0.14		中世～			
SK9190	不整形	1.46－＊＊－0.22		中世～			
SK9194	楕円	0.44－0.36－0.17		中世～			
SK9198	方	0.8－＊＊－0.2		中世～			
SK9211	不整形	1.06－＊＊－0.12		中世～			
SK9212	方	0.64－0.46－0.09		中世～			
SK9213	不整形	2.02－＊＊－0.26		中世～			

第23表　井戸一覧表（中世・近世）

遺構番号	平面形	規模(長さ・幅・深さm)	最終レベルm	出　土　遺　物	時　　期	備 考	挿図番号	図版番号
SE5067	円	2.0－1.68－0.59	23.7	土師器，加工板	13C～14C		163	165
SE5068	円	1.0－0.92－0.52	24.06	杓子形木器，曲物	13C～14C		163	165
SE6025	楕円	1.1－1.0－0.1	24.17		近世以降			
SE6026	楕円	0.91－0.87－0.34	24.2		近世以降			
SE6027	隅丸	1.46－1.3－0.60	24.02	中世土師器，伊万里，近代磁器	近世以降			165
SE7020	楕円	3.08－2.48－1.28	23.62	土師器，下駄，箸，加工材，瓢箪，鋳鉄	12C後～13C		163	164，165
SE8042	隅丸	1.00－0.94－0.53	23.52	曲物，折敷，円形板，加工材，竹	近世以降			165
SE8058	円	0.88－0.92－0.51	23.16	中世土師器，曲物，円形板，加工板	13～14C		164	163，164
SE8119	不整形	1.08－0.94－0.48	24.14	箸	13C～14C		164	165

第24表　土器・陶磁器一覧(1)（中世・近世）

挿図	挿図番号	図版番号	遺構番号	座標	種類	器種	法量(口径・器高・底径・高台径cm)	色調		釉調		年代	備考
132	693	170	SP97	SB45	中国製白磁	碗V類－4	18.0－	7.5Y7/1	灰白色	7.5Y7/2	灰白色	1140－1200	
	694	170	SP1020	SB49	中世土師器	皿NDII	9.0－＊＊－＊＊－1.0－	7.5YR5/2	灰褐色			13～14C	
	705	170	SP7144	SB65	土師器	皿	＊＊－＊＊－3.3－	10YR7/3	にぶい黄橙色			平安	
	706	170	SP7140	SB65	土師器	皿	＊＊－＊＊－5.4－	10YR7/2	にぶい黄橙色			平安	
	707	170	SP7172	SB66	中世土師器	皿RC	8.5－1.7－5.6－	10YR5/3	にぶい黄橙色			13～15C	口縁部に煤付着
	708	170	SP7172	SB66	中世土師器	皿	9.4－2.1－＊＊－1.2－	10YR6/2	灰黄褐色				
	709	170	SP7176	SB66	中世土師器	皿	10.0－＊＊－＊＊－1.1－	10YR7/3	にぶい黄橙色				
	712	170	SP7099	SB68	珠洲	擂鉢	20.1－	2.5Y6/1	黄灰色			1150～1200	I期
	713	170	SP7091	SB68	珠洲	四耳壺		10YR7/2	にぶい黄橙色			1150～1250	I～II期
133	714		SP7063	SB69	珠洲	甕		N6/0	灰色			1150～1250	I～II期
	726	170	SP9216		中世土師器	皿NC I	14.0－＊＊－＊＊－1.5－	2.5Y8/3	淡黄色			13～14C	
134	732	170	SP1012		中世土師器	皿NDII	8.8－1.2－＊＊－0.8－	10YR7/4	にぶい黄橙色			13～14C	
	733	170	SP4008		中世土師器	皿NC	12.9－2.2－	10YR7/3	にぶい黄橙色			13～14C	
	734	170	SP4008		中世土師器	皿NC	14.7－	10YR6/2	灰黄褐色			13～14C	
	735	170	SP8080		珠洲	擂鉢	31.6－	2.5Y6/1	黄灰色			1300～1375	IV期
	737	170	SP7084		中世土師器	皿RB?	＊＊－＊＊－4.4－	7.5YR7/2	明褐灰色			12C	
	738	170	SP7198		中世土師器	皿R	9.0－1.6－4.8－	5YR7/6	橙色			12～13C?	
	739	170	SP7198		中世土師器	皿NDII	10.0－1.5－	10YR8/2	灰白色			13～14C	
	740	170	SP7210		土師器	椀	＊＊－＊＊－6.0－	10YR6/2	灰黄褐色			平安	
	741	170	SP7210		土師器	椀	14.0－	10YR7/2	にぶい黄橙色			平安	
	742	170	SP7241		土師器	椀	11.9－	5YR6/4	にぶい橙色			平安	
	744	170	SP8100		中世土師器	皿NCII	11.5－＊＊－＊＊－1.3－	10YR7/4	にぶい黄橙色			13～14C	
	745	170	SP9025		中世土師器	皿NDII	7.5－1.3－＊＊－0.8－	10YR6/3	にぶい黄橙色			13～14C	
	746	170	SP9151		中世土師器	皿NBII	14.0－＊＊－＊＊－1.3－	10YR7/3	にぶい黄橙色			13～14C	
137	749	171	SD42		珠洲	甕	30.0－	N7/0	灰白色			1150～1200	I期
	750	171	SD42		珠洲	壺		2.5Y7/1	灰白色			1150～1250	I～II期，櫛描文
	751	171	SD42	X241Y106	中国製白磁	碗IV類		2.5GY8/1	灰白色			1060～1160	
	754		SD42		羽口			7.5YR6/4	にぶい橙色				
	756		SD45	X230Y97	土師器	椀	＊＊－＊＊－6.7－	10YR7/3	にぶい黄橙色			平安	
	757	171	SD46	X210Y115	土師器	椀	＊＊－＊＊－5.1－	7.5YR7/4	にぶい橙色			平安	
	758	171	SD46	X216Y110	中世土師器	皿NDII	8.0－1.2－＊＊－0.8－	10YR7/2	にぶい黄橙色			13～14C	
	759	171	SD46	X217Y108	中世土師器	皿NDII	8.2－1.0－＊＊－1.2－	2.5Y7/3	浅黄色			13～14C	
	760	172	SD46	X217Y108	中世土師器	皿NDII	8.8－1.2－＊＊－0.8－	10YR6/2	灰黄褐色			13～14C	
	761	171	SD46	X216Y111	中世土師器	皿NDII	9.0－1.5－＊＊－0.9－	10YR7/2	にぶい黄橙色			13～14C	
	762	171	SD46		中世土師器	皿NJ	9.1－2.0－	10YR6/2	灰黄褐色			15～16C	
	763	171	SD46	X211Y114	土師器	皿	＊＊－＊＊－4.8－	7.5YR7/3	にぶい橙色			平安	
	764	172	SD46	X211Y115	中世土師器	皿NDII	10.0－2.0－＊＊－1.1－	2.5Y7/2	灰黄色			13～14C	
	765	171	SD46	X228Y103	中世土師器	皿NC	13.0－	7.5YR6/4	にぶい橙色			13～14C	
	766	171	SD46		中国製白磁	碗		7.5Y8/1	灰白色	7.5Y8/1	灰白色		
	767	171	SD46		中国製白磁	碗V類－4		7.5Y7/1	灰白色	7.5Y7/1	灰白色		
	768	171	SD46	X211Y115	中国製白磁	碗V類－4	15.0－	N8/0	灰白色	7.5Y8/1	灰白色		文様輪花
	769	171	SD46	X217Y108	中国製青磁	碗D類	14.2－	N7/0	灰白色	7.5GY6/1	オリーブ灰色		龍泉窯系
138	770	171	SD46	X229Y102 X238Y105	珠洲	甕	40.0－	5Y6/1	灰色			1150～1250	I～II期
	771	171	SD46		珠洲	甕	38.0－	N3/0	暗灰色			1150～1250	I～II期
	772	171	SD46	X235Y100	珠洲	甕		2.5Y7/2	灰黄色			1150～1250	I～II期
	773	171	SD46		珠洲	甕	36.0－	N6/0	灰色			1250～1375	III～IV期
	774・775・776	171	SD46	X230Y109 X241Y107	珠洲	甕		N6/0	灰色				
	777		SD46	X235Y100	珠洲	甕	＊＊－＊＊－13.1－	N6/0	灰色				
	778	171	SD46		珠洲	擂鉢		N6/0	灰色			1150～1250	I～II期
	779	171	SD46	X217Y108	珠洲	擂鉢		N6/0	灰色			1300～1375	IV期
	780	171	SD46	X217Y108	珠洲	擂鉢		7.5Y6/1	灰色				
	781	171	SD46	X216Y110	珠洲	擂鉢	25.4－	N6/0	灰色			1200～1250	II期
	782	171	SD46	X215Y111 X216Y111	珠洲	擂鉢	28.0－	N6/0	灰色			1300～1375	IV期

第24表　土器・陶磁器一覧(2)（中世・近世）

挿図	挿図番号	図版番号	遺構番号	座標	種類	器種	法量(口径・器高・底径・高台径cm)	色調		釉調		年代	備考
138	783	171	SD46	X217Y108	珠洲	擂鉢	24.0−	5Y6/1	灰色				
	784	171	SD46	X217Y108 X211Y114	珠洲	擂鉢	＊＊−＊＊−14.0−	N6/0	灰色			1200～1300	II～III期
	785	171	SD46		珠洲	擂鉢	＊＊−＊＊−12.0−	N6/0	灰色			1200～1300	II～III期
	786	171	SD46	X216Y113	珠洲	擂鉢		7.5Y6/1	灰色				
	787	171	SD46	X217Y108	瓷器系陶器	壷	5.4−	N7/0	灰白色	10YR4/2	灰黄褐色		
143	809	172	SD4001		須恵器	壷	10.7−	N7/0	灰白色			平安	
	810	172	SD4001		土師器	椀？	＊＊−＊＊−5.3−	10YR7/3	にぶい黄橙色			平安	
	811		SD4001		土師器	皿	＊＊−＊＊−3.8−	10YR6/2	灰黄褐色			平安	
	812	172	SD4001		製塩土器			5YR6/6	橙色			平安	平底
	813	172	SD4001		珠洲	四耳壷	13.0−	N7/0	灰白色				
	814	172	SD4001		珠洲	四耳壷		2.5Y8/1	灰白色				
	815	172	SD4001		珠洲	擂鉢	23.0−	N5/0	灰色			1150～1250	I～II期
	822	172	SD7001		土師器	皿	8.3−2.2−4.0−	5YR6/3	にぶい橙色			平安	
	823	172	SD7001		土師器	皿	10.1−	10YR7/2	にぶい黄橙色			平安	内外面に煤付着
	824	172	SD7010		土師器	皿	14.0−	2.5Y6/1	黄灰色			平安	
	825	172	SD8001	X112Y46 X102Y44	土師器	皿	9.8−2.8−5.2−1.5−	2.5Y6/3	にぶい黄色				
	826	172	SD8056	X76Y43	中世土師器	IIINDII	5.8−1.4−＊＊−0.8−	2.5Y7/3	浅黄色				
146	827	173	SD8043	X73Y50	土師器	高杯		10YR6/3	にぶい黄橙色			古墳	
	828	173	SD8043	X95Y45 X93Y49	灰釉	皿	＊＊−＊＊−6.6−	2.5Y7/1	灰白色			9C前半	転用硯
	829	172	SD8043	X75Y48	中世土師器	IIINDII	8.1−1.6−＊＊−1.1−	10YR8/3	浅黄橙色			13～14C	
	830	173	SD8043	X75Y50	中世土師器	IIINDII	9.0−＊＊−＊＊−1.2−	10YR7/3	にぶい黄橙色			13～14C	口縁部に煤付着
	831	172	SD8043	X95Y48	中世土師器	IIINDII	8.6−＊＊−5.5−0.9−	10YR7/3	にぶい黄橙色			13～14C	
	832	173	SD8043	X73Y50	中世土師器	IIINBII	9.4−2.6−＊＊−1.2−	10YR7/4	にぶい黄橙色			13C前半	内面黒変
	833	173	SD8043	X72Y50	中世土師器	IIINDII	9.2−3.2−	10YR8/3	浅黄橙色			13～14C	
	834	173	SD8043	X75Y48 X70Y51	中世土師器	IIINCII	11.0−＊＊−＊＊−1.5−	10YR7/2	にぶい黄橙色			13～14C	
	835	172	SD8043	X73Y50	中世土師器	IIINCII	11.7−2.8−＊＊−1.6−	10YR7/3	にぶい黄橙色			13～14C	
	836	172	SD8043	X75Y48	中世土師器	IIINCI	10.5−3.2−＊＊−1.1−	10YR7/3	にぶい黄橙色			13～14C	
	837	172	SD8043	X96Y48	中世土師器	IIINCII	12.0−3.5−＊＊−1.0−	10YR6/3	にぶい黄橙色			13～14C	外面に煤付着
	838	173	SD8043	X76Y49	中世土師器	IIINC	12.0−3.1−7.0−1.6−	10YR7/3	にぶい黄橙色			13～14C	煤付着
	839	173	SD8043	X77Y48	中世土師器	IIINCII	12.0−＊＊−＊＊−1.2−	10YR6/2	灰黄褐色			13～14C	外面に煤付着
	840	172	SD8043	X76Y49	中世土師器	IIINCI	12.4−2.2−＊＊−1.7−	10YR7/3	にぶい黄橙色			13～14C	内面に煤付着
	841	173	SD8043	X69Y51	中世土師器	IIINCII	12.6−＊＊−＊＊−1.8−	10YR7/4	にぶい黄橙色			13～14C	
	842	173	SD8043	X76Y49	中世土師器	IIINCI	13.0−＊＊−＊＊−2.0−	10YR7/3	にぶい黄橙色			13～14C	
	843		SD8043	X76Y49	中世土師器	IIINBI	14.0−2.6−9.6−1.4−	10YR7/3	にぶい黄橙色			12C末～13C前	外面に煤付着
	844	173	SD8043	X73Y48	中世土師器	IIINBI？	14.0−＊＊−＊＊−1.2−	10YR6/2	灰黄褐色			12C末～13C前	煤付着
	845	173	SD8043	X76Y49	中世土師器	IIINAII?	16.0−＊＊−＊＊−2.9−	10YR7/3	にぶい黄橙色			12C	
	846	173	SD8043	X76Y49 X76Y51 X70Y52	珠洲	甕	58.0−	2.5Y7/1	灰白色				I期
	847	173	SD8043	X65Y52	珠洲	壷	23.0−	7.5YR7/3	にぶい橙色				III期？
	848	173	SD8043	X88Y52	珠洲	擂鉢	31.0−	N6/0	灰色				I～II期，文様波状文
	849	173	SD8043	X74Y37	珠洲	擂鉢	32.0−	N7/0	灰白色				IV期
	850	173	SD8043	X76Y49	珠洲	擂鉢	29.0−	N6/0	灰色				IV期
	851	173	SD8043	X85Y47 X75Y48	珠洲	擂鉢	＊＊−＊＊−11.7−	N7/0	灰白色				II～III期
148	878	174		X67Y55	土師器	甕	22.3−34.0−	2.5YR7/3	浅黄色			7C	煤付着
	879	174		X65Y57	土師器	甕		10YR6/3	にぶい黄橙色			7C	部分的に黒変
	880	174		X65Y56 X70Y55	土師器	椀	12.8−4.2−	10YR6/3	にぶい黄橙色			7C	
	881	174		X67Y55	黒色土器	鉢	16.0−8.0−	2.5Y6/2	灰黄色			7C	内外面に煤付着
	882	177		X88Y50	須恵器	椀	11.7−	2.5Y7/2	灰黄色			平安	
	883	177		X100Y47	須恵器	壷		N6/0	灰色			平安	
	884	177		X94Y49	土師器	皿	＊＊−＊＊−6.8−	7.5YR6/3	にぶい褐色			平安	有高台
	885	177		X80Y56	土師器	椀	10.8−	10YR7/3	にぶい黄橙色			平安	
	886	174			土師器	椀	10.4−3.0−4.4−0.8−	2.5Y7/3	浅黄色			平安	
	887	177		X58Y58	土師器	椀	13.8−5.0−6.0−	10YR6/4	にぶい黄橙色			平安	
	888	177		X101Y43	土師器	椀	13.6−	10YR6/2	灰黄褐色			平安	

第24表　土器・陶磁器一覧(3)（中世・近世）

挿図	挿図番号	図版番号	遺構番号	座標	種類	器種	法量(口径・器高・底径・高台径cm)	色調		釉調		年代	備考
148	889	177		X106Y43	土師器	椀	13.6−	10YR6/2	灰黄褐色			平安	
	890	174		X85Y51	土師器	皿	8.8−2.1−3.9−1.5−	5YR6/3	にぶい橙色			平安	
	891	175		X88Y50	土師器	皿	8.1−2.1−4.0−1.2−	10YR7/3	にぶい黄橙色			平安	
	892	177		X63Y53	土師器	皿	9.0−2.4−5.0−1.5−	10YR7/3	にぶい黄橙色			平安	
	893	177			土師器	皿	9.0−2.0−4.5−1.0−	10YR6/3	にぶい黄橙色			平安	
	894	175		X88Y51	土師器	皿	8.8−2.0−5.0−0.3−	10YR7/3	にぶい黄橙色			平安	
	895	175			土師器	皿	8.5−1.7−5.6−	10YR6/3	にぶい黄橙色			平安	
	896	177		X88Y50	土師器	皿	9.2−2.1−4.0−0.9−	10YR7/3	にぶい黄橙色			平安	
	897	177		X88Y50	土師器	皿	＊＊−＊＊−4.0−	5YR6/2	灰褐色			平安	
	898	177		X105Y44	土師器	皿	8.8−2.1−4.8−1.2−	10YR7/3	にぶい黄橙色			平安	
	899	177		X60Y57	土師器	皿	9.2−2.1−6.1−1.8−	10YR6/2	灰黄褐色			平安	
	900	177		X65Y57	土師器	皿	9.0−1.4−6.4−1.3−	2.5Y7/2	灰黄色			平安	
	901	177		X60Y57	土師器	皿	13.8−＊＊−6.4−1.5−	10YR6/3	にぶい黄橙色			平安	
	902	177		X81Y54	土師器	皿？	15.8−	10YR5/2	灰黄褐色			平安	
	903	177		X88Y50	土師器		＊＊−＊＊−6.0−	10YR6/4	にぶい黄橙色			平安？	
	904	175		X88Y50	中世土師器	ⅢRA	＊＊−＊＊−6.2−	10YR8/3	浅黄橙色			12C	内面黒変
	905	177		X100Y46	中世土師器	ⅢRA	＊＊−＊＊−5.6−	2.5Y8/3	淡黄色			12C	底部穿孔
149	906	177		X68Y55	中世土師器	ⅢNDⅡ	8.0−1.4−＊＊−1.0−	10YR6/3	にぶい黄橙色			13～14C	
	907	175			中世土師器	ⅢNDⅠ	9.2−1.8−＊＊−1.2−	10YR7/4	にぶい黄褐色			13～14C	
	908	175		X70Y55	中世土師器	ⅢNDⅡ	9.0−2.0−＊＊−1.3−	7.5YR7/4	にぶい橙色			13～14C	
	909	177		X74Y56	中世土師器	ⅢNDⅠ	9.4−＊＊−＊＊−1.1−	10YR6/2	灰黄褐色			13～14C	
	910	177		X83Y51	中世土師器	ⅢNCⅡ	11.1−＊＊−＊＊−2.0−	7.5YR7/4	にぶい橙色			13～14C	
	911	177		X65Y52	中世土師器	ⅢNCⅡ?	11.0−1.5−8.2−1.4−	10YR6/2	灰黄褐色			13～14C	黒変
	912	177		X67Y52	中世土師器	ⅢNCⅢ?	10.8−	10YR8/3	浅黄橙色			13～14C	
	913	177		X70Y52	中世土師器	ⅢNCⅢ	11.4−3.2−	10YR7/2	にぶい黄橙色			13～14C	
	914	177		X80Y48	中世土師器	ⅢNCⅠ	11.8−3.4−＊＊−1.2−	7.5Y7/3	にぶい橙色			13～14C	
	915	177		X65Y57	中世土師器	ⅢNBⅠ	13.8−＊＊−＊＊−1.5−	10YR8/2	灰白色			12C末～13C前	
	916	176		X88Y50	中世土師器	ⅢNBⅠ?	14.5−3.6−＊＊−1.6−	2.5Y7/3	浅黄色			12C末～13C前	
	917	177		X65Y57	中世土師器	ⅢNAⅡ	16.0−2.3−＊＊−2.0−	10YR7/2	にぶい黄橙色			12C	
	918	177		X70Y55	中世土師器	ⅢNAⅡ	17.0−＊＊−＊＊−0.9−	10YR8/3	浅黄橙色			12C	
	919	178		X92Y49	珠洲	甕	41.0−	7.5Y7/1	灰白色			1150～1200	Ⅰ期
	920	178		X74Y56	珠洲	甕	43.4−	10YR6/1	褐灰色			1200～1250	Ⅱ期
	921	176		X88Y47	珠洲	擂鉢	20.5−8.1−9.0−	7.5Y5/1	灰色			1150～1250	Ⅰ～Ⅱ期，内外面に一部煤付着
	922	178		X89Y50	珠洲	擂鉢	25.6−	N6/0	灰色			1200～1250	Ⅱ期
	923	178		X64Y55	珠洲	擂鉢	26.6−13.2−10.0−	N6/0	灰色			1200～1250	Ⅱ期，外面に煤付着
	924	178		X80Y55	珠洲	擂鉢	30.2−	N6/0	灰色			1200～1250	Ⅱ期
	925	178		X70Y51	珠洲	擂鉢	＊＊−＊＊−11.4−	N6/0	灰色				
	926	178		X78Y52	珠洲	擂鉢		N6/0	灰色				
	927	178		X70Y52	珠洲	擂鉢	28.8−	N6/0	灰色			1250～1375	Ⅲ～Ⅳ期
	928	178		X76Y48 X70Y51	珠洲	擂鉢	32.8−	N5/0	灰色			1300～1375	Ⅳ期
	929	176		X87Y51	珠洲	四耳壺	13.4−	N7/0	灰白色			1150～1200	Ⅰ期
150	930	178		X101Y43	中国製白磁	碗Ⅱ類	14.0−	N7/0	灰白色	10Y8/1	灰白色	1060～1160	
	931	178		X89Y50	中国製白磁	碗Ⅴ類2	16.0−	10Y8/1	灰白色	10Y8/1	灰白色	1060～1160	
	932	178		X65Y57	中国製白磁	碗Ⅳ類	＊＊−＊＊−7.2−	2.5Y7/2	灰黄色	5Y7/2	灰白色	1060～1160	
	933	178		X78Y54	中国製白磁	碗Ⅳ類	＊＊−＊＊−8.0−	2.5Y8/2	灰白色	2.5Y8/2	灰白色	1060～1160	
	934	178		X76Y51	中国製白磁	皿Ⅳ類1a	＊＊−＊＊−4.0−	2.5Y8/2	灰白色	2.5Y8/2	灰白色	1060～1160	
	935	178		X78Y52	中国製青磁	碗	＊＊−＊＊−4.1−	10Y5/1	灰色	10Y5/2	オリーブ灰色		
	936	178		X95Y45	中国製青磁	稜花皿	12.0−	N7/0	灰白色	7.5GY5/1	緑灰色	15C	櫛描波状文
	937	178			土師質土器	火舎	＊＊−＊＊−16.0−	2.5Y7/3	浅黄色				
	938	178		X101Y45	須恵器	転用硯		7.5Y6/1	灰色			平安	
	942	176		X84Y46	伊万里	碗	9.0−6.1−4.0−	N7/0	灰白色			18C前半	コンニャク印判5B6/2青灰色
162	1037	179	SD9104		中世土師器	ⅢNBⅠ	13.0−2.5−7.9−0.8−	10YR6/3	にぶい黄橙色			13C前半	
	1038	179	SD9128	X45Y52	中世土師器	ⅢNDⅡ	8.0−1.4−7.4−0.9−	10YR8/3	浅黄橙色			13～14C	
	1039	179	SD9148	X45Y20	珠洲	擂鉢		N6/0	灰色			1200～1300	Ⅱ～Ⅲ期

第24表　土器・陶磁器一覧(4)（中世・近世）

挿図	挿図番号	図版番号	遺構番号	座標	種類	器種	法量(口径・器高・底径・高台径cm)	色調		釉調		年代	備考
162	1040	179	SD9148	X95Y26	土師器	Ⅲ	15.8−4.9−6.8−	5YR6/4	にぶい橙色			平安	内面に煤付着
	1041	179	SD44	X238Y112	中国製染付	Ⅲ	＊＊−＊＊−3.0−	N8/0	灰白色			1510～1570	染付2.5PB5/4くすんだ青色，碁笥底
	1042	179	SD44		中国製白磁	碗Ⅸ類	10.2−	N8/0	灰白色			1250～1330	口禿
	1043	179	SD44		珠洲	擂鉢	36.0−	2.5Y6/1	灰色			1375～1450	Ⅴ期
	1044	179	SD44		伊万里	碗	13.4−	N8/0	灰白色			江戸	染付2.5PB5/4くすんだ青色
	1045	179	SD44		伊万里	紅Ⅲ	4.8−1.1−1.5−	N8/0	灰白色			1800～1860	菊花型押
	1046	179	SD44		伊万里	碗	10.6−	N8/0	灰白色			1650～1670	染付10G6/1緑灰色
	1047	179	SD44		陶器	擂鉢	36.0−	5Y7/1	灰白色			江戸～	(鉄釉)
	1048	179	SD44		信楽	灯明受Ⅲ	11.8−2.2−5.0−	10YR8/3	浅黄橙色	2.5Y7/3	浅黄色	1800～	
	1052	179	SD187		中世土師器	ⅢNDⅡ	10.0−＊＊−＊＊−0.8−	2.5Y3/1	黒褐色			13～14C	
	1053	179	SD188		越中瀬戸	Ⅲ	8.8−	N6/0	灰色	7.5YR3/4	暗褐色	江戸	(鉄釉)
	1054	179	SD188		信楽	灯明受Ⅲ	11.4−	N8/0	灰白色	7.5Y7/2	灰白色	1800～	
	1055	179	SD188	X218Y117	唐津	Ⅲ	＊＊−＊＊−5.0−	5Y8/1	灰白色	5Y1/5	緑灰色	江戸	内野山西窯系，蛇の目釉剝
	1056	179	SD188		磁器	Ⅲ	＊＊−＊＊−10.0−	N8/0	灰白色			江戸～	色絵
	1057	179	SD3087	X175Y96	珠洲	擂鉢	31.0−	N7/0	灰白色			1200～1250	Ⅱ期
165	1062	180	SE7020		土師器	Ⅲ	＊＊−＊＊−7.0−	10YR7/2	にぶい黄橙色			平安	
	1063	180	SE7020		土師器	Ⅲ	＊＊−＊＊−4.2−	10YR7/3	にぶい黄橙色			平安	
	1070	179	SE8058		中世土師器	ⅢNDⅡ	7.9−1.5−＊＊−0.6−	10YR6/2	灰黄褐色			13～14C	
	1071	180	SE8058		中世土師器	ⅢNDⅠ	10.0−2.2−3.0−1.0−	10YR7/3	にぶい黄橙色			13～14C	
	1072	180	SE8058		中世土師器	ⅢNC	11.7−＊＊−＊＊−0.8−	10YR4/1	褐灰色			13～14C	
168	1076	180	SK67		珠洲	甕	38.0−	N6/0	灰色			1250～1375	Ⅲ～Ⅳ期
	1079	180	SK121		中世土師器	ⅢNC	12.0−＊＊−＊＊−1.1−	10YR7/3	にぶい黄橙色			13～14C	
	1096	180	SK3057		中世土師器	ⅢNDⅡ	10.6−1.9−＊＊−1.3−	2.5Y8/2	灰白色			13～14C	
169	1103	180	SK5096		中国製白磁	碗Ⅴ類4a	16.0−	7.5Y8/1	灰白色	7.5Y7/1	灰白色	1140～1200	
	1106	180	SK7030		土師器	椀	14.1−4.0−6.0−	10YR5/1	褐灰色			平安	
170	1122	180	SK9002		中世土師器	ⅢNDⅡ	9.0−＊＊−＊＊−1.0−	7.5YR6/4	にぶい橙色			13～14C	
	1123	180	SK9002		中世土師器	ⅢNC	12.0−＊＊−＊＊−1.2−	10YR7/3	にぶい黄橙色			13～14C	
	1124	180	SK9002		中世土師器	ⅢNB?	14.0−＊＊−＊＊−1.3−	10YR8/3	浅黄橙色			13C前半	
	1125	180	SK9093		中世土師器	ⅢNDⅡ	8.5−＊＊−＊＊−1.0−	10YR8/3	浅黄橙色			13～14C	
175	1127	180	SK9134		中世土師器	ⅢNDⅡ	8.0−1.2−6.8−1.0−	10YR7/3	にぶい黄橙色			13～14C	
	1128	180	SK9134		中世土師器	ⅢNC	11.6−＊＊−＊＊−1.1−	10YR6/2	灰黄褐色			13～14C	
	1129	180	SK9134		中世土師器	ⅢNCⅡ	12.0−2.0−10.6−1.3−	7.5YR7/4	にぶい橙色			13～14C	
	1130	180	SK9134		中世土師器	ⅢNBⅠ?	14.0−2.1−13.2−1.3−	7.5YR7/4	にぶい橙色			13C前半	
	1131	180	SK9134		珠洲	擂鉢		2.5Y8/2	灰白色			1250～1375	Ⅲ～Ⅳ期
	1132	180	SK9134	X45～50Y45	珠洲	壺	26.0−36.0−11.6−	N6/0	灰色			1200～1250	Ⅱ期，ヘラ書き
	1133	180	SK9145		中世土師器	Ⅲ	12.0−＊＊−＊＊−1.3−	10YR8/3	浅黄橙色				
	1134	180	SK9146		中世土師器	ⅢNCⅡ	11.0−2.0−5.8−1.4−	10YR5/1	褐灰色			13～14C	
	1136	180	SK9150		中世土師器	ⅢNDⅠ	8.0−1.5−＊＊−0.8−	2.5Y7/3	浅黄色			12C後半	
	1141	180	SK17		伊万里	鉢	15.6−	N8/0	灰白色			1700～1850	染付2.5PB5/4くすんだ青色
	1142	180	SK7070A		陶器	擂鉢	32.0−	2.5YR5/3	にぶい赤褐色	7.5YR3/2	黒褐色	江戸	
177	1146	186	SK8029		伊万里	碗	7.9−3.5−3.6−	N8/0	灰白色			江戸	染付7.5B5/3暗青灰色
	1147	186	SK8029		伊万里	碗	8.9−5.5−3.7−	N8/0	灰白色			1780～1820	染付2.5PB5/4くすんだ青色
	1148	186	SK8029		伊万里	碗	11.6−6.2−4.4−	5Y8/1	灰白色			1820～1880	染付5PB5/4うすい紫みの青色
	1149	181	SK8029		伊万里	碗	10.4−5.4−4.0−	N8/0	灰白色			明治	染付5PB5/6うすい紫みの青色
	1150	186	SK8029		伊万里	碗	9.7−	N8/0	灰白色			江戸	染付5PB4/6くすんだ青色
	1151	186	SK8029		伊万里	碗	＊＊−＊＊−5.8−	N8/0	灰白色			1800～1850	染付2.5PB6/4くすんだ青色，広東型
	1152	181	SK8029		伊万里	段重	7.2−3.5−4.8−	N8/0	灰白色			1780～1860	染付2.5PB4/4くすんだ青色
	1153	181	SK8029		伊万里	Ⅲ	＊＊−＊＊−8.1−	N8/0	灰白色			1750～1800	染付2.5PB5/3くすんだ青色，高台下部に砂目
	1154	186	SK8029		伊万里	Ⅲ	＊＊−＊＊−9.2−	N8/0	灰白色			江戸	染付2.5PB4/4くすんだ青色
	1155	186	SK8029		瀬戸美濃	椀	＊＊−＊＊−5.6−	2.5Y8/2	灰白色			1800～1860	本業Ⅲ，染付2.5B4/2暗い灰青色
	1156	181	SK8029		瀬戸美濃	椀	6.9−6.0−3.2−	N8/0	灰白色			1808～	染付5PB4/6くすんだ青色
	1157	186	SK8029		瀬戸美濃	椀	10.5−5.8−3.9−	5Y8/1	灰白色			幕末～明治初期	染付2.5PB6/4くすんだ青色
	1158	186	SK8029		瀬戸美濃	椀	9.0−4.7−3.4−	N8/0	灰白色			幕末～明治初期	染付5PB3/8青色
	1159	181	SK8029		瀬戸美濃	椀	7.4−6.1−4.0−	N8/0	灰白色			明治？	染付5PB3/8青色

第24表　土器・陶磁器一覧(5)（中世・近世）

挿図	挿図番号	図版番号	遺構番号	座標	種類	器種	法量(口径・器高・底径・高台径cm)	色調		釉調		年代	備考
177	1160	181	SK8029		瀬戸美濃	皿	10.8－2.3－5.8－	N8/0	灰白色			明治	染付2.5PB2/8くすんだ青色
	1161	181	SK8029		瀬戸美濃	火入れ	＊＊－＊＊－7.3－	5Y8/1	灰白色			明治	染付5PB5/6うすい紫みの青色
	1162	186	SK8029		九谷？	椀	9.0－4.0－3.5－	N8/0	灰白色			幕末～明治初期	色絵
	1163	186	SK8029		九谷？	椀	9.4－	7.5Y8/1	灰白色			幕末～明治初期	色絵
	1164	186	SK8029		信楽	灯明皿	12.0－2.5－5.8－	2.5Y7/1	灰白色			1800～	(灰釉)
	1165	186	SK8029		信楽	灯明皿	12.0－2.2－4.8－	2.5Y8/2	灰白色	2.5Y7/3	浅黄色	1800～	(灰釉)
	1166	186	SK8029		越中丸山	椀	10.2－6.7－5.4－	7.5Y6/1	灰色	7.5G5/2	緑灰色	江戸～	
	1167	186	SK8029		越中丸山	瓶	＊＊－＊＊－7.0－	10YR6/1	褐灰色	10YR3/1	黒褐色	江戸～	(灰釉)5YR6/2灰オリーブ色
	1168	186	SK8029		越中丸山	鉢	13.0－	10YR6/1	褐灰色	5YR6/2	灰オリーブ色	江戸～	ハリ跡
178	1169・1170	186	SK8029		越中丸山	土瓶	10.0－	10YR7/4	にぶい黄橙色	5GY4/4	暗い灰黄緑色	江戸～	口禿，煤付着，蓋有り（口径8.2）(灰釉)5Y4/3暗オリーブ色
	1171	186	SK8029		越中丸山	椀	＊＊－＊＊－6.0－	10YR8/4	浅黄橙色	10YR2/2	黒褐色	江戸～	(鉄釉・灰釉)10YR8/1灰白色
	1172	186	SK8029		越中丸山	蓋	14.0－4.0－	7.5YR8/4	浅黄橙色	7.5YR3/2	黒褐色	江戸～	
	1173	186	SK8029		越中丸山	蓋	12.0－	10YR8/3	浅黄橙色	7.5YR5/4	にぶい褐色	江戸～	
	1174	181	SK8029	X87Y56	越中丸山	薬瓶	＊＊－＊＊－6.6－	10YR8/4	浅黄橙色	7.5Y5/3	灰オリーブ色	江戸～	(灰釉)2.5Y8/3淡黄色
	1175	182	SK8029	X86Y54	陶器	甕	18.8－20.8－11.0－	7.5YR5/2	灰褐色	7.5YR3/2	黒褐色	江戸～	(鉄釉)
	1176	186	SK8029		越中丸山	甕	30.2－	7.5Y6/1	灰色	2.5Y5/2	暗灰黄色	江戸～	(灰釉外面)5Y7/1灰白色
	1177	182	SK8029・30		瀬戸美濃	椀	10.0－6.3－5.4－	2.5Y7/1	灰白色			1800～1860	本業Ⅲ？染付2.5B4/2暗い灰青色
	1178	186	SK8029・30		瀬戸美濃	椀	3.8－	N8/0	灰白色			明治？	染付5PB5/6うすい紫みの青色
	1179	182	SK8029・30		瀬戸美濃	椀	10.3－5.4－3.7－	N8/0	灰白色			明治？	染付5PB3/8青色
	1180	186	SK8029・30		瀬戸美濃	椀	＊＊－＊＊－3.6－	N8/0	灰白色			明治？	染付5PB5/6うすい紫みの青色
	1181		SK8029・30		瓦質土器	火入れ？	11.0－7.3－9.2－	2.5Y8/3	淡黄色				
	1182	182	SK8029・30		瀬戸美濃	皿	10.2－2.2－5.8－	N8/0	灰白色			幕末～明治	染付5PB5/6うすい紫みの青色
	1183	182	SK8029・30		九谷？	椀	9.6－4.6－3.2－	N8/0	灰白色			江戸～	色絵
	1184	186	SK8029・30	X86Y54	越中丸山	瓶	＊＊－＊＊－8.0－	2.5Y6/1	黄灰色	10YR3/4	暗褐色	江戸～	(灰釉) 10Y6/1灰色
	1185	186	SK8029・30		唐津？	甕	15.0－16.2－9.4－	5YR6/4	にぶい橙色	10YR4/3	にぶい黄褐色	江戸	(鉄釉)5YR6/4にぶい橙色
179	1186	187	SK8030		伊万里	碗	10.5－	N8/0	灰白色			1750～	染付7.5B6/3青灰色
	1187	187	SK8030		伊万里	碗	10.1－	N8/0	灰白色			1750～	染付5PB5/6うすい紫みの青色
	1188	182	SK8030		伊万里	碗	10.8－5.7－4.8－	5Y8/1	灰白色			幕末～明治	染付5PB4/6くすんだ青色
	1189	182	SK8030		伊万里	碗	8.0－5.0－3.4－	N8/0	灰白色			1780～1860	染付7.5B5/2暗青灰色
	1190	183	SK8030		伊万里	碗	7.6－4.8－3.6－	N7/0	灰白色			1780～1860	染付2.5PB7/3うすい青色
	1191	187	SK8030		伊万里	碗	＊＊－＊＊－3.4－	N8/0	灰白色			1780～1860	染付5PB5/4うすい紫みの青色
	1192	187	SK8030		伊万里	碗	7.0－5.7－3.8－	N8/0	灰白色			1780～1860	染付7.5B3/8青色
	1193	187	SK8030		伊万里	碗	9.8－	N7/0	灰白色			1800～1850	染付5B5/2暗青灰色，広東型
	1194	187	SK8030		伊万里	碗	10.8－	5Y8/0	灰白色			1780～1860	染付2.5PB5/6くすんだ青色，蓋物
	1195	187	SK8030		伊万里	碗	＊＊－＊＊－6.4－	N8/0	灰白色			1800～1850	染付7.5B5/3暗青灰色，広東型
	1196	187	SK8030		伊万里	皿	12.6－3.7－7.8－	N7/0	灰白色			1750～1800	染付10BG7/1明青灰色
	1197	187	SK8030		伊万里	皿	11.8－	N8/0	灰白色			1750～1800	染付7.5B5/3暗青灰色，蛇の目釉剝
	1198	183	SK8030		伊万里	皿	11.5－3.6－4.6－	7.5Y8/1	灰白色			1750～1800	染付2.5GY6/1オリーブ灰色
	1199	187	SK8030		伊万里	皿	12.2－3.4－5.0－	N8/0	灰白色			1750～1800	染付10G6/1緑灰色，蛇の目釉剝，重ね焼き痕
	1200	187	SK8030		瀬戸美濃	小瓶	＊＊－＊＊－2.6－	N8/0	灰白色			1808～	染付7.5B7/3青灰色
	1201	183	SK8030		伊万里	瓶	＊＊－＊＊－5.8－	5Y8/1	灰白色			江戸	染付7.5B5/3暗青灰色
	1202	183	SK8030		伊万里？	瓶	＊＊－＊＊－8.1－	N8/0	灰白色			幕末～明治	染付2.5PB6/4くすんだ青色
	1203	183	SK8030		瀬戸美濃	椀	10.4－5.8－5.2－	7.5Y7/1	灰白色			1800～1860	本業Ⅲ？染付5B6/2青灰色
	1204	183	SK8030		瀬戸美濃	椀	8.3－6.0－3.5－	N7/0	灰白色			1800～1860	本業Ⅲ？染付5PB3/6くすんだ青色
	1205	187	SK8030		瀬戸美濃	椀	10.0－	N8/0	灰白色			明治	染付2.5PB2/8くすんだ青色
180	1206	187	SK8030		瀬戸美濃	椀	11.1－	N8/0	灰白色			明治	染付5PB3/8青色
	1207	183	SK8030		瀬戸美濃	椀	10.9－5.8－3.9－	N8/0	灰白色			明治	染付5PB5/6うすい紫みの青色，内外底面に墨書「イ△」
	1208	187	SK8030		瀬戸美濃	椀	10.2－6.3－4.4－	N8/0	灰白色			1850～	染付2.5PB6/4くすんだ青色
	1209	183	SK8030		瀬戸美濃	椀	9.3－5.1－3.4－	N8/0	灰白色			1850～	染付2.5PB6/5くすんだ青色
	1210	184	SK8030		瀬戸美濃	椀		N8/0	灰白色			1850～	染付5PB4/6くすんだ青色，外底面に墨書
	1211	184	SK8030		瀬戸美濃	椀	8.2－4.4－2.8－	N8/0	灰白色			1850～	染付5PB3/6くすんだ青色，口縁
	1212	184	SK8030		瀬戸美濃	皿	8.0－2.5－3.7－	N8/0	灰白色			1850～	染付2.5PB5/6くすんだ青色，角皿

第24表　土器・陶磁器一覧(6)（中世・近世）

挿図	挿図番号	図版番号	遺構番号	座標	種類	器種	法量(口径・器高・底径・高台径cm)	色調		釉調		年代	備考
180	1213	184	SK8030		瀬戸美濃	仏飯器	5.6－5.2－4.2－	N8/0	灰白色			明治	染付5PB3/8青色
	1214	187	SK8030		磁器	台付酒杯？	＊＊－＊＊－3.8－	N8/0	灰白色				
	1215	184	SK8030		磁器	碗	11.0－6.6－3.9－	5Y8/1	灰白色			明治	摺絵，染付2.5PB2/8くすんだ青色
	1216	184	SK8030		磁器	碗	11.5－5.9－4.0－	N8/0	灰白色			明治	摺絵，染付5PB3/8青色
	1217	187	SK8030		瀬戸美濃？	瓶		N8/0	灰白色			明治	染付5PB3/10青色
	1218	187	SK8030		磁器	皿	9.0－2.2－5.3－	2.5Y8/1	灰白色			江戸～	染付2.5PB5/4くすんだ青色
	1219	187	SK8030		磁器	皿？	＊＊－＊＊－3.2－	N8/0	灰白色			江戸～	染付2.5PB4/6くすんだ青色
	1220	184	SK8030		九谷？	皿	10.2－2.4－6.6－	N7/0	灰白色			江戸～	色絵
	1221	187	SK8030		九谷？	椀	7.8－5.7－2.9－	5Y9/1	灰白色			江戸～	色絵
	1222	185	SK8030		陶器	椀	9.4－7.1－5.2－	2.5Y8/3	淡黄色	2.5Y3/1	黒褐色	江戸～	(鉄釉)
181	1223	185	SK8030		越中丸山	椀	10.6－7.0－6.2－	5Y6/1	灰色	5Y4/2	灰オリーブ色	江戸～	(鉄釉・灰釉掛分)10Y7/1灰白色，ハリ跡
	1224	185	SK8030		越中丸山	椀	9.9－6.9－4.3－	7.5Y6/1	灰色	7.5Y3/1	オリーブ黒色	江戸～	(鉄釉・灰釉掛分)5B6/1青灰色，ハリ跡
	1225	187	SK8030		越中丸山	椀	10.4－	5Y6/1	灰色	N5/0	オリーブ灰色	江戸～	(鉄釉・灰釉掛分)5Y8/1灰白色
	1226	185	SK8030		越中丸山	椀	9.9－7.2－4.6－	2.5Y6/2	灰黄色	10YR2/2	黒褐色	江戸～	(鉄釉・灰釉掛分)2.5GY7/1明オリーブ灰色
	1227	187	SK8030		越中丸山	椀	9.8－	7.5Y6/1	灰色	7.5Y3/1	オリーブ黒色	江戸～	(鉄釉・灰釉掛分)5B6/1青灰色
	1228	187	SK8030		越中丸山	椀	10.0－	5YR5/2	灰褐色	10YR2/3	黒褐色	江戸～	(鉄釉・灰釉掛分)7.5Y7/2灰白色
	1229	187	SK8030		越中丸山	椀	9.2－6.5－4.8－	2.5Y7/2	灰黄色	5Y2/1	黒色	江戸～	(鉄釉・灰釉掛分)5Y7/1灰白色
	1230	185	SK8030		越中丸山	椀	8.7－6.0－4.3－	10YR8/4	浅黄橙色	2.5Y4/1	黄灰色	江戸～	(鉄釉・灰釉掛分)10Y7/1灰白色
	1231	185	SK8030		越中丸山	椀	8.1－6.1－4.7－	2.5Y5/1	黄灰色	7.5Y2/2	黒褐色	江戸～	(鉄釉・灰釉掛分)10Y6/1灰色
	1232	185	SK8030		越中丸山	椀	10.4－5.4－4.3－	N6/0	灰色	7.5Y7/2	灰白色	江戸～	(灰釉)
	1233	185	SK8030		越中丸山	椀	9.2－4.3－4.2－	5YR6/6	橙色	7.5Y7/2	灰白色	江戸～	(灰釉)
	1234	187	SK8030	X91Y43	越中丸山	鉢	19.0－5.5－7.3－	5YR5/3	にぶい赤褐色	7.5Y5/2	灰オリーブ色	江戸～	(灰釉)，ハリ跡
	1235 1236	187	SK8030		越中丸山	急須	7.1－2.2－	10YR6/3	にぶい黄橙色	5Y3/1	オリーブ黒色	江戸～	(鉄釉・灰釉掛分)2.5GY6/1オリーブ灰色
	1237	187	SK8030	X87Y56	陶器	鉢	17.8－	5Y6/1	灰色	10GY6/1	緑灰色	江戸～	
	1238	187	SK8030		陶器	鉢	16.2－	2.5Y8/3	淡黄色	2.5Y5/3	黄褐色	江戸～	(緑釉)10GY6/1緑灰色，煤付着
	1239	187	SK8030		陶器	蓋	11.8－3.4－5.0－	2.5Y8/2	灰白色	5Y7/2	灰白色	江戸～	
	1240	185	SK8030		陶器	壺	＊＊－＊＊－9.0－	5YR6/1	褐灰色	2.5Y4/2	暗灰黄色	江戸～	(鉄釉)5YR5/3にぶい赤褐色
	1241	187	SK8030		土製品	人形		10YR6/3	にぶい黄橙色			江戸	
	1242	187	SK8030		土製品	人形	＊＊－(9.4)－	7.5YR6/4	にぶい橙色			江戸	
182	1246	191		X219Y116	須恵器	壺		10YR5/2	灰黄褐色				
	1247			X219Y113	黒色土器	椀	＊＊－＊＊－5.0－	2.5Y7/3	浅黄色			平安	有高台
	1248	191		X108Y48	黒色土器	椀	＊＊－＊＊－5.3－	10YR7/4	にぶい黄橙色			平安	有高台
	1249	188		X215Y217	土師器	皿	8.8－2.0－4.4－	5YR7/3	にぶい橙色			平安	
	1250	191		X91Y65	土師器	椀		10YR6/2	灰黄褐色			平安	
	1251	188		X88Y50	土師器	皿	9.0－2.5－5.8－0.9－	10YR7/3	にぶい黄橙色			平安	
	1252	191		X60Y57	土師器	皿	4.3－	10YR7/3	にぶい黄橙色			平安	
	1253	191		X110Y50	中世土師器	皿RA I	＊＊－＊＊－5.3－	10YR7/3	にぶい黄橙色			12C後半	
	1254	191		X85Y43	中世土師器	皿RA I	＊＊－＊＊－4.9－	10YR7/3	にぶい黄橙色			12C後半	底部穿孔
	1255				土師器		＊＊－＊＊－8.1－	10YR7/3	にぶい黄橙色			平安	
	1256	191		X35Y26	中世土師器	皿NA I	13.4－2.4－＊＊－1.2－	10YR7/3	にぶい黄橙色			12C	
	1257	191		X115Y65	中世土師器	皿NB I	14.0－＊＊－＊＊－1.7－	10YR6/2	灰黄褐色			12C末～13C前	内面黒変，炭化物付着
	1258	191		X92Y18	中世土師器	皿NB I	16.4－＊＊－＊＊－1.8－	10YR6/4	にぶい黄橙色			12C末～13C前	内面黒変，炭化物付着
	1259	191		X74Y48	中世土師器	皿NCIII	8.8－	10YR6/2	灰黄褐色			14C	内外面黒変
	1260	191		X63Y45	中世土師器	皿NG	11.4－3.5－7.7－1.2－	10YR7/2	にぶい黄橙色			13C後～14C	
	1261			X45～50Y50	中世土師器	皿NDII	7.1－＊＊－＊＊－0.9－	10YR7/3	にぶい黄橙色			13～14C	
	1262	191		X97Y66	中世土師器	皿NDII	8.0－＊＊－＊＊－1.1－	10YR6/2	灰黄褐色			13～14C	内外面に煤付着
	1263	191		X85Y47	中世土師器	皿NDII	8.0－＊＊－＊＊－1.1－	10YR6/2	灰黄褐色			13～14C	
	1264			X210Y115	中世土師器	皿NDII	7.8－＊＊－＊＊－0.8－	2.5Y5/2	暗灰黄色			13～14C	炭化物付着
	1265	191			中世土師器	皿NDII	8.4－1.8－＊＊－1.3－	10YR7/4	にぶい黄橙色			13～14C	
	1266			X219Y106	中世土師器	皿NDII	8.8－1.5－＊＊－0.8－	10YR6/2	灰黄褐色			13～14C	
	1267	191		X95Y49	中世土師器	皿NDII	10.0－＊＊－＊＊－1.4－	10YR6/3	にぶい黄橙色			13～14C	
	1268	191		X185Y97	中世土師器	皿NDII	9.9－1.5－＊＊－1.0－	2.5Y7/2	灰黄色			13～14C	
	1269			X100Y60	中世土師器	皿NJ	8.0－＊＊－＊＊－0.4－	7.5YR6/4	にぶい橙色			15C後～16C	内外面口縁部に炭化物付着

第24表　土器・陶磁器一覧(7)（中世・近世）

挿図	挿図番号	図版番号	遺構番号	座標	種類	器種	法量(口径・器高・底径・高台径cm)	色調		釉調		年代	備考
182	1270	191		X219Y108	中世土師器	ⅢNJ	8.4−1.2−	10YR6/3	にぶい黄橙色			15C後～16C	
	1271	191		X70～75Y55	中世土師器	ⅢNJ	9.3−1.3−＊＊−1.0−	10YR7/3	にぶい黄橙色			15C後～16C	
	1272	191			中世土師器	ⅢNJ	8.9−1.5−＊＊−0.6−	10YR7/3	にぶい黄橙色			15C後～16C	
	1273			X219Y108	中世土師器	ⅢNJ	10.0−	10YR7/3	にぶい黄橙色			15C後～16C	
	1274			X210Y115	中世土師器	ⅢNJ	8.8−＊＊−＊＊−0.7−	10YR6/3	にぶい黄橙色			15C後～16C	
	1275	191		X181Y101	中世土師器	ⅢNJ	9.1−	2.5Y7/2	灰黄色			15C後～16C	
	1276	191		X89Y48	瓦器	Ⅲ		10YR8/2	灰白色				暗文（斜格子状）
	1277	191		X135Y61	瀬戸美濃	Ⅲ	11.0−2.3−5.0−	5Y7/1	灰白色	5Y6/2	灰オリーブ色		漆書「門・里・六十」，漆継
	1278	191		X90Y46	瀬戸美濃	Ⅲ	9.2−	5Y7/1	灰白色	7.5Y7/2	灰白色		
	1279	191		X180Y90	瀬戸美濃	Ⅲ	9.8−	5Y8/1	灰白色	5Y7/2	灰白色		端反り，（灰釉）
	1280	191		X78Y51	瀬戸美濃	花瓶		5Y7/1	灰白色	10Y6/2	オリーブ灰色		（灰釉）
	1281	191		X87Y55	瀬戸美濃	大Ⅲ	＊＊−＊＊−5.2−	2.5Y8/3	淡黄色	2.5Y6/4	にぶい黄色		（灰釉），目跡，漆継
183	1282	191		X130Y56	中国製白磁	碗Ⅱ類	15.2−	2.5Y8/1	灰白色	2.5Y8/2	灰白色	1060～1160	
	1283	191		X64Y55	中国製白磁	碗Ⅴ類4	16.0−	10Y7/1	灰白色	10Y7/1	灰白色	1140～1200	
	1284	191		X96Y52	中国製白磁	碗Ⅴ類4	16.0−	10Y8/1	灰白色	7.5Y7/1	灰白色	1140～1200	
	1285	191		X215Y116	中国製白磁	碗Ⅳ類	20.0−	5Y8/1	灰白色	5Y8/2	灰白色	1060～1160	
	1286	191		X199Y101	中国製白磁	碗Ⅳ類	19.0−	7.5Y7/2	灰白色	7.5Y7/2	灰白色	1060～1160	
	1287	191		X243Y103	中国製白磁	碗Ⅳ類	17.0−	N7/0	灰白色	5Y7/1	灰白色	1060～1160	
	1288	191		X140Y55	中国製白磁	碗Ⅳ類	17.0−	7.5Y8/1	灰白色	2.5GY7/1	明オリーブ灰色	1060～1160	
	1289	191		X237Y103	中国製白磁	碗Ⅳ類	15.8−	N7/0	灰白色	7.5Y7/2	灰白色	1060～1160	
	1290	191		X87Y62	中国製白磁	碗Ⅳ類	14.3−	2.5Y8/1	灰白色	2.5Y8/1	灰白色	1060～1160	
	1291	191		X50Y33	中国製白磁	碗Ⅴ類	＊＊−＊＊−5.6−	5Y8/1	灰白色	5Y7/2	灰白色	1140～1200	
	1292	191			中国製白磁	碗Ⅳ類	＊＊−＊＊−8.0−	2.5Y8/2	灰白色	2.5GY7/1	明オリーブ灰色	1060～1160	
	1293	191		X242Y114	中国製白磁	碗？	＊＊−＊＊−6.4−	7.5Y8/1	灰白色	7.5Y7/1	灰白色		
	1294	191		X162Y71	中国製白磁	碗？	＊＊−＊＊−5.0−	7.5Y8/1	灰白色	7.5Y7/2	灰白色		
	1295	191		X216Y109	中国製白磁	碗？		2.5Y8/2	灰白色	2.5Y8/2	灰白色		
	1296	192		X76Y43	中国製白磁	ⅢVI類−1b	10.2−2.5−3.6−	10Y7/1	灰白色	5Y8/2	灰白色	1060～1160	
	1297	192		X76Y39	中国製白磁	Ⅲ	12.0−	7.5Y7/1	灰色	7.5Y6/2	灰オリーブ色		
	1298	192		X102Y63	中国製白磁	ⅢE類	10.7−	N8/0	灰白色	2.5GY8/1	灰白色	1480～1580	
	1299	192		X90Y63	中国製白磁	Ⅲ	＊＊−＊＊−3.5−	5Y8/1	灰白色	5Y7/1	灰白色		
	1300	192		X101Y65	中国製白磁	Ⅲ	＊＊−＊＊−3.0−	2.5Y8/1	灰白色	2.5Y7/2	灰黄色	1060～1160	
	1301	192		X101Y65	中国製白磁	Ⅲ	＊＊−＊＊−3.2−	5Y8/1	灰白色	5Y7/1	灰白色		
	1302	192		X90Y63	中国製青白磁	Ⅲ	8.0−2.0−2.8−	N8/0	灰白色	2.5GY8/1	灰白色	12～13C	文様櫛描文
	1303	192		X35Y29	中国製青白磁	Ⅲ	＊＊−＊＊−3.6−	N8/0	灰白色	2.5GY8/1	灰白色	12～13C	文様型押蓮弁文
	1304	192		X46Y28	中国製青磁	碗Ⅰ類1	16.0−	N7/0	灰白色	5GY5/1	オリーブ灰色	1160～1230	龍泉窯系
	1305	192		X82Y63	中国製青磁	碗Ⅰ類3	16.0−	2.5Y7/1	灰白色	7.5Y6/2	灰オリーブ色	1160～1230	龍泉窯系，文様櫛描花文
	1306	192		X98Y64	中国製青磁	碗Ⅰ類3		2.5Y7/1	灰白色	7.5Y6/2	灰オリーブ色	1160～1230	龍泉窯系，文様櫛描花文
	1307	192		X215Y112	中国製青磁	碗Ⅰ類4	14.8−	N7/0	灰白色	7.5GY6/1	オリーブ灰色	1160～1230	龍泉窯系，文様飛雲文
	1308	192		X53Y34	中国製青磁	碗Ⅰ類5b	14.0−	7.5Y7/1	灰白色	2.5GY6/1	オリーブ灰色	1220～1260	龍泉窯系，文様鎬蓮弁文
	1309	192		X45～52Y40～45	中国製青磁	碗Ⅰ類5b	14.0−	7.5Y7/1	灰白色	2.5GY6/1	オリーブ灰色	1220～1260	龍泉窯系，文様鎬蓮弁文
	1310	192		X70Y42	中国製青磁	碗Ⅲ類2	14.0−	N8/0	灰白色	10GY6/1	緑灰色	1250～1330	龍泉窯系，文様鎬蓮弁文
	1311	192		X164Y71	中国製青磁	碗BIVa類	14.0−	7.5Y7/1	灰白色	5GY7/1	明オリーブ灰色	1460～1540	龍泉窯系，文様線描蓮弁文
	1312	192		X104Y66	中国製青磁	碗Ⅰ類1b	10.8−	2.5Y8/2	灰白色	2.5Y6/3	にぶい黄色	1160～1230	同安窯系，文様櫛描文
	1313	192		X105Y65	中国製青磁	ⅢⅠ類2	＊＊−＊＊−4.0−	N7/0	灰白色	2.5GY6/1	オリーブ灰色	1160～1230	龍泉窯系，文様櫛描文
	1314	192			中国製青磁	杯Ⅲ類	＊＊−＊＊−6.0−	10Y6/1	灰色	10YR5/2	灰オリーブ色	1250～1330	龍泉窯系
	1315	192		X108Y52	中国製青磁	盤	10.0−	10Y6/1	灰色	10Y6/2	オリーブ灰色	1250～1330?	
	1316	192		X125Y80	中国製染付	Ⅲ	＊＊−＊＊−3.6−	5Y7/1	灰白色			1510～1570	染付7.5B3/3くすんだ青色
184	1317	192		X216Y110	珠洲	甕	62.0−	5Y7/1	灰白色			1150～1200	Ⅰ期
	1318	192		X45Y50 X50Y43 X50Y39	珠洲	甕	44.0−	N7/0	灰白色			1150～1250	Ⅰ～Ⅱ期
	1319	192			珠洲	甕	41.2−	7.5Y6/1	灰色			1250～1375	Ⅲ～Ⅳ期
	1320	192		X171Y83	珠洲	甕	38.0−	5Y5/1	灰色			1300～1450	Ⅳ～Ⅴ期
	1321	192		X50～60Y30～35	珠洲	甕	46.0−	N6/0	灰色			1375～1450	Ⅴ期
	1322	192		X91Y43	珠洲	甕		7.5Y6/1	灰色			1300～1450	Ⅳ～Ⅴ期

第24表　土器・陶磁器一覧(8)（中世・近世）

挿図	挿図番号	図版番号	遺構番号	座標	種類	器種	法量(口径・器高・底径・高台径cm)	色調		釉調		年代	備考
184	1323	193		X196Y99	珠洲	擂鉢	＊＊－＊＊－12.0－	N7/0	灰白色			1200～1250	II期
	1324	192		X97Y64	珠洲	甕		5Y7/1	灰白色			1150～1200	I期
	1325	192		X40～45Y30～35	珠洲	甕		N5/0	灰色			1250～1375	III～IV期
185	1326	193		X45～50Y50	珠洲	壷	29.6－	5Y4/1	灰色				
	1327	193		X96Y65	珠洲	壷	19.1－	N7/0	灰白色				
	1328	193		X181Y83	珠洲	壷	22.0－	N5/0	灰色				
	1329	193		X73Y47	珠洲	壷	11.0－	N7/0	灰白色				
	1330	193		X230Y125	珠洲	四耳壷		5Y7/1	灰白色			1150～1250	I～II期，櫛描波状文
	1331	193		X73Y47 X70Y45	珠洲	壷		N7/0	灰白色				
	1332	193		X158Y86	珠洲	擂鉢	18.0－	5Y5/1	灰色			1150～1200	I期
	1333	193		X35Y31	珠洲	擂鉢	20.0－	5Y6/1	灰色			1150～1200	I期
	1334	193		X28Y40	珠洲	擂鉢	25.0－	N6/0	灰色			1150～1200	I期
	1335	193		X135Y70	珠洲	擂鉢	25.0－	2.5Y5/1	黄灰色			1150～1200	I期
	1336	193		X134Y56	珠洲	擂鉢	28.6－	2.5Y5/1	黄灰色			1200～1250	II期
	1337	193		X35Y26	珠洲	擂鉢	＊＊－＊＊－9.6－	10YR7/4	にぶい黄橙色			1200～1250	II期
	1338	193		X46Y47 X35Y35	珠洲	擂鉢	31.4－	N6/0	灰色			1200～1250	II期
	1339	193		X74Y45	珠洲	擂鉢	30.5－	N6/0	灰色			1200～1250	II期
	1340	193		X240Y108	珠洲	擂鉢		5Y7/1	灰白色				
	1341	193		X45～55Y40～45	珠洲	擂鉢	36.0－	5Y6/1	灰色			1200～1250	II期
186	1342	193		X76Y48	珠洲	擂鉢		5Y7/1	灰白色			1250～1300	III期
	1343	193		X231Y116	珠洲	擂鉢		2.5Y7/1	灰白色			1250～1300	III期，内面に墨付着
	1344	193		X78Y45	珠洲	擂鉢	37.6－	7.5Y6/1	灰色			1250～1300	III期
	1345	193		X135Y61	珠洲	擂鉢	31.6－	7.5Y7/1	灰白色			1300～1375	IV期
	1346	193		X45～50Y40～45	珠洲	擂鉢	29.0－	N6/0	灰色			1300～1375	IV期
	1347	193		X65Y51	珠洲	擂鉢	37.4－	N6/0	灰色			1300～1375	IV期
	1348	193	SX01		珠洲	擂鉢	36.0－	7.5Y6/1	灰色			1250～1300	III期
	1349	193		X54Y50	珠洲	擂鉢		N6/0	灰色			1200～1300	II～III期
	1350	193		X128Y79	珠洲	擂鉢	34.4－	2.5Y6/1	黄灰色			1300～1375	IV期
	1351	193		X93Y47	珠洲	擂鉢	39.0－	N6/0	灰色			1375～1450	V期，文様櫛描波状文
	1352	193			珠洲	擂鉢		7.5Y6/1	灰色			1300～1450	IV～V期
	1353	194		X227Y125	越前	甕		N7/0	灰白色				
	1354	194		X65Y51	越前か八尾	壷		2.5Y7/1	灰白色				
187	1355	194		X196Y97	越中瀬戸	天目椀	9.8－	2.5Y7/1	灰白色	2.5Y2/1	黒色	江戸	(鉄釉)
	1356	194		X195Y100	越中瀬戸	椀	＊＊－＊＊－4.0－	2.5Y6/2	灰黄色	7.5YR2/1	黒色	江戸	(鉄釉)，円盤状に整形
	1357	194		X247Y105	越中瀬戸	椀	＊＊－＊＊－5.2－	5Y7/1	灰白色	10YR3/3	暗褐色	江戸	(鉄釉)
	1358	194		X87Y56	瀬戸美濃	椀	＊＊－＊＊－4.4－	2.5Y8/3	淡黄色	2.5Y3/1	黒褐色	江戸	(鉄釉)，墨書
	1359	194		X148Y69	越中瀬戸	椀	＊＊－＊＊－5.0－	5Y7/1	灰白色	N1.5/0	黒色	江戸	(鉄釉)
	1360	194		X156Y87	越中瀬戸	椀	＊＊－＊＊－4.6－	10YR7/3	にぶい黄橙色	7.5YR3/2	黒褐色	江戸	(鉄釉)
	1361	194			越中瀬戸	皿	＊＊－＊＊－4.4－	7.5YR8/4	浅黄橙色	2.5Y4/2	暗灰黄色	江戸	(鉄釉)，墨書「大」
	1362	194		X140Y65	越中瀬戸	皿	＊＊－＊＊－3.0－	7.5YR8/4	浅黄橙色	7.5YR5/3	にぶい褐色	江戸	(鉄釉)，内面に重ね焼き痕
	1363	194		X171Y68	越中瀬戸	皿	＊＊－＊＊－4.2－	7.5YR8/3	浅黄橙色	7.5YR4/2	灰褐色	江戸	(鉄釉)
	1364	194		X130Y70	越中瀬戸	皿	＊＊－＊＊－5.0－	2.5Y8/2	灰白色	7.5YR5/2	灰褐色	江戸	(鉄釉)，印花，重ね焼き痕
	1365	194		X45～52Y40～45	越中瀬戸	皿	＊＊－＊＊－4.4－	7.5YR7/4	にぶい橙色	7.5YR3/3	暗褐色	江戸	(鉄釉)
	1366	194		X206Y109	越中瀬戸	皿	＊＊－＊＊－6.0－	5Y6/1	灰色	7.5YR4/3	褐色	江戸	(鉄釉)
	1367	188		X82Y66	越中瀬戸	秉燭	5.7－4.3－3.6－	7.5YR6/3	にぶい褐色	10R3/2	暗赤褐色	江戸	(鉄釉)
	1368	194			越中瀬戸	壷	9.0－	10YR7/4	にぶい黄橙色	10YR4/3	にぶい黄褐色	江戸	(鉄釉)，口縁部に重ね焼き痕？(灰釉)5Y6/2灰オリーブ色
	1369	194		X237Y105	越中瀬戸	壷	12.8－	10YR7/3	にぶい黄橙色	10YR3/2	黒褐色	江戸	(鉄釉)
	1370			X135Y55	越中瀬戸	匣鉢	13.4－10.8－14.0－	5YR7/3	にぶい橙色	7.5Y3/3	暗褐色	江戸	底部に煤付着
	1371	194			唐津	大皿	＊＊－＊＊－5.2－	2.5Y6/1	黄灰色	7.5Y5/2	灰オリーブ色	1600～1650	(灰釉)，鉄絵7.5YR3/1黒褐色，輪高台
	1372	194		X85Y56	京焼風唐津	椀	12.2－6.6－4.4－	2.5Y8/4	淡黄色			江戸	鉄絵2.5Y4/3オリーブ褐色
	1373	188		X243Y103	唐津	皿	＊＊－＊＊－4.9－	10YR6/2	灰黄褐色	10YR5/3	にぶい黄褐色	1700～1760	内野山西窯系，蛇の目釉剝
	1374	188		X130Y56	伊万里	碗	10.2－6.5－4.6－	2.5Y6/1	黄灰色			1700～1750	陶胎染付5B6/1青灰色
	1375	194		X95Y68 X96Y65	伊万里	碗	11.1－	2.5Y6/1	黄灰色			1700～1750	陶胎染付10BG5/1青灰色

第24表　土器・陶磁器一覧(9)（中世・近世）

挿図	挿図番号	図版番号	遺構番号	座標	種類	器種	法量(口径·器高·底径·高台径cm)	色調		釉調		年代	備考
187	1376	194		X140Y65	伊万里	碗	12.0−	2.5Y4/1	黄灰色			1700～1750	陶胎染付2.5Y5/3黄褐色
	1377	194		X153Y89	伊万里	碗	＊＊−＊＊−4.2−	10YR4/1	褐灰色			1700～1750	陶胎染付2.5Y4/3オリーブ褐色
	1378	194		X177Y100	伊万里	碗	10.4−	2.5Y6/1	黄灰色			1700～1750	陶胎染付2.5Y5/3黄褐色
	1379	188		X134Y56	伊万里	碗	9.4−4.9−3.7−	N8/0	灰白色			江戸	染付5PB5/6うすい紫みの青色
	1380	188			伊万里？	碗	8.0−＊＊−2.8−	7.5Y8/1	灰白色			1850～	染付7.5B3/4くすんだ青色，漆継
	1381	194		X140Y55	伊万里？	碗	7.8−5.2−3.4−	5Y8/1	灰白色			1850～	染付5PB5/4うすい紫みの青色
	1382	194		X86Y54	伊万里	そば猪口	＊＊−＊＊−6.0−	N8/0	灰白色			1750～1850	染付2.5PB色数値不明くすんだ青色
	1383	194		X86Y50	伊万里	紅皿	4.6−1.3−1.0−	5Y8/1	灰白色			1800～1860	菊花型押
188	1384	194		X178Y100	伊万里	皿	13.2−3.1−7.5−	N7/0	灰白色			1750～1800	波佐見窯系，染付10GY6/1緑灰色，蛇の目釉剝，見込みコンニャク印判か？
	1385	194		X228Y115	伊万里	皿	13.0−2.8−5.4−	N8/0	灰白色			1750～1800	波佐見窯系，染付7.5B5/3暗青灰色，蛇の目釉剝，見込みコンニャク印判
	1386	194		X194Y94	伊万里	皿	13.1−3.0−7.0−	N8/0	灰白色			1750～1800	波佐見窯系，染付10GY5/1緑灰色，蛇の目釉剝
	1387	194		X86Y56	伊万里	皿	12.0−3.2−4.4−	N8/0	灰白色			1750～1800	波佐見窯系，染付5GY7/1明オリーブ灰色，蛇の目釉剝，重ね焼き痕
	1388	188		X243Y106	伊万里	皿	13.0−3.2−4.3−	N8/0	灰白色			1750～1800	染付7.5B5/3暗青灰色，蛇の目釉剝
	1389	194		X67Y38	伊万里	皿	12.8−	N8/0	灰白色			江戸	染付5PB3/6くすんだ青色，漆継
	1390	194		X135Y55	伊万里	皿	13.7−3.5−8.4−	N8/0	灰白色			江戸	染付7.5B5/2暗青灰色
	1391	194		X156Y90	伊万里	皿	12.8−3.2−8.0−	N8/0	灰白色			1740～1800	染付5B4/1暗青灰色，コンニャク印判
	1392	189		X133Y55	伊万里	皿	13.2−3.3−5.6−	N8/0	灰白色			江戸	染付5PB5/4うすい紫みの青色，口錆
	1393	189		X134Y55	伊万里	鉢	15.4−	N8/0	灰白色			1750～1860	染付7.5B6/3青灰色
	1394	194			織部	向付	17.0−	5Y7/1	灰白色	2.5GY5/3	暗い黄緑色	江戸	鉄絵5YR3/4暗赤褐色，漆継
	1395	195		X96Y65	瀬戸美濃	椀	＊＊−＊＊−5.0−	5Y8/1	灰白色			1800～1850	本業Ⅲ期，陶胎染付2.5B5/3暗青灰色，広東型
	1396	195		X115Y65	瀬戸美濃	椀	11.4−6.7−6.0−	5Y8/1	灰白色			1800～1850	本業Ⅲ期，陶胎染付2.5PB6/4くすんだ青色，広東型
	1397	189		X86Y54	瀬戸美濃	碗	7.0−6.0−4.2−	N8/0	灰白色			幕末～	染付5PB5/6うすい紫みの青色
	1398	189		X143Y66	瀬戸美濃	碗	7.9−6.4−3.8−	N8/0	灰白色			幕末～	染付5PB5/6うすい紫みの青色
189	1399	189		X135Y55	越中丸山	皿	13.6−4.6−6.4−	10YR7/4	にぶい黄橙色	2.5YR6/3	にぶい黄色	江戸～	(長石釉?)，ハリ跡
	1400	195		X135Y55	越中丸山	皿	13.0−3.9−6.0−	7.5Y5/1	灰色	5Y5/3	灰オリーブ色	江戸～	(長石釉)，ハリ跡
	1401	195			越中丸山	皿	14.0−3.8−6.0−	2.5Y6/2	灰黄色	2.5Y6/3	にぶい黄色	江戸～	鉄絵10YR3/1黒褐色，蛇の目釉剝
	1402	195		X135Y55	越中丸山	皿	14.0−3.4−5.6−	2.5Y6/1	黄灰色	5Y6/2	灰オリーブ色	江戸～	鉄絵10YR3/1黒褐色，蛇の目釉剝
	1403	195		X142Y55	越中丸山	皿	14.0−	5Y6/1	灰色	5Y6/2	灰オリーブ色	江戸～	鉄絵10YR4/4褐色
	1404	190		X87Y56	越中丸山	瓶	＊＊−＊＊−6.2−	7.5YR6/1	褐灰色	7.5YR3/2	黒褐色	江戸～	(鉄釉)
	1405	190		X169Y93	越中丸山	鉢	21.0−6.9−8.0−	10YR7/3	にぶい黄橙色	10Y7/1	灰白色	江戸～	ハリ跡
	1406			X135Y55	越中丸山	鉢	＊＊−＊＊−8.6−	7.5YR7/4	にぶい橙色	2.5Y5/4	黄褐色	江戸～	ハリ跡，漆継
	1407	195		X45～55Y40～45	陶器	鉢	＊＊−＊＊−11.0−	2.5Y8/3	淡黄色			江戸～	
	1408	195		X158Y89	越中丸山	鉢	20.0−	10YR7/4	にぶい黄橙色			江戸～	
	1409	190		X240Y104	瓦器	火舎	28.0−13.7−	10YR7/2	にぶい黄橙色			江戸～	文様菊花文，押印，漆
	1410	195		X179Y103	陶器	擂鉢	34.0−	7.5R4/4	にぶい赤色	5YR2/1	黒褐色	江戸～	
	1411	195		X143Y66	陶器	擂鉢	33.4−	7.5YR7/1	明褐灰色	7.5YR3/3	暗褐色	江戸～	染付
	1412	195		X135Y55	陶器	擂鉢	31.6−13.6−16.0−	5YR6/4	にぶい橙色	5Y3/2	オリーブ黒色	江戸～	染付(サビ釉)5YR5/3にぶい赤褐色
	1413	195		X134Y55	陶器	擂鉢	30.8−	5YR6/1	褐灰色	5YR3/2	暗赤褐色	江戸～	染付(サビ釉)5YR5/3にぶい赤褐色
190	1414	195		X179Y103	瓦器	火舎	25.0−	N1.5/0	黒色			江戸～	
	1415	195		X179Y103	瓦器	火舎		10YR7/2	にぶい黄橙色			江戸～	押印
	1416	195		X179Y103	瓦器	火舎		2.5Y6/2	灰黄色			江戸～	押印
	1417	195		X220Y106	瓦器	不明		7.5YR6/4	にぶい橙色			江戸～	
	1418	195		X112Y64	陶器	鉢	15.6−	5Y7/1	灰白色	10YR1.7/1	黒色	江戸～	
	1419	190		X133Y55～56	磁器	仏飯器	5.4−5.7−3.8−	N8/0	灰白色			江戸～	色絵
	1420	195		X140Y55	瀬戸美濃	椀	8.0−4.2−3.2−	N8/0	灰白色			江戸～	染付5PB5/4うすい紫みの青色
	1421	190		X30Y27	磁器	碗	6.7−5.8−4.2−	N8/0	灰白色			江戸～	染付2.5PB6/4くすんだ青色，ガラス継
	1422	190		X140Y55	磁器	碗	11.6−6.1−4.3−	N8/0	灰白色			明治	染付摺絵5PB2/8暗い青色
	1423	190		X139Y59	磁器	碗	10.8−5.6−3.7−	N8/0	灰白色			明治	染付摺絵5PB3/10青色
	1424	195		X95Y49	土製品	人形		10YR6/3	にぶい黄橙色			江戸	

第25表　木製品一覧(1)（中世・近世）

挿図	挿図番号	図版番号	遺構番号	座　標	種　類	規格(長－幅－厚cm)	樹　種	備　考
132	695	196	SP1054		礎板	18.2－5.6－		
	696	196	SP1050		礎板	23.7－10.5－3.4	クリ	
	697	196	SP1045		礎板	26.3－11.0－3.6	スギ	
	698	196	SP1016		礎板	19.2－9.0－4.4		
	699	196	SP1045		礎板	20.2－9.2－2.5	スギ	
	701	196	SP5030		櫛	(3.6)－(1.9)－0.9		
	702	196	SP5011		木椀	15.0－5.3－0.6	ケヤキ	
	703		SP5006		漆椀	9.6－1.6－0.3		内外面とも黒色の漆
	704	197	SP5061		箸	20.3－0.6－0.4	スギ	
	711	196	SP7162		柱	(41.6)－(12.8)－10.5	スギ	
133	715	197	SP7069		礎板	8.2－8.3－6.0	スギ	
	716	197	SP7125		礎板	9.3－7.5－2.6	スギ	
	717	197	SP7125		礎板	10.0－6.3－4.5	スギ	
	718	197	SP7113		礎板	26.2－15.6－4.0	スギ	礎板(下)
	719	197	SP7113		礎板	15.7－8.6－4.2	スギ	礎板(上)
	720	197	SP7066		箸	21.9－0.6－0.5		
	722	197	SP8116		柱	(26.3)－10.0－8.4		
	723	197	SP8295		柱	(27.1)－12.3－10.5	エノキ	
	724	198	SP8276		柱	62.0－14.0－11.6		
	725	198	SP9227		柱	80.4－13.4－12.4		
	727	198	SP9232		柱	(29.5)－(14.1)－(13.3)	スギ	
	728	199	SP9243		加工板	12.0－6.0－1.5		
134	729	198	SP9257		礎板	17.7－10.3－5.8	スギ	
	731	198	SP25		柱	(20.7)－14.8－12.4		
	736	199	SP5007		呪符木簡	18.1－2.9－0.6	スギ	
	743	199	SP8011		柱	(24.3)－(14.1)－(15.0)	スギ	
	747	199	SP9248		礎板	19.0－(4.7)－1.8		
	748	199	SP9182		礎板	20.1－12.2－2.8	スギ	
137	752	200	SD42	X244Y104	加工板	12.0－2.7－0.4		木札
	753	200	SD42		加工板	7.5－2.0－0.7		切り込みあり
	755	200	SD45		柄	37.4－2.8－2.6	スギ	筋状に漆残る
139	788	200	SD46	X211Y115	下駄	13.1－5.2－1.2	スギ	
	789	201	SD46		漆椀	14.0－6.5－0.6	ブナ	内外面に漆塗
	790		SD46		漆椀	(20.2)－＊＊－0.6	ブナ	内外面に黒地に朱模様の漆
	791	201	SD46	X217Y108	漆椀	14.0－7.3－0.6	ブナ	内外面に黒色の漆，朱模様の漆
	792		SD46	X215Y110	漆椀	12.0－＊＊－0.3		内外面に黒地に朱模様の漆
	793	201	SD46	X215Y110	漆椀	＊＊－＊＊－0.7	ブナ	内外面に黒地に朱模様の漆
	794	200	SD46	X218Y109	櫛	(4.2)－2.8－1.1	イスノキ	漆塗
	795		SD223		円形板	27.3－5.5－0.5		底板？
	796	200	SD223		加工棒	(20.4)－1.5－1.1	スギ	木札？
	797	201	SD223		箸	21.6－0.6－0.5		
	798		SD2001		漆椀	＊＊－＊＊－0.7		内外面に黒色の漆
	800		SD2007	X180Y87	漆椀	＊＊－＊＊－0.5		内外面に漆塗
140	807	201	SD2007	X189Y89	下駄	24.5－5.5－1.8		
	808	202	SD2007	X195Y88	加工板	18.3－6.8－2.0		
143	816		SD4001		漆椀	＊＊－＊＊－0.3	ケヤキ	
	817		SD4001		箸	(18.9)－0.6－0.5		
	818	202	SD4001		円形板	(12.8)－(6.8)－8.5		曲物底板？
	819	202	SD4001		加工板	(10.6)－2.8－0.4	スギ	木簡？
	820	202	SD4001		加工板	(15.7)－(3.0)－0.4	スギ	木簡？
	821	202	SD4001		加工板	16.1－2.0－1.1		
147	853	202	SD8043	X75Y48	櫛	(5.4)－1.9－0.9	イスノキ	僅かに漆残る
	854	203	SD8043		櫛	(2.6)－3.7－1.1	イスノキ	一部分に漆残る
	855	203	SD8043	X88Y46	漆椀	13.0－5.5－0.5	ケヤキ	内外面に黒地に朱模様の漆
	856		SD8043	X73Y50	漆椀	14.0－＊＊－0.5		内外面に黒色の漆
	857	203	SD8043	X80Y48IIb	漆椀	14.0－4.6－0.5	トチノキ	
	858		SD8043	X79Y49	漆椀	＊＊－＊＊－0.7		内外面所々に漆残る
	859		SD8043	X72Y50	漆椀	14.0－＊＊－0.3		内外面に黒色の漆

第25表　木製品一覧(2)（中世・近世）

挿図	挿図番号	図版番号	遺構番号	座　標	種　類	規格(長－幅－厚cm)	樹　種	備　考
	860	203	SD8043	X80Y48	箸	19.6－0.7－0.4	スギ	
	861	203	SD8043	X76Y49	箸	18.9－0.7－0.6		
	862		SD8043	X98Y43	箸	23.1－0.7－0.5		
	863	203	SD8043	X82Y48	箸	21.8－0.6－0.5		
	864	203	SD8043	X77Y48	箸	(20.8)－0.7－0.4		
	865	203	SD8043	X82Y48	杓子形木器	(24.7)－6.1－0.8	スギ	
	866	203	SD8043	X76Y49	加工棒	16.1－2.3－1.1		
	867-875		SD8043	X75Y48	烏帽子		同定不可	漆塗，断片
	876	204	SD8043	X96Y45	加工板	21.7－7.8－1.6		全面所々に漆残る
	877	204	SD8043	X98Y43	加工棒	(41.6)－1.4－0.7		
151	946	204	D1谷部	X65Y55IIf－j	下駄	22.6－12.0－2.3	ヒノキ科	全面所々に漆残る
	947	204	D1谷部	X107Y43IIb	下駄	22.3－11.3－(2.7)	スギ	全面所々に漆残る
	948	205	D1谷部	X107Y43IIb	下駄	17.8－9.1－3.1	スギ	
	949	205	D1谷部	X95Y45	下駄	20.0－5.9－(1.9)	スギ	全面所々に漆残る
	950	205	D1谷部	X95Y49	下駄	21.4－4.6－(1.6)	スギ	
	951	204	D1谷部	X80Y56IIb	下駄	(11.6)－8.7－(1.7)	トチノキ	
	952	205	D2谷部	X68Y55IIb	下駄	(20.3)－(7.8)－(1.1)	シイ属（ツブラジイ?，スダジイ?）	
	953	205	D2谷部	X62Y56IIb	下駄（差歯）	7.9－15.3－2.2	スギ	
	954	205	D1谷部	X100Y44IIb	下駄（差歯）	10.6－12.6－2.4	スギ	
	955		D2谷部	X65Y57IIr	下駄（差歯）	9.3－6.5－1.3		表･裏面に漆残る
	956		D1谷部	X70Y52IIb	下駄（差歯）	11.3－7.7－2.0	スギ	
152	957	206	D1谷部	X101Y45IIj	曲物	24.3－＊＊－4.2	スギ	
	958	206	D1谷部	X101Y47IIk	曲物	12.0－＊＊－(5.1)	スギ	
	959	206	D2谷部	X62Y56IIb	円形板	9.3－9.4－0.5	スギ	底板
	960	207	D1谷部	X85Y52	樽（蓋）	61.8－61.8－2.4		
	961	207	D2谷部	X70Y55IIb	折敷	(21.6)－8.2－0.7		
	962		D2谷部		折敷	38.5－15.5－1.2		
153	963	207	D1谷部	X80Y55IIf	折敷	36.6－14.4－1.1		
	964	207	D2谷部	X63Y53IIb	折敷	31.9－(10.2)－0.7	スギ	
	965	207	D2谷部	X65Y57IIr	折敷	34.7－18.9－1.0	スギ	全面に漆残る
	966		D2谷部	X65Y57IIr	折敷	16.2－(8.8)－0.9		
	967	207	D1谷部	X85Y47	漆椀	＊＊－＊＊－0.5	ケヤキ	内外面･底部に黒色の漆，模様は朱色
	968	208	D1谷部	X79Y55IIg	漆椀	＊＊－＊＊－0.6	カツラ	内外面に黒色の漆，口縁部に刻みあり
	969	208	D1谷部		漆椀	＊＊－＊＊－0.9	ケヤキ	内面朱色･外面黒色の漆塗
	970	208	D1谷部	X101Y48	漆皿	10.6－3.1－0.5	ケヤキ	内外面に黒色の漆
	971	208	D2谷部	X68Y55IIb	漆椀	15.8－4.5－0.5	ケヤキ	内外面に漆塗
	972	208	D2谷部		漆椀	14.6－4.8－0.5	ケヤキ	内外面に黒色の漆
	973	208	D1谷部	X77Y57IIg	漆椀	16.0－5.5－1.1	ケヤキ	
	974		D1谷部	X79Y55IIg	漆椀	16.0－＊＊－0.6		内外面に黒色の漆
	975		D2谷部	X62Y56IIb	漆椀	＊＊－＊＊－0.4	ケヤキ	黒色の漆残る
	976		D1谷部	X77Y57IIg	漆椀	＊＊－＊＊－0.8	ケヤキ	内外面に漆塗
154	977		D2谷部	X75Y57IIb	漆皿	8.5－1.3－0.4		内外面に黒色の漆
	978	208	D1谷部	X88Y50IIV	漆皿	9.1－1.3－0.3	ケヤキ	内外面に黒色の漆
	979		D2谷部	X65Y57IId	漆皿	9.5－2.0－0.3	ケヤキ	内外面に漆塗
	980		D1谷部	X103Y47IIg	漆皿	10.7－1.5－0.3	ケヤキ	内外面に黒色の漆
	981		D1谷部	X101Y43IIb	漆片口		カツラ	
	982	208	D2谷部	X63Y53IIb	箸	21.5－0.8－0.5		
	983		D2谷部	X65Y57IIf	箸	21.0－0.6－0.4		
	984	208	D1谷部	X88Y47	箸	22.6－0.7－0.4		
	985	208	D1谷部	X92Y49	箸	24.4－0.6－0.5		
	986	208	D1谷部	X76Y55IIf	杓子形木器	23.9－4.1－0.8	スギ	
	987	209	D1谷部	X77Y57IIg	台脚	13.3－19.9－2.0	スギ	
	988	209	D1谷部	X77Y57IIg	加工木(特殊)	(7.8)－(2.4)－0.7	スギ	
	989	209	D1谷部	X83Y52IIe	糸巻き(枠木)	(33.4)－3.4－3.2	スギ	
	990	209	D2谷部	X75Y56IIf	柄	41.8－2.6－2.5	スギ	部分的に漆残る，割れ口あり
	991	209	D2谷部	X69Y56IIr	舟形	28.5－4.9－3.6	スギ	全面に漆の跡あり

第25表　木製品一覧(3)（中世・近世）

挿図	挿図番号	図版番号	遺構番号	座　標	種　類	規格(長－幅－厚cm)	樹　種	備　考
154	992	209	D2谷部		舟形	20.0－4.1－2.1	スギ	
155	993	210	D2谷部	X65Y57IIf	鏃形？	9.2－1.2－1.1	針葉樹（マツ以外）	
	994	210	D2谷部	X68Y55IIb	加工板	32.7－6.9－0.7	スギ	底板？
	995	210	D1谷部	X79Y56IIk	加工板	(54.4)－16.4－2.4	スギ	
	996	210	D2谷部	X63Y56IIb	加工板	50.9－8.1－0.9	スギ	
	997	210	D1谷部	X87Y52IIf	加工木(特殊)	68.0－16.0－9.6		
	998	210	D2谷部	X65Y57IIf	加工板	(42.5)－3.5－0.6	スギ	
	999	210	D2谷部	X70Y52IIb	加工木(特殊)	12.0－4.0－1.5		
	1000		D1谷部	X80Y56IIb	加工木(特殊)	9.5－5.7－2.5		
	1001	210	D2谷部	X67Y57IIr	加工木	17.7－3.1－2.4		
	1002	210	D2谷部	X69Y52IIb	加工棒	(15.2)－2.1－0.7		
156	1003	211	D2谷部	X74Y56IIf－j	加工棒	43.0－2.5－1.8	スギ	
	1004	211	D2谷部	X65Y57IIr	加工棒	39.0－1.1－0.6		
	1005	211	D2谷部	X65Y57IIr	加工棒	(32.3)－2.0－1.6	スギ	全面に筋状に漆残る
	1006	211	D2谷部	X65Y57IIr	加工板	(32.6)－2.2－2.2	スギ	
	1007	211	D2谷部	X68Y55IIb	加工棒	(27.4)－2.3－0.8	スギ	
	1008	211	D2谷部	X65Y57IIr	加工棒	78.4－2.3－1.6		木目の筋の所々に漆の跡あり
	1009	211	D1谷部	X77Y57IIg	加工棒	(46.8)－1.8－1.7	スギ	全面に漆塗
	1010	211	D2谷部	X64Y57IIr	加工棒	(54.0)－2.4－1.2		
	1011		D2谷部	X64Y57IIb	加工棒	53.0－2.2－2.1	スギ	
	1012	211	D2谷部	X65Y57IIr	加工棒	192.0－4.8－4.8		
157	1013	211	D1谷部	X88Y50IIV	加工木(特殊)	28.8－12.1－7.3	ケヤキ	ごく僅かだが表面に漆残る
	1014		D2谷部	X68Y55IIb	加工棒	27.3－1.8－0.9		
	1015		D1谷部	X86Y45IIb	加工棒	23.0－0.9－0.6		
	1016	211	D2谷部	X63Y56IIb	加工棒	(18.0)－1.2－0.9	スギ	
	1017	211	D2谷部	X63Y56IIb	加工棒	(18.0)－1.0－0.8	スギ	
	1018	212	D1谷部	X87Y48	加工棒	(21.3)－1.7－1.3	スギ	
	1019	212	D1谷部	X82Y53	加工棒	62.8－2.9－1.5		全面に漆残る
	1020	212	D2谷部	X71Y56IIf	加工棒	50.0－3.4－0.7		
	1021	212	D1谷部	X77Y57IIg	加工棒	39.6－2.6－1.3	スギ	
	1022	212	D2谷部		加工棒	(43.0)－1.3－1.3		
	1023		D2谷部		加工棒	34.3－1.7－1.7		
	1024		D2谷部	X71Y56IIr	加工棒	(30.8)－1.6－1.2		
	1025	212	D1谷部	X86Y51	加工棒	36.2－1.8－1.6	スギ	木目の筋の所々に漆残る
	1026	212	D1谷部	X86Y52	加工棒(特殊)	35.8－5.2－3.3		
	1027	212	D1谷部	X83Y52IIe	加工棒	39.2－0.9－0.7	スギ	
	1028		D1谷部	X83Y52IIe	加工棒	(16.2)－0.9－0.7	スギ	
	1029		D1谷部	X83Y52IIe	加工棒	(17.8)－1.1－0.8	スギ	
	1030	212	D1谷部	X83Y52IIe	加工棒	(28.2)－1.0－1.0	スギ	
	1031	212	D1谷部	X83Y52IIe	加工棒	34.0－0.9－0.9	スギ	
	1032	212	D1谷部	X83Y52IIe	加工棒	(26.0)－1.0－0.9	スギ	
	1033		D1谷部	X83Y52IIe	加工棒	(23.8)－1.0－0.6	スギ	
	1034	212	D1谷部	X86Y52IIf	加工棒	34.6－2.6－2.3	ヒノキ科	
162	1035	212	SD9007	X42Y34	加工木(特殊)	74.8－4.8－3.2	スギ	
	1036	213	SD9007	X43Y34	漆椀	14.7－5.6－0.7	トチノキ	内外面に漆塗，外面に削り痕
	1049	213	SD44		樽（蓋）	14.7－14.7－1.1		
	1050	213	SD44		下駄	19.2－7.1－(3.4)		表・裏面に漆残る？
	1058	213	SD3087	X178Y96	櫛	(17.0)－3.8－1.2	イスノキ	
165	1059		SE5067		加工板	22.3－2.8－0.5		
	1060	213	SE5068		曲物	45.0－＊＊－21.0	スギ	井戸枠
	1061	213	SE5068		杓子形木器	24.9－＊＊－0.4	ヒノキ	
	1064	214	SE7020		下駄	(23.3)－11.7－(3.1)	スギ	茶褐色の漆残る
	1065	213	SE7020		箸	21.3－0.4－0.4		
	1067	214	SE8042		折敷	(15.2)－11.7－0.8		
	1068	214	SE8042		円形板	25.0－8.8－1.3		
	1069	214	SE8042		曲物	13.6－＊＊－4.5	スギ	
	1073	214	SE8058		曲物	36.0－＊＊－10.2		井戸枠
	1074	214	SE8058		曲物	39.0－＊＊－17.2	スギ	井戸枠

第25表　木製品一覧(4)（中世・近世）

挿図	挿図番号	図版番号	遺構番号	座　標	種　類	規格(長－幅－厚cm)	樹　種	備　考
165	1075	214	SE8058		曲物	59.0－＊＊－13.8		井戸枠
168	1077	215	SK67		柄	12.3－3.4－1.4	スギ	
	1078		SK67		箸	(5.0)－0.5－0.5		
	1080	215	SK121		箸	(16.8)－0.7－0.4		
	1081	215	SK121		加工棒	(29.6)－8.5－(0.8)		
	1082	215	SK326		下駄	(15.9)－11.7－(3.2)	ケヤキ	
	1083	215	SK114		箸	28.4－0.8－0.5		
	1084	215	SK3013		チュウギ	20.7－1.0－0.6	スギ	
	1085	215	SK3013		チュウギ	(19.5)－0.8－0.7	スギ	
	1086	215	SK3013		チュウギ	19.4－1.2－0.6	スギ	
	1087	215	SK3013		チュウギ	(16.8)－1.0－0.8	スギ	
	1088	215	SK3013		チュウギ	(15.6)－0.8－0.6	スギ	
	1089	215	SK3013		チュウギ	(16.2)－0.9－0.7	スギ	
	1090	215	SK3013		チュウギ	(1.1)－0.9－0.8	スギ	
	1091	215	SK3013		チュウギ	(14.3)－1.0－0.8	スギ	
	1092	215	SK3013		チュウギ	(14.4)－0.6－0.5	スギ	
	1093	215	SK3013		チュウギ	17.0－0.9－0.7	スギ	
	1094	215	SK3013		チュウギ	(16.6)－1.0－0.8	スギ	
	1095	215	SK3013		チュウギ	13.6－1.1－0.7	スギ	
	1097	216	SK3057		漆椀	16.0－4.8－0.6	ケヤキ	内外面に黒色の漆
	1098	215	SK3057		下駄	22.3－		
169	1099	216	SK3057		擬宝珠形	14.2－	ヤナギ類	
	1100	216	SK3057		擬宝珠形	13.7－	ヤナギ類	
	1101		SK3057		加工棒	34.0－3.3－1.5		
	1102		SK3057		加工棒	28.0－1.6－1.6		
	1105		SK6024		円形板	6.0－＊＊－0.7	モミ	曲物底板？
	1107	216	SK7030		加工板	60.8－16.4－1.4	スギ	北西側板
	1108	216	SK7030		加工板	62.8－14.2－1.5	スギ	南東側板
	1109	216	SK7030		加工板	58.1－16.0－0.8	スギ	南西側板
170	1110	216	SK7030		加工板	62.0－12.4－1.2	スギ	北東側板
	1111	216	SK7030		加工板	30.9－(7.2)－1.1	スギ	南西裏止め
	1112	216	SK7030		加工板	28.3－(3.4)－1.5	スギ	北西裏止め
	1113		SK7030		加工棒	33.7－(2.8)－1.4	スギ	南東裏止め
	1114		SK7030		加工板	33.4－(6.6)－1.7	スギ	北東裏止め
	1115	217	SK7239		箸	(22.7)－0.6－0.4		
	1116	217	SP7240		箸	22.9－0.6－0.6		
	1117	217	SP7240		箸	(19.3)－0.6－0.6		
	1118	217	SE8119		箸	(17.2)－0.6－0.5		
	1119	217	SK9055		箸	21.4－0.6－0.5		
	1126	217	SK7070		下駄	17.8－5.9－3.0	タケ	竹製
175	1137	217	SK9172		加工板	10.8－5.8－0.6		
	1138	217	SK9172		加工棒	20.5－1.2－0.6		
	1139	217	SK9172		箸	20.1－0.6－0.5		
	1145	217	SK7070		下駄	20.7－9.1－(8.8)	カエデ属ウリカエデ節	
181	1243	217	SK8030		栓	5.2－2.8－2.8	スギ	
	1244	218	SK8030		円形板	6.7－(6.5)－0.3	スギ	底板
190	1425		D2	X50Y30IIb	漆椀	＊＊－＊＊－0.4		内外面に黒色の漆
	1426		B2E	X193Y90II	漆椀	＊＊－＊＊－1.1		内外面に部分的に黒色の漆
	1427		C3	X112Y66 I	漆椀	＊＊－＊＊－0.8		内外面に黒色の漆
	1428		A	X220Y120III	漆椀	＊＊－＊＊－0.6		内面赤色・外面黒色の漆塗
	1429		B3	X160Y90	漆椀	＊＊－＊＊－0.7	ケヤキ	一部分に黒色の漆残る
	1430	218	B2E	X186Y99	木椀	12.6－5.7－1.4	ブナ	
	1431	218	B1	X220Y98	下駄	(12.6)－6.6－(3.9)	スギ	
	1432	218	A	X235Y118 I II	円形板	31.2－9.8－2.0		底板
	1433	218	B2E	X188Y87	加工棒	57.0－1.2－1.2		

第26表　石製品一覧（中世・近世）

挿図	挿図番号	図版番号	遺構番号	座　標	種　類	規格（長－幅－厚－重cm・g）	材　質	備　考
132	700	223	SP3083		石鍋	8.6－6.2－1.4－125	滑石	
	710	223	SP7172		砥石	9.4－5.5－0.9－80	泥岩	
133	721	223	SP7062		砥石	2.8－2.4－0.3－2.4	粘板岩	
134	730	223	SP9251		砥石	3.6－2.1－0.7－10	泥岩	
139	799	223	SD2001	X189Y92	砥石	6.0－3.6－2.7－109	凝灰岩	
140	803	220	SD2001	X180Y91	石臼	32.0－(31.6)－12.8－20200	凝灰角礫岩	上石
	804	220	SD2001	X179Y91	石臼	30.0－30.0－10.6－14400	凝灰岩	上石
	805	219	SD2001	X187Y91	石臼	32.0－32.0－13.2－25000	凝灰角礫岩	下石
	806	219	SD2001	X176Y91	石臼	31.2－31.2－9.6－14600	凝灰岩	下石
146	852	223	SD8043	X76Y49	砥石	6.2－5.3－1.6－90	粘板岩	
150	939	223	D1	X78Y54	砥石	9.3－7.1－2.8－280	不明	
175	1135		SK9146		砥石	5.3－2.5－2.5－50	凝灰岩？	
	1140		SK9135		剝片	1.9－1.4－0.7－1.7	鉄石英	
	1143	223	SK7070		砥石	7.6－＊＊－5.5－600	砂岩	
	1144	223	SK7070		砥石	7.7－6.2－4.7－600	砂岩	
181	1245	223	SK8030		石硯	12.8－7.3－2.0－280	粘板岩	
191	1434	223	D2	X46Y43	石硯	(4.5)－7.5－2.1－100	泥岩	
	1435	223	C2	X141Y68 I	石硯	(11.0)－6.3－1.6－250	粘板岩	
	1436		B2E	X184Y97IV	石鍋	5.1－4.9－1.7－59.9	滑石	
	1437	223	B3	X165Y85 I	砥石	9.1－3.2－0.7－40	粘板岩	
	1438	223	B3	X153Y89	砥石	13.7－6.7－4.5－560	砂岩	
	1439	223	B3	X152Y85	砥石	12.6－＊＊－6.1－900	砂岩	
	1440	223	B3	X157Y86	砥石	11.1－＊＊－5.1－530	砂岩	
	1441	222	B1	X211Y114II	五輪塔	(21.6)－＊＊－14.3－7800	凝灰岩	火輪
	1442	221	B3	X153Y85	石臼	30－＊＊－10.5－2600	凝灰岩	上石
	1443	221	B3	X153Y87	石臼	31－＊＊－9.1－3100	砂礫岩？	上石
	1444	221	D1	X86Y55 I	石臼	30－＊＊－7.2－3000	凝灰岩	上石
	1445	222	D1		石臼	34－＊＊－10.6－5000	凝灰角礫岩？	上石
192	1446	222	B3		石臼	32－＊＊－8.0－3900	凝灰角礫岩	上石
	1447	221	B3	X153Y87	石臼	32－＊＊－8.2－3100	凝灰角礫岩	下石

第27表　金属製品一覧（中世・近世）

挿図	挿図番号	図版番号	遺構番号	座　標	種　類	規格（長－幅－厚－重cm・g）	材　質	備　考
139	801	224	SD2007	X176Y90	楔状	18.8－1.9－0.5－61.47	鉄	馬鍬,舟釘
	802	226	SD2007	X200Y83	銅銭	2.4－	銅	
150	940	224	D1	X86Y51IIb	球状	2.25－2.2－＊＊－7.26		
	941	224	D1	X105Y45IIb	火箸	20.8－0.8－＊＊－21.84	銅	
	943	226	D1	X98Y41IIb	銅銭	2.4－	銅	元豊通寶
	944	226	D1	X83Y49IIb	銅銭	2.4－	銅	皇宋通寶
	945	226	D2	X70Y56IIf	銅銭	2.4－	銅	元祐通寶
162	1051	226	SD100	X236Y101	銅銭	2.8－	銅	寛永通寶
165	1066	224	SE7020		板状	(6.1)－3.15－0.9－22.73	鉄	
170	1120	226	SK8050		銅銭	2.4－	銅	政和通寶
	1121	226	SK8050		銅銭	2.4－	銅	皇宋通寶
192	1448	224	C2	X135Y55	匙状	(24.8)－(6.6)－0.25－33.86	銅	
	1449	224	D1	X118Y50 I b	鎌	(19.6)－2.8－0.2－50.91	鉄	
	1450	225	D2	I	包丁	(16.5)－3.5－0.5－79.92	鉄	
	1451	225	A	X235Y100	刀子	(17.2)－2.4－0.5－56.43	鉄	
	1452	225	B2E	X186Y105II	釘	15.0－1.5－0.5－30.89	鉄	
	1453	225	C1	X171Y65 I	不明	(13.8)－1.5－0.6－49.36	鉄	
	1454	225	B2E	X186Y101II	煙管	4.3－0.9－0.1－7.55	銅	
	1455	225	D2	X43 I	煙管	4.9－1.0－0.1－10.77	銅	
	1456	225	A	X238Y131 I －III	煙管	4.9－1.0－0.1－3.51	銅	
	1457	225	D1	X75Y45 I	鉛玉	1.1－＊＊－＊＊－4.48	鉛	
	1458	225	B2E	X188Y105II	円盤状	4.8－＊＊－1.0－77.02	鉄	
	1459	226	B3	II	銅銭	2.3－	銅	
	1460	226	C2	X198Y80II	銅銭	2.4－	銅	永楽通寶
	1461	226	B2	X197Y82II	銅銭	2.5－	銅	祥符通寶
	1462	226	B2E	X185Y92II	銅銭	2.5－	銅	寛永通寶
	1463	226	B2E	X183Y92II	銅銭	2.35－	銅	寛永通寶
	1464	226	B3	X158Y84 I	銅銭	2.4－	銅	寛永通寶
	1465	226	B3	X165Y90	銅銭	2.4－	銅	寛永通寶
	1466	226	B3	X167Y84 I	銅銭	2.4－	銅	寛永通寶
	1467		B3	X172Y91 I	銅銭	2.3－	銅	寛永通寶

第Ⅴ章　考　　察

1　五社遺跡出土の古墳時代土器について

竪穴建物，土坑，溝の遺構出土品に加え，包含層出土の遺物も含めて一括性の高い土器群である。以下，器種分類に基づき概観する。

A　甕形土器

A類－「く」字状口縁を持つもの。甕形土器の主体となる。体部は長胴のものが主体であるが，倒卵形や，下膨れ気味のもの，球形に近いもの等多様である。調整は外面ハケメで仕上げられ，下位にケズリを施すものが主体であるが，内外面ともにケズリで仕上げるものもみられる。内面はハケメ，ナデで，肩部以下に粘土接合痕が顕著にみられる。口縁端部の形態により細分が可能と思われる。1類は端部を丸く収めるもので，口縁の短いものと長いものがある。2類は長い口縁部が直線的に開くもので，端部は丸い。3類は端部を平縁状に面取りするもの。4類は端部をつまんでいるもので，外側に弱い段が付くもの。5類は端部を薄く仕上げるもので，指頭圧痕が残る。6類は長めの口縁で，端部が外反するものである。

B類－直立気味に伸びて途中で屈曲外反する口縁で，口縁帯を持つ。大きくは「く」字状口縁に含まれるかもしれない。体部は長胴で，底部に小さな平坦面を持つ。調整は外面ハケメ，下位ケズリで，口縁～頸部にかけての口縁帯部分にナデを施す。内面はハケメ，ケズリで，頸部に段を持つ。内面肩部～中位にかけて粘土接合痕がみられる。

C類－A類に含まれる可能性あり。強く外反する短い口縁部で，長胴平底である。109の1点のみ。

D類－内湾気味に直立する口縁で，途中に稜を持つ。体部は長胴平底である。壺形土器C類になる可能性もある。調整は内外面ともにハケメで，外面中位は横方向にハケメを施す。内面肩部に粘土接合痕を残す。43の1点のみである。

E類－ゆるく外反する直立気味の口縁を持つ。端部は丸い。体部は球形に近く，丸底である。調整はナデ，ケズリで，内面に指頭圧痕がみられる。

F類－小型の甕を一括。

B　壺形土器

甕形土器との識別が困難なものが多く，甕形土器に含まれる可能性がある。

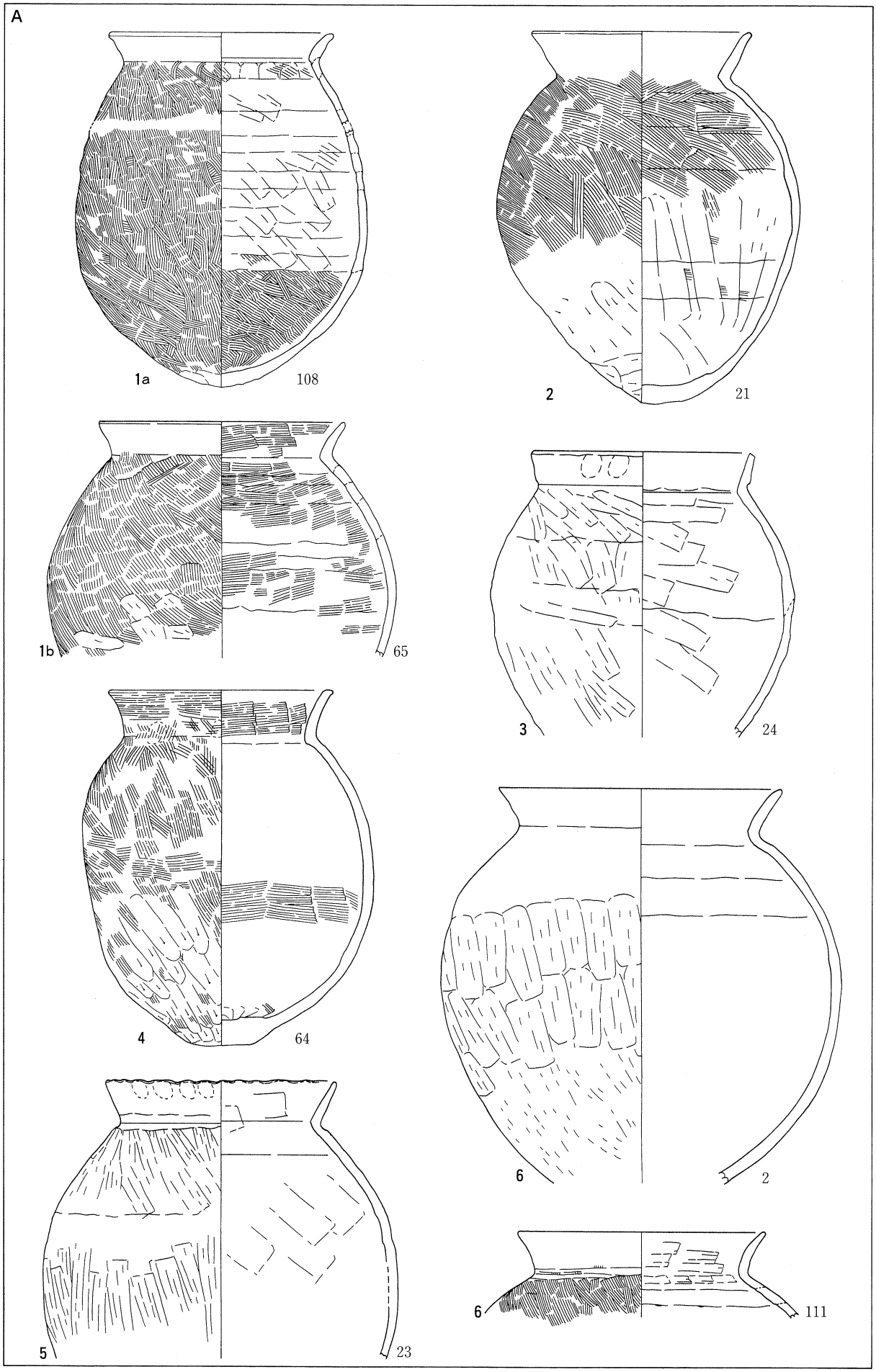
A類－「く」字状に外反する口縁に，丸底球胴の体部が付くもの。調整は外面ハケメ，ケズリで仕上げられ，口縁部はナデ。内面はハケメである。

B類－有段口縁。口縁下部に凸帯状の段を持つもの。体部は球胴になると思われる。内面肩部に粘土接合痕を残す。「山陰系」の影響を受けていると考えられる。

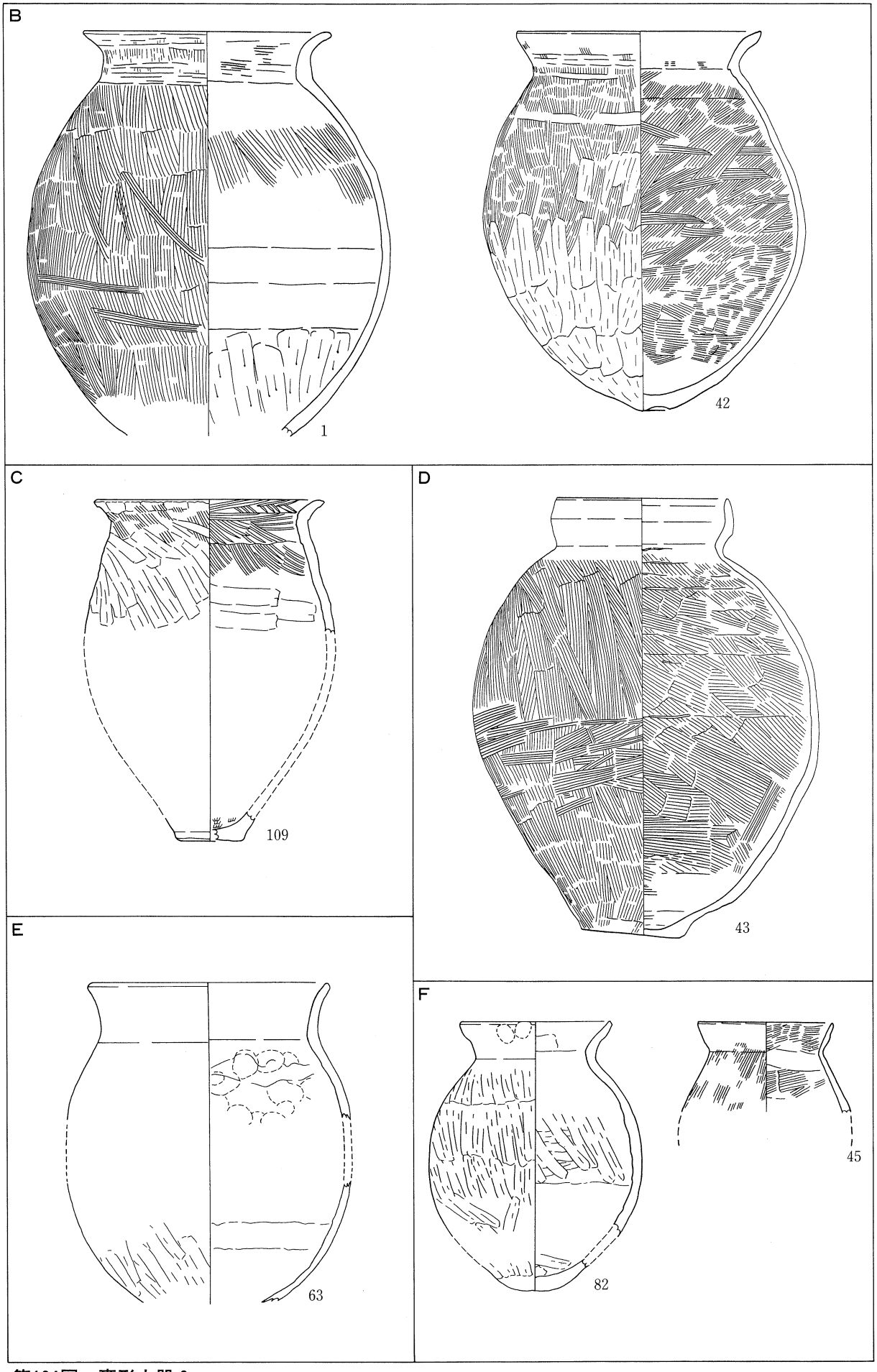
C類－直口壺。口縁の形態で細分が可能である。1類はやや内湾気味に立ち上がり，途中に稜を持つ。2類は直線的に伸びる短い口縁を持つもの。

D類－外方へ直線的に伸びる長い口縁に，丸底・球形の体部が付く中・小型壺。調整はナデ，ハケメで，内底面に指頭圧痕が残る。頸部内面に段を持つ。

E類－外方へ直線的に伸びる口縁の小型壺で，D類よりも頸部の径が小さい。体部は算盤玉状で，胴部最大径が中位以下にくるもの。頸部内面に鋭い稜を持つ。調整は外面ハケメで，下位にケズリを施し，口縁～頸部にかけてはナデである。内面はハケメで，粘土接合痕が残る。



第193図　甕形土器1「く」字状口縁



第194図　甕形土器 2

F類－外方へ直線的に伸びる口縁に，潰れた球形の体部が付く小型壺。口径は胴部最大径を越えない。体部の形態で細分が可能である。１類は胴部最大径が体部中位にあり，頸部内面に鋭い稜を持つ。調整は外面ハケメ，ミガキ，ケズリと多様であるが，中位以下にはケズリを施す。内面はケズリである。２類はやや下膨れの体部で，頸部内面に稜を持たない。やや短く，直立気味の口縁が付く。３類はやや直立する口縁で，頸部内面に稜を持たない。頸部径が大きく，頸部のくびれがほとんどないもの。粘土接合痕が残る。

G類－口縁部しかなく，全体の器形は不明であるが，外方へ直線的に伸びる長い口縁を持つ小型壺。器壁が薄く，硬質な胎土である。

C　高杯形土器

A類－椀状に開く杯部で，杯下部の稜は不明瞭である。脚は中ほどがやや膨らむエンタシス柱状で，裾部で強く屈曲外反し，内面に段ないしは鋭い稜を持つ。裾部はやや内湾気味で，長い。脚部の調整は外面ミガキで，内面に粘土接合痕が残るものが多い。

B類－杯部の形態はA類とあまり変わらないが，やや杯下部の稜がある。脚部は「ハ」字状（やや丸味を持つ）に開いて，裾部で屈曲外反する。裾部の屈曲は短く，内面に稜を持つ。調整はミガキで，ハケメの残るものが一定量ある。脚内部には粘土接合痕が残る。脚部の長いものと短めのものとがある。

C類－浅い皿状の杯部で，杯下部の稜はない。脚部はB類と同様であるが，短くずんぐりしている。

D類－逆台形状の直線的に開く杯部で，下部に明瞭な段を持つ。杯部口径は15㎝程で，他に比べて小さい。脚部は「ハ」字状に開いて裾部で屈曲外反するが，屈曲は曖昧である。裾部内面に段を持つ。調整はナデ，ハケメである。脚部内面には粘土接合痕が残る。

E類－椀状に開く杯部で，A類と変わらないが，口径の大きなものと小さなものの２種がある。脚部は「ハ」字状に開き，裾部はやや屈曲気味だが，明瞭なものではなく，内面に稜は持たない。調整はナデ，ハケメで，脚部内面に粘土接合痕が残る。

F類－脚部しかなく，全体の器形は不明である。「ハ」字状に開く脚部で，「東海系」高杯の影響を受けていると考えられる。調整はナデ，ミガキで，一部ハケメが残る。器壁は薄い。内面に粘土接合痕はみられない。

G類－杯部のみで，全体の器形は不明である。口径20㎝以上の大型品で，杯下部に明瞭な段または，凸帯があるもの。調整は外面ナデ，ハケメで，内面はナデ，ミガキが丁寧に施されている。

H類－杯部のみで，全体の器形は不明である。逆台形状の小さな杯部で，下部に明瞭な段または，凸帯を持つ。調整は外面ナデ，ハケメで，内面はナデである。D類の杯部と考えられる。

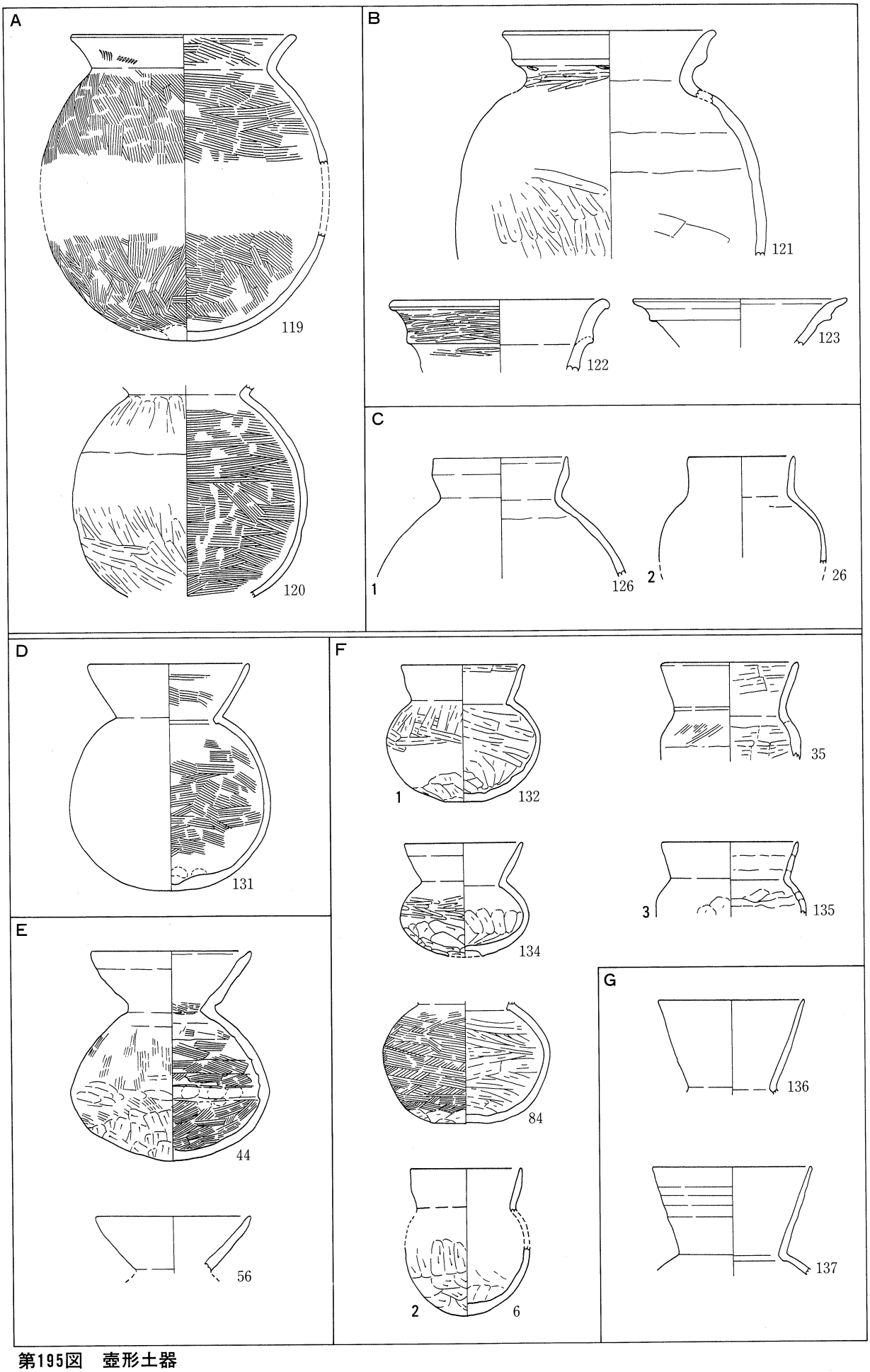
I類－杯部のみで，全体の器形は不明である。内湾気味に立ち上がる椀状の杯部で，細分が可能である。１類は皿状の浅いもので，端部がやや外反気味で杯部内面に不明瞭だが稜を持つ。２類は直線的に開き，口縁端部が強く外反する。３類は内湾気味で深い鉢状の杯部で，口縁端部が強く外反する。口径に大小の２タイプがあり，脚部が付くかどうか不明である。

D　その他

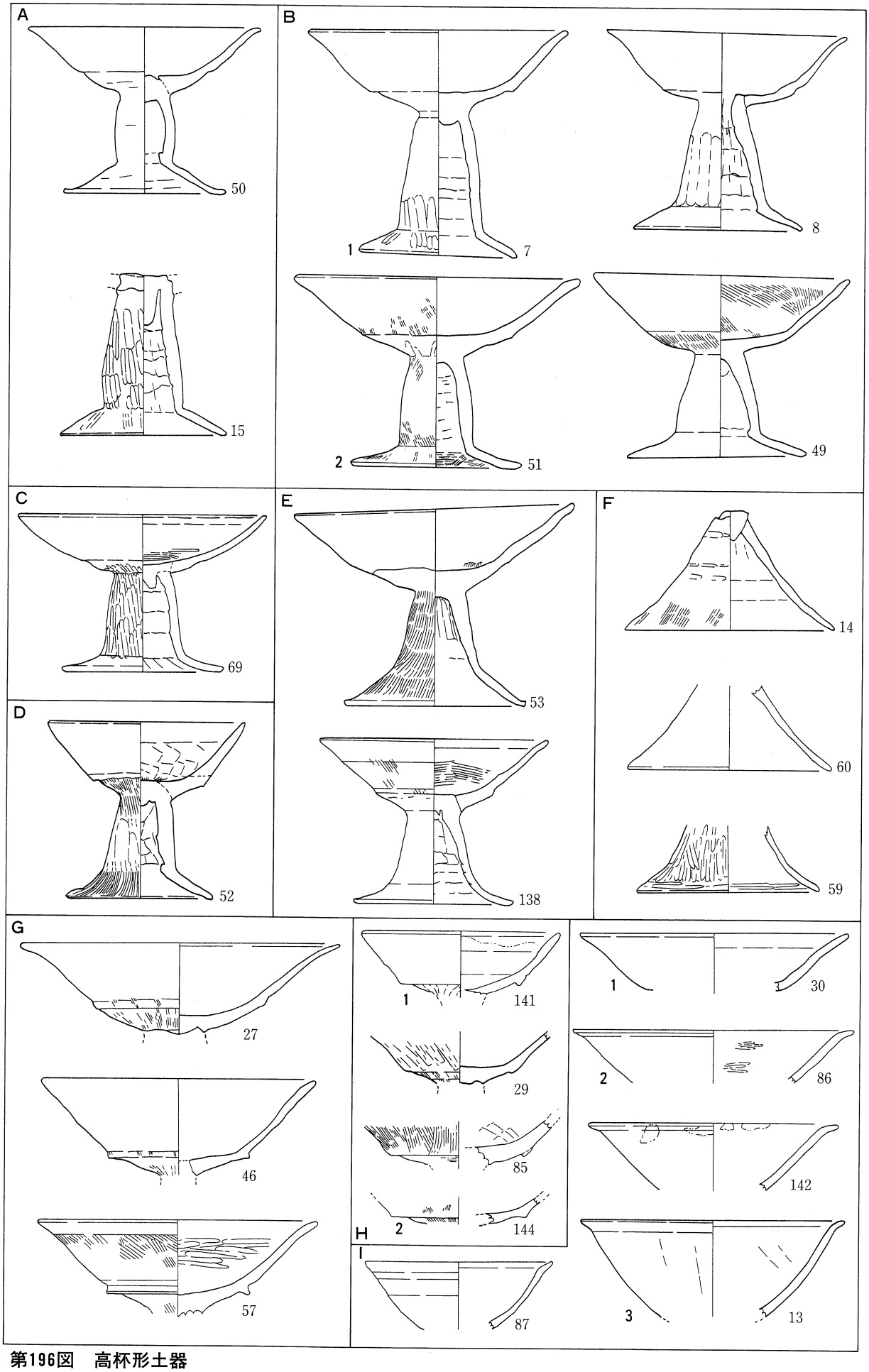
蓋形土器が１点出土している。

E　まとめ

当土器群は包含層出土の遺物も含むが，出土地点は竪穴建物周辺に限られることから，一括資料として捉えることが可能であると考える。器種構成は，甕・小型壺・高杯のセットで構成されており，


A
119
120
B
121
122
123
C
1
126
2
26
D
131
E
44
56
F
1
132
134
84
2
6
35
3
135
G
136
137

第195図　壺形土器


A
50
15
B
1
7
8
2
51
49
C
69
D
52
E
53
138
F
14
60
59
G
27
46
57
1
141
29
85
2
144
H
I
87
1
30
2
86
142
3
13

第196図　高杯形土器

椀形土器・手づくね土器・須恵器は未共伴である。甕形土器では「布留系」甕は認められず，「く」字状口縁の甕が主体となり，平底のものが一定量みられる。高杯はＢ類が主体であるが，「ハ」字状の脚のＦ類，大型で稜のはっきりしたＧ類などバラエテイーに富む。小型壺はＥ～Ｇ類と多様である。県内では当該期の遺跡の調査例は少ないが，小杉町北野遺跡，富山市境野新遺跡・古沢Ａ遺跡，小矢部市道林寺遺跡[注1]・高岡市石塚遺跡等がある。北野遺跡とは，椀形土器・手づくね土器・須恵器がみられない点，高杯・小型壺が多い点で同様の在り方をしている。境野新遺跡[注2]では，手づくね土器・須恵器がみられず，高杯・小型壺が多くみられる点は共通した在り方をしている。しかし，椀形土器がみられ，内面黒色処理されたものを含む点，小型壺の胴部に円孔を持つもの（線に分類されている）がみられる等の点は，当土器群よりも後出の様相と考えられる。古沢Ａ遺跡[注3]は須恵器がみられず，小型壺が多くみられる点は共通した在り方であるが，椀形土器並びに手づくね土器が一定量みられる点については，境野新遺跡よりも更に後出の様相である。道林寺遺跡第３号住居址からは甕・中型の壺・高杯・椀形土器・須恵器が出土しており，椀形土器が多用されている。漆町遺跡第13群土器群に位置づけられている。石塚遺跡では凹地からの一括土器で，甕・小型壺・高杯及び椀，手づくね土器・須恵器（ＴＫ208に比定）が出土している。小型壺がみられる点や椀形土器が少ない点から道林寺遺跡第３号住居址出土土器群よりも古相に位置づけられているが，道林寺遺跡３号住出土の須恵器がＴＫ216に比定されており，さらに手づくね土器を含まないことから，石塚遺跡を古相に置くことに疑問が持たれる[注4]。

以上のような様相から県内での推移は，県西部では五社遺跡→道林寺３号住→石塚遺跡となり，県中央部では北野遺跡→境野新遺跡→古沢Ａ遺跡となると考えたい。五社遺跡出土の当土器群は県中央部では北野遺跡と同時期に位置づけることが可能であろう。北陸では南加賀地域を主体とした田嶋氏の編年で，古墳時代３様式Ⅰ期（漆町遺跡第11～12群土器群）に該当するものと考える。道林寺３号住と石塚，境野新と古沢Ａとの間は大きな時期差とはならず，３様式Ⅱ期の範疇に収まるものと考える。県西部では道林寺３号住の段階から須恵器が共伴しているが，中央部では須恵器の共伴は古沢Ａ遺跡以降であり，西部のほうが須恵器導入が先行しているといえる。当土器群では，須恵器は確認されておらず，道林寺３号住との間に一つの画期があるものと考えられる。実年代では，５世紀中葉と想定できる。　　（三島道子）

注１　小矢部市道林寺遺跡の資料については伊藤隆三氏，塚田一成氏の御好意により，実見させていただいた。

注２・３　富山市境野新遺跡並びに古沢Ａ遺跡の遺物については，藤田富士夫氏，窪野隆弘氏の御好意により実見させていただいた。

注４　祭祀的土器が小型丸底壺から手づくね土器へ変わるという変遷があり，手づくね土器の有無で判断すると石塚遺跡のほうが若干新しい様相を持つように考えられるが，遺跡格差とも捉えられる。このことから，両者の時期差というのは僅かなものと理解する。

※県内の推移等，全文を通して岡本淳一郎氏から助言，指導をいただいた。記して感謝いたします。

様式（田嶋）	県西部	「く」字甕	小型壺	高杯	椀	手づくね	須恵器	県中央部	「く」字甕	小型壺	高杯	椀	手づくね	須恵器
３様式Ⅰ期	五社	○	○	○				北野	○	○	○			
３様式Ⅱ期	道林寺３号住	○	○	○	○		○TK216	境野新	○	○	○	○黒		
	石塚	○	○	○	○	○	○TK208	古沢Ａ	○	○	○	○	○	(○)

第28表　土器組成表

引用・参考文献

伊藤隆三　1987『道林寺遺跡』小矢部市教育委員会

伊藤隆三・塚田一成　1991『北反畝遺跡』小矢部市教育委員会

上野章他　1978『日の宮遺跡発掘調査報告書』富山県教育委員会

久々忠義・橋本正春他　1982『北陸自動車道遺跡調査報告－立山町土器・石器編』富山県教育委員会

酒井重洋・島田修一　1987『北野遺跡・椎土遺跡緊急発掘調査概要』小杉町教育委員会

田嶋明人　1986『漆町遺跡Ⅰ』石川県埋蔵文化財センター

田嶋明人　1987『永町ガマノマガリ遺跡』石川県埋蔵文化財センター

出越茂和　1995『上荒屋遺跡Ⅰ　第2分冊古墳時代編』金沢市教育委員会

土肥富士夫　1985『倉垣遺跡』石川県志賀町教育委員会

中島俊一他　1978『辰口町・高座遺跡発掘調査報告』石川県教育委員会

藤田富士夫他　1974『富山市境野新遺跡発掘調査報告書』富山市教育委員会

藤田富士夫他　1983『古沢A遺跡発掘調査概要』富山市教育委員会

南久和　1992『金沢市沖町遺跡』金沢市教育委員会

望月精司　1995『念仏林南遺跡II』小松市教育委員会

山口辰一　1996『市内遺跡調査概報IV』高岡市教育委員会

山本正敏他　1978『富山県小矢部市竹倉島遺跡発掘調査概報』富山県教育委員会

2　富山県における出現期のカマドについて

A　はじめに

五社遺跡では5世紀中頃に位置づけられる竪穴建物が4棟検出されている。うち3棟ではカマドが確認されており，富山県においては最古例にあたる。北陸地方は古墳時代のカマドについては類例に乏しく，6世紀後半～7世紀初頭頃になって出現し，7世紀中頃以降に普及するという状況[注1]である。富山県においても，カマドの出現は6世紀後半の上野遺跡で確認されたものが最古例であり，北陸の他地域と同様の在り方をするものと考えられてきた。しかし，五社遺跡では3棟の竪穴建物でカマドが確認され，県内及び北陸のカマド出現が約1世紀半も遡ることとなった。そこで，県内のカマドの変遷を追うと共に，五社遺跡のカマドの持つ意義についてみていきたい。

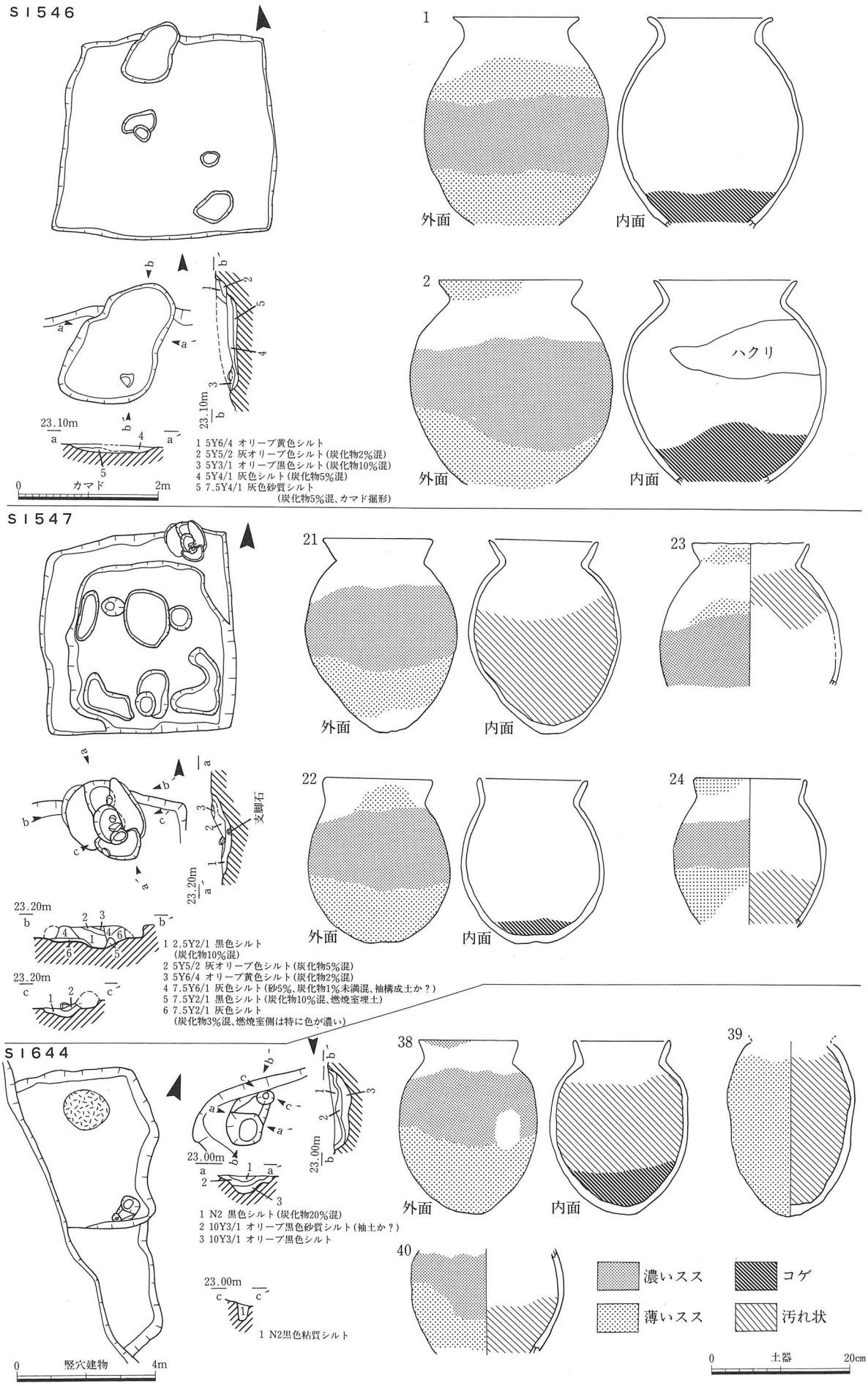
B　用語

まず，「カマド」であるが，竈，かまど，カマドとまちまちに表記されているが，ここではカマドの表記を取るものとする(部分名称については第Ⅳ章1の注1を参照)。カマドはその構造・概念の上で，炉とは大きな差を持ち[注2]，けっして「発展した炉」の延長上には考えられない施設である。ここでのカマドは，燃焼部（火処）を粘土などの構築材で覆い，焚口部と掛口部を作り出したもので，屋外に煙を導き出す煙道を持つ。空気の供給をコントロールできる加熱施設としての作り付けカマドを対象とする。

C　五社遺跡のカマド

竪穴建物内の位置，規模，並びに出土土器の使用痕についてみていきたい。**SI546**のカマドは北壁中央の西寄りに位置し，壁に対して斜め左（西）に振れている。規模は160cm×120cmの楕円形で，浅い掘り込みを持つ。天井・袖・煙道・煙出口は確認されていないが，壁を25cmほど掘り込み，炭化物を多量に含む土が堆積していることからカマドの基部と考えている。同様な遺構が新潟県舟戸遺跡SI-1号住[注3]にあり，報告では「張出し炉」とされ，「煙道を持つカマド成立直前の過渡期の形態」とされている。SI546・舟戸遺跡SI1の例は，「類カマド[注4]」とか「カマド状遺構[注5]」と称されるものではなく，上部構造については不明ではあるが壁を掘り込んでいる点からは，未発達ながら煙道を意識したものと考えられ，カマドの概念の範疇で捉えられる施設であると考えている。**SI547**のカマドは北壁の東角に位置し，壁に対して斜め右（東）に振れており，ベッド状遺構の上に位置する。天井・煙出口は確認されていないが，袖は遺存状態が良く，カマドの全容が解る。規模は122cm×100cmで，燃焼部・焚出口は浅く掘り込まれ，壁を斜めに20cm掘り込んでいる。カマドの焚口幅は40cm，燃焼部幅30cm，焚口から奥壁までの長さ（奥行）90cmを測り，支脚石は焚口から32cmの位置にある。また，SI546・SI547ではカマドの覆土から被熱していない高杯が出土しており，カマド祭祀を行っていた可能性も考えられる。**SI644**のカマドは南壁東角に位置し，壁に対して斜め左(東)に振れている。規模は88cm×52cmで，他の2基とは異なり，壁を掘り込まずに接するだけである。天井・袖は確認されていないが，覆土の第2層は袖土の可能性がある。奥壁から40cmのあたりから一段深く掘り込まれており，焚出口と考えられる。また，奥壁と接する位置に粘土の小ピットがあり，性格は不明だが煙出口の可能性も考えられる。

3基のカマドはいずれも，竪穴建物の掘形に炭混じりの灰褐色シルトを貼って貼床とし，その上からもう一度掘り込んで土を貼りカマド基部としている。カマドの上部は更に上に作られることになる。このように，五社遺跡のカマドは二重構造を取っている。このような例は埼玉県下田・諏訪遺跡等で確認されており，除湿または亀裂防止効果の為と考えられている[注6]。また，初現期のカマドは炉と併設



第197図　五社遺跡のカマドと土器使用痕

される例が多くみられるという指摘[注7]があり，五社遺跡の場合はカマドを持つ竪穴建物の全てで地床炉が確認されている。

次に，土器の使用痕であるが，外山氏[注8]によるとカマド使用の土器にみられる使用痕は，1，肩部以下（口縁部から6㎝～7㎝下）に一線を画する様に，底部にかけて煤が付着する，2，胴部の煤が無い部分や頸部にカマド材の粘土が付着する，3，内面は外面の加熱痕跡と対応し，煤付着部分よりも僅かに下がった辺りからヨゴレが付着する，4，焦げつきは炉使用の土器に比べて少ない，5，内面に煤の付着はみられない等の特徴を持つ。五社遺跡のカマドを持つ竪穴建物出土の甕の場合，1・3・4・5が該当しており，カマドに使用された土器であると考えられる[注9]。外面は肩部以下に煤の付着が認められ，肩から胴部中位にかけては帯状に濃い煤（タール状）がみられるが，口縁部及び内面には煤の付着は認められない。口縁部には部分的に薄い煤の付着がみられる所もあるが，口縁全周に巡るものはない。内面の焦げは底部付近にみられる。ヨゴレは判断が曖昧な部分もあるが，外面の煤ラインとほぼ対応している。しかしながら，出土状況からは炉に接するように出土した甕もあり，完全にカマドのみの使用とは限定できない面もある。2については，粘土の付着はいずれの土器にも認められない。このことは，五社遺跡のカマドが，甕を掛口に粘土等で固定する，いわゆる「はめごろし」の形態を取らないことを示していると考えられる。また，外山氏が観察の対象とした土器は群馬県のものであり，「二つ掛け横並び」の構造をとるカマドが主流を占めていることを考えると，五社遺跡のカマドは別の構造[注10]を持つものであると考えられる。別の構造というのは，SI547ではほぼ中央に支脚と思われる石があり，「一つ掛け」のカマドと推測できる。先の関東（東日本）のカマドが「二つ掛け横並び」で甕と掛口を粘土で固定するものが主流であるのに対し，西日本のカマドは「一つ掛け」が主流となり，東日本と比較して袖や掛口部等を薄く造る。富山県はその境界線上に位置することが指摘[注11]されており，これらのことから，五社遺跡の例は西日本的な薄く造るカマドであると考えたい。

D　出現期のカマド

次に出現期のカマドについてみていきたい。全国的には初現期のカマドは，福岡県西新町遺跡[注12]・大阪府四ツ池遺跡[注13]・滋賀県西ノ辻遺跡[注14]・三重県勝田遺跡[注15]等で確認されており，いずれも3～4世紀代に位置づけられている。西新町遺跡のSC-31号住は布留式併行期（3世紀末～4世紀初頭）の竪穴建物で，北壁中央部に焼土が確認され，煙道は認められていないがU字状に側壁を残すもので，初現期のカマドと考えられている。同様な遺構は四ツ池遺跡SA01住居址でも確認されており，時期は庄内式期末である。カマドの出現は，九州南部・山陰・北陸・東北を除く地域では，5世紀代には確実に確認されるようになり（第198図），本格的な受容と普及は5世紀後半以降ということになる。出現期のカマドを持つ竪穴建物には須恵器が伴う例が多いことから，カマドの採用と須恵器の導入とが密接な関係を持つことが指摘されている[注16]。

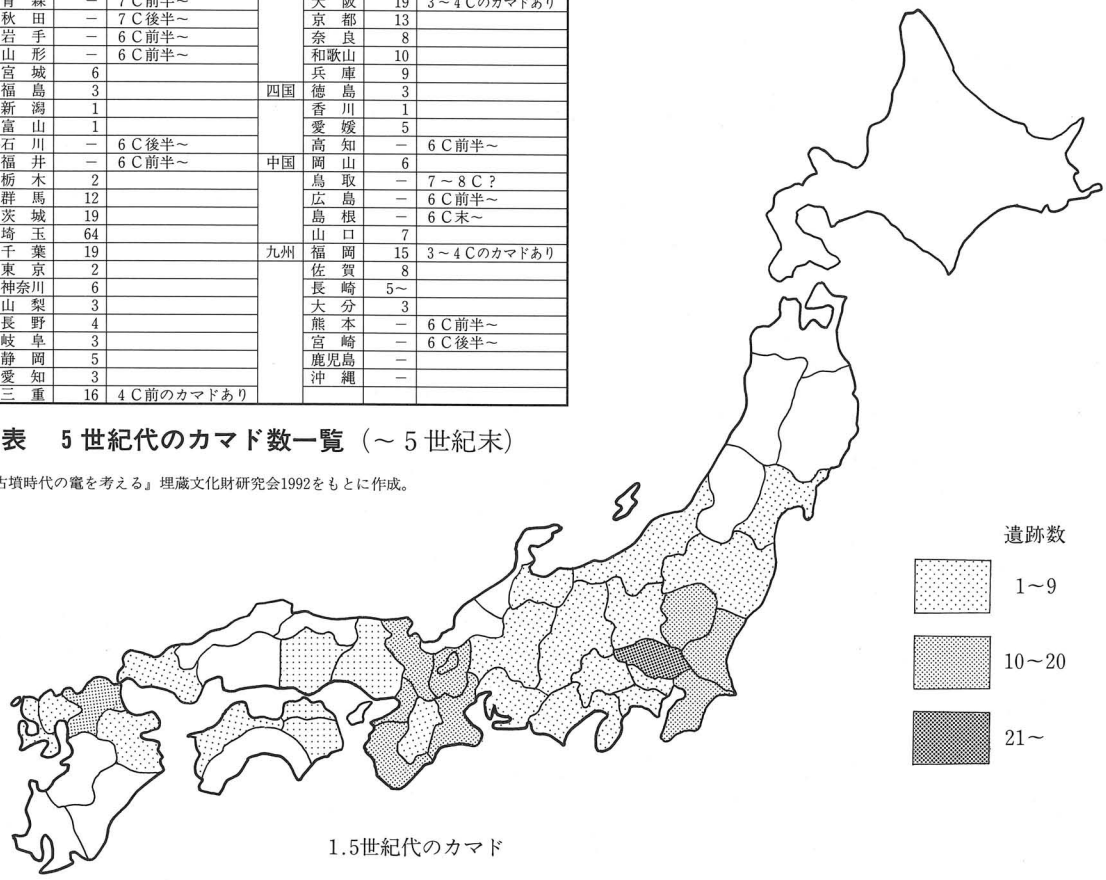
E　北陸の出現期のカマド

一方，北陸においてのカマドの出現は他地域に比べて遅く，6世紀代になってからであるが，北陸の中でも，新潟と石川・福井ではその在り方に違いがある。新潟では5世紀後半に舟戸遺跡の例があり，6世紀前半以降には普及する。カマドの出現・普及の時期は，隣接する信州・北関東・東北南部地域と比較すると若干遅れるが，北陸地方よりは早いことが指摘[注17]されている。このことから，新潟でのカマドの導入は東日本の影響の下に行われたものと考えられる。また，カマドの構造上の面からは，一之口遺跡SI112号住[注18]等で「二つ掛け横並び」の構造をとるカマドが確認されており，東日本的な在り方をしている。

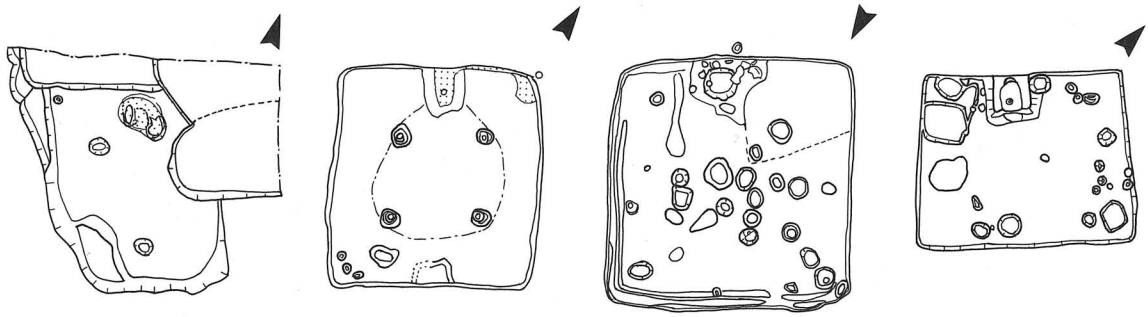
地域	県　名	遺跡数	備　　考	地域	県　名	遺跡数	備　　考
東北	北海道	－	7C後半～	近畿	滋　賀	11	4C前のカマドあり
	青　森	－	7C前半～		大　阪	19	3～4Cのカマドあり
	秋　田	－	7C後半～		京　都	13	
	岩　手	－	6C前半～		奈　良	8	
	山　形	－	6C前半～		和歌山	10	
	宮　城	6			兵　庫	9	
	福　島	3		四国	徳　島	3	
北陸	新　潟	1			香　川	1	
	富　山	1			愛　媛	5	
	石　川	－	6C後半～		高　知	－	6C前半～
	福　井	－	6C前半～	中国	岡　山	6	
関東	栃　木	2			鳥　取	－	7～8C？
	群　馬	12			広　島	－	6C前半～
	茨　城	19			島　根	－	6C末～
	埼　玉	64			山　口	7	
	千　葉	19		九州	福　岡	15	3～4Cのカマドあり
	東　京	2			佐　賀	8	
	神奈川	6			長　崎	5～	
中部	山　梨	3			大　分	3	
	長　野	4			熊　本	－	6C前半～
	岐　阜	3			宮　崎	－	6C後半～
東海	静　岡	5			鹿児島	－	
	愛　知	3			沖　縄	－	
	三　重	16	4C前のカマドあり				

第29表　5世紀代のカマド数一覧（～5世紀末）

※『古墳時代の竈を考える』埋蔵文化財研究会1992をもとに作成。



1.5世紀代のカマド

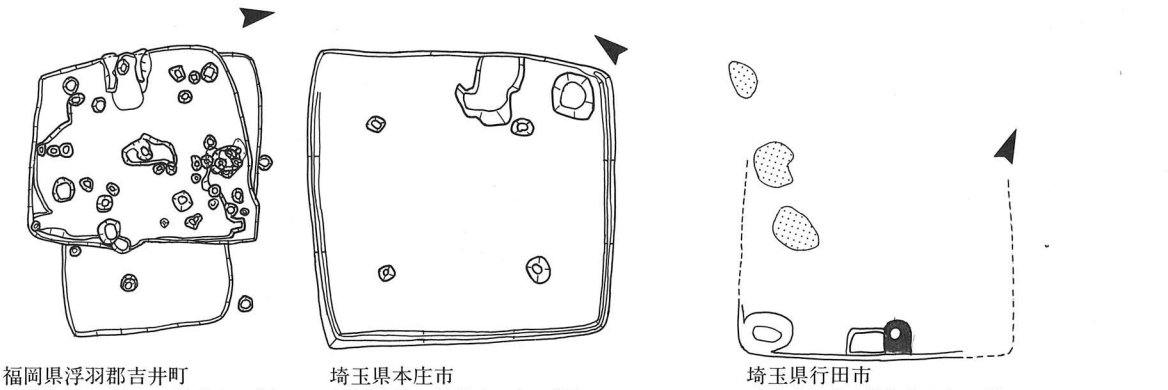


福岡県福岡市
西新町遺跡SC-31(4C前)

滋賀県神崎郡能登川町
西ノ辻遺跡(4C前)

大阪府堺市
四ツ池遺跡SA01住(～4C中)

福岡県浮羽郡吉井町
塚堂遺跡B地区3号住(5C前)



福岡県浮羽郡吉井町
塚堂遺跡B地区1・4号住(5C前)

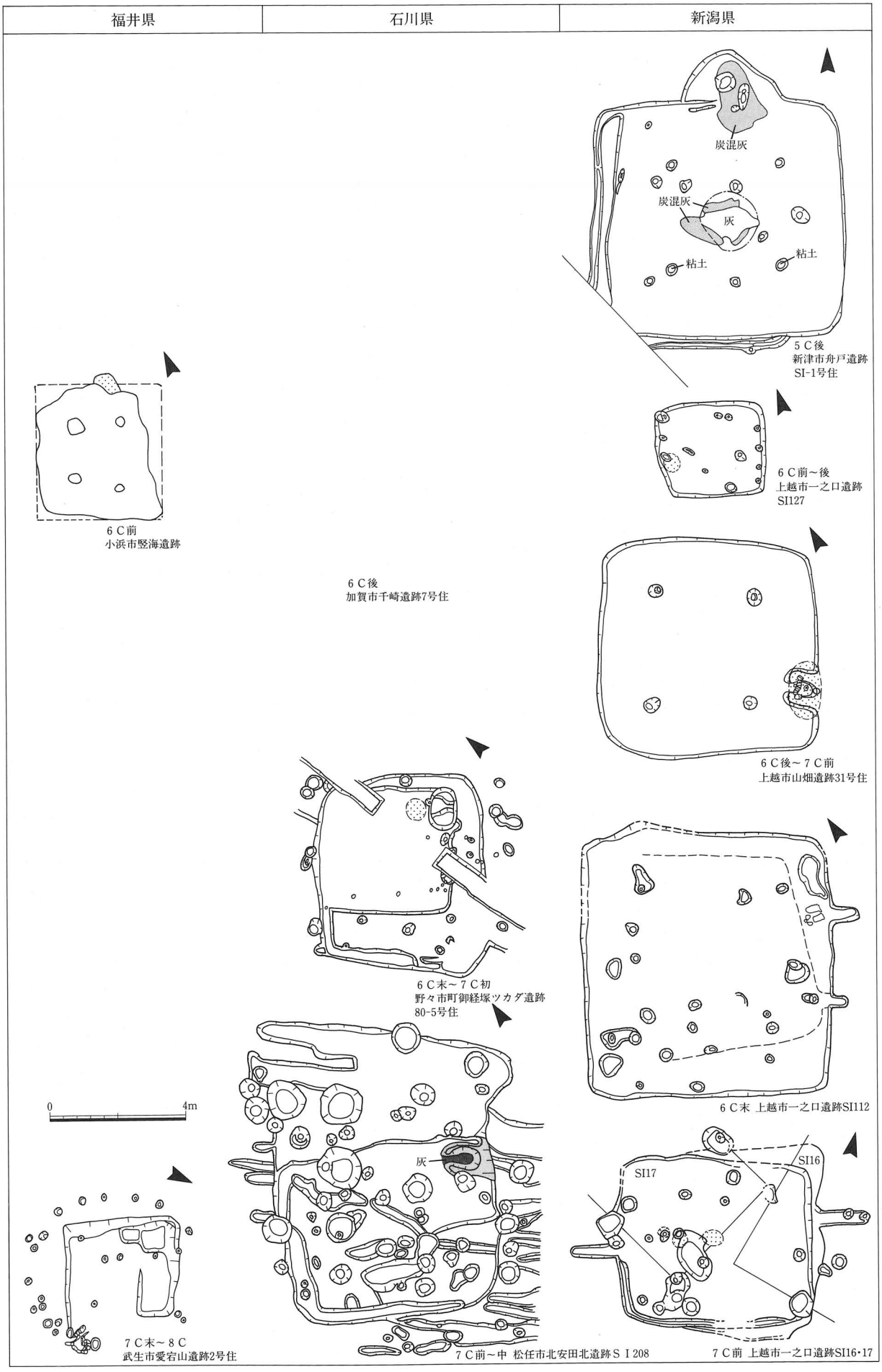
埼玉県本庄市
諏訪遺跡32号住(5C中～後)

埼玉県行田市
武良内遺跡1号住(5C中～後)

0　4m

2.出現期のカマド

第198図　出現期のカマド　1．5世紀代のカマド　2．出現期のカマド



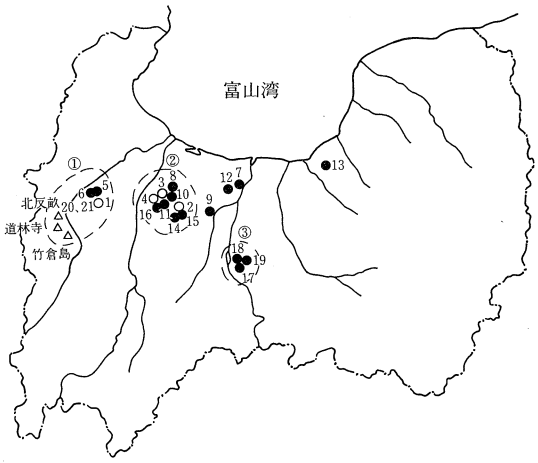
第199図　北陸地方のカマド

これに対し，石川・福井では，カマドが出現するのは6世紀になってからで，福井では堅海遺跡[注19]で6世紀前半，石川では千崎遺跡[注20]で6世紀後半が初現とされ，以後7世紀になって普及する。6世紀後半の石川県念仏林南遺跡[注21]で確認されたカマドは，明確な煙道を持たず，火処を粘土で覆っただけの簡易な「へっつい」的なカマドと予測され，西日本的な構造を持つと考えられている。

一方，いわゆる作り付けのカマドに対して，移動可能な置竈は確認例は少ないが5世紀末頃からみられる。同様に作り付けのカマド以前に置竈がみられる地域として，山陰地方（島根・鳥取）が挙げられる[注22]。島根では置竈が5世紀後半に出現するのに対し，カマドは6世紀末であり，鳥取では置竈はやはり5世紀後半に出現するが，カマドの方は未確認である。このように，山陰地方は弥生時代から奈良時代まで炉が作り続けられる特異な地域で，カマドとは異なる炊事形態を持っていたと考えられる。弥生時代から古墳時代の北陸地方では，土器及び墓制等の面で山陰地方の影響を強く受けていることが知られており，カマドの在り方においてもその影響を受けているものと思われる。

F　富山県におけるカマドの変遷

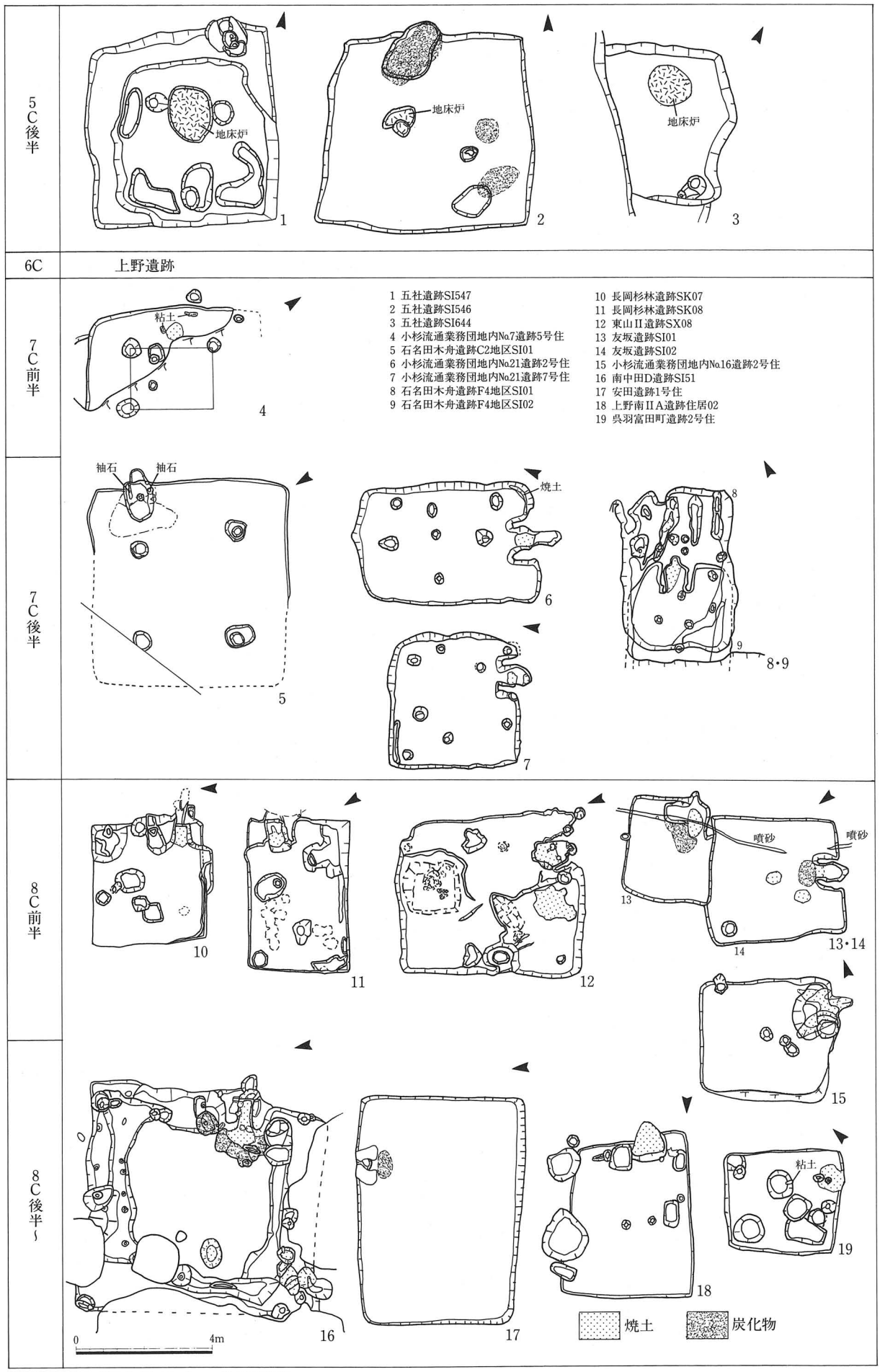
富山県においては，今回の五社遺跡（5世紀中頃）が初現となる。6世紀前半の確認例はなく，約1世紀半あいて6世紀後半に上野遺跡に出現するが，記録写真集による資料しかなく詳細については不明である。7世紀前半には流通業務団地内遺跡群（以下，流団と略す）No.7遺跡5号住で地床炉とその周囲に白色砂質土を方形に固めた土魂が検出されており，土魂が火熱を受けていること，及び土製支脚が出土していることからカマドの可能性が強いとされている遺構である。この段階までは，カマドは単発的で継続性がみられず，県内で本格的に導入され出すのは，7世紀後半以降になってからと思われる。7世紀後半には流団No.21遺跡（小杉丸山遺跡）・石名田木舟遺跡C2・F4地区で確認されている。流団No.21遺跡では24棟の竪穴建物が確認されているが，完掘されたものは少なく，そのうち2棟でカマドが確認されている。いずれも南壁に位置し，両袖・煙道を有している。石名田木舟遺跡C2地区では7世紀後半に属す竪穴建物が2棟確認され，いずれもカマドを持つ。1号住では，袖部に切石が使用され，支脚石に甕が置かれた状態で出土している。8世紀前半になると長岡杉林遺跡・東山II遺跡・友坂遺跡・流団No.16・18遺跡で確認されており，長岡杉林遺跡等の県中央部の地域でもカマドが導入され出す。8世紀後半には上野南遺跡・流団No.20遺跡・呉羽富田町遺跡の他，神通川の東側の地域でも南中田D遺跡・吉倉A・



第200図　遺跡位置図

時期	No.	遺跡名	竪穴数	カマド数	文献
5C中	1	五社	4	3	8
6C前					
6C後	2	上野	1～	1～	16
7C前	3	流団No.7	23	1	13,15
7C後	4	流団No.21	24	2	14,15
	5	石名田木舟C地区	2	2	8
	6	石名田木舟F4地区	1	1	9
8C前	7	長岡杉林	2	2	2
	8	東山II	1	1	17
	9	友坂	3	3	6
	10	流団No.16	1	1	12,14,15
	11	流団No.18	6	3	12,13,15
8C後	12	呉羽富田町	4	2	5
	13	安田	3	3	7
	14	上野南I	6	3	11
	15	上野南IIA	2	1	11
	16	流団No.20	3	2	10,15
	17	南中田D	61	54	3
	18	吉倉A	4	4	4
	19	吉倉B	48	37	1，4
9C前	20	石名田木舟F2地区	3	3	9
	21	石名田木舟F4地区	1	1	9

第30表　県内のカマド確認遺跡一覧



第201図　富山県のカマドの変遷

B遺跡等の県総合運動公園内遺跡群や滑川市安田遺跡で確認例があり，本格的な普及時期となるが，県最東部の地域ではカマドの確認例が無く不明な点が多い。南中田D遺跡は存続年代が8世紀後半から10世紀前葉にかけての集落で，61棟の竪穴建物が確認されており，うち54棟がカマドを持つ。カマドの袖部や天井に芯材として石が使用されているものと，粘土のみによるものと2タイプが認められる。また，カマドの床面積に対する占有比率から，竪穴建物自体の規模が縮小する傾向にあっても，カマドの規模は時期の新旧にかかわらず変化しないことが指摘されている[注23]。

カマドの構造面では，燃焼部及び焚出口等を浅く掘り窪めることや，煙道の長さ等に時期による大きな違いはみられず，出現期からほぼ完成された状態でカマドが導入されていたものと考えられる。また，カマドが作られている方位であるが，南及び西向きのものが多く，次いで北向きである。カマド位置がコーナー付近にあるものは，カマドの占める比率の高い方の壁に作られているものとした。南中田D遺跡では，ほとんどのカマドが東及び南向きで強い規則性を持っていた時期から，北向きが急増し，以降規則性が崩れていくという現象がみられるが，他の遺跡ではばらばらであり，規則性は認められない。近接する遺跡でもばらつきがみられることから，集落（竪穴建物）の立地環境や風向きによるものと思われ，規則性は見出せない。東向きを取るものは，県内では呉羽富田町・南中田D・吉倉B遺跡の3遺跡のみと少ない。南中田Dと吉倉Bとは隣接する遺跡であり，地理的（地形的）な条件によるものと考えられる。

県内でカマドが確認された遺跡は（第200図），①五社・石名田木舟遺跡による県西部の地域，②流団・上野遺跡を中心とする小杉町・大門町にまたがる射水丘陵地域，③運動公園に関連する神通川右岸の地域の大きく3地域に分かれる。地域ごとにみていくと，②の地域は，6世紀後半の上野遺跡でカマドが出現して以降，8世紀後半まで継続してみられ，県内ではカマドの定着が早い地域である。射水丘陵は県のほぼ中央に位置し，須恵器・鉄などの生産遺跡が集中しており，須恵器の生産は7世紀第1四半期から開始されている。流団・上野・上野南遺跡は須恵器窯・製鉄炉を含む生産施設と，その工人集落からなる。このことは，カマドの導入と，須恵器（生産）の導入及び工人集団との間に密接な関係があることを示唆しているものと考えられる。③の地域は，カマドの出現は遅く，8世紀後半以降になってからであり，県内のカマド普及のピーク時にあたる。南中田・吉倉等の集落遺跡は神通川と熊野川に挟まれた扇状地上に位置する。①の地域は県西部の小矢部川右岸地域である。五社遺跡では5世紀中頃のカマドが確認され，県内でも最古にあたるが，その後に継続はしない。五社遺跡周辺のほぼ同時期と思われる遺跡からは陶邑編年のTK216・208等の須恵器が出土しており，県内でも須恵器導入の早い地域である。また，富山では置竈は確認されておらず，作り付けのカマドに先行して置竈のみられる石川（能登に多い）と対照的である。

G　まとめ

これまで，北陸並びに富山県内のカマドの出現・普及の状況についてみてきた。ここでは，県内のカマドの導入から普及までの変遷と，五社遺跡の位置づけについてまとめてみたい。

まず，構造的には，短いながら壁を掘り込んで煙道の立ち上がりとする点や，燃焼部・焚口部を浅く掘り窪める点等はカマド普及期の南中田D遺跡も，出現期の五社遺跡も変化は認められない。このことは，カマドが一地方で発展発生（自然発生）したものではなく，「完成された形」でおそらくは畿内から導入されたことを示していると考えられる。

次に，カマドの導入についてであるが，県内では①→②→③の順にカマドの出現時期が遅くなり，西から東へ伝播していった状況を示していると考えられる。出現期に関わるものでは，①・②の2つ

の地域がある。両地域ともに4～6世紀にかけて首長墓や群集墳が築かれた地域である。①の地域は道林寺・北反畝遺跡等の須恵器を出土する遺跡（集落）がみられ，県内でも須恵器導入の早い地域であり，須恵器やそれに伴う技術を受け入れる社会的背景があったと思われる。②の地域は7世紀初頭から須恵器生産が行われており，カマドは須恵器生産に関わる工人の集落で用いられたものである。こうしてみると，富山のカマドの導入は須恵器の導入とほぼ同時期であり，密接な関わりの下に行われたといえる。カマドの導入には2つの段階がみられる。1段階は，「モノ」としてのカマドのみが導入されたもので，五社遺跡にあたる。五社遺跡からは須恵器は出土していないが，須恵器を導入しうる環境下にあったと思われる。しかし，遺跡自体が一時期のみの短期滞在で終わってしまうこともあり，周辺に継続（定着）しない。2段階は，「技術・人」を介してカマドの導入がなされたもので，須恵器生産が他地域に比べ卓越する射水丘陵[注24]で始まる。須恵器等の生産工人の集落で用いられ，周辺地域へも継続（定着）していく。このことから，富山におけるカマドの本格的な導入は2段階（6世紀後半～7世紀初頭）からと考えられ，富山で須恵器生産が開始される時期と連動しており，同時に導入されたものと考えられる。以上，大雑把な推論を重ねてきたが，カマドのデータ化や周辺地域との比較・検討など今後の課題としていきたい。　　（三島道子）

注1・7　田嶋明人　1992「北陸地方の概要」『古墳時代の竈を考える』埋蔵文化財研究会
注2・5　森原明廣　1990「関東地方におけるカマド初現をめぐって」『研究紀要』6山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
注3　川上貞雄　1995『舟戸遺跡』新津市教育委員会
注4　石野博信　1975「考古学からみた古代日本の住居」『日本古代文化の探求　家』社会思想社
　　合田幸美　1988「出現期の竈」『網干善教先生華甲記念考古学論集』同記念会
注6　柿沼幹夫　1979「Ⅴ住居跡について」『下田・諏訪』上越新幹線埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ埼玉県教育委員会
注8　外山政子　1990「羽田倉遺跡の煮沸具の観察から」『長根羽田倉遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団
　　外山政子　1991「三ツ寺Ⅱ遺跡のカマドと煮沸」『三ツ寺Ⅱ遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団
注9　藤田氏は西日本の土器を対象に 煮沸具の煤・コゲの観察から炉型・カマド型を分類し，使用施設を特定している。五社の例は，藤田氏がカマド型に分類されたパターンに該当すると考えられる。藤田至希子　1986「古墳時代前期の煮沸具形態について」『矢部遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第49冊　奈良県立橿原考古学研究所
注10　外山政子　1992「炉かカマドか-もう一つのカマド構造について」『研究紀要』10群馬県埋蔵文化財調査事業団
注11　愛知県東部から飛騨山脈を通り，富山県に通じるラインを境界線として，東西で竈構造が異なる。北陸地方は奈良時代の例であるが，一つ掛けで西日本的な構造を持っている。杉井　健　1993「竈の地域性とその背景」『考古学雑誌』第40巻1号
注12　松村道博　1989『西新町遺跡』福岡市教育委員会
注13　樋口吉文他　1992「大阪府」『古墳時代の竈を考える』埋蔵文化財研究会
注14　杉浦隆支他　1992「滋賀県」『古墳時代の竈を考える』埋蔵文化財研究会
注15　倉田直純他　1988『勝田遺跡発掘調査報告』三重県教育委員会
注16　須恵器とカマド導入とに密接な関係があることを指摘した論文は多々ある。林博通　1973「カマド出現に関する二・三の問題」『水と土の考古学』小江先生還暦記念論集刊行会など
注17　春日真美　1996「越後における5～8世紀の竪穴建物」『新潟考古学談話会会報』第16号
注18　鈴木俊成他　1994『一之口遺跡東地区』上越市春日・木田地区発掘調査報告書Ⅳ　新潟県教育委員会・新潟県埋蔵文化財調査事業団
注19　入江文敏他　1992「福井県」『古墳時代の竈を考える』埋蔵文化財研究会
注20　石川県教育委員会　1971『千崎遺跡』
注21　望月精司他　1995『念仏林南遺跡Ⅱ』小松市教育委員会
注22　亀田修一　1992「中国・四国地方のカマド」『古墳時代の竈を考える』埋蔵文化財研究会
注23　河西健二他　1991『南中田D遺跡発掘調査報告書』富山県埋蔵文化財センター
注24　上野　章　1993　「富山県における生産開始期の須恵器窯跡について」『北陸古代土器研究』第3号

引用・参考文献

※本文中に引用した遺構実測図については，一部加除筆させていただいた。

岩松　保　1987「カマドの有る住居と無い住居」『京都府埋蔵文化財論集』第1集　京都府埋蔵文

化財調査研究センター
大川　清　1955「カマド小考」『落合』早稲田大学考古学研究室
大場磐雄　1955「土師式住居址からみた諸問題」『平出』平出遺跡調査会
栗原文蔵他　1977『鴻池・武良内・高畑』埼玉県遺跡発掘調査報告書第11集　埼玉県教育委員会
木田　清　1990「5世紀～8世紀における石川県内の竪穴式住居 掘立柱建物について」『松任市源波遺跡』松任市教育委員会
小島幸雄他　1979「山畑遺跡」『岩木地区遺跡群発掘調査報告』上越市教育委員会
駒見和夫　1985「古代における炉とカマド」『信濃』第36巻4号
笹森紀己子　1982「かまど出現の背景」『古代』第72号
田中茂良　1993「竈構造に関しての一考察」『市原市文化財センター研究紀要』II　市原市文化財センター
田辺昭三　1981『須恵器大成』角川書店
谷　旬　1982「古代東国のカマド」『研究紀要』7　千葉県文化財センター
富田好久　1985「古代に於ける炉とカマドの変遷」『末永先生米寿記念獻呈論文集』同記念会
中島俊一　1982『松任市上二口遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
藤原秀樹　1986『愛宕山遺跡群Ⅰ』武生市教育委員会
前田清彦　1990『松任市北安田北遺跡II』松任市教育委員会
馬田弘稔他　1983『塚堂遺跡Ⅰ』福岡県教育委員会
宮崎幹也　1988「竪穴住居に付随するカマドの検討-滋賀県下の検出例から」『紀要』第1号　滋賀県文化財保護協会
横川好富　1987「竈の出現とその背景」『埼玉の考古学』柳田敏司先生還暦記念論文集　同刊行委員会
吉田　淳　1984『御経塚ツカダ遺跡発掘調査報告書Ⅰ』野々市町教育委員会

富山県内のカマド確認遺跡・文献　※No.は第30表の文献番号と対応する。

［富山市］
1：狩野　睦他　1994『吉倉B遺跡』富山県総合運動公園内遺跡発掘調査報告(4)　富山県埋蔵文化財センター
2：久々忠義他　1987『長岡杉林遺跡』富山市教育委員会
3：斉藤　隆他　1991『南中田D遺跡発掘調査報告書』富山県埋蔵文化財センター
4：酒井重洋他　1993『任海遺跡・吉倉A遺跡・吉倉B遺跡』富山県総合運動公園内遺跡発掘調査報告(3)　富山県埋蔵文化財センター
5：藤田富士夫　1978『富山市呉羽富田町遺跡発掘調査報告書』富山市教育委員会
［婦中町］
6：岡本淳一郎他　1993『友坂遺跡発掘調査報告II』婦中町教育委員会
［滑川市］
7：宮本幸雄　19882『安田・寺町遺跡発掘調査報告書』滑川市教育委員会
［小矢部市・福岡町］
8：河西健二他　1994『埋蔵文化財年報(5)』財団法人富山県文化振興財団
9：島田美佐子他　1995『埋蔵文化財年報(6)』財団法人富山県文化振興財団
［小杉町・大門町］
10：池野正男　1979『流通業務団地No.20遺跡緊急発掘調査概要』富山県教育委員会
11：池野正男　1991『上野南遺跡群発掘調査報告』小杉町教育委員会
12：上野　章　1980『小杉流通業務団地内遺跡群第2次緊急発掘調査概要』富山県教育委員会
13：上野　章　1982『小杉流通業務団地内遺跡群第3・4次緊急発掘調査概要』富山県教育委員会
14：上野　章　1984『小杉流通業務団地内遺跡群第6次緊急発掘調査概要』富山県教育委員会
15：上野　章　1986『小杉流通業務団地内遺跡群第8次緊急発掘調査概要』富山県教育委員会
16：橋本　正　1974『小杉町上野遺跡-記録写真編』富山県教育委員会
17：山本正敏他　1983『県民公園太閤山ランド内遺跡群調査報告(2)』富山県教育委員会

3　五社遺跡古代後期の土師器の編年について

A　はじめに

五社遺跡古代後期面では，土器が一括して出土した柱穴や土坑が７基ある。このような土坑については，建物柱穴・建物敷地内外に存在する「埋納土坑」が知られ，建物の造営・廃棄に際しての祭祀に伴う土坑であると考えられている[注1]。まずそれぞれの遺構の出土状況を検討し，次いで遺物の法量や器形，技法の特徴を整理し，資料の区分と編年的位置付けを考えたい。

遺物が出土した遺構は柱穴が１基（ＳＰ5246），埋納土坑と考えられるものが５基，そのうち建物の内部にあるものが２基（ＳＰ3266・ＳＫ5206），建物に近接しているもの３基（ＳＫ5245・ＳＫ5340・ＳＫ6165），建物に近接した集石遺構１基（ＳＸ5003）である。建物の内部にある土坑は柱穴より規模が大きいのに対し，建物に近接しているものは柱穴とほぼ同じ規模である。出土した遺物は完形かほぼ完形に近いものを多く含み，使用痕の顕著にみられないものである。上向きに据えられたように出土する場合が多く，建物の造営，廃棄に関わる祭祀と考えられる。出土遺物の構成は土師器と黒色土器の食膳具に限られている土坑がほとんどで，１基のみ須恵器，製塩土器を供伴する。胎土についてはほぼ均一であるが，無台椀の一部に限って異なるものがある。

以下具体的に各遺構の資料について述べる。

B　法量と器形（第202～204図）

1　ＳＸ5003出土遺物

一括遺物には土師器無台椀と有台椀がある。土師器椀には底部が相対的に小さく体部が丸みをもつもの（500）と底部が相対的に大きく器高が低いもの（499）がある。500は口径11.6cm・器高3.3cm・底径5.2cm，径高指数[注2]28.4・底口指数[注3]44.8，499は口径12cm・器高3.3cm・底径６cm，径高指数27.5・底口指数50を測る。底部は回転糸切りで，無調整である。器壁は比較的薄い。有台椀は口径15cmを測り，体部は浅く，外に直線的に開き，口縁部は屈曲して外反する。底部は回転糸切りで，貼り付けた高台が剝離している。高台は体部の形態から高い高台いわゆる足高高台であろう。ＳＸ5003はＳＢ22に付属した集石遺構で，上面が被熱している。遺物は集石に混じって出土しているが，被熱したものはない。

2　ＳＰ3266出土遺物

一括遺物には土師器無台椀・有台椀，須恵器壺，製塩土器がある。土師器無台椀には底部が相対的に小さく体部が丸みをもつもの（331）と底部が相対的に大きく器高が低いもの（330・329），直線的な体部で口縁が屈曲して外反するもの（327）がある。331は口径11.2cm・器高3.3cm・底径4.6cm，径高指数29.5・底口指数41.1，330は口径11.6cm・器高3.1cm・底径5.2cm，径高指数26.7・底口指数44.8，329は口径11.4cm・器高３cm・底径5.6cm，径高指数26.3・底口指数49.1を測る。327は口径12cmを測る。底部は回転糸切りで無調整である。無台椀の器壁は比較的薄いが，327は特に薄いものである。有台椀（328）は口径14.6cmを測り，直線的に伸びる体部で口縁端部がやや外反気味である。底部は回転糸切りで貼り付け高台が剝離しているが，高台はやや高めのものが付くと考えられる。無台椀・有台椀ともに前代の形態を残すが，ＳＸ5003のものより口径が縮小している。資料的に制限があるが，法量は無台椀が12cm以下11cm台であり，底部の大小がみられるだけで３タイプ，１法量である。有台椀も器形のタイプが浅く，直線的に開くものに限定されるようである。使用痕はほとんどみられない。

ＳＰ3266はＳＢ18の内部にある土坑で，遺物の出土は土坑の南西部に集中しており，上向きに置か

れたようなほぼ完形の土師器と須恵器・製塩土器の破片が出土している。他の土坑の遺物が食膳具に限定されるのに対し，当遺構は貯蔵具などを共伴している点で他と様相を異にしている。

3　ＳＰ5246出土遺物

出土した遺物は土師器無台椀・無台皿と黒色土器有台椀である。その構成比率は２：１である。土師器にはＳＰ3266でみられた無台椀は無く，非常に器高が低く，体部が丸く立ち上がり，端部の器壁がやや厚い小皿（337）と，口径が14.2cmを測り，体部がやや丸みをもち口縁端部が外反する，相対的に底部が小さい大型椀（339）の２種になる。337は口径10cm・器高1.3cm・底径６cm，径高指数13.0・底口指数60.0を測り，339は口径14.2cm・器高3.7cm・底径5.6cm，径高指数26.1・底口指数39.4を測る。黒色土器有台椀には丸みをもった体部で口縁部がやや外反するもの（340）と口縁端部の外反が強い端反りのもの（341）がある。340は高台を絞り出して成形した際の菊花状文が高台内面にあり，高台はぼてっとした断面三角形である。内面のミガキは340は口縁部から体部中程までなのに対し，341は全面にある。340は口径14.5cm・器高5.5cm・底径5.6cm，径高指数37.9・底口指数38.6を測り，341は口径15.4cmを測る。

ＳＰ5246はＳＢ26の柱穴であるが，ＳＰ5246の北には埋納土坑が集中している。前記の法量の縮小傾向はさらに顕著であるが，一方で新たな法量として14cm台の大型土師器無台椀が出現し，土師器の法量が小型の皿と大型の椀に二極化する大きな変化である。黒色有台椀には法量の大小があり，やや古い様相が残っている。

4　ＳＫ6165出土遺物

ＳＫ6165からは土師器無台皿・椀が出土している。組成は底部が相対的に大きく器高が低い椀から変化した皿（490・491）と，底部が相対的に小さく，体部は腰が丸く張り，口縁部が外反する大型椀（492）で構成され，その比率は２：１である。490は口径8.8cm・器高2.2cm・底径4.6cm，径高指数25.0・底口指数52.3を測り，491は口径9.2cm・器高2.5cm・底径4.9cm，径高指数27.1・底口指数53.3を測る。492は口径16cm・器高4.2cm・底径5.3cm，径高指数26.3・底口指数33.1を測る。

ＳＫ6165はＳＢ34～ＳＢ36の東に隣接する埋納土坑である。遺物は伏せて埋納されていたようである。小型の皿と大型椀に二極化するのはＳＰ5264と同様で，ほぼ同時期と考える。

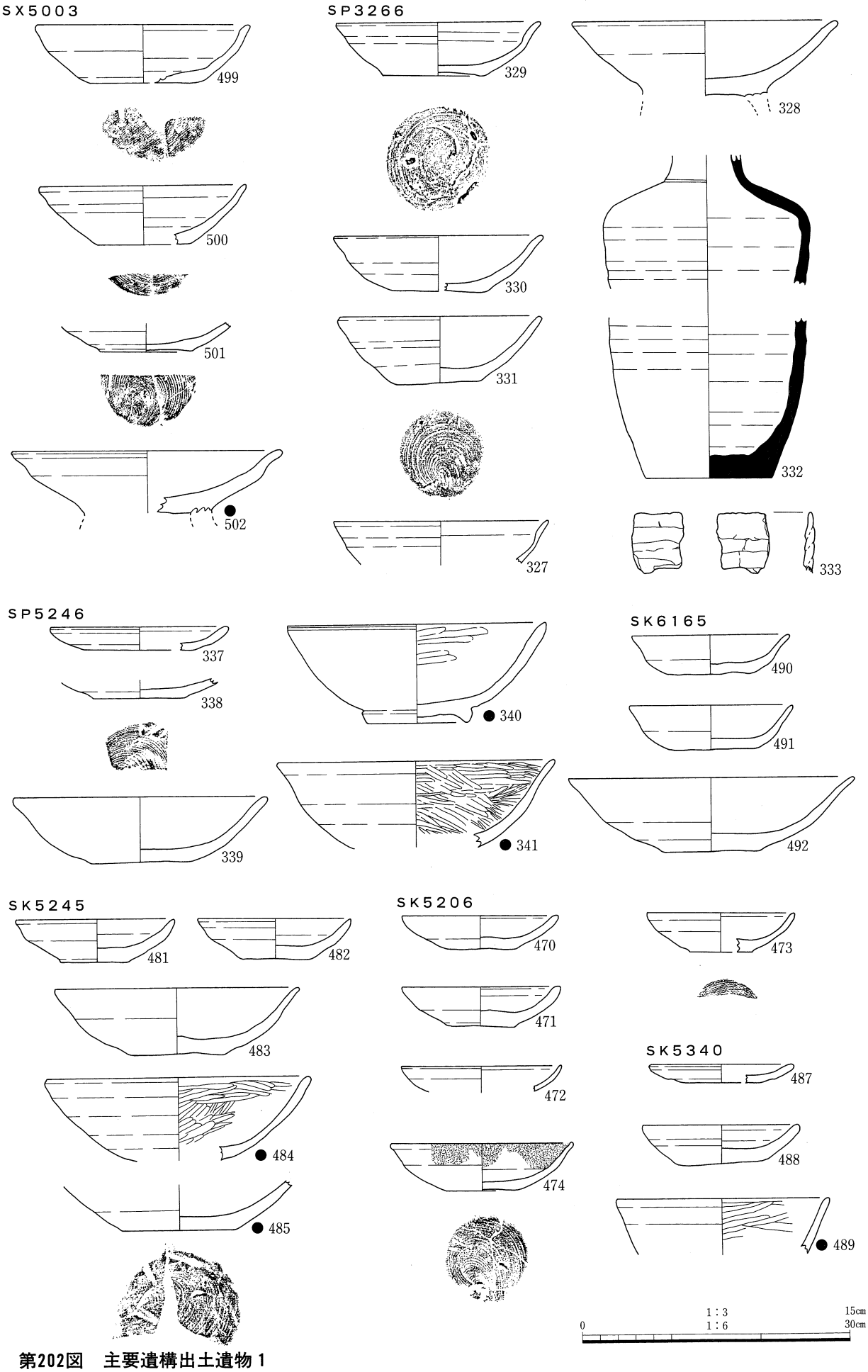
5　ＳＫ5254出土遺物

ＳＫ5245からは土師器無台皿・椀，黒色無台椀が出土している。器種組成は底径が小さく，器壁が厚く体部が直線的に伸び，口縁がやや内湾する皿（481・482）と，体部は腰が丸く張り，口縁部が外反する大型椀（483），体部が直線的に伸びる黒色土器（484）で構成される。481は口径8.9cm・器高2.4cm・底径3.8cm，径高指数27.0・底口指数42.7を測り，482は口径8.6cm・器高2.2cm・底径3.8cm，径高指数25.6・底口指数44.2を測る。483は口径13.7cm・器高3.8cm・底径5.2cm，径高指数27.7・底口指数38.0を測る。484は口径16cmを測り，内面のミガキは底部まで施されている。

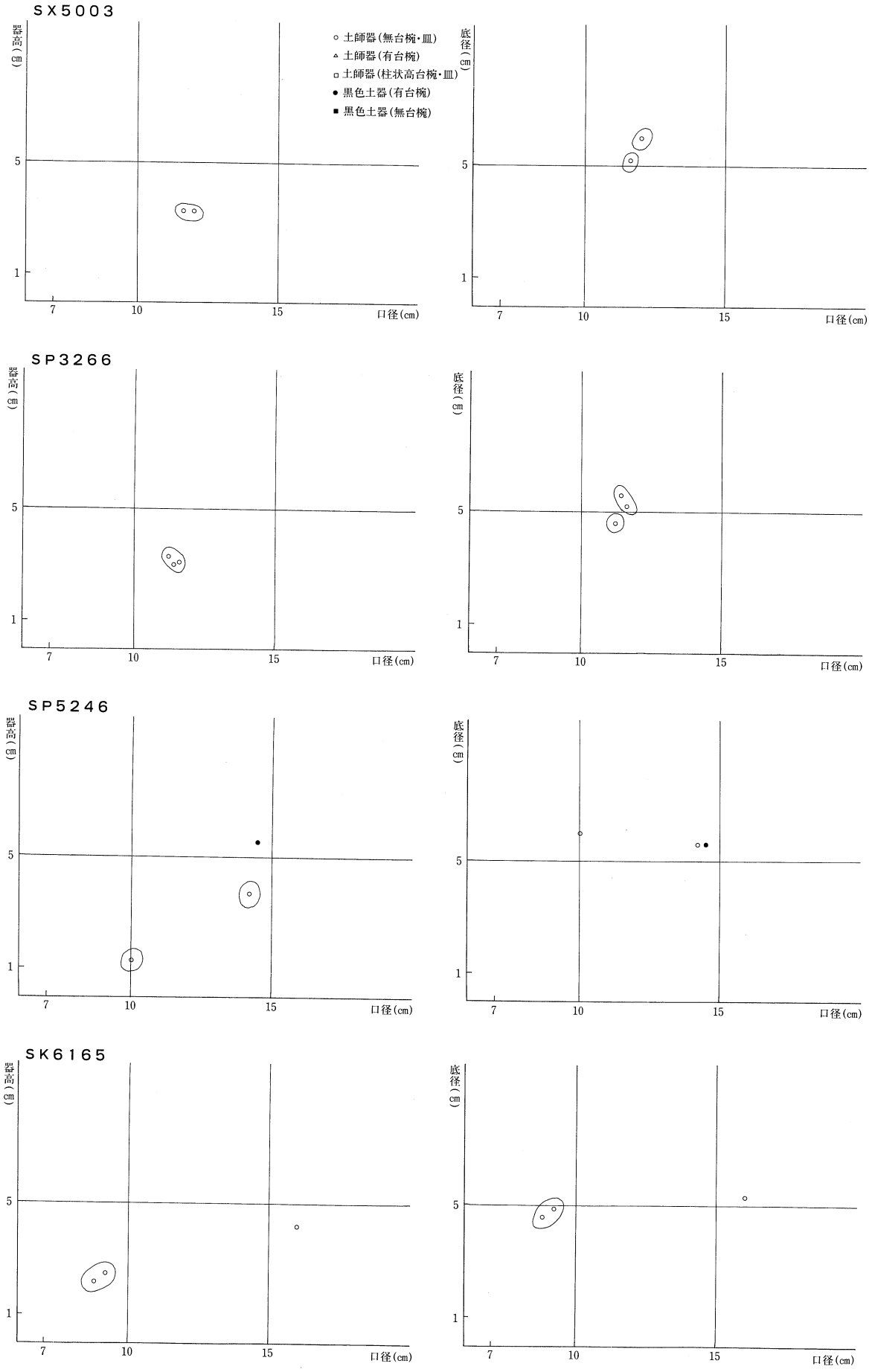
ＳＫ5245の位置はＳＢ24・ＳＢ25とＳＢ26に挟まれ，埋納土坑が集中している所にあたる。遺物はほぼ完形の皿を伏せたように埋納している。土師器の皿・椀ともにさらに法量が縮小しており，椀の器高も低くなる。底部だけでなく体部の器壁も厚く，ぼてっとした感じが強くなり，前記までの皿とは様相を異にする。

6　ＳＫ5206出土遺物

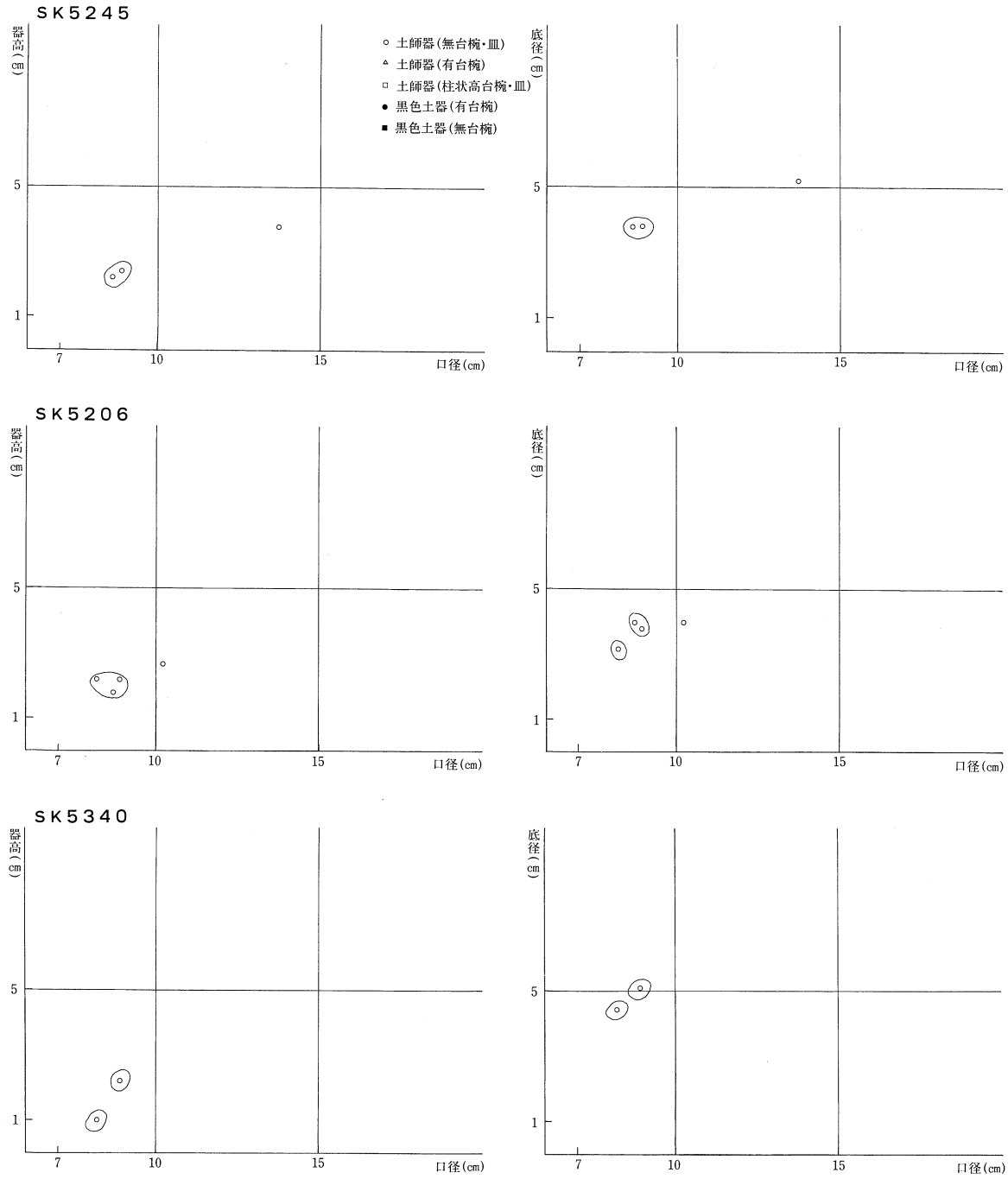
ＳＫ5206からは土師器無台皿が出土している。皿の形態は底部が小さく，器壁が厚く体部が直線的に伸び，口縁がやや内湾するもの（470～473）と底部が相対的に小さく，やや丸みをもった体部と外



第202図　主要遺構出土遺物 1



第203図　土器法量散布図1



第204図　土器法量散布図 2

反する口縁部をもつ皿（474）に分かれる。前者は口径8.2cm～9cm・器高1.8cm～2.2cm・底径3.2cm～4cm，径高指数20.7～26.8・底口指数39.0～46.0を測り，後者は口径10.2cm・器高2.7cm・底径4cm，径高指数26.5・底口指数39.2を測る。472は器壁が非常に薄く，口縁端部は内外面からナデて尖る。474は内外面に煤が付着しているもので，使用痕がある数少ない例である。

ＳＫ5206はＳＢ23の内部にある土坑で，中央から上向きで出土している。遺物はやや古い様相をもった皿も含んでいるが，ＳＫ5245と同様な傾向にあり，器種は皿に限定されている。皿は器壁が厚くなり，法量が縮小していることから，ＳＫ5245に平行ないし後続するものと考える。

7　ＳＫ5340出土遺物

ＳＫ5340からは土師器無台皿・黒色土器椀・製塩土器が出土している。土師器無台皿には非常に器高が低く，体部が丸く立ち上がり，端部の器壁がやや厚い小皿（487）と底部が相対的に大きく，器壁

が厚く体部が直線的に伸びるもの（488）の２種がある。487は口径8.2cm・器高１cm・底径4.4cm，径高指数12.2・底口指数53.7を測り，482は口径8.9cm・器高2.2cm・底径5.1cm，径高指数24.7・底口指数57.3を測る。黒色土器（489）は口径12cmを測る。体部は直線的に立ち上がり，口縁はやや外反気味である。内面のミガキは粗い。

ＳＫ5340はＳＰ5246・ＳＫ5245と隣接しており，埋納土坑の集中地点に位置する。遺物は土坑中央に上向きで出土しており，共伴する製塩土器は小破片である。遺物の口径はさらに縮小し，器壁は厚く，器高は低くなり，前記の傾向が一層進んだ様相と考えられる。

8　埋納土坑以外の遺構出土一括遺物（第205・206図）

上記の埋納土坑以外で遺物が多く出土したのは溝であるが，一括性が高い遺物はＳＤ2020のものである。遺物が出土した範囲はＸ179～185，Ｙ87～89で，土器以外に木製品・土製品があるが，ここでは土師器と黒色土器の食膳具に限定してみていく。

土師器には無台皿･椀，有台椀，黒色有台椀がある。369は底部が小さく，体部は丸みをもって伸び，口径９cm・器高2.2cm・底径3.2cm，径高指数24.4・底口指数35.6を測る。ＳＫ5245の皿と類似している。370は小さい底部で体部が湾曲しながら立ち上がり，口縁部が外反するもので，口径11cm･器高3.2cm・底径４cm，径高指数29.1・底口指数36.4を測る。371・372は底部が大きめで，丸みをもった体部とやや外反気味な口縁部をもつもので，口径11.4cm・11.8cm，器高3.2cm・４cm，底径5.6cm・5.4cm，径高指数28.1・33.9，底口指数49.1・45.8を測る。これらはＳＰ3266の椀と類似しているが，口径がやや小さい。373･374は大型の無台椀で，底部が大きく，腰が張り口縁が外反するもの（373）と直線的な体部と外反気味な口縁部をもつもの（374）の２種がある。373は口径14.4cm・器高4.2cm・底径６cm，径高指数29.2・底口指数41.7を測り，374は口径15.6cm・器高4.2cm・底径6.1cm，径高指数26.9・底口指数39.1を測る。

有台椀については底部の破片のみで，全容は明らかではないが，やや高台高が高く，外に開くものが多い。器壁が薄い高台径の小さいもの（386）と器壁が厚く，高台径が大きいもの（387･388）の２種がある。高台内面には回転糸切り痕がある。

黒色土器には丸く腰が張り，端反りで，断面三角形のシャープな高台をもつもの（376・377）と体部の形態は前者に類似しているが，高台がやや小さく端部が丸いもの（375），体部が直線的に伸びるもの（378）がある。376・377と375とは器高がほぼ同じで，口径・底径に大小があり，378は形態が異なるが口径がほぼ同じで，器高の浅深がある。したがって２器種ある黒色有台椀のそれぞれに，口径・底径の大小２種と浅深の２種の法量分化があったことが想像できる。これらはＳＰ5246の黒色有台椀に比べ，口径が大きく，高台形がよりシャープであることから，若干古い様相を呈していると考えられる。ＳＤ2020は自然流路であり，出土遺物の時期幅はあるが，一括性の高いものに限れば，ＳＰ3266からＳＰ5246・ＳＫ6165の様相を含む，過渡的なものであると考えられる。

以上，ＳＸ5003－ＳＰ3266－ＳＰ5246－ＳＫ6165－ＳＫ5245－ＳＫ5206－ＳＫ5340とＳＤ2020の資料を順に見てきたが，前述のとおりＳＤ2020の資料はＳＰ3266とＳＰ5246の間に入るものである。これらから法量・形態の変化をまとめると以下のようになる。

①　小型の無台椀は２種存在し，ＳＤ2020にかけて縮小傾向にある。

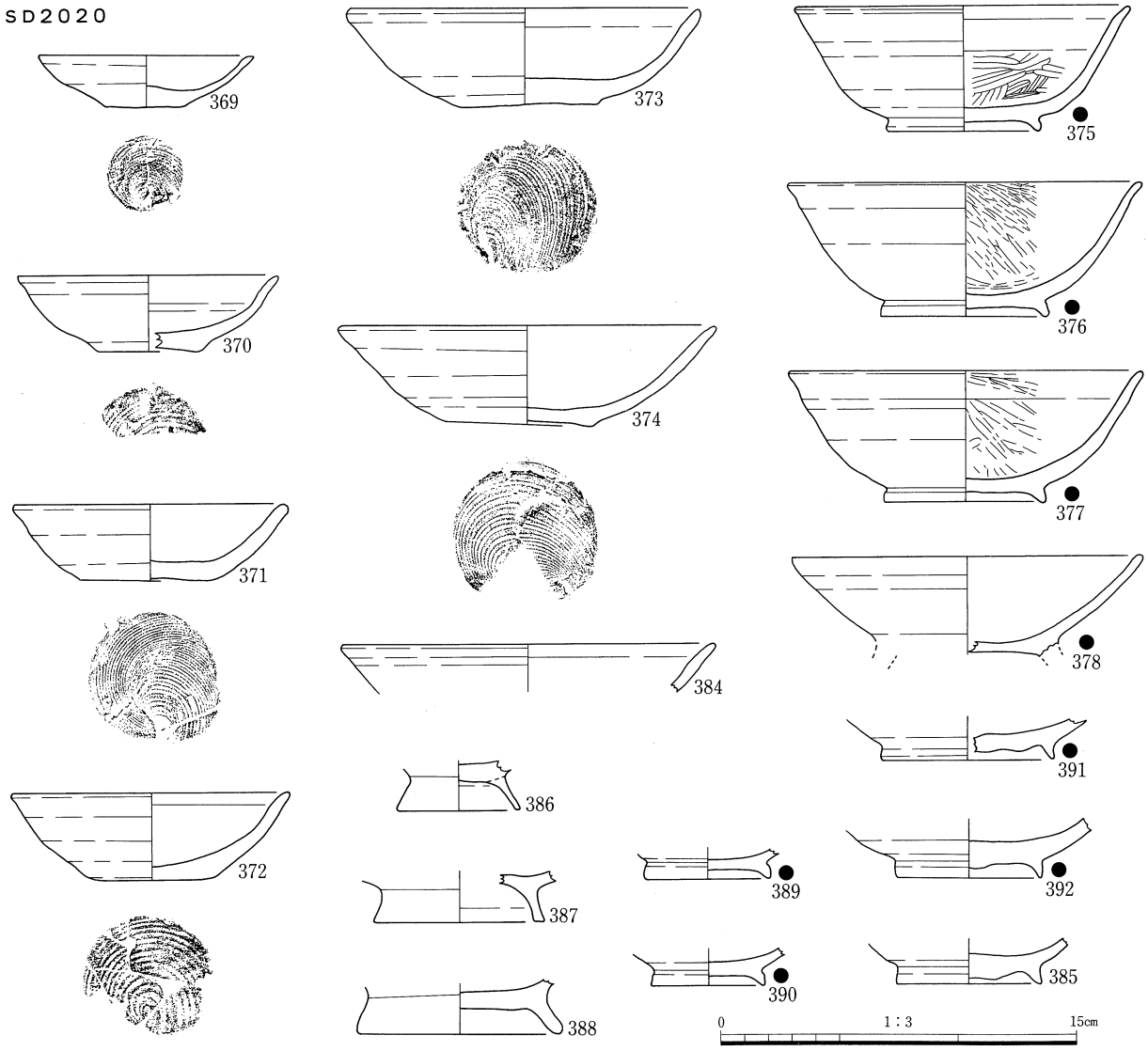
②　ＳＰ5246では小型椀が消滅し，無台の小皿２種以上と大型の椀２種で構成され，ＳＫ5340にかけて縮小傾向にある。

③　ＳＤ2020から見られる黒色有台椀は２種類あり，口径が縮小傾向にあるとともに，高台の形態

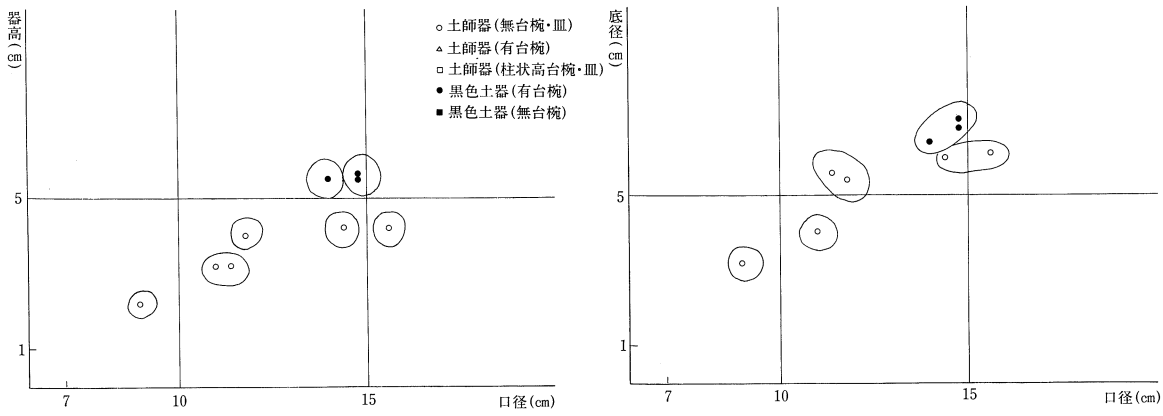
がシャープな断面三角形から小さくなる。

④　ＳＸ5003から見られる土師器有台椀は２種類あり，口径が縮小，器高が低くなる傾向にあるが，ＳＤ2020から以降は消滅している。

⑤　柱状高台はＳＤ4102出土遺物に底部が見られる。ＳＤ4102の資料はＳＫ6165からＳＫ5245の遺物に類似していることから，これらと共伴する可能性が高いと考える。



第205図　主要遺構出土遺物２



第206図　ＳＤ2020土器法量散布図

9　包含層出土の遺物（第207～211図）

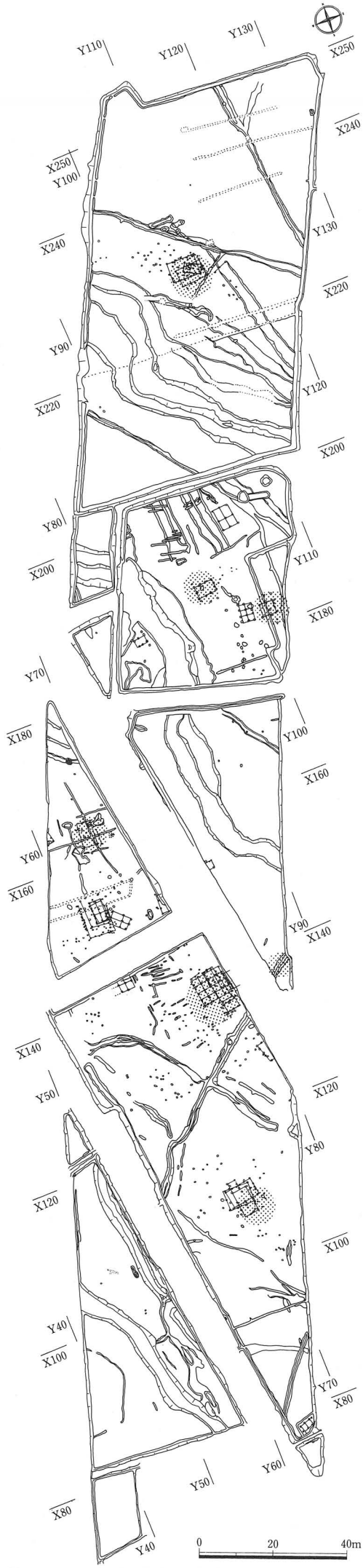
包含層から出土した遺物の分布は，集中する箇所が7地点ある。遺物は全てⅣ層からの出土であるが，遺構の集中する地点と合致することから，それぞれの法量・形態の検討をし，遺構との関連をみてみる。

X 162～163 Y 62～69の範囲はＳＢ22の上層にあたる。出土した遺物は，土師器無台皿(526)，椀(559)，有台椀(590・592・593）である。526はやや厚めで小さい底部で，体部はやや丸く伸びる。口径8.9 cm・器高1.9 cm・底径3.8 cm，径高指数21.3・底口指数42.7を測る。559は体部が直線的に伸び，挽き目がはっきりしているもので，口径13 cmを測る。592はやや腰が張り，口縁が外反する足高高台のもので，口径12.9 cm・器高6.2 cm・底径8.1 cm，径高指数48.1・底口指数62.8を測り，593は体部が直線的に開き，口縁が外反気味な足高高台のもので，口径14.1 cm・器高5.6 cm・底径8.3 cm，径高指数39.7・底口指数58.9を測る。526・559はＳＫ5206のものと，有台椀はＳＸ5003・ＳＰ3266のものと類似しており，口径が小さく深いものと口径が大きく浅いものの2種類ある。

X 190～191 Y 95の範囲はＳＢ18の上層にあたる。出土遺物には土師器無台皿(533)・無台椀(552・553・556)・有台椀(587・588・591)，黒色土器（610）がある。533はやや器壁が厚いがＳＫ6165に類似した皿で，口径8.8 cm・器高2 cm・底径5.2 cm，径高指数22.7・底口指数59.1を測る。552・553・556はＳＰ3266に類似した小型椀で，口径11.2 cm～11.6 cm・器高3.3 cm～3.5 cm・底径4.4 cm～4.8 cm，径高指数28.4～31.3・底口指数38.6～42.9を測るものである。有台椀は高台が剝離しているものもあるが，591はＳＸ5003と類似しており，587・588の体部の形態も同様である。591は口径14.6 cm・器高5.6 cm・底径8 cm，径高指数38.4・底口指数54.8を測る。法量と形態の関係は前述したとおりである。610は体部が丸く湾曲し，小さい高台が付くもので，口径13.8 cmを測る。

X 108～109 Y 67～71の範囲はＳＢ34～ＳＢ36の上層にあたり，出土した遺物は土師器無台皿（528）と椀（558）である。ＳＫ6165と類似しており，528は口径10 cm・器高2.5 cm・底径5.4 cm，径高指数25・底口指数54を測り，558は口径14.5 cm・器高4 cm・底径4.4 cm，径高指数27.6・底口指数30.3を測る。ＳＫ6165でみられた小皿と大型椀で構成される傾向は，包含層でも同様である。

X 136～137 Y 84の範囲はＳＤ4102の上層にあたり，出土した遺物は土師器無台皿（510・530・536），黒色土器有台椀（608・630・639）である。皿の形態はＳＫ6165に，黒色土器の形態はＳＤ2020のものに類似しているが，高台形は断面が四角であることから，



第207図　包含層遺物集中出土地点

やや新しい様相をもっている。皿は口径8.3cm～9.2cm・器高2cm・底径4.6cm～5cm，径高指数21.7～24.1・底口指数50～60.2を測るものである。黒色土器は口径14.3cm・器高6.3cm・底径6.8cm，径高指数44.1・底口指数47.6を測り，同法量に浅深の2種があることが推定できる。

X 131～139 Y 71～78の範囲はＳＢ28～ＳＢ31の上層にあたる。遺物は土師器無台皿（507・508・515・517・534）・椀（550），黒色土器無台椀（604）である。皿の形態はＳＫ6165に類似したもの（507・508）とＳＫ5245に類似したもの（515・517・534）がある。前者は口径8.9cm～9cm・器高1.9cm～2.3cm・底径5cm～5.4cm，径高指数21.1～25.8・底口指数56.2～60を測るもので，後者は口径8.4cm～9cm・器高2.3cm～2.4cm・底径4cm～4.1cm，径高指数26.7～27.4・底口指数44.4～48.8を測る。椀は口径14cm・器高4cm・底径4.3cm，径高指数28.6・底口指数30.7を測り，底部の大小で2種類あることがわかる。604は体部が丸く湾曲し，器壁が薄いもので，口径10.7cm・器高3.2cm・底径7cm，径高指数29.9・底口指数65.4を測る。無台の黒色土器は出土点数が非常に少ないため，法量や形態変化の傾向ははっきりしない。602は柱状高台である。

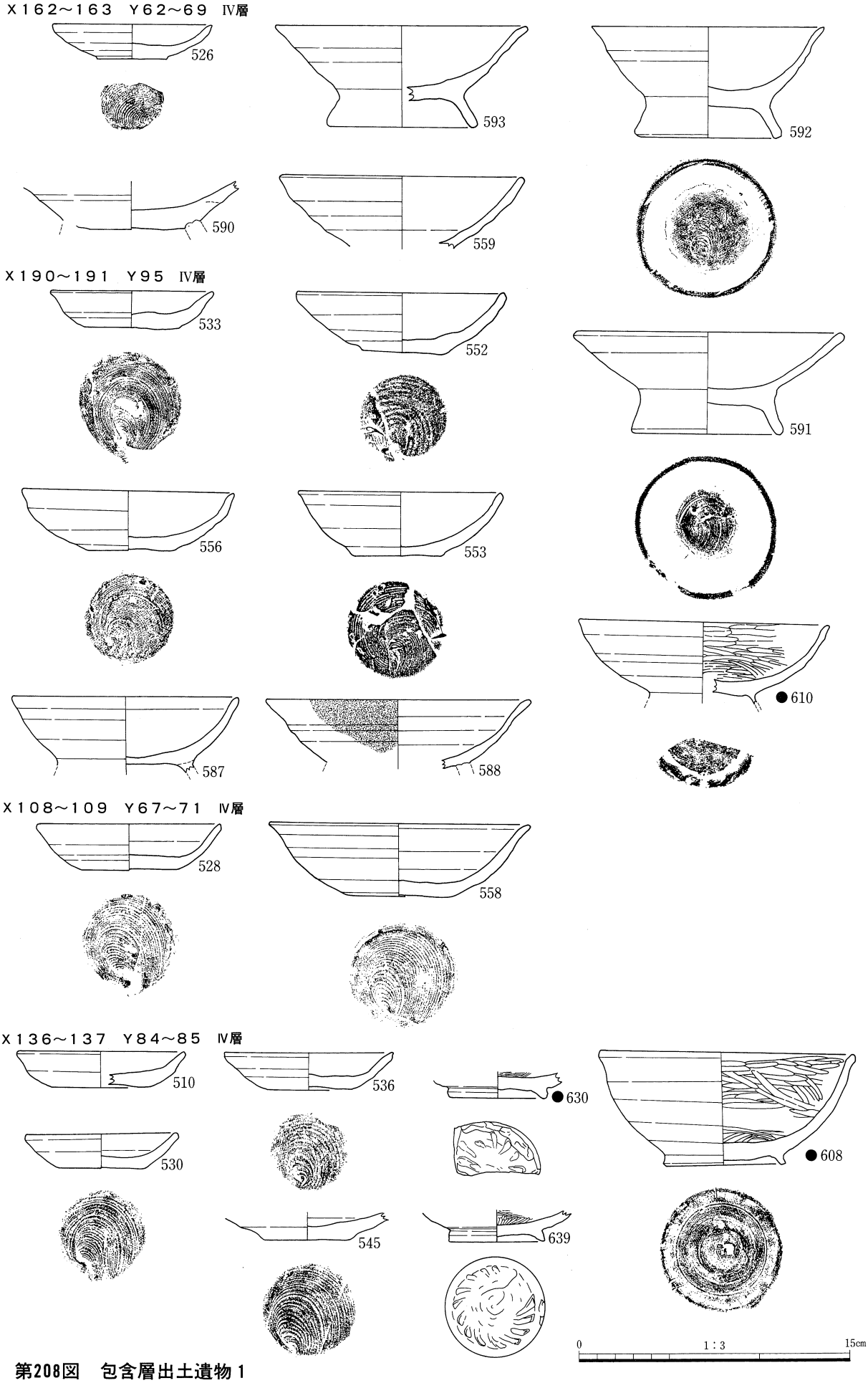
X 228～230 Y 106～115の範囲はＳＢ20の上層にあたり，遺物は土師器無台皿（523）・椀（548・555）が出土している。皿の形態はＳＫ5245・ＳＫ5206と類似しており，口径8.6cm・器高2.2cm・底径5.3cm，径高指数25.6・底口指数61.6を測る。548は口径13.2cm・器高3.7cm・底径4.6cm，径高指数28・底口指数34.8を測り，ＳＫ5245と類似しているが，底部が小さいことから前述のように底部の大小2種類がある。555は体部が丸く湾曲し，底部が厚くやや柱状気味で，口径13.6cm・器高4.1cm・底径5.9cm，径高指数30.1・底口指数43.4を測る。柱状高台の底部が大きいタイプと考えられる。

X 181～184 Y 88～105の範囲はＳＢ13～ＳＢ15の上層にあたり，遺物は土師器無台皿（506・522）・椀（598），黒色土器有台椀（631・638）が出土している。皿の形態はＳＫ5245に類似しており，口径9cm・器高1.6cm～2cm・底径5.6cm～6.1cm，径高指数17.8～22.2・底口指数62.2～67.8を測る。椀は体部がやや丸みをもって直線的に伸び，柱状高台をもつもので，口径14.8cm・器高5.5cm・底径5cm，径高指数37.2・底口指数33.8を測る。皿は底部が大きいタイプ，椀は小さいタイプである。黒色土器有台椀は底部のみであるが，高台は断面三角形のものとやや四角いものがあり，高台径が大きいタイプである。

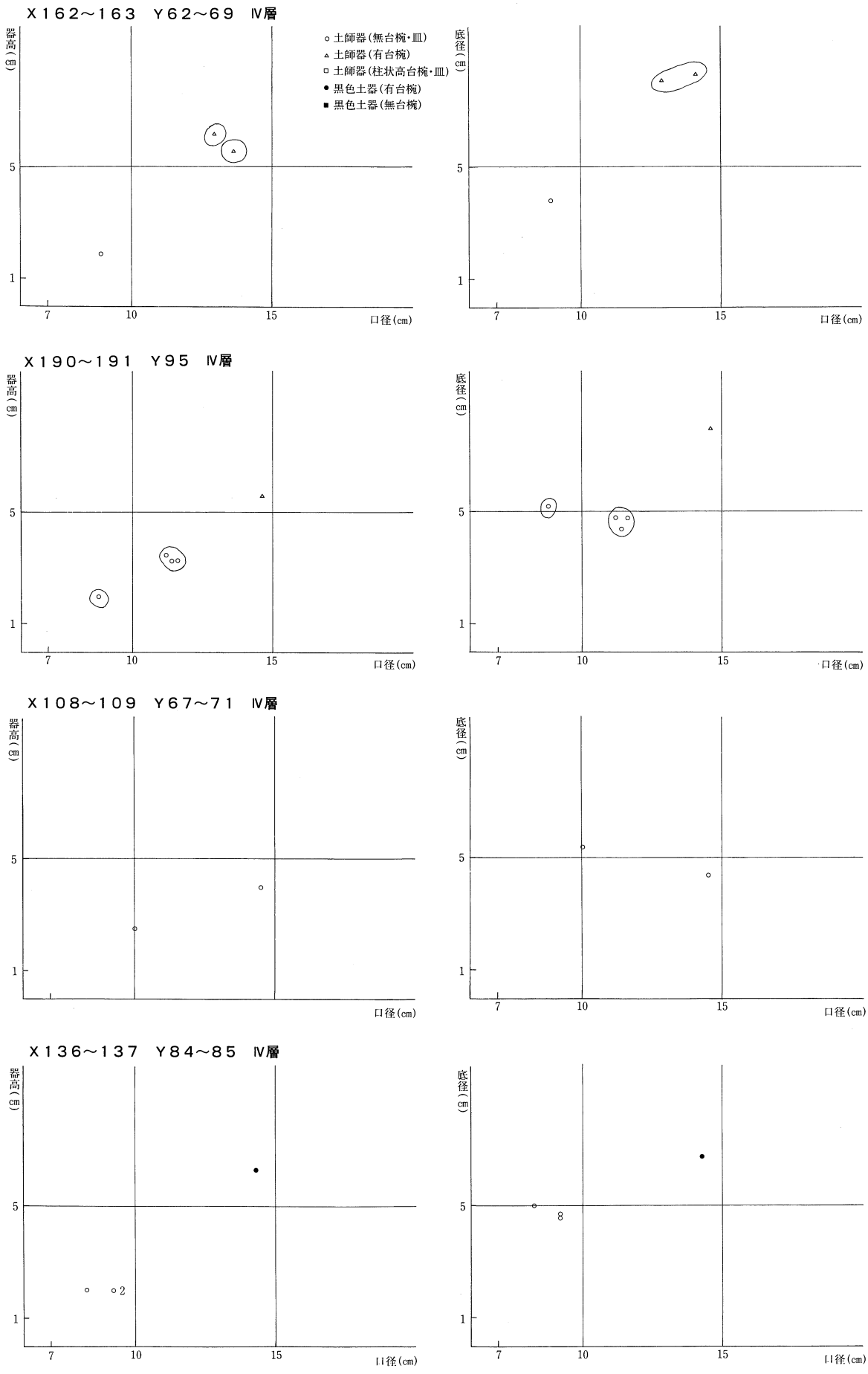
10　小矢部市桜町遺跡（舟岡地区）ＳＤ09出土遺物

五社遺跡の周辺でほぼ同時期の遺物が一括で出土した資料として比較する[注4]。遺物は土師器無台椀（1～4）・皿（6～8）・有台皿（13～15）・黒色土器（17・18）がある。椀の形態は五社遺跡ＳＰ5246・ＳＫ6165に類似しており，口径13.9cm～16cm・器高3.6cm～4.4cm・底径5.3cm～7.8cm，径高指数22.5～31.6・底口指数41.7～48.8を測り，浅深の2種がある。無台皿は底部が大きく，体部が直線的に開き，器高がやや低いもので，口径8.8cm～9.5cm・器高1.9cm～2cm・底径5cm～5.2cm，径高指数20～22.7・底口指数54.7～56.8を測り，五社遺跡とは異なる形態である。有台皿は柱状高台で，腰が張って直線的に立ち上がるもの（13・14）と低く直線的に開くもの（15）があり，口径8.5cm～9.8cm・器高2.9cm～3.9cm・底径3.7cm～4.2cm，径高指数34.1～41.5・底口指数39.4～47.1を測る。この形態の皿も五社遺跡には見られないものである。黒色土器は底部の破片のみであるが，高台の断面形は太く四角いものである。

以上五社遺跡包含層・桜町遺跡出土の遺物を土師器・黒色土器の食膳具に限って，順に遺構一括資料と対応させてみてきたが，多くはＳＰ5246からＳＫ5206のものに類似しており，遺跡の中心となる時期であることが窺える。また包含層から出土した施釉陶器は，緑釉陶器は近江系の軟質陶で10世

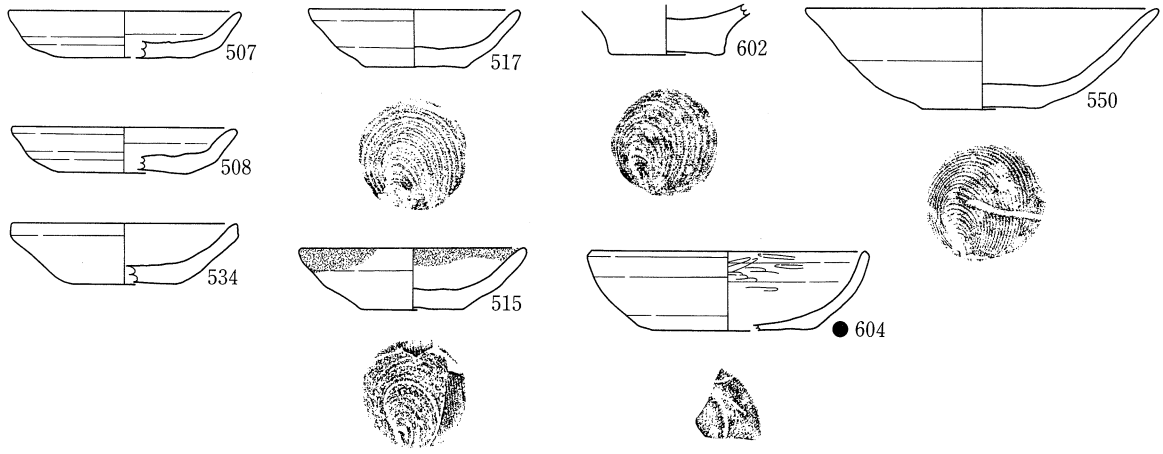


第208図　包含層出土遺物1

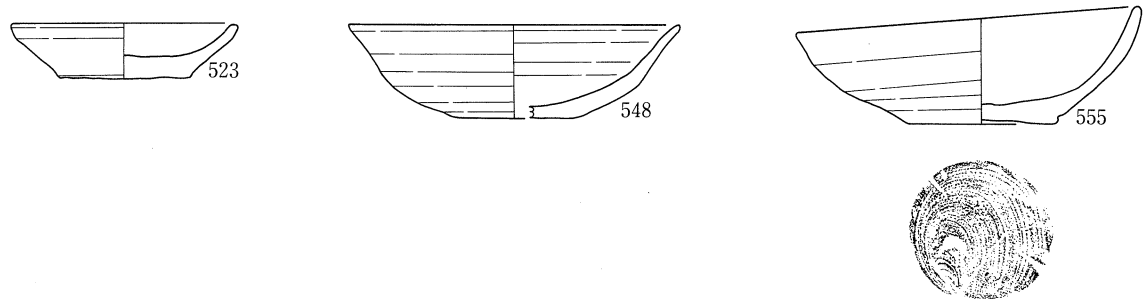


第209図　土器法量散布図3

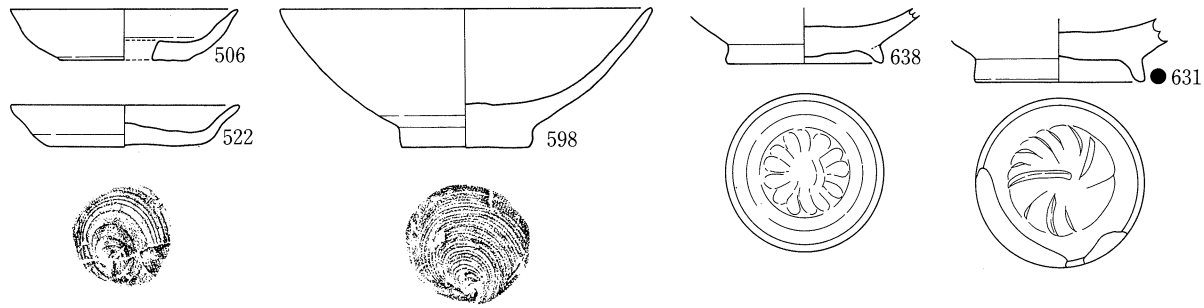
X131～139　Y71～78　Ⅳ層



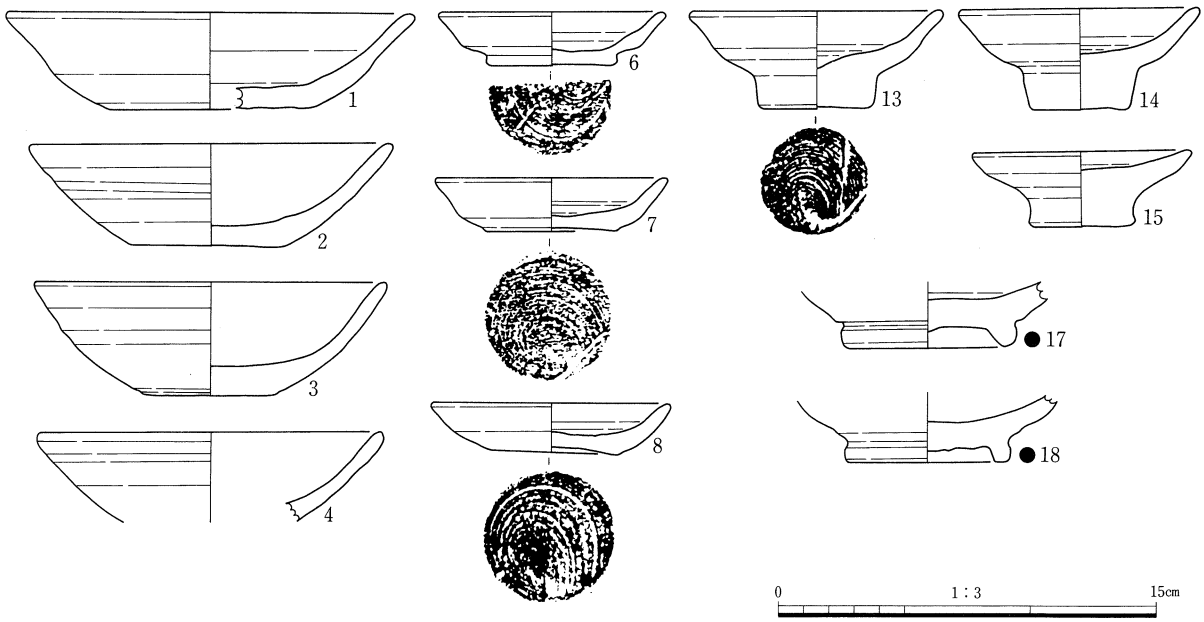
X181～184　Y88～105　Ⅳ層



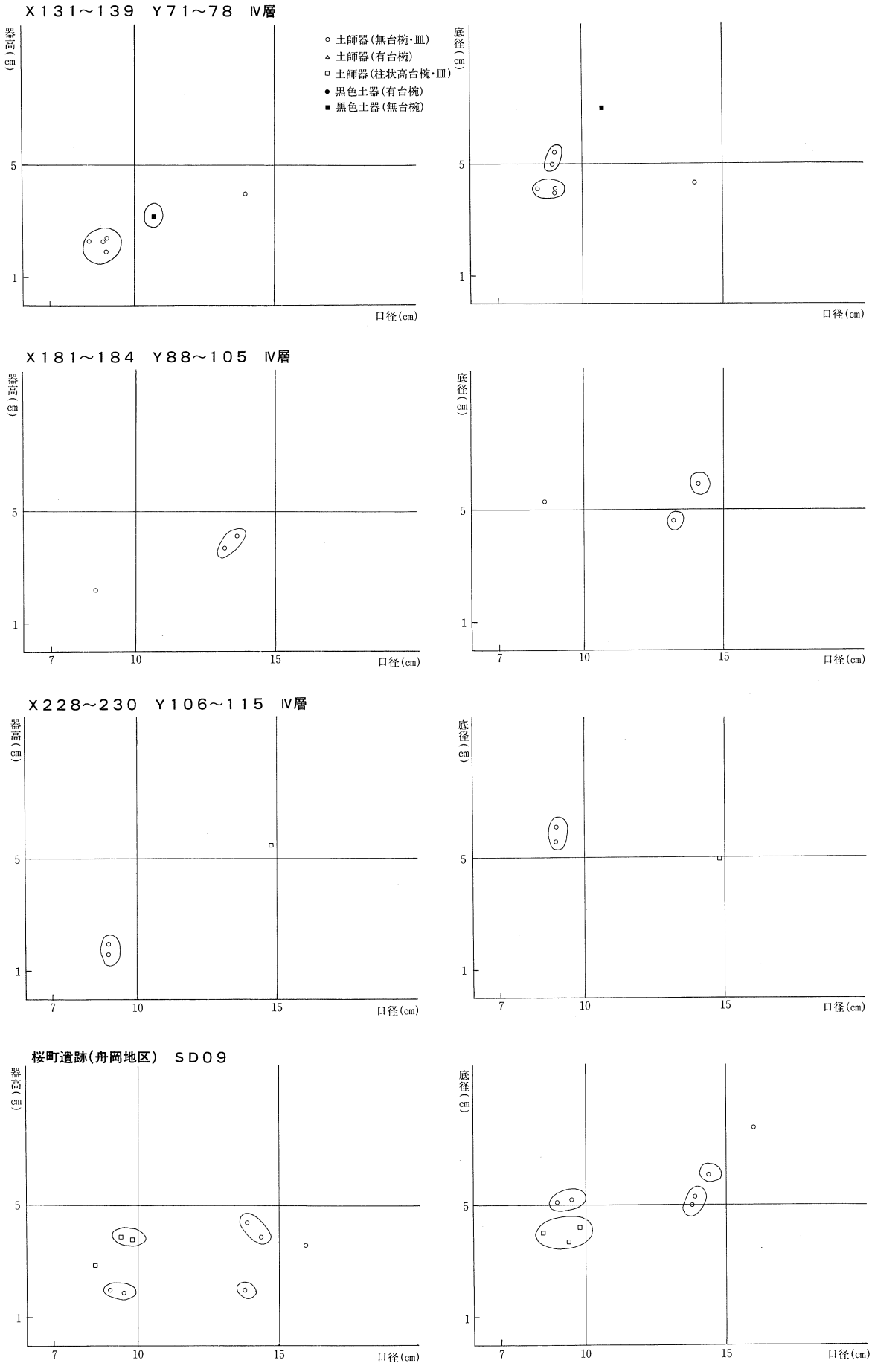
X228～230　Y106～115　Ⅳ層



桜町遺跡(舟岡地区)　SD09



第210図　包含層他出土遺物 2



第211図　土器法量散布図 4

紀後半，東濃産の灰釉陶器は虎渓山1号窯式のもので10世紀後半，白磁椀II類，IV類が11世紀後半～12世紀前半にかけてのものと大きく新旧に分かれ，遺跡の年代幅を示していると考える。

C　技法（第212図）

ここでは黒色土器有台椀の製作技法について検討したい。しかし，器形全体を観察できる資料は7点のみで，ほとんどが底部の破片であるため，底部の成形・調整について考えたい。黒色土器有台椀の底部は大きく回転糸切り後高台を貼り付けるものと，高台を絞り出して成形したため菊花状文が残るものに分かれる[注5]。貼り付け高台のものはさらに以下の3種類に分けられる。

a：中央に糸切り痕があり，高台周囲は強いナデで一段深くえぐられ，高台内側が外傾するもの

b：底部は平坦で，中央に糸切り痕があり，やや高めの高台がつくもの

c：底部全面に糸切り痕があり，低い断面三角形の高台が付くもの

また絞り出し高台のものは以下の5種類に分けられる。

a：底部は平坦で，全面ナデ消しており，菊花状文はほとんどないもの

b：高台周囲は強いナデで中央部が盛り上がるが，全面ナデ消しで菊花状文はほとんどないもの

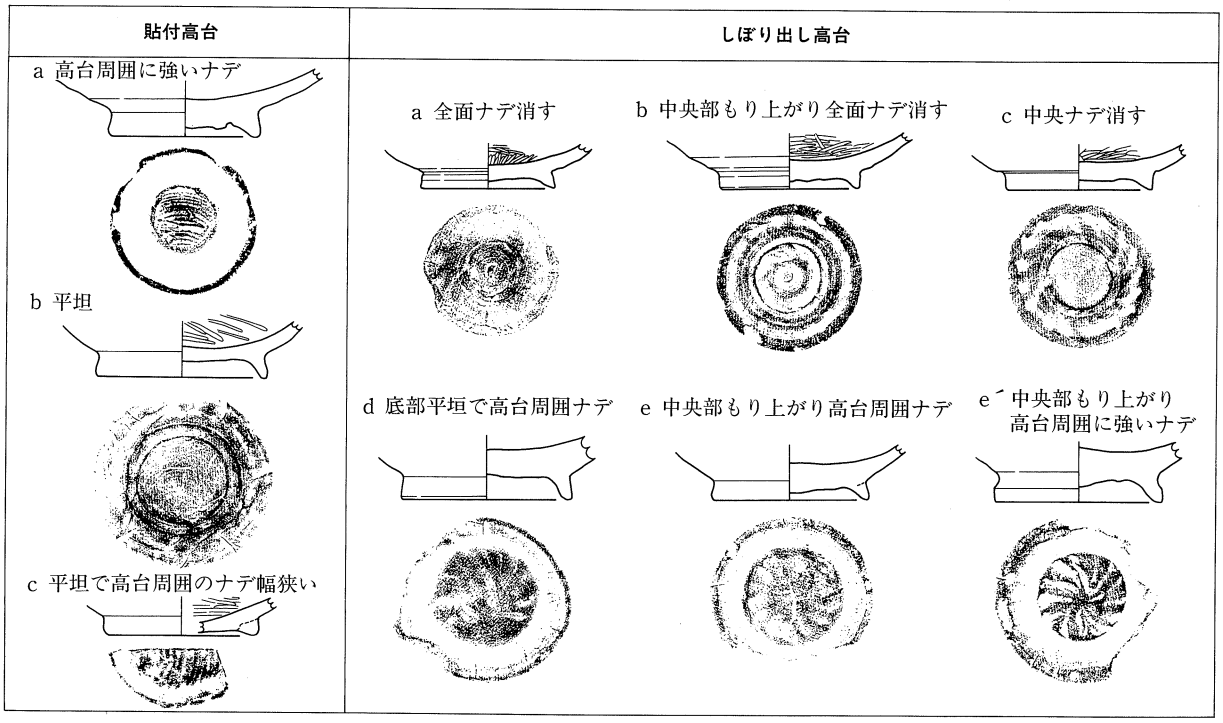
c：高台まで菊花状文が見られ，底部中央のみナデ消すもの

d：底部は平坦で，高台周囲はナデているが，全面に菊花状文があるもの

e：中央部が盛り上がり，高台周囲はナデで，中央部に菊花状文があるもの

é：eより高台周囲のナデが強いもの

五社遺跡では糸切り後貼り付け高台のものと絞り出し高台のものの比率は破片数で約1：20であり，圧倒的に絞り出し技法のものが主体である。このような製作技法は地域的な特性であり[注6]，金沢市戸水ホコダ遺跡・大友西遺跡・松任市三浦・幸明遺跡でも類似したものが報告されている[注7]。また絞り出し高台の椀はSD 2020出土のものが高台がシャープで最も古い様相をもっており，タイプaである。次の段階のSP 5246になるとタイプaはなくなり，タイプb・cになるが，その後の傾向は明らかではない。包含層出土の底部のみではタイプbはほとんど見られず，タイプc：タイプd：タイプeの比率は約2：1：3である。底部の調整は簡略化される傾向が見られるが，体部内面の調整はミ



第212図　黒色土器の高台内面の分類

ガキが顕著であり，目立って簡略化されていない。したがって少量ではあるが内面にミガキのない黒色土器があるが，これは技術的に異なる系譜のものと考えられる[注8]。

D　胎土

胎土については砂粒・海綿骨針・赤色酸化粒が含まれているが，大きく以下の2群に分ける。肉眼での大別であるため，さらに精密に観察すれば細分可能であろうが，現状では力量不足である点をお断りしておきたい。

1類：砂粒・赤色酸化粒が多く含まれ，海綿骨針を含むもの

2類：砂粒・海綿骨針を含むが，赤色酸化粒はわずかなもの

上記の分類に基づいて，各遺構の胎土についてみていく。

ＳＸ5003の胎土は無台椀については1類と2類がほぼ1：1の割合で，有台椀については2類となっている。ＳＰ3266の胎土は無台椀は1類と2類でその比率は3：1，有台椀は2類である。その他に高台高が低い有台椀底部は1類である。1類のものは全般に淡赤色に発色しており，比較的大粒の赤色酸化粒が多く含まれる。ＳＤ2020の胎土は小型無台椀と土師器有台椀は全て1類で，大型椀は2類，黒色土器は1類と2類が混じるが，2類が主体である。小型椀は淡赤色から赤褐色に発色しており，赤色酸化粒が多く含まれる。ＳＰ5246の胎土は全て2類である。ＳＫ6165の胎土は皿が1類と2類は1：1の比率で，大型椀は2類である。ＳＫ5245・ＳＫ5206・ＳＫ5340の胎土は全て2類である。

以上より，ＳＤ2020までは小型椀が1類で，淡赤色から赤褐色に発色させるが，その後は器種を選ばずに2類主体へと変化している。焼成の際の発色も意図的なものと考えられる。

E　区分と編年的位置づけ（第213図）

ここでは前述した遺構出土遺物の変化をまとめ，区分して編年的位置づけを行う。その際には包含層出土の遺物や小矢部市桜町遺跡の遺物を補足資料として用いる。

1期（前）：ＳＸ5003とＳＢ22付近の包含層には，土師器無台・有台椀がある。無台椀には底部が小さく体部が丸みをもつものと底部が大きく器高が低いものがある。口径11cm～12cm台，径高指数28前後，前者は底口指数44.8，後者は底口指数50である。有台椀は口径13cm前後で丸みをもち口縁部が外反し，高台は開き端部が丸い深身のもの（径高指数39.7，底口指数58.9）と，口径14cm～15cmで体部が直線的に伸び，高台が外に開き端部が丸い浅身のもの（径高指数48.1，底口指数62.8），身部の器高が低く直線的に開き端部が外反するものの3種があり，最も分化している。胎土は小型椀は1類で，有台椀は2類である。

1期（中）：ＳＰ3266とＳＢ18上の包含層には土師器無台・有台椀がある。土師器無台椀の口径は11cm台に縮小しているが，前期を小型化したものである。胎土は全て1類で，淡赤色から赤褐色に発色させる。これら以外に口径12cmを測る，器壁が非常に薄く，胎土が2類の小型椀がある。有台椀は高台が外に開き端部が丸い浅身のもののみになる。

1期（後）：ＳＤ2020には土師器無台・有台椀，黒色土器がある。無台椀はさらに口径が縮小しているが，前期までと同じ傾向である。有台椀については胎土が1類で，高台径に大小があることを指摘できるが，全体を知る資料はない。黒色土器はこの段階に急増する。有台椀には口径14.8cmで丸く腰が張り，端反りで，断面三角形のシャープな高台をもつものと，口径14cmで体部の形態は前者に類似しているが，高台がやや小さく端部が丸いもの，口径14.8cmで体部が直線的に伸びるものの3種がある。大小2法量の他に，浅深の2タイプあり，最も法量分化している段階である。高台は絞り出し高台が主体で，高台内面の菊花状文をナデ消しているものと貼り付け高台のものがある。胎土は2類が主体である。

2期：ＳＰ5246・ＳＫ6165には土師器無台皿・椀，黒色土器があるが，さらに包含層と桜町遺跡ＳＤ09の資料で補足すると，土師器有台皿が加わる。１期の主体であった口径11cm台の小型椀は無く，口径８cm～10cm台の無台皿と口径14cm～16cmの大型の無台椀が主体になる。無台皿には非常に器高が低く（径高指数13.0），体部が丸く立ち上がり，端部の器壁がやや厚いもの，底部が相対的に大きく腰が張って口縁部が外反するもの（底口指数52～53），底部が大きく体部が直線的に開き，器高が低いもの（径高指数約21・底口指数約55）の３種があり，無台椀には体部がやや丸みをもち口縁端部が外反する底部が大きいもの（径高指数約26・底口指数約40），底部が小さいもの（径高指数約26・底口指数33前後），底部が小さく丸みをもちやや深いもの（径高指数31.6・底口指数41.7）がある。口径は14cm前後と16cm台の２法量あり，浅深の２タイプに分化している。有台皿は柱状高台のもので，腰が張って直線的に立ち上がるものと低く直線的に開くものがある。黒色土器は１期の形態が小型化したもので，高台が小さくなり，高台内面の菊花状文をナデ消すものは減少する。胎土は２類が主体で，１期の小型椀のような淡赤色から赤褐色に発色させるものは見られない。

3期：ＳＫ5245・ＳＫ5206と包含層には土師器無台皿・椀・有台椀，黒色土器がある。無台皿は底径が小さく，器壁が厚く体部が直線的に伸び，口縁がやや内湾する皿（径高指数25前後・底口指数43～44前後）１種になる。無台椀は口径13cm台で２期より小型化しているが，底部の大小２タイプのみである。有台椀は柱状高台で，口径13cm台で底部が大きく浅いもの（径高指数30.1・底口指数43.4）と口径14cm台で底部が小さく深いもの（径高指数37.2・底口指数33.8）の２種ある。黒色土器無台椀は器壁が薄く体部が丸いものと直線的に立ち上がるものの２種あるが，極少量である。有台椀は減少している。胎土は全て２類である。

4期：ＳＫ5340には土師器無台皿と黒色土器がある。無台皿は非常に器高が低く体部が丸く立ち上がり，端部の器壁がやや厚いもの（径高指数12.2・底口指数53.7）と，器壁が厚く体部が直線的に伸びるもの（径高指数24.7・底口指数57.3）の２種である。黒色土器椀は口径が縮小している。胎土は全て２類である。当期の遺物は非常に少ないため，全容を示していない可能性が高く，今後の資料の増加で変更されることもあろう。

以上遺構出土品を中心に食膳具の変遷についてみてきた。各時期の年代については遺構出土の施釉陶器等がないため確定できないが，包含層出土の緑釉陶器は近江系の軟質陶で10世紀の後半，東濃産の灰釉陶器は虎渓山１号窯式のもので10世紀後半で，ともに非常によく使い込まれ見込みがつるつるしている。また中国製白磁椀II類，IV類が11世紀後半～12世紀前半にかけてのものと時期が大きく分かれることから，ある程度遺跡の年代幅を示していると考える。しかし，富山県内には当時期の比較資料がほとんどないため[注9]，資料が充実している加賀地域を対象とした出越茂和氏の編年[注10]との平行関係で各時期の年代を押さえたい。

１期（前）：12cm～11cm台の土師器無台椀と14cm前後の足高高台椀からなり，三浦・幸明遺跡IV区SK16・千木ヤシキダ遺跡SX05・SX10と類似している。須恵器・黒色土器の食膳具はなく，土師器無台椀２種と有台椀３種の単純な組成となることから，II２新期～II３期に平行すると考えられる。

１期（中）：口径が縮小して11cm台の土師器無台椀と14cm前後の足高高台椀からなり，中村・井手遺跡２・５号土壙・額谷カネカヤブ遺跡SK02に類似している。小型椀が量的に増加し，口径12cm～13cmの大型椀がないことなどから，III１期に平行すると考える。しかし，信濃では小型椀と大型椀のセットが存在しており[注11]，当遺跡でも存在する可能性はある。

１期（後）：小型椀の口径はさらに縮小し，土師器有台椀は減少する。黒色土器が急増し，大小２法

量と浅深２タイプに分化しており，三浦・幸明遺跡III区SK07に類似している。黒色土器有台椀の器形は丸石２号窯式の灰釉有台椀の形態を模倣したものが主体を占める。口径12cm～13cmの無台の大型椀はないが，III２期に平行すると考える。

２期：１期の主体であった小型椀が消滅し，口径８cm～10cmの無台皿が急増し，口径14cm～16cmの大型無台椀が主体となる。無台皿に３種，無台椀には２法量に浅深の２タイプがある。黒色土器有台椀は口径が縮小し，高台が小さな断面三角形になる。器高が最も低い器形の皿は他遺跡では例が無く，五社遺跡特有のものであろうか。また16cm台の大型の無台椀は消滅した土師器有台椀を補完していると推測される[注12]。前掲の２例を除けば基本的には戸水ホコダ遺跡SK70・大友西遺跡SD166ａ・ｂに類似しており，III３期に平行すると考えられる。

３期：土師器無台皿・無台椀・有台椀，黒色土器無台・有台椀があるが，無台皿は１種になり，大型無台椀は口径が縮小し，柱状高台椀が少量ではあるが存在する。黒色土器も減少し，法量分化していたものが欠落し，単純な組成になる。器種組成は異なるが，器形は大友西遺跡SK195・三浦・幸明遺跡III区SK10に類似しており，IV１期に平行するものと考える。

４期：土師器無台皿と黒色土器があるが，口径はともに縮小している。大友西遺跡SD166ｃに類似したものがあり，IV２期に平行すると推定する。

以上４期に区分したが，１期は土師器食膳具が卓越する時期，２期は器種・法量分化ともに豊富な時期，３期は器種組成・法量分化が単純化する時期，４期は皿のみの中世的組成に転換する時期といえよう。２期にある柱状高台小皿は３期～４期とも定量存在し，中世のロクロ土師器へとつながるものと考える。また３期以降の器種組成の単純化は，それに変わる施釉陶器や漆器などの食膳具としての定着を表しているものであろう[注13]。

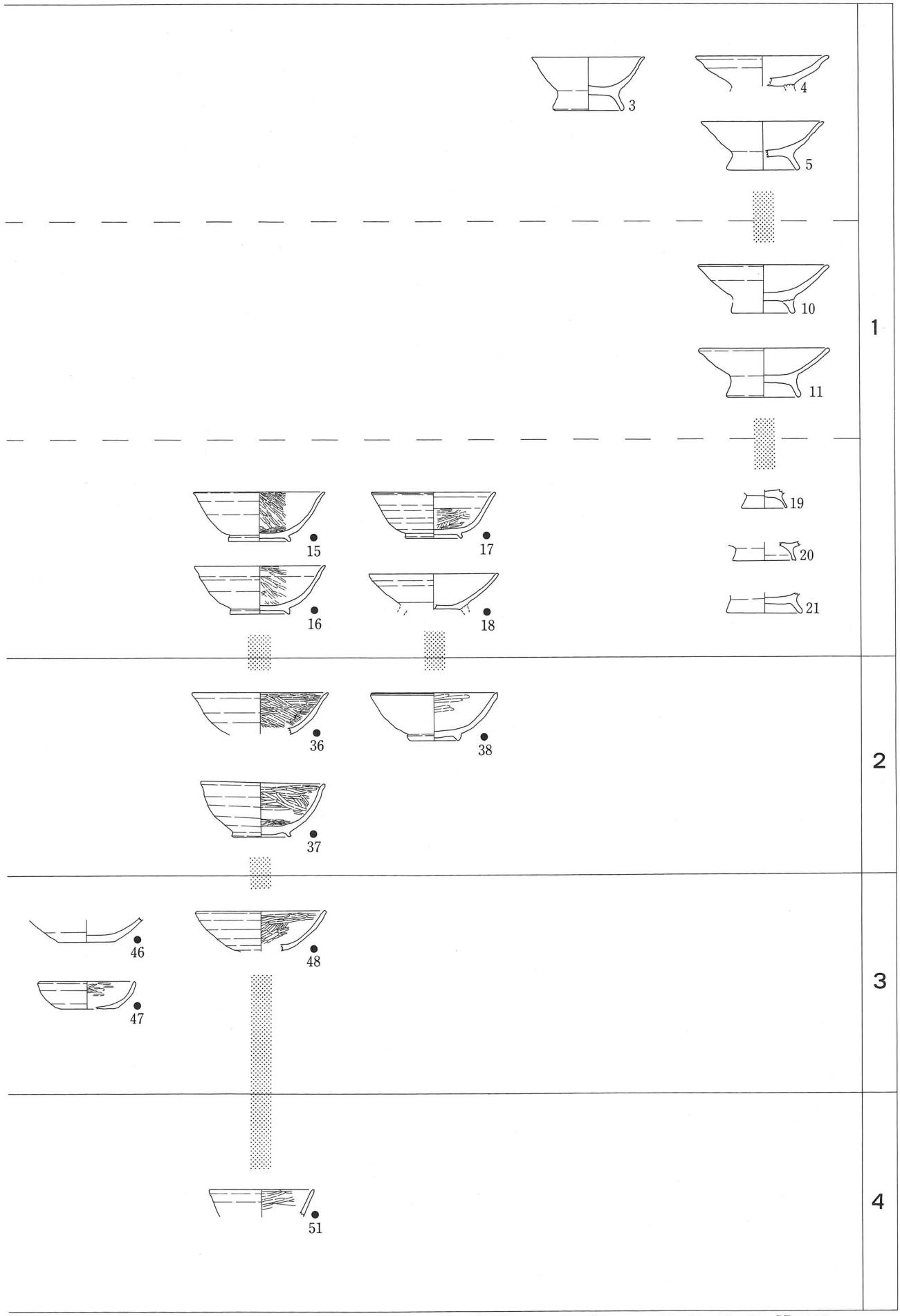
以上，加賀地域の編年に沿って五社遺跡の位置づけを行ったが，年代的位置づけについては第31表を参照されたい。本論は五社遺跡の食膳具に限っており，煮炊具・貯蔵具・木製容器については検討していないため不十分なものになったが，資料の増加を待って再度検討したい。　　（中川道子）

注１　楠　正勝　1987　「埋納土坑について－掘立柱建物に伴う祭祀について－」『金沢市千木ヤシキダ遺跡』　金沢市・金沢市教育委員会・金沢市疋田第二土地区画整理組合
出越茂和　1991　「千木ヤシキダ遺跡に見る古代地鎮祭祀」『金沢市千木ヤシキダ遺跡II』　金沢市教育委員会・金沢市疋田第二土地区画整理組合

段階		五社遺跡	年代	出越	北加賀の基準資料	年代	田嶋
			950	II２古	千木ヤシキダ遺跡SX09 （千木ヤシキダ遺跡SX01）	1000	VII１
1	前	SX5003		II２新	三浦・幸明遺跡IV区SK16 （千木ヤシキダ遺跡SX05）		VII２古
				II３	千木ヤシキダ遺跡SX10		
	中	SP3266	1000	III１	中村・井手遺跡２・５号土壙 額谷カネカヤブ遺跡SK02	1050	VII２新
	後	（SD2020）		III２	三浦・幸明遺跡III区SK07		
2		SP5246 SK6165		III３	戸水ホコダ遺跡SK70 （大友西遺跡SD166ａ・ｂ）		中世Ⅰ－Ⅰ
3		SK5245 （SK5206）	1050	IV１	大友西遺跡SK195 三浦・幸明遺跡III区SK10		
4		SK5340		IV２	（大友西遺跡SD166ｃ）		中世Ⅰ－Ⅱ１

第31表　五社遺跡土器編年表案　　（　）は補足資料

第213図　五社遺跡古代後期土器編年案



1～2・4　SX5003，3・5　包含層，6～10　SP3266，11　包含層，12～21　SD2020，22・31・36・37　SP5246，23～38・33～35　桜町遺跡（舟岡地区）SD09，29・30・32　SK6165，38　包含層，39・40・43・46・48　SK5245，41・42　SK5206，44・45・47　包含層，49～51　SK5340

前田清彦　1996　「第4節　土器祭祀の様相」『松任市三浦・幸明遺跡』　松任市教育委員会・松任市三浦・幸明地区土地区画整理組合

注2　口径÷器高×100で算出した。

注3　底径÷口径×100で算出した。

注4　伊藤隆三氏・塚田一成氏のご好意で実見，御教示いただいた。遺物の法量は『北反畝遺跡』（小矢部市教育委員会1990）の実測図を計測したもので，若干数値が異なる可能性があることをお断りしておく。

注5　高台断面からは粘土がひねり出されているものが観察できた。高台を絞り出した際の底面の痕跡の呼称については，望月精司氏の論考「10～12世紀の土師器生産と供給の様相」『シンポジウム北陸の10・11世紀代の土器様相』　北陸古代土器研究会に依った。

注6　前掲の望月氏の論考では貼り付け高台は小松南部・北部系であり，有台にほぼ統一され，菊花状文があるものは金沢南部系であるとされている。五社遺跡では黒色土器無台椀が少量ではあるが存在していることから，小松南部・北部系の技術で製作されたものを若干含む組成であるといえる。

注7　出越茂和氏のご好意で戸水ホコダ遺跡・大友西遺跡の遺物を実見・御教示いただいた。ＳＤ2020のものは法量・形態・胎土まで類似している。

注8　前掲の望月氏の論考では内面の磨きが欠落するのは小松南部・北部系の技術であるとの指摘がある。

注9　県内の資料については池野正男氏，宮田進一氏から御教示いただいた。
宮田進一　1993「古館遺跡」『医王は語る』　医王山文化調査委員会

注10　出越茂和　1997　「北陸古代後半における椀・皿食器（後）」『北陸古代土器研究』第7号　北陸古代土器研究会

注11　原　明芳　1997　「古代末期の信濃の土器様相」『シンポジウム北陸の10・11世紀代の土器様相』　北陸古代土器研究会

注12　Ⅱ2新期の門新遺跡では土師器有台椀が少なく，口径15cm～16cm台の無台椀がその機能を補っていると推測される例があると，出越茂和氏から御教示いただいた。

注13　3期～4期と考えているＳＤ202からは総黒の有台の漆椀が，2期が中心で4期まで時期幅のあるＳＤ2020からは総黒の有台の漆椀と木皿が出土している。

引用・参考文献

石川県教育委員会　1979『加賀市田尻シンペイダン遺跡発掘調査報告書』

石川県立埋蔵文化財センター　1985『北塚遺跡群』

石川県立埋蔵文化財センター　1989『白江梯川遺跡』

池野正男　1997「越中における10・11世紀の土器様相」『シンポジウム北陸の10・11世紀代の土器様相』北陸古代土器研究会

宇野隆夫　1991『律令社会の考古学的研究－北陸を舞台として』桂書房

宇野隆夫　1997「中世食器様式の意味するもの－計量分析による使用法の復元」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集　国立歴史民俗博物館

小矢部市教育委員会　1990『北反畝遺跡－条里遺構の発掘調査概要Ⅱ－』

小矢部市教育委員会　1994『平成5年度小矢部市埋蔵文化財発掘調査概報』

柿田祐司　1997「能登の10・11世紀代の資料」『シンポジウム北陸の10・11世紀代の土器様相』北陸古代土器研究会

春日真実　1997「北陸北東部の様相」「越後の10・11世紀の土器」『シンポジウム北陸の10・11世紀代の土器様相』北陸古代土器研究会

金沢市教育委員会　1987『金沢市千木ヤシキダ遺跡』

金沢市教育委員会　1991『金沢市千木ヤシキダ遺跡Ⅱ』

金沢市教育委員会　1993『上荒屋遺跡Ⅱ』

金沢市教育委員会　1995『金沢市額谷カネカヤブ遺跡』

川畑　誠　1997「加賀国の消費遺跡の概要」『シンポジウム北陸の10・11世紀代の土器様相』北陸古代土器研究会

上越市教育委員会　1989『新潟県上越市　四ツ屋遺跡発掘調査報告書』

田嶋明人　1986「Ⅳ考察－漆町遺跡出土土器の編年的考察－3）9世紀後半から13世紀にかけての土師器の変遷」『漆町遺跡Ⅰ』石川県立埋蔵文化財センター

田嶋明人　1988「古代土器編年軸の設定」『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』報告編　石川考古学研究会・北陸古代土器研究会

田嶋明人　1990「古代から中世にかけての土器の推移（加賀）」『シンポジウム　土器からみた中世社会の成立』

田嶋明人　1997「中世食器の地域性　5北陸」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集　国立歴史民俗博物館

出越茂和　1994「北陸の施釉陶器」『古代の土器研究』

出越茂和　1994「加賀におけるロクロ土師器の出現と展開」『中近世土器の基礎研究』Ｘ　中世土器研究会

出越茂和　1994「北陸のロクロ土師器」『中近世土器の基礎研究』ＸⅠ　中世土器研究会

出越茂和　1996「北陸古代後半における椀・皿食器（前）」『北陸古代土器研究』第6号　北陸古代土器研究会

出越茂和　1997「北加賀」『シンポジウム北陸の10・11世紀代の土器様相』　北陸古代土器研究会

新潟県教育委員会　1986『北陸自動車道上越市春日・木田地区発掘調査報告書Ⅱ　一之口遺跡西地区』

新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団　1994『新潟県埋蔵文化財調査報告書第60集　一之口遺跡東地区』

新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団　1995『北陸自動車道上越市春日・木田地区発掘調査報告書Ⅴ　鉄砲町遺跡』

原　明芳　1994「信濃における中世的土器様相の成立」『シンポジウム　土器からみた中世社会の成立』

原　明芳　1994「信濃の施釉陶器」『古代の土器研究』

前川　要　1987「平安時代における東海系緑釉陶器の使用形態について」『中近世土器の基礎研究』Ⅲ

松任市教育委員会　1993『松任市中村井手遺跡』

松任市教育委員会　1996『松任市三浦・幸明遺跡』

吉岡康暢　1991「中世的食器組成の成立と時期区分覚え書」『中近世土器の基礎研究』Ⅶ

吉岡康暢　1997「中世食器の地域性　総括」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集　国立歴史民俗博物館

和島村教育委員会　1995『門新遺跡』

4　五社遺跡古代後期の集落構造について

A　はじめに

第Ⅳ章３では五社遺跡古代後期について遺構・遺物の詳細な記述がされた。また前節では遺物が11世紀の１世紀の間で４時期に区分された。本節では遺構の重複関係や出土遺物をもとにして遺構を時期区分し，変遷をみていき，遺跡の性格を考えてみたい。

B　集落変遷の検討（第214・215図，第32表）

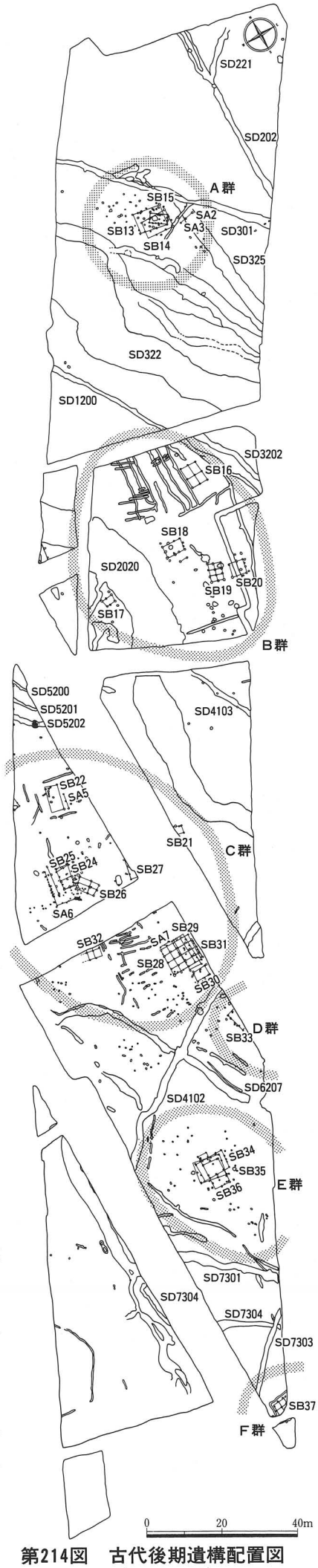
古代後期面は第214図のように延長約400ｍにわたって発掘された。建物の群分けについて以前筆者は７群に分けた[注1]。しかし，今回は古代後期の建物を改めて大まかにＡ～Ｆの６群に分けた。Ａ群は調査区の一番北側にあるＳＢ13～15の３棟の建物からなる。これらはすべて重複していることから，１棟ずつが３時期に存在したと考えられる。Ｂ群はＡ群と自然流路（ＳＤ322）を挟んで南側に位置し，ＳＢ16～20の５棟の掘立柱建物からなる。重複関係は無い。ＳＢ17は自然流路（ＳＤ2020）の西側に位置するが，Ｂ群に含める。Ｃ群はＳＢ21～32の12棟からなる。Ｂ群とはＳＤ2020によって分けられる。ＳＢ24～26とＳＢ28～30は重複している。Ｄ群はＳＢ33の１棟だけで，主に調査区の東側に広がる。Ｅ群はＳＢ34～36の３棟からなり，互いに重複している。Ｆ群はＳＢ37の１棟だけで，この群も中心は調査区外となる。建物はＣ群が最も多く，中心的な役割をしたと考えられる。

また，五社遺跡の位置する一帯は条里が残存する地域として知られ[注2]，遺構の方位も併せて変遷を考えてみる。遺構の方位は全体では第215図の１で大まかに真北を中心とするものと，西へ45度振る群とに分けられ，２方向がある。

遺物の時期は先にも述べた様に１～４期に分けられる。しかし，４期の土器を出土する遺構が少なく建物が存在するかどうか不明であるので分別が不可能である。ここでは３と４期を３・４期とし１時期に扱う。建物の主軸方向と土器の時期を併せて考えると，真北の方向は１期と３・４期の両方が混在し，主軸方向では区別できない。西45度の遺構は少ないが２期がこれに当る。掘立柱建物は総柱・側柱の両形式があるが，遺物が出土する建物をみると１期のものは側柱が多く，３・４期は総柱のものがみられた。五社遺跡では側柱が古く総柱が新しいと考えた。

C　古代後期集落の変遷（第216図）

前項の時期区分・方位を検討した結果，以下のように変遷を考えた。また，条里地割の存在が想定できることから各時期に一町（109ｍ）の方格を遺構図に当てはめる試みをした。



第214図　古代後期遺構配置図
（1：1,500）

遺構名	群	遺構種類	方　位	時　代	備　　考
SB13	A群	掘立柱建物（側柱）	N-87°-W	2期か	
SB14	A群	掘立柱建物（側柱）	N-85°-E	1期か	
SB15	A群	掘立柱建物（側柱）	N-62°-W	3期か	
SB16	B群	掘立柱建物（総柱）	N-12°-W	3～4期か	
SB17	B群	掘立柱建物（側柱）	N-79°-E	1期か	
SB18	B群	掘立柱建物（側柱）	N-2°-E	1期	SP3266付属。
SB19	B群	掘立柱建物（総柱）	N-10°-E	3期か	SK3276付属。
SB20	B群	掘立柱建物（側柱）	N-86°-W	1期か	
SB21	C群	掘立柱建物(側柱？)	N-87°-W	1期か	調査区外へのびる。
SB22	C群	掘立柱建物(総柱？)	N-6°-E	1期か	SX5001付属。
SB23	C群	掘立柱建物(側柱？)	N-14°-W	3期か	SK5206付属。調査区外へのびる。
SB24	C群	掘立柱建物（側柱）	N-3°-W	3～4期か	SB25より新しい。
SB25	C群	掘立柱建物（総柱）	N-5°-W	3期	SB24より古い。
SB26	C群	掘立柱建物（総柱）	N-45°-W	2期	SB24・25より古い
SB27	C群	掘立柱建物	N-5°-W	1期か	調査区外へのびる。
SB28	C群	掘立柱建物（総柱）	N-6°-W	3～4期か	
SB29	C群	掘立柱建物（側柱）	N-9°-W	3～4期か	SB28より新しい。
SB30	C群	掘立柱建物（側柱）	N-78°-E	3～4期か	SB28と同時期。
SB31	C群	掘立柱建物	N-9°-W	1期か	調査区外へのびる。
SB32	C群	掘立柱建物（総柱）	N-1°-W	3～4期か	調査区外へのびる。
SB33	D群	掘立柱建物	N-24°-W	2期か	調査区外へのびる。
SB34	E群	掘立柱建物（側柱）	N-82°-E	1期か	
SB35	E群	掘立柱建物（側柱）	N-88°-W	1期か	
SB36	E群	掘立柱建物（総柱）	N-5°-W	3～4期か	SD7318付属。
SB37	F群	掘立柱建物（総柱）	N-76°-E	3～4期か	調査区外へのびる。
SA 2	A群	柵	N-55°-E	2期か	
SA 3	A群	柵	N-72°-E	2期か	
SA 4	A群	柵	N-73°-W	3～4期か	
SA 5	C群	柵	N-1°-E	3～4期か	SB22に付属。
SA 6	C群	柵	N-3°-E	3～4期か	SB24・25に付属。
SA 7	C群	柵	N-81°-E	3～4期か	SB28に付属。
SD202	—	溝	N-5°-W	3～4期か	SD221に合流。
SD221	—	溝	N-41°-W	2期か	
SD301	—	溝	N-51°-W	3期	SD324に合流。
SD323	—	溝	N-30°-W		
SD324	—	溝	N-55°-E	2期か	SD301に合流。
SD325	—	溝	N-14°-W	1期	SD324より古い。
SD347	—	溝	N-14°-W	1期か	SD301より古い。
SD1200	—	溝	N-39°-W	2期か	SD3203に接続。
SD2021	—	溝	N-4°-W	1期か	SD2023に接続。
SD2023	—	溝	N-4°-W	1期か	
SD3202	—	溝	N-35°-W	1期か	SD1200に接続。
SD3203	—	溝	N-39°-W	2期か	
SD3204	—	溝	N-2°-E	3～4期か	
SD3214	—	溝	N-7°-W	1期か	
SD3236	—	溝	N-7°-W	1期か	
SD3237	—	溝	N-7°-W	1期か	
SD3238	—	溝	N-7°-W	1期か	
SD4102	—	溝	N-51°-E	2期	SD6207と直交。
SD4103	—	溝	N-37°-W	2期か	
SD5200	—	溝	N-44°-W	2期か	
SD5201	—	溝	N-44°-W	2期か	
SD5202	—	溝	N-44°-W	2期か	SX5004より古い。
SD5203	—	溝	N-87°-W	1期か	SB23に付属。
SD5204	—	溝	N-81°-W	1期か	SB23に付属。
SD5233	—	溝	N-8°-E	1期か	
SD6101	—	溝	N-39°-W	2期か	
SD6207	—	溝	N-36°-W	2期	SD4102と直交。
SD7301	—	溝	N-55°-W	1期か	SD8201に接続。
SD7303	—	溝	N-37°-E	2期か	
SD7304	—	溝	N-64°-W	1期か	SD7303より古い。
SD7318	—	溝	N-76°-W	3～4期か	SB37に付属。
SD3225	—	畠区画	N-83°-E	1期か	
SD3226	—	畠区画	N-83°-E	1期か	

第32表　古代後期遺構の主軸方位と時期

1期　1期はほぼ真北を向く遺構で構成される。A群はSB14の1棟だけである。SB14は平面積が34.3㎡で住居と考えられる。B群はSB17・18・20からなる。SB17は平面積が5.8㎡と小さいことから小屋及び雑舎と思われる。SB18は平面積が16.8㎡と小型だが側柱掘立柱建物で住居と考えられる。SB20は平面プランが正方形で総柱掘立柱建物の可能性があり，倉庫と考えられる。C群はSB21・22・27・31の4棟からなる。SB22は平面積26.2㎡の側柱掘立柱建物で周囲に溝が巡る。SB21・27・31は平面積は不明だが，SB27・31が住居，SB21は小屋としておく。E群はSB34が1棟だけである。SB34は平面積39.3㎡の側柱の掘立柱建物で住居と考えられる。1町の方格をSD325を南北方向の軸としてあわせると畠の区画と考えられるSD3225・3226がSD325と直交する東西方向の線に乗る。そのほかSD3202・SD7301がSD325と同方位である。建物群の配置は住居1棟の建物（群）と住居3棟からなる建物群の2種類が散在する形態である。

2期　2期は西へ45度前後ふれる主軸をもつ一群である。建物の数が少なく4棟で各群1棟である。規模は20㎡未満1棟，20㎡以上50㎡未満2棟である。

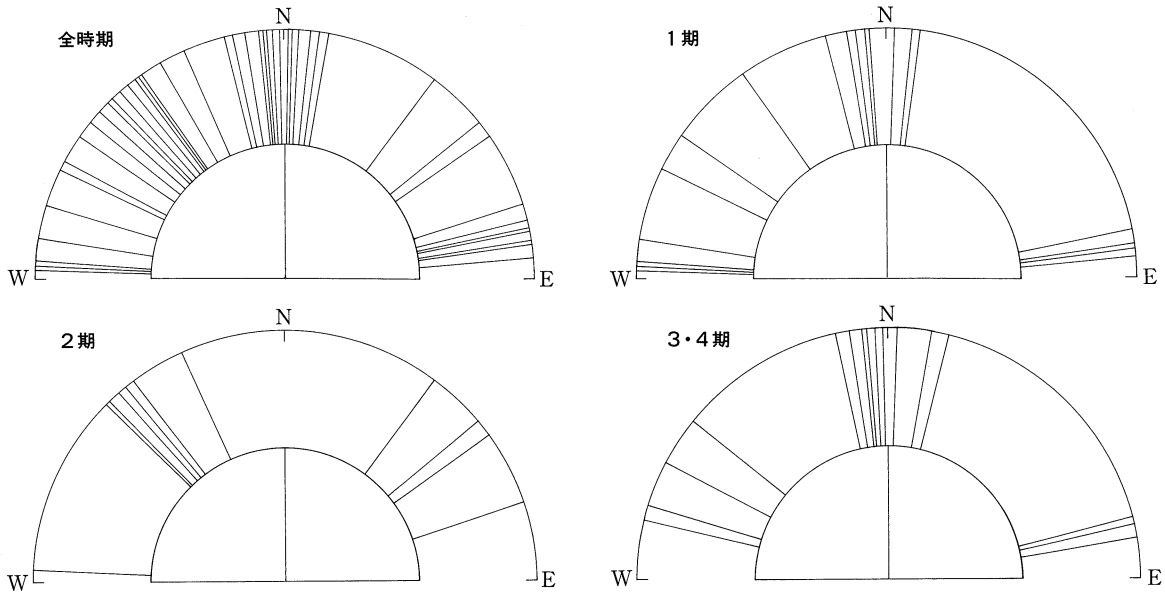
A群はSB13が1棟で平面積41㎡の側柱掘立柱建物で住居と考えられる。C群ではSB26がある。SB26は平面積が17.2㎡の総柱掘立柱建物で住居と思われる。D群はSB33で規模は不明だが住居と考えられる。E群はSB35，平面積が40.3㎡の側柱掘立柱建物で住居と考えられる。

溝には十字状に交差する溝SD4102・SD6207があり特徴的である。このSD4102・SD6207の交点に1町方格を合わせた。SD5202はSD6207と半町はなれ平行な位置である。その他，SD1200・3203・4103がSD6207に平行，SD221・324・7303がSD4102に平行である。

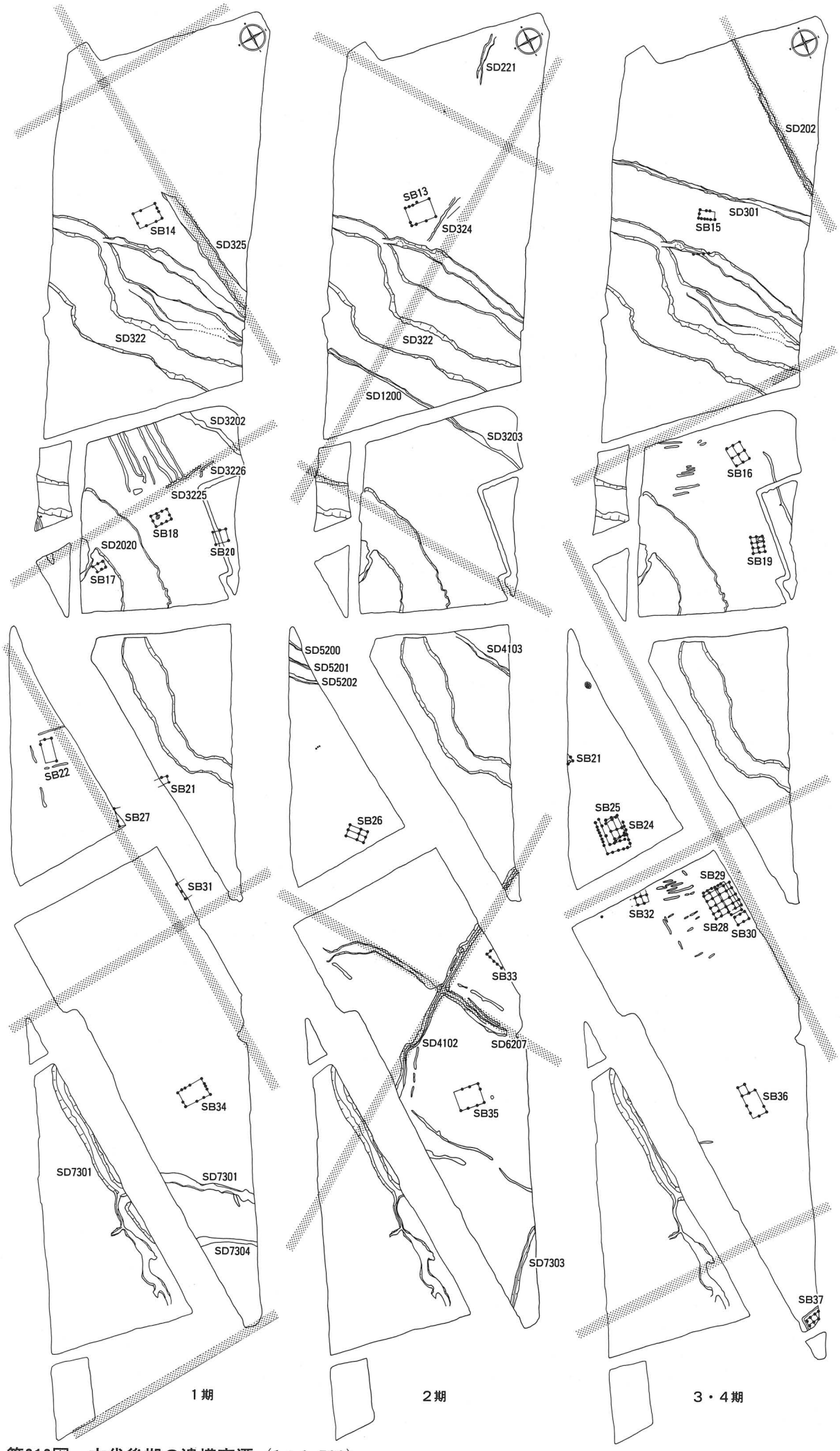
建物の配置は1坪内に住居1棟ずつ程度が，散在した形態である。

3・4期　3・4期はふたたび真北の方位をもつ遺構となる。建物は12棟あり，総柱が過半数を占める。建物規模は20㎡以下が5棟，20㎡以上50㎡未満が3棟，50㎡以上100㎡未満が1棟である。

A群はSB15だけである。SB15は平面積11.5㎡の側柱掘立柱建物で住居と考えられる。B群はSB16とSB19の2棟が当該期に属する。SB16は柱間が長く特異な総柱で平面積25.7㎡で，住居と考えられる。SB19は平面積16.5㎡の総柱掘立柱建物で住居と考えられる。C群はSB23・24・25・28・29・30の6棟からなる。C群はSB32とSB28の間に畠が存在し，さらに2分できるかもしれない。



第215図　古代後期遺構の主軸方位



第216図　古代後期の遺構変遷（1：1,500）

ＳＢ24とＳＢ25は平面積17.9と18.9㎡の総柱掘立柱建物で住居と考えられ，重複している。ＳＡ６がこれらにともなう。ＳＢ28は平面積は66.2㎡，桁行8.6ｍ・梁行7.7ｍの中世的な総柱掘立柱建物で住居と考えられる。ＳＢ29は平面積31.3㎡の側柱掘立柱建物で住居と考えられる。ＳＢ28と29は重複する。ＳＢ30は平面積9.1㎡の側柱の掘立柱建物で，雑舎と考えられる。ＳＢ32は規模が不明だが住居と考えられる。Ｅ群はＳＢ36だけである。ＳＢ36は平面積30.7㎡の側柱の掘立柱建物で住居と考えられる。Ｆ群もＳＢ37の１棟である。ＳＢ37は規模は不明だが住居と考えられる。

１町方格をＳＤ202にあわせるとＣ２地区とＢ３地区の間及びＣ１地区とＣ２地区の間の現道が方格と合致し，現在の残存地割とほぼ同じとなる。

建物の配置は住居１棟と住居と小さな屋か雑舎の２棟からなる建物群の２タイプが散在する。

Ｃ　他遺跡との比較（第217～219図）

古代後半期（９世紀中頃前後）から中世初頭（12世紀から13世紀）を五社遺跡古代後期と比較するためにみていく。建物規模について便宜上20㎡未満を小型，20㎡以上50㎡未満を中型，50㎡以上100㎡未満を大型，100㎡以上を特大型にする。

じょうべのま遺跡[注3]（第217図１）

富山県東部の海岸地帯の微高地，入善町田中に所在する。遺跡は古代と中世の時期がある。ここでは古代を取り上げる。古代は９世紀を中心とする遺跡でＡからＥ期までに区分される。特にＢ期は最大190㎡を越える特大型１棟と中型２棟･小型１棟以上からなる建物群を形成する。建物機能では屋が４棟と楼１棟とされている。建物配置は配置は「コ」の字形に配置される。遺物には「丈部吉椎丸上白米五斗」と書かれた木簡，「寺」･「庄」の墨書土器，施釉陶器などがある。遺跡の性格は寺院領荘園の荘家と考えられる。

佐伯遺跡[注4]（第217図２）

富山県の東部，早月川と住川の間の洪積丘陵，魚津市佐伯に所在する。遺跡は縄文時代･弥生時代･奈良・平安時代の複合遺跡である。ここでは奈良・平安時代を取り上げる。奈良・平安時代は９世紀前半を主体とする当該期の建物には掘立柱建物26棟・竪穴住居１棟があり，集中した配置である。掘立柱建物の規模は中型15棟・小型６棟である。建物機能は小規模なもの以外はほとんどが住居と考えられている。遺構は重複が多く建て替えを行っており，いくつかの時期に分類されると思われる。遺物では「廣川」の墨書土器が９点出土している。遺跡の性格は一般集落と考えられる。

吉倉Ｂ遺跡[注5]（第217図３）

富山県の中央部の神通川と熊野川にはさまれた扇状地中の微高地，富山市吉倉に所在する。遺跡の時期は中世・古代の２時期ある。古代は８世紀後半～９世紀末の遺跡で１～５期に分けられている。ここではこのうち４期を取り上げる。当該期の建物には掘立柱建物11棟と竪穴建物３棟がある。建物規模は大型２棟，中型６棟，小型３棟である。建物機能では倉１棟・納屋１棟の他は住居とされる。竪穴建物についても住居と考えられる。遺構の配置は掘立柱建物のみからなる中心的な建物群と竪穴建物と掘立柱建物の住居からなる群，竪穴住居だけでなる群の３種類の建物群が散在している。遺物には「城長」と書かれた墨書土器がある。遺跡の性格は「開墾集落」とされている。

長岡杉林遺跡[注6]（第217図４）

富山県の中央部の呉羽山丘陵段丘上，富山市長岡字杉林に所在する。遺跡は縄文時代･奈良時代（８世紀前半）･平安時代（９世紀末～10世紀）の３時期がある。ここでは，平安時代期を取り上げる。当該期に属する建物は掘立柱建物３棟（すべて側柱）で，集落全域の調査ではないが集中した配置と考

第217図　古代後半期の集落（1：1,500各報告からトレース改変）　1. じょうべのま遺跡　2. 吉倉B遺跡（4期）　3. 佐伯遺跡　4. 長岡杉林遺跡（平安期）　5. 上荒屋遺跡（第4新期～第6期9）

えられる。建物規模は中型２棟・小型１棟である。建物機能は住居１棟・倉１棟・祀堂１棟に分けられる。遺物には瓦塔と緑釉陶器・灰釉陶器がある。遺跡の性格は一般的な集落と考えられるが，瓦塔や大型の井戸は周辺集落との共有の場と考えられている。

上荒屋遺跡[注7]（第217図）

石川県の中央部の扇状地扇端部，金沢市上荒屋に位置する。遺跡は弥生時代，古墳時代，奈良・平安時代・中世の４時期ある。ここでは奈良・平安時代のうち五社遺跡古代後期と似た十字に交差する溝がある第４新期から第６期（９世紀中頃）を取り上げる。当該期に属する建物は掘立柱建物・小鍛冶をしたと考えられる竪穴がある。これらの建物は一町四方の３方を区画する条里溝の内部に集中して位置する。建物規模は特大型１棟・大型２棟・中型２棟である。遺物には大量の「東庄」の墨書土器・木簡・などがある。遺跡の性格としては東大寺領横江東荘の庄家となっている。

三浦・幸明遺跡[注8]

遺跡は石川県の中央部手取扇状地上の松任市三浦町に所在する。遺構面は７世紀末～９世紀末の中層と10～12世紀の上層の２面がある。ここでは上層の内，五社遺跡古代後期と同時期と思われる，Ⅶ２（古）期（11世紀第１四半期）とⅦ２（新）期（11世紀第２四半期）を取り上げる。Ⅶ２（古）期は掘立柱建物６棟で構成される。建物規模は中型２棟・大型２棟・特大型２棟である。建物の機能は総柱掘立柱建物の屋が３棟，総柱倉庫が２棟，側柱掘立柱建物の座舎倉が１棟に分けられている。Ⅶ２（新）期は８棟あり，同時存在は６棟で構成される。機能では屋が４棟，倉・雑舎が２棟になる。建物規模は特大型３棟・大型３棟・中型１棟である。遺物には大量の輸入磁器や国産施釉陶器がある。遺跡性格について報告書では「開発領主クラス」とされている。

北反畝遺跡[注9]（第218図１）

富山県西部の砺波山丘陵の東麓，小矢部川左岸段丘上，小矢部市綾子に位置する。古墳時代中期～後期，平安時代末～鎌倉時代，南北朝～室町時代及び近世の４面の遺構面がある。ここでは平安時代末～鎌倉時代の面を取り上げる。遺跡の立地する一帯は条里地割りが良好に残されており，発掘調査でもこれに合致する溝などが確認された。当該期に属する建物は４棟ありすべて総柱の掘立柱建物である。配置は坪内に散在する形態である。建物規模は中型１棟と特大１棟がある。建物の機能はすべて屋と考えられる。遺跡の性格について「農地の管理・経営を主目的とした在家住宅」とされる。

臼谷岡ノ城北遺跡[注10]（第218図３）

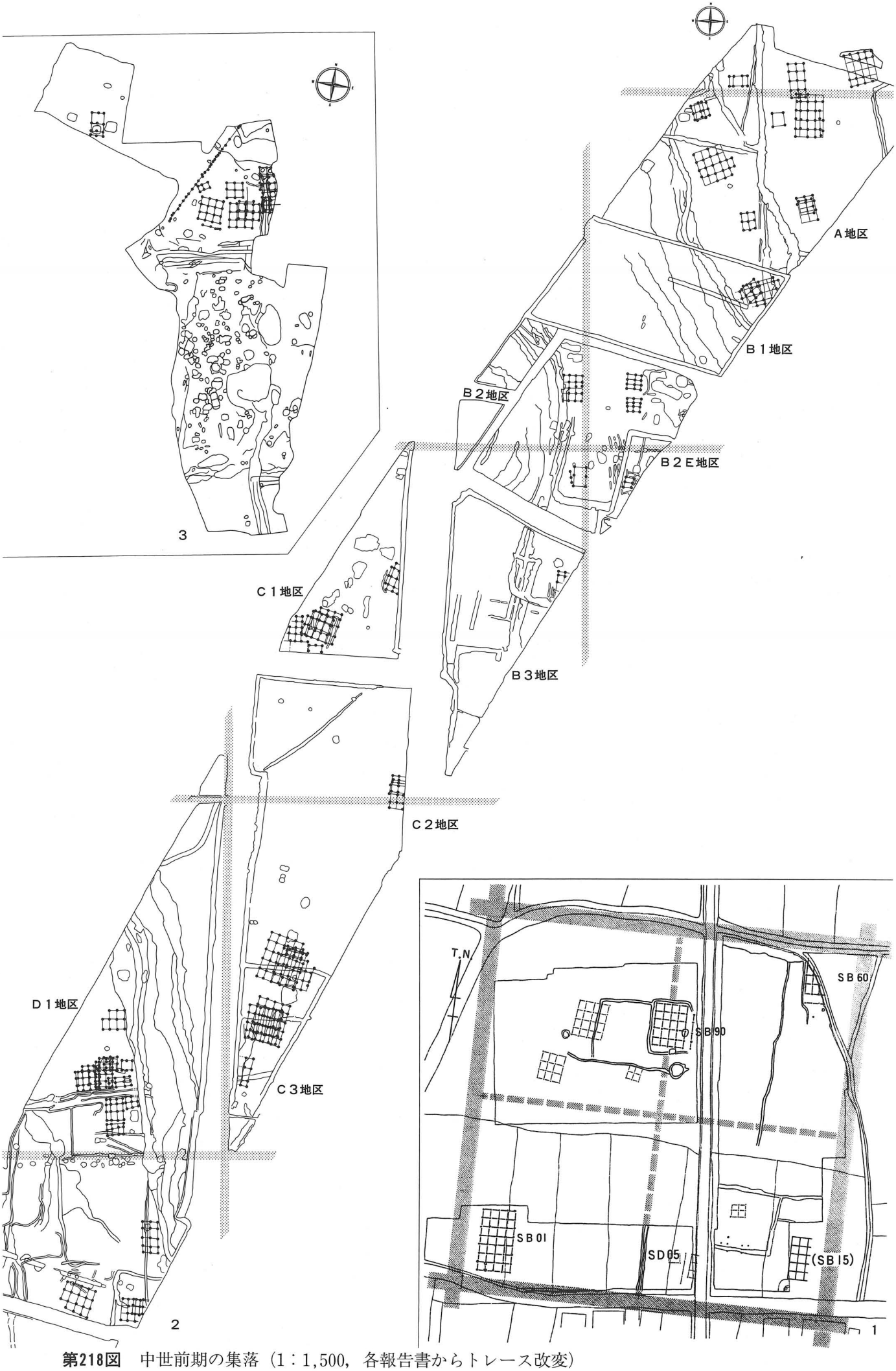
富山県の西部の渋江川の河岸段丘上，小矢部市臼谷に所在する。遺跡は縄文時代・平安時代・鎌倉～安土・桃山時代の３時期がある。ここではＣ地区の中世を取り上げる。当該期に属する建物は掘立柱建物が10棟り，すべて総柱である。建物規模は大型１棟（51㎡）・中型４棟である。建物配置は集中した形態である。建物の機能は倉及び雑舎が２～３棟でそれ以外は屋（住居か）と考えられる。遺跡の性格は一般農村と考えられる。

神田遺跡[注11]

富山県の中央部やや東の扇状地扇端部，中新川郡上市町神田字山王に所在する。遺跡は中世が中心（12世紀後半～13世紀前半）となっている。建物は掘立柱建物20棟で集中して存在する。建物規模は特大型７棟・大型７棟・中型７棟・小型２棟である。建物機能では屋21棟と倉２棟に分けられる。遺跡の性格は開発領主クラスとされる。

五社遺跡中世面（第218図３）

五社遺跡の中世面は12世紀後半から14世紀の時期幅があり，何時期かの変遷がある。詳細は第Ⅳ章



第218図　中世前期の集落（1：1,500，各報告書からトレース改変）
1．北反畝遺跡　2．五社遺跡（中世）　3．臼谷岡ノ城北遺跡